

暖炉よりもなお熱く

赤い鳩サブレ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カチューシャと交際する事になった主人公が、彼女に発情しないようノンナに搾り取られる。それだけのお話。番外編「独占欲だよノンナさん」更新。ちよつとした後日談なお話です。

目次

暖炉よりもなお熱く

第一話 1

第二話 13

第三話 24

寒い夜にはボルシチを

第一話 36

第二話 47

第三話 58

自己批判室、再び

第一話 71

第二話 82

第三話 94

第四話 105

幕間

11月のマトリョーシカ 116

迷い惑うはスネグーラチカ

第一話 137

第二話 148

第三話 162

祝砲に暴君は散る

第一話 174

第二話 185

第三話 200

第四話 213

エピソード

春のモスクワにて

226

番外編・例えばこんなノンナさん

独占欲だよノンナさん

246

暖炉よりもなお熱く

第一話

寒風吹きすさぶ北海を進む一隻の学園艦。その外見は、旧ソビエトのキエフ級重航空巡洋艦を思わせる。

数十隻ある学園艦の中でも上位に入るであろう巨大さを誇るその学園艦の側面には、

「^プПра^ウВа^ダダ」

の文字が、鋏と定規をモチーフとした校章と共に大きく刻まれている。

プラウダ高校。国内最大規模のサンダース大学付属高校と肩を並べる名門校。

その生徒の気質は一樣ではなく、本拠地である青森の朴訥さを残した者もいれば、まるで永久凍土を思わせるかのような鋭さを持ち合わせている者もいる。しかし、過酷な気候に鍛えられた強さを根底に備えている点については共通している。

その学園艦の中央部に重々しく聳えるプラウダ高校本校舍、その中には多くの教室以外にも様々な施設が存在する。クレムリンを思わせる巨大な会議室、「シベリア送り25ルール」の処罰の場として生徒たちに恐れられる地下教室などだ。

「お目覚めのようですね、同志ゴロドク。現在の状況は分かりますか？」

「……良ければ教えて頂けないでしょうか、同志ノンナ？」

そして彼、伍堂六郎——通称ゴロドクが椅子に拘束されている「自己批判室」もその一つであった。

窓も無い灰色の壁に椅子と、粗末な机。第三者が座るためのやや上質なソファ。壁の暖炉には火がくべられ、パチパチと音を立てつつ赤々と室内を照らしている。

「自己批判」と言えば聞こえは良いが、その実態は指導室——それも、教師から生徒にではなく、生徒から生徒への指導のために使われる部屋だ。

「全ての生徒は等しい価値と崇高な志を持つ同志であり、学内において平等である」というプラウダ高校の校訓において、先輩から後輩への叱咤や指導は表向き禁止されている。しかし、部活動などにおいてそういった指導が必要なのも事実である。

故に「生徒が自主的に自身を批判し、他の生徒の意見を求める場」という名目でこの部屋が存在する。暖炉の煙突すら複数層のフィルターによって完全防音を施され、カメラも設置されていないこの部屋の中で行われる事に関しては、教員側も一切不介入。場合によっては生意気な後輩を叩き潰す場として使われるという噂も絶たない、プラウダの生徒にとって恐怖の対象だ。

「いやいや、本当に何で!?!」

「……分かりませんか?」

人に顔向けできない程には酷い顔はしていないが、と行って眉目秀丽という程でも無い。

身長も170cmには届かないし、体重も太りすぎでも痩せすぎでもない。

成績も中間やや上やや下を行き来する程度で、部活動もしていない帰宅部。

悪人めいた響きの名前とは裏腹に、学園艦内の仮住まいで一人暮らしを満喫する、ごく普通のプラウダ高校三年生。

それがゴロドクの全てであり、このまま浮き上がりも沈みもせず卒業する筈であった。

——いや、今日の昼に「特別な事」はあったか。

「……同志カチューシャの事でしょうか、同志ノンナ?」

「人並みの理解力はあるようですね、話が早くて助かります」

ゴロドクの問いかけに彼女、プラウダ高校戦車道副隊長のノンナは

答えた。

彼女の事はゴロドクも知っていた。世間的には戦車道は廃れつつある競技という印象が強いが、それはプラウダにおいては一致しない。優秀な人材と強力な戦車を併せ持つプラウダ戦車道は同校の看板のひとつであり、それ目当てで入学してくる少女もいる。

中でも昨年の全国大会で強豪・黒森峰を打ち破った隊長・カチューシャと副隊長・ノンナの存在感は別格だった。男性であるゴロドクにとって女子の競技である戦車道は話聞く程度の認識だったが、それでも彼女らの事は知っていた程だ。

「(それにしても……本当に同じ歳か、この人?)」

そう思いつつ、ゴロドクは眼前に立つノンナを見上げた。

170cmを裕に超える長身をダークグリーン製の制服で包み、険しい表情でゴロドクを見下ろす姿は恐ろしく威圧的であったが、同時にそれは艶めかしくもあった。

防寒のために厚手の素材で作られた制服の上からでなおボディラインがくつきりと浮かび上がる身体は「締まる所は締まり、出る所は出ている」という陳腐な表現しかできないほど成熟した女性のそれで、後ろ手に手錠で拘束され、椅子に座らされているという現在の状況でなければ自分は既に勃起していただろう。ゴロドクはそう思った。

「そこまで理解が進んでいるのであれば、この状況には納得していただけだと思いますが」

「いえ、逆に分からなくなりました。同志ノンナ」

「……そうですか」

率直に答えるゴロドクに、ノンナは怒りとも軽蔑とも取れない視線を向けると傍らの机の上に置かれたバインダーを取った。

「同志ゴロドク。貴方は二カ月前、迷子の猫の親を探す同志カチューシャと偶然に遭遇。これを手助けしましたね?」

「……は、はい(何で知ってるんだ、この人?)」

バインダーに視線を向けつつ言うノンナに、ゴロドクは内心で疑問に思いつつも答えた。

スーパーで夕飯を買った帰り、ゴロドクは迷い猫とおぼしき飼い猫を抱えて途方に暮れていた金髪の少女を見かけ、放っておく事も出来ずそれを手助けしたのは二カ月前の事だ。

正直なところ、それが『地吹雪』『小さな暴君』の異名を持つカチューシャであるとはこの時は全く気付かなかった。その時の雰囲気や外見などから、小学校高学年くらいと思ったから声をかけたのだ。

幸い、その猫はゴロドクの住むアパートの近所で幾度か見かけた猫だったため解決は容易だった。

飼い主の許に無事に戻れた猫の姿を見てカチューシャは本当に嬉しそうに顔をほころばせると、ゴロドクの視線が自分に向けられているのに気付いたのかハツと表情を引き締めてこう言った。

「あ、貴方なかなかやるじゃないの！ また何かあったら、このカチューシャの補佐を務めなさい！」

それは「また何かあったら助けてね」の彼女なりの言い方だったのだろう。連絡先を交換したゴロドクは、それから探しものや迷子、校内のトラブルなどのお助けにカチューシャと共に幾度が走り回る事になった。

「不覚でした。猫を抱えてオロオロするカチューシャが余りに愛らしく、よもや貴方のような一般生徒に助けを求めるところまで追い詰めてしまうとは……」

「え？」

「何でもありません。そして同志ゴロドク、貴方は本日12時23分、校舎裏庭において同志カチューシャから交際の申し入れ、いわゆる『告白』を受けた。これを認めますね？」

「な、何でそれまで!？」

「……認めますね？」

そう問い詰めてくるノンナの視線は真っ直ぐにゴロドクの目を見据えている。ゴロドクは何とか誤魔化せないか言い訳を幾つか考えた後、それが彼女に通用しないであろう事を悟ると力なく答えた。

「……認めます、同志ノンナ。なあアンタ、もしかしてカチューシャの

事を尾行」

「私が求めたのは情報の確認だけです。同志ゴロドク」

逆に問い返そうとするゴロドクの言葉を強引に打ち切り、ノンナはバインダーを置いた。

ノンナの発言は全て真実だった。校舎裏に呼び出され、また猫が木から降りられなくなったとかの解決かと思っていたゴロドクにカチューシャは顔を真っ赤にしつつ言った。

「わ、私と付き合いなさい！ これは命令よ、ゴロドク！」

そう言う彼女が強気な態度の裏で自身の不安を懸命に押し隠そうとしている事が、ゴロドクにも伝わってきた。

彼女は「暴君」と呼ばれ、尊大な態度を他者にとることが多い。しかしそれはプラウダ戦車道隊長として部下に弱い姿を見せたくない彼女なりの示し方で、その内側は普通の、優しい少女なのだ。二月ほどの付き合いながら、ゴロドクにはそれが理解できた。

とはいえ、告白された事への戸惑いもあった。ゴロドクにとって彼女は身近な幼い少女みたいな存在であり、男女として交際する事に発想が及ばなかったからだ。

「どうしたの!?! は、早く『はいDa』って言いなさいよ！」

言葉上では強気な態度を崩さないものの、既にカチューシャは泣きそうな顔になっていた。拒否される事への不安を隠しきれなくなってきたのだ。

その健気な姿に、ゴロドクは僅かな迷いこそ残したが首を縦に振った。それがつい数時間前の事だ。

そして帰宅しようと靴箱に向かう前に、背後から何者かに眠らされ——今に至る。

確かに交際についての不安はあったが、こんな形で問題が発生するとはゴロドクにとっても完全に予想外だった。おそらく自分を眠らせたのは眼前のノンナか、その協力者だろう。

しかし——

「ま、待った！ 確かに俺は彼女の告白を受けたけど、それとこんな目に合うのと何の関係があるんだ!?! 彼女が戦車道の隊長だったのは

俺も知ってるけど、だからって副隊長のアンタが口出しする事じゃないだろう！」

「……それが理解できない貴方だからこそ、こうして此処にお招きしたんです」

ゴロドクとしてはもつともな正論を言っている筈なのだが、ノンナはそれに表情を僅かにも変えずに淡々と答える。

どうも彼女との会話はいちいち噛み合わない。まるで話の前提から違うようだ。

何とか後ろ手の手錠の拘束を解けないかと腕を揺するゴロドクに、ノンナは言った。

「同志ゴロドク。いち生徒である貴方には理解し難いかもかもしれませんが、カチキューシャ隊長は我々プラウダ戦車道にとつて太陽であり、私たちを導く指導者であり、規範とすべき敬愛する先駆者なのです」

そう語るノンナの表情には僅かに赤みが差し、瞳には憧憬の念が浮かぶ。

彼女を尾行していたとしか思えない詳細な情報、そしてこの態度。それらから彼女がカチキューシャに対してどのような感情を抱いているかをゴロドクが理解するのはさほど難しくはなかった。

「……嫉妬か」

「そんな安い表現を使わないで頂けますか？」

苦笑いで呟いたゴロドクに、即座に表情を戻しノンナは鋭く言った。

「大体分かってきた。つまり、俺に彼女と別れろって言うんだろ？」

「それだけでなく、プラウダから転校してカチキューシャの前に二度と姿を現さないでほしい……というのが、私の本音です」

無表情のままノンナは物騒な事を平然と言った。彼女は「ブリザードのノンナ」の異名を持ち、カチキューシャに信頼される一方で部下（後輩）からは鬼のように恐れられているとは聞いていた。しかし今こうして彼女と相対していると、「ブリザード」の二つ名が決して名前負けするものでない事がゴロドクにも理解できた。鋭利で冷たく、それでいて激しさを秘めている。正に激しい吹雪だ。

「言っておきますが、冗談とは思わないでください。貴方を傷つけずとも、転校を決めたくなるような気持ちにさせる事は容易です」

「……怖いね」

ゴロドクの頬を一筋の汗が流れる。

しかし、同時にゴロドクは違和感を覚えた。「本音では」と彼女は言った。つまり、自分を拘束したのには別の意図があるという事だ。

ノンナは椅子の前に腰を落とし、正面からゴロドクを見据えた。黒いタイツに包まれた脚と短めのスカートによって作られた隙間から、僅かに白いものが覗く。下着に意識を向けている場合ではないのだが、男の本能であろうか、ゴロドクは思わずそれを視線で追った。

「とはいえこの場合、カチューシャが悲しむという大きな問題があります。それは私の望むところではありません」

ゴロドクの視線に気づいていないのか、ノンナは変わらぬ口調で言った。

「つまり……付き合っていていいって事か？」

「より具体的に言うならば在学中は清く正しい交際を行い、その後卒業後、関係を自然消滅していただくのが最良と考えます」

「……」

「付き合うな」より更に無茶な事を言ってきた。

とはいえ、即座に危険な目に遭うという訳ではないらしい。ゴロドクは安堵の吐息をつくとき、ノンナの瞳を見て言った。

「……分かったよ。それに従わないと、帰してくれないんだろ？」

「ご理解が早くて助かります。ですが……言葉だけでは、信用する事がこちらでもできません」

「誓約書でも書けてのか？」

「いいえ」

ゴロドクの言葉に首を横に振ると、ノンナはおもむろにゴロドクの股間に手を伸ばした。ジッパを掴まむとそれを引き下ろし、躊躇う事無くパンツの中に手を差し入れてくる。

「なっ、何を!？」

「男性の脳は股間と直結しており、一度劣情に襲われれば約束など意

味を持たないと聞きます。無論そうなった場合、貴方を無傷で済ませる事はできませんが、カチューシャが傷付けられてからでは手遅れです」

「そ、そんな事ないってー!」

「それが信用できません。なので……」

ノンナの指がゴロドクの肉棒を探り当てた。半ば勃起したそれを外に引き出し、包むように握る。

「……貴方がカチューシャと交際している期間、彼女に一切勃起する事がないよう、私が『処理』を行います」

「そんな無茶苦茶な……っ!」

椅子を揺らし抵抗しつつも、むくむくと肉棒はその固さを増しつつあった。状況はともかく、長身の美女に自身のペニスを握られているというだけで股間は熱を帯び、血を送り込んでくる。

「では、いきます」

そう淡々とノンナは言う、手を動かし始めた。

「痛たたたたっ!?!」

思わずゴロドクは悲鳴をあげた。まるで戦車の車体をやすり掛けするような荒っぽい手つきで、握り具合の加減もなく手を上下させる。充血しかかっていた肉棒は逆にその固さを弱め、ノンナの手の中で萎んでゆく。

「ちよ、痛っ! 待った、痛いつ! ちよつと待って!」

「……………?」

「あー……死ぬかと思った」

怪訝な表情を浮かべつつ、ノンナは素直に手を止める。生殖機能を失いかけた恐怖から解放され、ゴロドクは大きく息をついた。

「あの、同志ノンナ……いや、ノンナさん。ひよつとして、こんな事するの初めてじゃないか?」

「当然です。^男xy^{性器}など、父親のものしか知りません」

「……………」

あのまま止めていなかったら本当に肉棒が削り落ちていたかもしれない。ゴロドクは戦慄を覚えつつノンナに言った。

「その……ノンナさん、あんたも……オ、オナニーくらいはすると思うんだけど、ノンナさんのと同じで、俺のコレも結構デリケートなんだ。そんなんじや、痛いだけで発散とかは無理だよ」

「……存外難しいものですね。単純な形をしているだけに、扱いも単純かと思っていたのですが。確かに最初よりも縮んでいます」

萎えた肉棒を眺めつつノンナは言った。どうやら彼女は、その冷静な外見とは裏腹に勢いで動くところもあるらしい。多分、最初の手の動かし方にしても何かの本かで知った程度の知識なのだろう。

暫くノンナは何かを考えるように首を傾げると、ゴロドクを見た。

「……分かりました、同志ゴロドク。では貴方が気持ちよくなれるよう、私に指示を出してください。それに従います」

「え?! えっと……それじゃ、さつきより弱く握ってもらっていいかな?」

何ともおかしい事になってきた。自分を拘束している相手に抜き方を教えるという状況に混乱しつつ、ゴロドクはとりあえずノンナに指示を出した。ノンナの指が再度肉棒に触れ、先ほどよりも柔らかく竿を握る。

「この程度……でしょうか」

「んっ、そ、そんな感じ……それで、握りすぎない程度に扱いてくれ」
「分かりました」

そう言うと、ノンナは先ほどよりも緩やかに手を動かし始めた。先ほどとは打って変わって、小動物を愛でるかのような柔らかい手の動き。萎えていた肉棒に再び血が集まり、硬さを増してゆく。

「なるほど、こうすれば気持ちよくなるんですね。反応がはつきり違っています」

感心するようにノンナが言うと、その吐息が肉棒にかかる。革から先端を覗かせかけていた亀頭にその吐息があたり、ビクンとゴロドクは腰を震わせた。

更にノンナは手を動かし続ける。肉棒は完全に勃起し、熱く脈動し

つつノンナの手の手で暴れる。

しかしながら、ゴロドクはもどかしさを感じた。ノンナの手の動きは完全に一定で、ある程度のところで刺激が停まっているのだ。

「くっ！　こ、今度は、少し動きに緩急をつけて、根元から……」
「こう……ですか？」

握力に微妙な強弱をつけ、ノンナは手の動きを大きくする。まだ慣れていないためか強く握り過ぎる瞬間もあるが、先ほどのゴロドクの苦悶は相当だったのだろう。そういった時にはノンナはすぐに握力を弱める。まだ不慣れでもどかしい感じが、何とも言えない快感をゴロドクに与える。

「うっ、ううっ！　そ、そうですっ、ノンナさん……っ！」
「……………」

快感に悶えるゴロドクに対し、逆にノンナは不満のようであった。「意外と時間がかかるものですね……これでは、完全に発散させ切るまで時間がかかります」

「どうやら、男性はもっと早く射精するものと思っていたらしい。扱く手を止めないまま、ノンナはゴロドクに尋ねた。

「同志ゴロドク、何か短縮する方法はありませんか？」
「えっ？」

思わぬ質問を受け、無意識にゴロドクはノンナの唇を見た。薄紅も引かれていない、しかし艶やかな唇を。

ゴロドクは唾を呑み込むと、ノンナにおずおずと言った。

「ええっと、その……ノ、ノンナさんの口で啜えてもらえれば、もっと早く射精するかも……です」

「……………」
数秒、ノンナはゴロドクを見詰めた。その感情を伺い知る事はできない。
「…………調子に乗り過ぎたか？」

ゴロドクの額に冷や汗が浮かぶ。

永遠に思える数秒の後、ノンナが動いた。淀みない動きで、髪をかき上げつつ顔を股間に近づける。

「分かりました。動かし方は貴方が指示を……んむっ……」
「うああっ！」

ヌルヌルとしたノンナの口腔内に突然亀頭が啜えこまれ、ゴロドクは腰を震わせつつ声をあげた。

「……………？」

「んっ！ そのまま、唇を締めなが、らっ！ 先端を、アリスを舐めるみたいなの、感じて……………っ！」

「じゅっ、じゅるっ……………んんんん……………」

ゴロドクに言われるがまま、ノンナは舌を使い始めた。舌が亀頭を舐めまわし、唇をすぼめるようにして竿を締め付ける。

「んんん……………んん……………ちゅっ……………」

「ふあっ！ や、ヤバいつ！ それ……………っ！」

どうやら、ゴロドクの反応から肉棒の感じるところがノンナにも多少分かってきたようだ。ついでに舌先で鈴口を刺激しつつ、頭を前後させて口腔内全体で肉棒に快感を与えてくる。

先ほどまで冷徹な姿を見せていた女性と同一人物とは思えない程の情熱的な動きに、ゴロドクの腰から急激に射精感が昇ってきた。

「そっ、そろそろっ！ イクッ、イキますっ！ ノンナさん……………」

「じゅっ、じゅぶっ……………っば、分かりました。床が汚れますので、このまま私の口の中で出してください。じゅるる……………」

「うっ、うああっ！」

ゴロドクの訴えにノンナは短く答えると、再び肉棒を啜えこんだ。吸い上げるような口の動きと亀頭を舐める舌の動きが、とどめとばかりに激しくなる。

「うっ、ううっ、イクウツ！」

「……………っ！」

ビクビクと腰が激しく震えるのと共に、ゴロドクの肉棒から精液が迸った。初めての口内射精に、ノンナは身体を強張らせつつも精液を受け止めてゆく。口の端から漏れた精液の残渣が床に零れ落ちる。

「はあ、はあ……………」

「……………ケホッ」

大きく息をつくゴロドクの様子に、射精が収まった事を確認したノンナはせき込みつつ口を離した。亀頭と唇の間に、粘液の橋がかかる。

「これで、発散できましたか？」

立ち上がり、まるで何事もなかったかのように問いかけるノンナ。しかし、激しい動きで紅潮した頬と口元から漂う精臭は隠せるものではない。

その姿を見ているだけで、ゴロドクは自分の股間に再び血が集まるのを感じた。

「……………」

一向に治まる様子の無い肉棒を見て怪訝な顔をするノンナ。ゴロドクは気恥ずかしさを覚えつつ言った。

「その、男性ってのは……一回イクだけで、収まらなかったりするんです」

「なるほど、簡単にはいかないという事ですね」

納得するようにノンナは頷くと、再びゴロドクの前に腰を落としました。

「では……次はどうすれば良いですか？」

その様子に、ゴロドクは自身が興奮している事に気付いた。

当初、この場所ではノンナが主であり、自身はそれに流されるしかない状況だったはずであった。

しかし今は——彼女が自分の言いなりになっていないか？

「あ、ああ……それじゃ、その、とりあえず、手錠を解いてもらっていいか？」

堪らない支配欲が湧き上がるのを、ゴロドクは感じていた。

第二話

「それでは……次はどうすれば良いですか？」

口の端に精液の残渣を残しつつ尋ねてくるノンナに、ゴロドクは答えた。

「あ、ああ……それじゃ、その、とりあえず、手錠を解いてもらっていいか？」

「……分かりました」

逃げるつもりが無い事が伝わったのだろう。ノンナは少しだけ考えた後、ゴロドクが拘束されている椅子の後ろに回った。カチャカチャという音の後、手首に感じていた金属の感触が消える。

「ふう……」

おずおずとゴロドクは手を前に回し、腕の様子を確認した。多少もがいた事で手首の辺りが赤くなっているが、血は出ていないようだ。

「……………」
ノンナはゴロドクのそんな様子を無表情に見下ろす。視線を感じ、ゴロドクは改めてノンナを見上げた。

彼女の視線を股間に感じる。未だに勃起を治めていない肉棒に。

「……………どうしました？」

「なあ……その、ノンナさん。ここまでにしらないか？」

「どういう意味です？」

ゴロドクの視線を受けて尋ねるノンナに、ゴロドクはばつが悪そうに言った。

彼女、ノンナが男性経験が無いのはここまでの挙動で分かっていた。知っていれば、少なくとも射精させようとして海綿体を削る勢いで肉棒を握ったりはしないだろう。

「いや、だから……信用してくれって事さ。あんただって、好きこのんでこんな事をしたくない訳じゃないだろ？」

そんな彼女が自分に性行為を行おうとしている事に、変な申し訳なさがあつた。

そもそもカチューシャはゴロドクにとっても性の対象ではない。

それをノンナが、必要以上に警戒しているだけなのだ。にも関わらず、彼女は自分の身を汚そうとしている。

自分を拘束した事を含めて彼女の勝手とはいえ、流石にこれ以上は行きすぎに思えた。

「調子に乗らないでください。拘束は解きましたが、貴方を信頼した訳ではありません」

しかし、ゴロドクの気遣いは逆にノンナの気分を害したようだった。眉をひそめ、斬り込むように言葉を返す。

「仮に貴方がそうだとしても、カチューシャの側から貴方を求めようとする可能性も否定できません。その時に、貴方がカチューシャを受け入れられる状態では意味がありませんので」

「あ、あんたなあ……！」
一応の善意を全力で拒否され、ゴロドクの顔に僅かの怒りが浮かぶ。

戦車道を修めている女性というのは競技の性質上、意地っ張りが多いのだろうか。とりあえずノンナがこのまま黙って自分を解放するつもりが無い事を察し、ゴロドクは大げさにため息をつくのがつくりと首を下げた。

「……分かったよ！ 分かったから、頑張つて発散させてくれ」
「そうさせて頂きます。それで、どうすれば良いですか？」

頷くとノンナは再び腰を下げ、改めて肉棒に視線を向ける。

何だか意地の張り合いみたいになってきた。こうなったらノンナが音を上げるか、あるいはゴロドクの精巣が空になるかしなければ部屋からは出られないだろう。

「(だったら……)」

ゴロドクは考える。

幾ら無表情を装っていても、嫉妬から自分を拘束した以上はノンナにもちゃんと感情がある。という事は、羞恥心だつて当然あるはずだ。

ならば、ノンナが「これ以上できない」という所までエスカレートさせれば、自分も彼女も必要以上の消耗をする事無くこの状況から開

放されるのでは？

勿論ノンナが最後まで意地を張る可能性もあるが、今の拒絶で彼女に怒りを覚えたゴロドクにはそれはそれで彼女の自業自得だと思えた。

——彼女の豊満な身体に興味が無いと言えば、嘘になるだろう。そういう気持ちも幾らかあった。

「それじゃ……今度は、ノンナさん。あんたの胸で扱いてくれないか？」

「……胸で？」

イメージが浮かばないのだろう。首を傾げるノンナに、ゴロドクは続けて言った。

「今から俺が言うようにしてくれば大丈夫。まず、胸を出してくれよ」

まずは初手の仕掛け。ここでゴロドクに胸を見せる事に抵抗があるなら早い話になる。

「分かりました。お待ちを……」

しかしノンナの意地と覚悟はこの程度では動かないようだった。腰をかがめたまま、制服に指をかけるとボタンを上から外してゆく。

「……………」

ゴロドクは無言で唾を呑んだ。

厚手の布地はゴロドクが思っていた以上に彼女の身体を抑えつけていたのだろう。ボタンが弾けるように外される度、その下のふっくらしつつも締まる所は締まった肢体のラインが明らかになってゆく。

やがて臍上までボタンが外れると、大きく開いたダークグリーン製の制服の間から白い肌とアイボリーのブラ、そして豊かな双丘が形作る深い谷間が顔を覗かせた。

「……………これで？」

「あ!?! いや、いや、その、ブラも外してくれ。俺も、ズボンを脱ぐから」

「……………」

ノンナに問いかけられ、思わず見惚れていたゴロドクは我に返ると慌てて答えた。言いつつ唾液と精液で濡れたズボンをパンツごとず

り下げて床に投げ捨て、上履きと靴下、上半身のみ制服という姿になる。

普通の少女ならば恥じらいで動きが多少なりとも鈍るところである。しかし、下半身裸のゴロドクからそう言われたノンナは迷う事無く制服のボタンを最後まで外すと袖を抜き、床に制服を置いた。

「(おあ……!?)」

アイボリーのシンプルなブラとスカート、黒タイツだけの姿になったノンナにゴロドクは息を呑んだ。

張りと瑞々しさを湛えた、きめ細やかな白い肌は若々しい少女のそれ。

しかし、形良い首筋から続く豊満な肢体は成熟した女性に勝るものだった。重そうに揺れる乳房は控えめに見積もってもEカップか、F、あるいはそれ以上あるのではないだろうか。

まだ触れられていないにも関わらず、ノンナのその姿だけでゴロドクの肉棒は固さを増し反り返った。

「……既にそうなっているのを見る限り、やはり信用はおけませんね」
呆れるような声でノンナは言う、背中に手を回しブラのホックを外した。窮屈なブラから開放された乳房が大きく揺れながら露わになる。薄桃色の乳首は小さく、白く大きな乳房の先端で揺れている。

「よっ!?!」

「……?」

「ンツ、よ、よし。それじゃ、そのまま胸を俺のに近づけてくれ」

思わず声が裏返ったのを咳払いで誤魔化し、ゴロドクは足を広げ自身の肉棒に導いた。

ノンナはそれに従い、椅子の前で膝立ちになると上半身をゴロドクの下半身に預けるような姿勢になった。豊かな乳房の前で、赤くひくつく肉棒が揺れる。

「この状態で、貴方のコレを挟めば良いのですか?」

「ああ、そうだ。まず先に、さつきみたいにあんたの唾液で濡らして、それから扱くんのだ」

「ご注文が多いですね……」

「俺はいいって言ってるのに、あんたが聞かないから説明しているんだぜ？ まあ、無理はしなくていいよ」

ゴロドクの言葉は半分は本心、半分はノンナへの挑発だ。

「……分かっています」

ノンナはそう答えると口を閉じ、唾液を溜め始めた。口腔内で舌を動かしているのが分かる。

数秒間の間を置き、ノンナは顔を亀頭の上に近づけた。唇を緩めると唾液がとろりと肉棒に降りかかる。

「っば……」

「くっ……！」

唾液の熱さに、思わずゴロドクは声を漏らした。

亀頭から竿へ、そして根本の陰毛まで唾液が濡らしてゆく。

ノンナは口を半開きにしたまま乳房に手を添え、深い谷間を左右に広げると濡れた肉棒をその中央に迎えた。

「そ、そのまま……挟んで、両側から捏ねるように、扱くん……うあっ！」

「はっ、はあっ……」

「すっ、凄っ……！」

柔らかくも弾力に富んだ、両側からの強烈な肉圧。ゴロドクは思わず背を反らす程に悶えた。

少なくとも標準サイズかやや上程度はあるゴロドクの肉棒を、ノンナの豊富な乳房はすっぽりと覆い隠していた。両側から手を添え、圧迫しつつ身体ごとノンナが上下を始めると、唾液と先走りで滑らかになっていた谷間をニユルニユルと肉棒は滑り、時折亀頭が谷間の間から顔を出した。

「んっ、んんっ……こ、こっ……ですか？」

「ううっ！ そ、そうだ……両側から押し付けながら……緩急を、つけて……くっ！」

「ふっ、ふうっ……はあっ……！」

問いかけてくるノンナに、呼吸を荒くしつつ指示する。

ノンナはゴロドクの言う通りの動きで肉棒を刺激してゆくが、その

声には次第に甘い吐息が混ざり始めていた。少なからず、彼女も自身の胸からの刺激に感じているのだろうか。

肩口まで伸びた艶やかな黒髪が汗に濡れ、ノンナの頬に貼りつく。長身と気丈な表情が似合う彼女が膝立ちで男の肉棒を挟み込みつつ奉仕するという何とも倒錯的な状況は、ゴロドクの身にぞくぞくとした背徳感を湧き上がらせる。

「ああっ……ま、まだ、でしょうか……？」

「もっ、もう、ちよつと……！ 舌っ、舌先で、つついてっ……！」

「はっ、はい……はあっ……ああ……！」

左右の乳房の圧力に強弱をつけつつ、ノンナは口を開いて舌先を伸ばした。

身体を下げ、乳房の谷間から亀頭が顔を覗かせると、その鈴口をつつくようにノンナの舌が触れた。

「うあっ！」

「ふあ……あ、あはあ……」

それだけで亀頭からは更なる先走りが滲み、谷間に垂れてゆく。ノンナはその反応を楽しむかのようにリズムカルに身体を動かしつつ、乳圧を弱めずに亀頭の刺激を続けてゆく。

やがて二度目の射精感がゴロドクの腰から昇ってきた。びくびくと腰が震え、射精の前兆を示す。

「は、反応が、はあっ、変わってきましたが……」

「もっ、もうちよつとで、イクツ！ あと、ちよつと……！」

だが、ゴロドク自身が思った以上にその射精感の限界は早く来た。

「くっ、あああっ！」

「ンツ……!?!」

背を反らし、ゴロドクは絶頂に達した。胸の谷間に挟まれたまま亀頭からは噴水のように精液が噴き出し、ノンナの整った顔を、濡れた唇を、白い双丘を汚してゆく。

「あっ、ああっ……！」

「……っ、次からは出る時はちゃんと行ってください。これでは、顔を洗わないと人前に出られません」

射精感に震えるゴロドクを他所に、ノンナは荒い呼吸のまま言った。白い肌には朱が差し、精液の飛沫を浴びた薄桃色の乳首は僅かに突起して揺れている。

「わ、悪かったよ……」

「……………」

素直に謝るゴロドク。ノンナは乳房の谷間から肉棒を解放すると、腰を落として息をついた。顔に付いた精液を指で拭う。

ノンナの唾液と自身の先走りによってぬらぬらと濡れる肉棒は、だらりとゴロドクの股間に垂れ下がった。

「……………これで、終わりでしょうか？」

ノンナの問いかけに、ゴロドクは僅かに迷った。

二回目の射精で確かに自身の中に脱力感は生まれている。ここで股間から意識を遠ざければ、ノンナに「もう充分」と示す事も出来るだろう。

しかし、ゴロドクにも男の端くれとしての意地が多少なりともある。ここで唯々諾々とノンナの意図するままに終わるのは、彼女の意地に負けるようなものだ。

それは、嫌だ。ゴロドクはそう思った。

唇を噛み締め、精液に汚れたノンナの姿を視界に収めつつ、腰に意識を集中する。

「……………!?!」

ノンナの表情に初めて驚きが浮かんた。

脱力していた肉棒がむくむくと起き上がり、更なる射精を求めるようにノンナの眼前で反り返る。

「まだ……………足りないようですね」

「あんたが思ってる以上に、男ってのは何回でも出来るんだよ」

そう言いつつゴロドクは椅子から立ち上がり、ノンナの前に立った。腰を落とした彼女の丁度頭の位置に肉棒が来る状態になり、精液塗れの亀頭をその顔に突き付ける。

「……………『完全に発散させる』って言ったよな？」

「……………」

「その、何だ、これ以上は……うっ!？」

「やめた方が」と言いかけた所で、ゴロドクは股間からの快感に身体を跳ねさせた。

見れば、ノンナが肉棒に指を添え、扱き始めている。

「ノ、ノンナさん、あんた……っ!」

「言った通りです。貴方がもう勃たなくなるまで、私が相手をします」
まだ整い切っていないかったノンナの吐息が、再び荒くなってゆく。
見れば、無意識にだろうか、彼女の空いた手は自身の股間に伸び、
ショーツの上から秘所をゆつくりと撫で擦っている。

「……ああもう、知らねえぞ」

その光景に否応なく興奮を駆り立てられると、ゴロドクはノンナの手に自身の手を添えて扱くのを止めさせた。

「何を……?」

「あんたが本当に俺を発散させたいって言うなら、俺からもさせてもらおう」

そう言うとゴロドクはノンナの身体を床に押し倒し、その上に覆いかぶさった。

体格的にはノンナの方が上であるが、彼女はそれを振り払おうとしない。

「……本当に意地っ張りだな、あんた」

普通なら本能的にでも多少の抵抗はする筈である。それすら抑え込むノンナの自制心に、思わずゴロドクは言った。

「あ……貴方には、分かりません。私がどれだけカチューシャを想っているか、など……」

「……だろうな」

そう答えるノンナには確かな意思があった。ゴロドクが同意せざるを得ない程の意思が。

おそらく彼女は自分がカチューシャを知るより遥かに前から彼女の事を慕い、常に側にいて、それでいて自分の想いが叶う事はない事を誰より理解しながらも耐えていたのだろう。

だからこそ、カチューシャを奪おうとしている自分が許せない敵に

見えたのだ。

ここまで自身の身体を捧げようとする姿勢には、あるいはカチューシャから興味を引き離そうとする思惑もあったのかもしれない。

——と言つて、素直に「負ける」つもりもゴロドクには無かった。

ここまで来てノンナが退かない以上、次に行う事は——

「んっ……」

「……!?!」

ゴロドクは身体を重ねたまま、ノンナの唇に自身の唇を重ねた。戸惑うようにノンナの身体が跳ねる。

同時に右手を彼女の豊かな乳房に、左手をスカートに差し入れてゆく。

精臭混じりのノンナの吐息がゴロドクの口腔内に流れ込み、頭を痺れさせてゆく。

「はあっ……ま、待つてください、これは……!?!」

「待たない」

「ンッ！　ンンッ!?!」

唇を離し、初めて制止を口にしたノンナにゴロドクは短く答えると、今度は薄桃色の乳首にしゃぶりついた。

それだけでノンナの身体は震え、身体の奥から熱を帯びてゆくようだ。

「(……?)」

ゴロドクは僅かに違和感を覚えた。ただ乳首に吸い付いただけで、まだ舌を動かしてもいないのにやけに反応が強い。

その間に、スカートに差し入れていた手がショーツのステッチの部分まで辿り着いた。乳首を舌先で舐めつつ、下着越しに秘所の周りを撫でるように指を動かす。

「あっ！　あああっ！」

ノンナの身体が跳ねる。やはりやけに反応が強い。

「(もしかすると……)」

「っ!?!　待つ……ンアッ！」

思い切つてゴロドクはノンナのショーツの間から直接、彼女の股間

に指を割り入れた。指先に感じるじつとりとした湿気。

陰毛のシヨリシヨリとした感触が伝わってくる。やがて指が陰唇まで達すると、果たしてそこは既に濡れていた。

「ノンナ、さん……あんた、ひよつとして相当に感じやすいんじゃないか？」

「そつ！ そんな、事は……アンツ！」

ノンナの顔が急激に赤くなってゆく。まるで子供がいよいよやるように首を横に振りつつ、顔を隠すように手をあてる。

「戦車乗りというのは、周囲のあらゆる状況に即座に対応できるよう鋭敏な感覚が求められるのよ」とカチューシャが言っていたのを、ゴロドクは思い出した。その鋭敏さにおいて、プラウダでノンナの右に出る者はいないという自慢話も。

それと関係あるのか無いのか。門外漢のゴロドクには分からない事であったが、ノンナが非常に感じやすい体質である事は間違いなさそうだった。

先ほどまでの態度とは打って変わって自身の中からの快感に翻弄されるノンナの姿に、ゴロドクは呟いた。

「……何か可愛いな、あんた」

「何を馬鹿なつ、あんつ、事を……ンンツ！」

抗議しようとしたノンナは、秘所を弄るゴロドクの指の動きで言葉を中断させられた。指を一本挿れただけで、膣内は強く抵抗しそれを締め付けてくる。しかし同時に嬖からは愛液が滲み始め、指先を濡らしてゆく。

「あつ、ああつ！ こつ、これではつ、貴方の発散が……！」

「これでいいんだよ。あんたが気持ちよくなってるのを見て、俺も興奮してるんだ。ほら……」

「……!？」

そう言いつつ、ゴロドクは顔を隠していたノンナの手を掴むと肉棒に添えさせた。射精して間もないというのに、既に肉棒は先程よりも大きく脈動し、鉄のように固く、また熱くなっていた。

ノンナは言われる事無く、ゴロドクの肉棒を抜き始めた。

「こ、こんなに、熱く……あはあっ！」

「ノ、ノンナさんのも、凄い、濡れてきてる……」

「言わないで、ンツ、く、ください……お願い、ですから……んくうっ！」

ゴロドクはノンナのショーツをタイトごとずり下げ、より大胆に指を動かした。

まだ処女であるノンナの秘所は狭く、指を二本挿れるのも難しいほどであったが、膣内できくに指を動かし、ノンナの感じるところを探る。

「あっ、あっ！ あああっ！」

ノンナの身体がびくびくと震え、背を反らした。軽く達してしまつたようで、痛い程に指を締め付けてくる。

その様子に、ゴロドクも自身が我慢できなくなってきているのを感じていた。

ノンナの太腿に引つかかる下着とタイトをめくるように脱がせ、足元に丸めて転がす。

ゴロドクは汗に塗れた制服を脱ぎ、殆ど全裸の状態になるとノンナの脚を抱え、大きく股を広げさせた。

「ああ……」

ゴロドクが何をしようとしているのか、ノンナにも理解できたのだろう。瞳を潤ませつつ、見上げてくる。

「……んくぞ」

「……」

もはや中断の確認もしようとしないうちにゴロドクに、ノンナは肌を紅潮させつつ無言で視線を逸らした。

「ンツ……」

「うっ!? あっ、ああっ！ ああああっ！」

ひくつく女陰に肉棒が押し当てられ、そのままゆっくりと押し入る。

強い圧迫感に悶え、ずり上がろうとするノンナの身体を押しさえつつゴロドクは腰を更に突き入れた。

第三話

壁の暖炉がパチパチと音を立て、室内で身体を重ねる男女の姿を赤く照らす。

「ンツ……！」

「んっ、あっ！…ンンツ！」

しかし、その二人の様子は愛のある交わりと呼ぶには程遠い——”勝負”に近いものであった。

「あうっ!!? あっああっ！」

ゴロドクに乗られながらノンナは大きく背を反らし悶えた。

未知の圧迫感と刺激に戸惑うように髪を振り乱し、それでも自分からゴロドクの背中に手を回して挿入を堪えようとする。

「うあっ！…ノ、ノンナっ、凄……っ！」

一方のゴロドクもノンナの女陰に肉棒を突き入れつつ、今にも射精し兼ねない衝動から耐えていた。気持ちの昂りからか、ノンナを呼び捨てている事にも気付いていない。

戦車道の日々の修練に依るものだろうか。初めて肉棒を受け入れたノンナの膣内は亀頭から竿に至るまで肉棒全体を強烈に締め付け、それでいて押し返す事無く無数の襞が更に奥に肉棒を引き込もうと蠢いていた。

ずぶずぶと亀頭は更に進み、やがてこつんとした感触に至った。ノンナの子宮口だ。

「……っ！」

「ぐっ！…な、何だこれっ……!?!」

ノンナは無言でゴロドクを強く抱きしめた。同時に膣内の襞がうねうねと動き、奥まで辿り着いた肉棒から精液を吐き出させようと竿全体を扱ってくる。二人の身体の間でノンナの豊かな乳房がゴロドクの胸板に押し付けられ、淫猥に形を歪ませる。

ゴロドクはその快感に戸惑いつつもノンナの顔を見た。先ほどまでの鉄面皮とは打って変わり、自身の中から湧き上がる快感に耐えるようにその瞳は閉じられ、口元は強く噛み締められている。

おそらく、ノンナは意図してこのような膣の動きを行ってはいない。本能でゴロドクの肉棒を迎え入れているのだ。

次いでゴロドクは結合部に目を向けた。挿入前にノンナはかなり感じていたのだろう。スムーズにはいかなかったが、それでも出血や痛みは最小限に抑えられたようだ。ノンナの肌は紅潮したままで、仰向けでなお形を崩さない大きな乳房が汗で光っている。

ノンナはようやく多少落ち着いたのか、硬く閉じていた瞳を開いた。僅かに涙が浮かんでいる。

「はあっ……はあっ……！」

「ぜ、全部、入った……大丈夫か？」

「荒い呼吸を繰り返すノンナに対し、こみ上げる射精感を何とか誤魔化しつつ尋ねるゴロドク。

「はあっ……と、止まらずに……動いて、ください……でないと、あつ、貴方の発散に、なり、ません……んくうっ！」

「……!？」

膣内の肉棒の脈動にノンナは喘ぎつつも、はつきりと答えた。

ゴロドクは思わず言葉を失った。この期に及んでなお、ノンナは当初の「ゴロドクの性欲を発散させる」を果たすつもりなのだ。

自分の処女まで捧げてまで意地を通そうとする彼女に、本来ならば呆れるべきなのだろう。しかし、自身の中からこみ上げる快感に戸惑い、全身を紅潮させつつ潤んだ瞳で懸命にそう言うノンナの姿は艶やかで、それが自分に対してのものでなかったとしても健気で、ゴロドクの中から否応なく更なる興奮を湧き上がらせた。

「んっんっ!？」

興奮で一際大きくなったゴロドクの肉棒に、ノンナは身を震わせた。

「分かったよ。遠慮なく、動く、からな……っ！」

少し身体を離し、ゴロドクはゆっくりと腰を動かし始めた。激しい締め付けに、腰を速く動かせば一気に射精してしまいそうだったからだ。

「ふあ……ンッ! はあっ……ああっ！」

「くうっ、し、締まるっ！」

白をつくように少しずつつ引き抜き、カリが入口に引つかかるくらいから一気に奥まで突き入れる。再びゆっくりと腰を引かせ、同じ動きを繰り返す。奥まで届くたびにノンナは悶えるが、そこには圧迫感による苦悶だけでなく甘い響きも混じり始めている。

そしてその間にもノンナの膣内は絶えずゴロドクの肉棒を締め上げつつ、同時に柔らかく全体を舐め上げるように壁を蠢かせて射精を煽る。

「こ、こっちも、凄いな……全然、手に収まらない……！」

「そっ！ そんな事を、言わないでっ下さっ……ああんっ！ そっ、そっ！」

腰を突くたびにゆさゆさとノンナの大きな乳房が重く揺れる。ゴロドクは堪らなくなり、ノンナの胸に手を伸ばすと激しく揉みしだいた。指の間から乳肉が溢れ、片手に余るボリユームの乳房はゴロドクの手の中で自在に形を変えつつも確かな弾力を掌に返してくる。薄桃色の乳首は既に固く勃起し、指先で柔らかく捏ねるとノンナは嬌声と共に更なる愛液を溢れさせた。

「ううっ、ノンナ、ノンナ……っ！」

「ああっ！ あっ！ あっ！ んああっ！」

次第にゴロドクの腰の動きが速まる。ノンナの身体ががくがくと揺れ、締め付けが強くなってゆく。ゴロドクの腰とノンナの尻が打ち合う度に激しく肉の打ちあう音が響き、豊満さと引き締まりを併せ持つ豊かな尻がぷるりと揺れる。

初めてだと言うのに、感じやすい彼女の身体は破瓜の痛みを快感で上書きし、既に軽い絶頂を立て続け与えているようだった。

ゴロドクはノンナの名を言いつつ、腰を更に振った。ぐちゅぐちゅと淫らな水音が結合部から響く。先走りと愛液と汗が絡み合う淫臭が部屋に満ち、ゴロドクの理性を蕩けさせてゆく。

おそらくはノンナもそうなのだろう。最初こそ自分の感じる姿を見せたくないように赤面した顔を隠していたが、それも出来なくなりゴロドクの手を握りつつ、懸命に快樂に押し流されるのを堪えてい

る。

「ぐうっ！ く、来るっ！ ノンナッ、出るっ！」

「ンッ！ だっ、出してっ、くださいっ！ 出して……っ！」

ゴロドクの射精感の限界が近づいてきた。それを聞いたノンナは脚をゴロドクの腰に絡みつかせ、より密着しようとする。

初めてのの上に安全日かどうかも知らない相手に膣内射精する事に、僅かな迷いはあった。しかしそれは股間からの耐えがたい射精感に押し流された。

「ちゅ、ンッ、ンンッ……うっ、うううっ！」

「ぶあっ……はあっ、ああっ……ふああっ！」

濡れるノンナの唇に自身の唇を押し当て、強いキスをする。同時にゴロドクの腰が震え、大量の精液がノンナの膣内に注ぎ込まれた。

「あっ、ああ……」

「熱っ、熱い……なか、溶けるっ……！」

止まらない射精に喘ぐゴロドク。一方のノンナも初めて中に受け入れる精液の熱さに身を震わせた。

どくどくと吐き出される精液はゴロドク自身が驚く程止まらず、幾度も腰を震えさせ、ようやく収まった頃には結合部から白濁液を溢れさせていた。ごぼりと挿入された肉棒の隙間から白濁液が漏れ、互いの陰毛を汚す。

「あ……はあ……！」

「んんっ……こ、これ、で……？」

ゴロドクが大きく息をつく、ノンナは喘ぎつつ途切れがちに言った。

だが――

「ひうっ!？」

ノンナの身が大きく跳ねた。射精したばかりというのに、ゴロドクの肉棒は挿入したまま再び滾りノンナの膣内で反り返った。絶頂の余韻から戻る間もなく再び快感を強引に引き出されたのか、戸惑いをその顔に浮かべゴロドクを見る。

「そんな、また、大きく……っ!？」

「……悪い」

ゴロドクは射精の余韻を残しつつも、据えた瞳でノンナを見て謝罪した。

「え……？」

「あんたの身体が良すぎて、全然治まらない」

「んんっ！　そ、それは、待ってくだ……ひっ！　ふああっ！」

そう言うゴロドクは再び腰を振り始めた。溢れる精液で更に滑らかになった膣内を、凶悪なまでに怒張した肉棒が再び蹂躪してゆく。ノンナは無言を言わせぬ快感の奔流に悲鳴めいた嬌声をあげた。

ノンナの意地が折れかけている。それは先ほどの問いかけで伝わった。だが、行為を止めない理由はそれだけではなかった。

クールな鉄面皮を外し、艶やかな黒髪を振り乱しつつ悶える汗に濡れた顔。

170cm超の長身に豊かな乳房と尻肉を備えた、極上の身体。

未経験だったとは思えぬほどに肉棒を受け入れ、射精を促してくる女陰。

ノンナのそれら全てが淫らで、かつ美しかった。

もつと彼女と交わりたい、彼女から快感を得たい。彼女と共に快楽に溺れたい。

既に理性を麻痺させたゴロドクの脳髄は、ただ本能のままにノンナを犯したいという衝動に吞まれていた。

「ああっ！　ま、待ってっ、くだっ！　さっ、ひいっ！」

「ごめん、待てない……くっ、ううっ！」

未知の強い快感に怯えるように身をずり上げさせるノンナ。その身体が部屋に置かれたソファに当たった。継るようにソファに手を伸ばすノンナの腰を抱えると、ゴロドクは繋がったまま彼女の身を揺らせた。

「ぐっ！　も、もつと、動くぞ……っ！」

「あふあっ！　こ、こんな、ンンッ！　ふかつ、深いっ！」

ソファに手を置き、ゴロドクに腰を突き出す格好になったノンナの膣を後背位から突き回す。正常位よりもより深い所まで肉棒が届く

ようになり、襷を亀頭が擦るたびにノンナは背を反らし、汗を散らす。
「ノンナッ！ ノンナッ！」

「あっ！ ああっ！ だっ、駄目っ、駄目、ですっ！」

「こ、この胸も、最高っ、だっ！」

「ふああっ！ あっ！ 熱いっ、ですっ！ 胸、熱いっ！」

ゴロドクはただ本能のままに腰を振り、上から覆い被さると激しく肉棒を突き入れつつ乳房を強く揉んだ。

仰向けで形を崩さなかったノンナの乳房はうつ伏せになった事で更に大きさを増し、ぱんぱんと肉が打ちあう動きに合わせて重く揺れる。それを握るように力を込めると、ノンナは痛みがもせず悶え、更に肉棒の締め付けを強めてゆく。

もともと余韻が抜けきる前に再開したからか、早くも次の射精感がこみ上げてきた。今度は我慢する事無く、そのまま一気にスパートをかける。

「あひっ！ ひっ、あはあっ！」

「うおっ、おおっ！ 出るぞっ、出るっ！」

「…………っ！」

大量に出したばかりというのに、どくどくと精液が亀頭から膈内に迸る。ノンナは言葉を発する事も出来ずに強制的に再度の絶頂に導かれ、唇を噛み締めて精液を受ける。

「ぐっ、ぐうっ！」

「な…………!? ふあ、あああっ！ そんなっ、まだ、出て…………ああんっ！」

射精したまま、ゴロドクは腰をまた動かし始めた。結合部から溢れる精液と愛液がぼたぼたと床に零れ、淫らな水たまりを造る。

ノンナは悲鳴めいた喘ぎと共に、ゴロドクに懇願するように言った。

「わっ！ わかつ、分かりましたっ、ンンッ！ 貴方の、貴方のを、あ

ひっ！ はっ、発散させるのは、あ、諦め、ますから…………っ！」

「あ、『諦めるから』っ！ 何だ、ノンナッ！」

「ゆ、許して、下さいっ！ も、もう、耐えられ…………んひいっ！」

「駄目だっ！ 言ったよな、『俺の性欲を完全に発散させる』って！」

全部出して、やるっ！ お前に、俺の全部っ！」

「ふああっ！ 嫌っ、嫌っ！ こ、こんなの、知らな……ひいっ！」
「嫌」と言いながらもノンナの腰はゴロドクの動きに合わせてくねり、肉棒が引き抜かれるたびに名残惜しそうに膣内の襞が絡みつく。まるで言葉と動きが一致していない。未知の快感が強すぎ、恐怖を感じているのだろう。

「ンツ……ちゅ、じゅるっ……もつと、舌、出して……っ！」

「ふあ、ふあい……んっ、んくっ……ちゅ……」

ゴロドクはノンナの身体に覆いかぶさりつつ、彼女の顔を後ろに向かせる。繋がりながらキスを交わした。彼女の恐怖を和らげるように口腔内に舌を押し入れ、ノンナの歯茎を柔らかく舐めあげつつ唾液を交換する。快感にだらしなく蕩け切った顔でノンナは憎むべき相手のはずのゴロドクの舌を受け入れ、吸い上げる。

「うっ、うおっ、うおっ！」

「ふっ、ふひいっ！ あああっ！」

獣めいた声と共に三度目の射精。しかしゴロドクは腰を止めない。そのまま後ろからのピストンを続けつつ、ぐちよぐちよになった女陰の上でひくつく尻穴に指を添える。

「まだ……まだだっ！」

「だっ、駄目っ!? やめっ……ひああっ!!」

陰唇に指をあて、精液と愛液で濡らすとゴロドクは尻穴に指を埋めた。止めようとしたノンナの声が途中で嬌声に変わる。尻穴が引き締まると、十分に濡れそぼった膣の締め付けが一際強くなる。

「ひいっ……許して、許して、くださ……いひいっ！」

「許せる……かよっ！ 勝手に拘束してっ！ 止めようとしてもっ、止めっ、なくてっ！ 勝手なんだよっ、お前っ！」

脳が痺れるほどの興奮が、ゴロドクの中の攻撃性を露わにさせていた。腰に当てていた手を振り上げ、ばちんと尻を叩く。

「くひいっ！」

「どうだっ！ どうだっ、ノンナッ！」

「はひいっ！ ゆっ、許して、くらさ……んひいっ！ ま、また、また

「……っ！ ゆる、して……あつ、ああんっ！」

尻を叩かれ、ノンナは悲鳴と嬌声をあげつつも腰をくねくねと動かし捏ねるように肉棒を刺激する。既に幾度も絶頂に達してしまっているようだ。ひととき強い締め付けが時折肉棒を包み、その度にノンナは謝罪の言葉を喘ぎと共に口にする。

腰がぶるぶると震える。とどめとばかりにゴロドクは奥まで亀頭を突き入れ、子宮に精液を叩き付けた。

「うああっ、出るっ！ まだ、出るっ！」

「あはああああっ！」

ゴロドクの叫びと共に吐き出される熱い精液。ノンナはそれを受け、悶絶しつつソファにぐったりと身体を預けた。

「まだ、まだだ……っ！」

「ふあ……っ！」

半分意識が飛んでいるノンナの手を掴むと、再び彼女を仰向けにする。ゴロドクはノンナの胴に馬乗りになると、汗に塗れた乳房の谷間に精液と愛液に塗れた肉棒を挟ませた。ぐったりとしたノンナのだらしなく蕩け切った表情を見つつ、豊かな乳房が形作る谷間の乳圧を堪能する。

「ブリザード」の異名を持つプラウダ戦車道の凜とした副隊長をゴロドクはまるで自慰のための道具のように扱い、彼女もそれを受け入れていた。

何度目か分からない射精感が湧き上がる。龟头から迸る精液が、ノンナの顔と乳房を汚してゆく。

「うっ、うっっ！」

「あ……ああ……」

恍惚とした表情のまま、ノンナは生臭い精液を舐めとった。

その後、どこまで何をやったのかはゴロドクも覚えていない。

気が付き、我に返った時には既に室内にノンナはおらず、部屋の片隅に制服が畳んで置かれていただけだった。

身体に残った体液は暖炉の熱で乾き、臭いを隠しつつ帰るのに苦勞

したので覚えている。

翌日から、ゴロドクはカチューシャとの交際を始めた。普通に一緒に出掛けたり、彼女の戦車道の練習風景を観戦したりした。

ゴロドク自身が思っていた通り、カチューシャにはやはり友人以上の感情を持つ事はできなかった。

というか、カチューシャ自身も小学生のボーイフレンド程度の交際を「男女交際」と思っていたようだ。案外、本当に「恋人が仲良くしていればコウノトリが赤ちゃんを運んできてくれる」を信じているのかもしれない。怖いので、確認はしなかったが。

ノンナとは、全く話をしていない。

廊下でたまにすれ違ったり、あるいはカチューシャと一緒に居るところを見る事はあったが、彼女は自分に気付くと視線を合わせる事無くその場を去ってしまう。

彼女が言っていた「発散」をさせられる事も無く、そんな感じで、二週間が過ぎた。

「それじゃみんな、紅白戦いくわよ！ ゴロドク、ちゃんとこのカチューシャ様の戦いぶりを見ていなさい！」

プラウダ高校、戦車道演習場。T-34/85の砲塔から手を振るカチューシャに、ゴロドクは客席から微笑みつつ手を振り返した。

戦車が土煙をあげてフィールドへと向かってゆく。男性には馴染みの薄い競技ではあるが、幾両もの鉄の車両が進む姿はなかなかの迫力だ。

単なる紅白戦という事もあり、客席に人の姿はない。

鼻の頭に冷たい感触。ふと上を見ると静かに雪が降り始めている。学園艦の進路は北上中。積もる雪になりそうだ。

「同志ゴロドク」

「うわっ!?!」

横からの突然の声に、ゴロドクは思わず声をあげて驚いた。慌てて声の方を向く。

「あ……」

何時の間に来ていたのだろう。そこにはプラウダの制服姿のノンナが立っていた。

「……………」

「失礼します」

何を言つてよいか分からないゴロドクを他所に、ノンナは彼の横に座った。そのまま何も言わず、美しい彫像のようにフィールドに視線を向ける。

「……………あー、いや、同志ノンナ。今日はいい天気だな」

「雪です」

「……………」

とりあえずの話題をばつさりと斬られ、ゴロドクはふと思った事を口にした。

「あんたは、試合に出ないのか？」

「私が出ると、良いところを貴方に見せる役を持って行かれるのではと心配されました」

「そっか……………」

「……………」

「……………」

話題が続かない。

「……………ん？」

ゴロドクの鼻がひくついた。柑橘系の、爽やかな香水の匂い。

「香水、付けてたっけ？」

そう聞かれ、初めてノンナはゴロドクに視線を向けた。

「……………臭いが取れないもので」

「臭い？」

「貴方が染み付けさせた臭いですよ。特に髪に着いたのが洗っても落ちません」

「あ……………」

「……………あ、そんな理由で髪を切る訳にもいきませんので、やむなく」

ゴロドクの脳裏にあの日の出来事が思い起こされる。もう二週間前の事ではあるが、あの時の快感は詳細に至るまで思い出す事ができ

る。

——正直なところ、その記憶を自慰に使った事もある。

「…………ごめん、やり過ぎた」

ゴロドクは素直に謝罪した。

ノンナが意地を張った面もあったとはいえ、途中から自分が暴走してしまったのは事実だ。ましてやノンナは処女だった訳で、初体験と呼ぶには色々と酷すぎた。この二週間まともに話す機会も無く謝罪も出来ないでいたが、申し訳ないという気持ちはあった。

「……………」

ノンナは無表情にゴロドクを見ている。やがて、彼女は口を開いた。

「あれから、色々試していました」

「え？」

「あの日に貴方に受けた刺激に依るものか、身体が普通の自慰行為で満足できなくなりました」

「…………!？」

「更に言えば、戦車道の試合などで緊張や興奮を覚える度に貴方との行為が思い起こされ、集中が乱されています。非常に深刻な問題です」

ゴロドクはノンナを見た。鉄面皮のような無表情。しかし、その瞳の奥に見えるのは——

「ど、同志ノンナ?」

「…………ノンナ」で結構です」

そう言うと、ノンナはゴロドクの手を取ると自身のスカートの中へと導いた。

「…………!？」

下着を着けていない。防寒用の黒いタイツ越しに女陰の感触と、溢れてくる愛液のぬめり、そして焼けるような熱量が伝わってくる。

「今度は私の『発散』に、お付き合いただけますか?」

そう言うのと口の端だけを持ち上げ、ノンナは轟惑的に微笑んだ。

【暖炉よりなお熱く 終わり】

寒い夜にはボルシチを 第一話

しんしんと雪が降っていた。

時刻はまだ夕暮れ前だが厚く空を覆う雲は日光を塞いでおり、街灯が学園艦の街並みを薄く照らしている。

アスファルトに薄く積もる雪に、厚手の長靴が小さな足跡をつけてゆく。

「ふう……」

ポンチョに積もる雪を身体を振るって落とすつつ、プラウダ戦車道隊長「小さな暴君」カチューシャは目的地のマンションを見上げた。エントランスに入り、セキュリティ付き自動ドアの横のインターホンで部屋番を押す。

数度の発信音の後、インターホンから男性の声が流れてきた。

『は、はい！ こちら伍堂……』

「遅いわよ、ゴロドク！ このカチューシャ様が来てあげたんだから、一回鳴ったらすぐ出なさい！」

伍堂六郎、通称ゴロドクの応答にカチューシャはいきなり叱りつけた。しかし、その表情には嬉しさが浮かんでいる。

『カ、カチューシャ!?!』

「驚いた？ 今日は特別に、ゴロドクにこのカチューシャの料理を作ってあげようと思って来てあげたの！」

『あ……あ、ああ、嬉しいよ。カチューシャ……うっ?!』

『ゴロドク、どうしたの?』

ゴロドクの呼吸が荒い。カチューシャは怪訝な顔でインターホンに尋ねた。

『い、いや、ちよつと急いで出たら、くうっ！ 足の小指を打って……』

『ドジね、全く！ ドア、開けてもらえる?』

『ああ、い、今開けるから……』

少しの間の後、自動ドアが音もなく開く。カチューシャはポンチョ

を取りつつ、足早にエレベーターへと向かった。

ゴロドクとの「交際」が始まって一カ月、何だかんだで彼の部屋に行くのは初めてだ。

インターホンで怒鳴りつけこそしたが、その表情には隠しきれない嬉しさが滲んでいた。

ベッドに机に書棚にテレビ、独り暮らしの男性が住むには非常に一般的なレイアウトのマンションの一室。

インターホンから指を離し、ゴロドクは呻きつつ視線を自身の足元に向けた。

「ノ、ノンナ、ヤバいってー！ く、くうっ！」

「ちゅ、じゅぷっ……ぷはっ……口を挟まないでください」

艶やかな黒髪をかき上げつつ、ゴロドクの硬く勃起した肉棒を舐めしやぶる長身の少女。

プラウダ高校戦車道において「ブリザード」の異名を持つ副隊長、ノンナは制止しようとするゴロドクの声に喉奥まで呑み込んでいた肉棒を解放すると、竿に手を添えて扱きつつ言った。

「いや、だから！ カ、カチューシャがもう上がってくるってー！」

「カチューシャの歩幅で一階のエレベーターまで向かい、そこからエレベーターが降下。少し背伸びをしてボタンを押し、この階まで上がってきたところで部屋番を探し、この部屋のベルを押すまで約2分から3分弱と予測されます。一度射精していただくには十分です」

「そ、そんな無茶苦茶な……ううっ！」

「では、このズボンの上からでも分かる程にコレを勃起させた状態でカチューシャに会うおつもりですか？」

「だ、だったら最初からカチューシャが来るって教えてくれれば……」
「私も、貴方がこんなに簡単に勃起すると知っていれば先に教えたのですが……んむっ……じゅっ、じゅるっ……」

「っ!? うっ、くうっ！」

言葉を惜しむようにノンナは再びゴロドクの肉棒を啜えこみ、唇で竿を締め付けつつ頭を前後させはじめた。焼けるように熱い口腔内

のぬめりに、ゴロドクの背が跳ねる。

ノンナがゴロドクの部屋に唐突にやってきたのは、つい数十分前の事だ。

教えた覚えもない住所に当たり前のように訪れた彼女は、食材の詰まったスーパリーの袋を両手に持ちつつゴロドクの部屋のベルを鳴らし、挨拶もそこそこに上がり込んできた。

おそらくは学校から帰宅せずに直接来たのだろう。プラウダの制服のままのノンナは呆気にとられるゴロドクを他所にキッチンに入り、洗い場に残ったままだった食器を手早く洗うと部屋の片づけを始めた。てきぱきとシワの付いたままのシーツを整え、床に転がったままの雑誌を整え、換気をして空気を入れ替える。その手際はホテルマンと見紛う程だ。

彼女が一度ある行動を決めたならば、それを終えるまではこちらの話を聞かない。それがある程度分かってきていたゴロドクはノンナに事情を尋ねる事を早々に諦め、自身の部屋を整える様子を眺めていた。

同時に、彼女が週末に自分の部屋を訪れた事への期待感もあった。一度ならず身体を重ねた女性が初めて自室を尋ね、料理の準備を持ち込んで部屋の掃除をしてくれている。健全な一般的男性であれば、この状況で期待するのは当然であろう。

ふと見れば、食材と一緒に買ってきたであろう粘着ロールを手にはノンナはカーペットの埃や毛を取っていた。腰を曲げ、丁度尻をゴロドクに突き出しているような格好だ。プラウダの女生徒の制服はスカートは短めで、多くの女生徒は脚の暖をタイツで補う。今日の彼女はベージュのタイツのようだった。タイツ越しに下着の形がくつきりと浮き上がり、布地越しからでも分かるほど肉付きのよい尻が揺れている。

それを見ている内にゴロドクは自然と勃起し、ノンナに触れようとしたところで彼女が何かを言おうとし——インターホンが鳴った。そして、今の状況に至る。

「ンツ、ンツ……ちゆうう……」

「んあっ！ そ、そんな、吸ったらっ！」

「ぷはっ……そろそろ、近くなってきました。床を掃除する時間もありませんので、このまま……あむっ……」

「ああっ！ ノ、ノンナっ！」

大きく口を開けて強く吸い付きつつ、舌尖を龟头に絡め舐め上げる。ただひたすらに相手の肉棒から精液を搾り取ろうとするノンナの舌と口の動きに、彼女の頭に手を添えつつゴロドクは大きく喘いだ。

自分の前に跪き肉棒に奉仕するノンナの姿は否応なくゴロドクの支配欲を満たし、同時に興奮を煽る。次第に腰が震え、射精感がこみ上げてきた。

「ううっ、で、出るっ！」

「ふっ、んんっ、じゅるっ……」

「うっ、うああっ！」

「……………っ！」

ゴロドクの腰が一際大きく震え、精液が龟头から迸った。ノンナは苦し気に眉を歪ませつつも、口を肉棒から離す事無く生臭い白濁液を嚥下してゆく。

どくどくと精液が精管を駆け登る度、ゴロドクの背に堪らない快感が走る。数度の震えの後にようやく射精が治まり、ゴロドクは大きく息をついた。

「はあく……」

「……………」

「痛ーっ!?!」

突然の股間からの痛みにも、ゴロドクは慌てて腰を引いた。ノンナが半勃起したままの肉棒に軽く歯を立てたのだ。

「な、何するんだよ!?!」

「終わったのならば早く口から抜いてください。嗽うがいをしますから、貴方も腰だけ拭いて支度を」

「あ、ああ……」

そう言われ、快感に浸っていたゴロドクはカチューシャが向かってきている事を思い出した。慌てて近くのティッシュを数枚出し、股間を大急ぎで拭く。ノンナは腰を起こすと、口の端に精液の残渣を残しつつ洗面台へ向かって行った。口を漱ぐ音が聞こえる。

部屋のインターホンが鳴ったのは、その数秒後だった。

「お疲れ様です、カチューシャ。材料の準備と下ごしらえは終わります」

「ありがと、流石はノンナね」

どうやら、ノンナは最初からカチューシャに指示されてここに来たらしい。二人が動くわしてどうなるものかと内心穏やかでなかったゴロドクは、ひとまず胸を撫でおろした。

外套を脱ぎ、ひと息ついたカチューシャはびしっとゴロドクを指さすと言った。

「さてと、ゴロドク！ カチューシャが何を作るか分かるかしら？」

「ええっと……ロ、ロシア料理？」

少し自信なさげにゴロドクは答えた。

おそらくは、反応を含めて期待通りの答えだったのだろう。カチューシャは満足そうに頷くと言葉を続けた。

「^{正解}Da！ このカチューシャ手製のボルシチをご馳走してあげるわ！

ノンナ、手伝ってくれる？」

「はい、カチューシャ。エプロンも用意していますのでお付け下さい」
小さな歩幅でぱたぱたとキッチンにカチューシャは向かう。それに静かに続くノンナ。おそらくは食材と一緒に用意してきたのだろう、その手には二着のエプロンが持たれている。

「……………」

ゴロドクは少しばつが悪そうにノンナを見た。

「……………」

ノンナは何も言わずにカチューシャを追った。

ゴロドクとノンナの関係はあの日——カチューシャと交際する事になったゴロドクがノンナに拘束され、結果的に彼女と激しく交合し、ノンナからも求めてくるようになった日——から、微妙な距離感で続いていた。

「関係」と言っても大つぴらに交際している訳でも、普段から親しく話をしている訳でもない。互いが互いに相手の身体を求めたくなった時、都合が合えば身体を重ねる。そんな関係だ。

プラウダ高校戦車道が紅白戦を行った、ノンナから初めて誘われた日。ゴロドクは誘われるままに近くの倉庫で彼女と何度も交わった。外では雪が積もる中、暖房もない倉庫でゴロドクの身体から熱を求めするようにノンナは乱れ、ゴロドクは彼女を求めた。

幾度目かの射精を終えた後に競技場の客席に戻った時には、試合は終わる直前だった。

ノンナは平時の落ち着いた態度でカチューシャを出迎え、ゴロドクは「途中で腹が冷えてトイレに駆け込んでいた」と言い訳して、あまり試合を見られなかった事を謝罪した。カチューシャは若干不満そうにしながらも、ゴロドクが試合を観てくれた事に嬉しそうだった。少し、胸が痛んだ。

その後——ノンナとは表向き、廊下で軽く話をする程度の関係になった。

学校の話、戦車道の話、カチューシャの話をする程度の軽い関係——少なくとも、ノンナの素っ気ない態度からそれ以上を読み取る事は他人にはできないだろう。当のゴロドク自身がそうなのだから。

それでも、自分が彼女を求めればノンナは応えてくれるし、ノンナが求めればゴロドクも応える。

例えば、ゴロドクがふとノンナを抱きたくなったとする。廊下で会った時などに、ゴロドクはこう言う。

「その……この後、いいか？」

するとノンナは普段の話題と全く変わらない無表情のまま、こう答える。

「戦車道のミーティングが終わり、撤収が完了するのが18時頃です。それまで時間を潰しててください」

OKのサインとしては余りに事務的な言い方だが、ある意味彼女らしいとゴロドクは思う。

授業が終わり、図書室などで時間を潰す。やがて時計の針が18時付近まで来て閉館の音楽が流れ始める頃、のんびりと図書室を出てぶらぶらと戦車道ガレージ——とは反対方向の自己批判室周辺へと向かう。カチューシャや、他の戦車道履修者と出くわすのを避けるためだ。

すると、大体ノンナがその先に立っている。ゴロドクに気付くと、ノンナは首を横に振った。

「同志ゴロドク、自己批判室は使用中です」

「あちゃ……」

自己批判室はこのプラウダ高校で最も防音性、気密性の高い施設だ。後からノンナに聞いたところでは、この部屋をホテル代わりに使っている生徒も実際にいるらしい。

残念だが、今日は無理か。そんな気持ちが表情に表れていたのだろう。ゴロドクの顔を見つつノンナは言った。

「仕方がありません、第二候補に向かいますよ」

そう言うとノンナはゴロドクに背を向け、先導しつつ何処かへ歩き始めた。とりあえずその後についてゆく。

階段を降り、幾つかの角を曲がった廊下の先、とあるドアの前でノンナの足は止まった。用途を示す札には何も書かれていない。

ノンナはポケットから鍵を出し、そのドアを開けた。中に入ってみると、幾つかのベッドと戸棚が整然と並んでいる。

「ここは？」

「災害時などの緊急時用の予備保健室です。鍵はノーチエックで職員室からお借り出来ます」

なるほど、確かに数千人の学生を抱える学園艦の校舎であればそういった部屋の幾つかもあるだろう。

しかし、ゴロドクには引つかかる部分があった。

「なあ、用意が良すぎないか？」

「……………」

ノンナは答えず、部屋の鍵をかけ直すと窓の厚手のカーテンを引いた。電灯の点いてない室内は僅かに差し込む光だけの暗さとなる。

おずおずと、ゴロドクは更に尋ねた。

「ひよつとして……………ノンナも『したかった』とか？　だから、あらかじめ第二候補の部屋まで……………んんっ!？」

ゴロドクの言葉は、途中でノンナの唇に遮られた。熱い吐息と、柑橘系の香水の匂いがゴロドクの脳を刺激する。

「んっ、んんっ……………」

「んはっ、はっ、はあっ……………」

ノンナの身体がゴロドクに押し付けられる。大きさと弾力を兼ね備えた重みのある乳房の感触が制服越しに伝わってくる。

じつくりと舌を絡み合わせた後、口を離すとノンナは言った。

「……………誘ったのは貴方ですよ、ゴロドク？」

「ノ、ノンナ……………さん？」

ノンナの身体が熱い。ゴロドクの制服のシャツのボタンを外しつつ、ノンナはスカートの中へゴロドクの手を導いた。むわっとする熱量が掌に伝わる。ノンナの意図を察したゴロドクは彼女のタイツをずり下げ、ショーツの隙間から女陰へと指を伸ばす。

「んっ……………!」

「……………!」

既に陰唇は潤み始めていた。陰毛のシヨリシヨリした感触の中、ノンナの秘所を弄る。

一方、ゴロドクのシャツの前を全開にしたノンナは次にズボンへと手を伸ばした。器用に片手でベルトを外し、ジッパを下げるとゴロドクのパンツの上から肉棒を撫でさする。

「ノ、ノンナ……………っ!」

「はっ、はあっ……………!」

堪らず、ゴロドクは近くのベッドにノンナと共に転がり込むように倒れ込んだ。互いの秘所を弄る手を止めないまま、再度唇を重ねる。

ゴロドクの手がノンナの制服を荒々しく掴んだ。

「や、破らないでください。帰れなく、なりますから……」

「あ、ああ……」

喘ぎの合間のノンナの言葉に、ゴロドクは慌てて手の力を緩めた。自身の興奮を抑えつつ、ゆつくりとノンナの制服のボタンを外してゆく。窮屈そうに厚手の布地に包まれていたノンナの乳房はボタンをひとつ外すごとに拘束から開放され、露わになる黒いブラは赤みを増す白い肌と煽情的なコントラストを造り上げる。

「んっ、はっ、はふっ……!」

「ああっ!」

ブラによって作り出された深い谷間に顔を押し当てつつ、ゴロドクはノンナの制服を脱がしきるとスカートのホックを外した。ノンナが脚を上げるのに合わせ、タイツをめくるように脱がせて丸め、足元に落とす。

「ふうっ……も、もう、こんなに……」

「うっ! ノ、ノンナ、まだっ!」

一方でノンナはゴロドクの肉棒を抜く手を止めないでいた。パンツをずり下げられ剥き出しになった肉棒は臍に当たりそうな程に反り返り、先端の皮が剥けて露わになった赤黒い亀頭がノンナの手の動きに合わせてビクビクと震える。最初の時は肉棒を削るような勢いで抜いていたノンナだったが、今では加減が掴めたのかゴロドクの肉棒を痛みと快感のギリギリの所で刺激してくる。

危うく挿入前に射精感が昇りかけたゴロドクだったが、何とか堪えるとノンナの黒いブラのフロントホックを外し、仰向けでなお形を崩さずに震える豊かな乳房に舌を這わせた。

「ま、待て……んっ、はあっ……」

「っ! ゴ、ゴロ、ドク……んああっ!」

相変わらずノンナの身体は感じやすい。半勃起している乳首を咥え、舌で転がすだけで身長170cm超の長身を反らし悶える。

硬さを増し、尖る乳首をゴロドクは舌先でしばらく堪能した後、彼女の脚を抱えると大きく広げた。薄暗い中、てらてらと光るノンナの

女陰に肉棒を宛がう。

「んっ……あ、あれ？」

「あっ、ああっ……」

だが、亀頭はノンナの女陰の上を何度か滑った。暗がりだけに、膣口の位置を亀頭で探るが上手くいかない。

もどかしそうにノンナは腰をくねらせると、細い指をゴロドクの肉棒に添えた。

「ノ、ノンナ？」

「そ、そのまま……腰を、突き出して、ください……」

そう言いつつ、ノンナは顔を反らした。

恥じらいながらも挿入を求めるノンナの姿に、ゴロドクは更に肉棒を熱くさせると腰を突き入れた。

「うっ、うあっ！ ノンナ……っ！」

「ああっ！ は、入って、きます……熱い、のが……っ！」

ノンナの膣内は熱く潤み、それでいてゴロドクの肉棒を強く締め付ける。

「ノンナ、ノンナっ！」

「ふああっ！ ゴロドク、ゴロドクっ！」

ゴロドクは夢中で腰を振り、荒々しくノンナの膣深くまで肉棒を挿入してゆく。

ノンナはそれに応えるように悶えつつ、ゴロドクの背に手を回し強く抱きしめた。

結局、その日は保健室内で三時間以上セックスを繰り返し、夜回りを警戒しつつ帰る事になった。

——シーツと布団の洗濯は、ゴロドクに任された。

状況によつて多少の差異はあれ、二人の関係は概ねそんな感じだ。一般的には、ゴロドクとノンナの関係は「セフレ」と呼ぶのが一番近いのだろう。恋愛感情を伴わない、セックスだけの関係。

それはゴロドクがカチューシャと交際する事になったのが切っ掛けで生まれた、奇妙な関係だ。だからこそゴロドクは考える。自分と

ノンナの関係は、どこまで続くのか。

カチューシャとの交際が当初のノンナの思惑通りに自然消滅すれば、この関係は無くなるのだろうか。ゴロドクは平凡な大学生となり、ノンナはカチューシャを敬愛し続ける副官として大学戦車道で活躍してゆくのだろうか。

またもう一つ、ゴロドクの勝手な気がかりもあつた。果たしてノンナは、自分とのセックスをどう捉えているのだろうか。

そもそもノンナ自身の勇み足で彼女は処女を散らし、快感を知つた。最初に彼女が意図していた「カチューシャを襲わないよう、ゴロドクの性欲を発散させる」という目的は雲散霧消している。

ならば今の彼女の相手は、別に自分でなくても良いのではないか。自分よりもより強い快感を与えてくれる相手が現れたならば、こちらを一瞥もせずそちらに行ってしまうのではないか。否、既に自分以外と交わっているのではないか。

手前勝手な独占欲と勘繰りだとはゴロドク自身も思う。しかしそれでも、そういった気持ち自身が自身の中に有る事は否定できなかった。

「よい……しよ！ ノンナ、その玉ねぎを取ってもらえる？」

「はい、カチューシャ」

楽し気に料理を進めるカチューシャとそれを的確に補佐するノンナの姿を見つつ、ゴロドクはそんな事を考えていた。

第二話

「えーと……いただきます」

「いただきます」

「よく味わいなさい、ゴロドク！」

一応は部屋の主ということスウェット姿の部屋着のゴロドクが食膳の合掌を行うと、ノンナは丁寧な頭を下げ、カチューシャは合掌しつつゴロドクに向かって言った。二人ともプラウダの制服のままだ。

改めて眼前に用意された夕食を見る。ほかほかと湯気を立てる、赤いスープ。中には大きめに切られたじゃがいもやニンジン、レッドビートなどが転がっている。その横に添えられているのが白米とお新香というのが、何とも日本食だ。

「……カチューシャ」

「え？ あー！ そ、そうだったわ！ ゴロドク、まだ食べちゃ駄目！」ふと、ノンナがカチューシャに顔を向ける。思い出したようにカチューシャは突然慌てると、スプーンを手にしたゴロドクを急に制止した。

「え？」

「そ、その……ささっ、最初のひとくちはカチューシャが食べさせてあげる！ ほら、口を開きなさい！」

戸惑うゴロドクに、カチューシャは顔を紅潮させつつ言った。

横に視線を向けると、ノンナが「従え」というメッセージを目配せで送ってきていた。なるほど、おそらくは料理中に「彼女なのですから、『あーん』くらいはしてあげては？」的なアドバイスを彼女にしたのだろう。

「分かったよ、カチューシャ。ほら、あーん」

ゴロドクは微笑むと、大きく口を開けて目を閉じた。カチューシャが息を呑む気配が伝わってくる。相前に緊張しているのだろう。

「カチューシャ、緊張しすぎていますよ」

「わ、分かっているわ！ そそ、それじゃいくわよ！ それっ！」

「熱ーっ!？」

突然口内に飛び込んできた熱いスープに、思わずゴロドクは悲鳴を上げて悶絶した。吐き出す事もできず、そのまま呑み込もうとするが今度は咽が熱くなり更に悶える。

「ええっ!?! だ、大丈夫、ゴロドク!？」

「カチューシャ、スープを冷ます手順が抜けています」

「ちよ、先に言いなさいよノンナ! ほらゴロドク、お茶!」

「ソツ、ソツ……はあああ、死ぬかと思った」

氷入りの麦茶を飲み、ようやくゴロドクは一息ついた。口の中を火傷したようで、少しヒリヒリする。

「ご、ごめんなさい……」

珍しくカチューシャは素直に謝り、申し訳なさそうに頭を下げた。普段からプラウダ戦車道の隊長として強気な態度を崩さない彼女だが、こういう時にちゃんと相手に頭を下げられる素直さを持っているのだ。

「……ほら、あーん」

落ち込むカチューシャの様子を見て、ゴロドクは改めて大きく口を開けた。

「え?」

「もう一回。今度はちゃんと冷ましてくれよ?」

きよとんとするカチューシャに、ゴロドクは言った。

「……………」

「カチューシャ」

「わ、分かってるわ! ゴロドク、ちよつと待ちなさい!」

動きを止めたカチューシャに、ノンナが水を向ける。気付いたようにカチューシャはいつもの強気な態度に戻ると、改めて自身の手前の皿にスプーンを差した。湯気を立てるスープに息を吹きかける。

「ふーっ、ふーっ……はい」

「……うん、美味しい!」

先ほどは熱さで味も何も分からなかったが、今度はちゃんと味わう事ができた。炒めた牛肉の旨みに様々な野菜の風味が混ざり合った、

濃厚な味わいが口の中に広がる。ゴロドクは素直に味を褒めた。

「そ、そう。それじゃ、もう一口、食べさせてあげるわ。感謝しなさい！」

「あーい」

口を広げたまま返事を返し、ゴロドクは横から自分たちを眺めているであろうノンナを見た。

ノンナの視線は顔を赤くしつつスープを冷ますカチューシャに向けられ、その口元には優しげな微笑みが浮かんでいた。

他愛ない話を交わしつつ、ゆっくりした食事を終えた頃には時刻は20時を回っていた。

ゴロドクは腰を上げ、窓越しに外を見た。

「うわ……」

昼過ぎから降り始めた雪は夕方からその勢いを増し、外は吹雪になっていった。道路に目をやると、ライトを点けた除雪車が動いている。東北からロシア付近までを主な行動範囲とするプラウダ学園艦において雪は珍しくないが、今晚は強い降りになりそうだ。

「こりやすぐには止まないな。ゆっくりして行って、何だったら泊まっていくか？」

「その方が良さそうですね。カチューシャ、貴女も……」

他意はなくゴロドクが言う。ノンナはそれに同意し、皿をまとめつつカチューシャに声をかけた。

「う……うん、そうね……ふああ……」

カチューシャは弱々しく答えた。瞼を重そうにしつつ、小さくあくびをする。

食べ終わり直前くらいから、彼女はこんな感じだった。食べたらずぐ眠くなる体質のようで、体型も相まって本当に幼い子供のように見えてしまう。

「ゴロドク、毛布をお借り出来ますか？」

「え？ あ、ああ。押し入れに……」

その様子にノンナは素早く察したのだろう。皿を置いてゴロドク

に尋ねると、押し入れから毛布を取り出しカチューシャの側に寄った。彼女の小さな身体を抱きかかえ、食卓から少し離れた所で彼女の身体を置く。

「ノンナ……？」

「ご夕食を食べて眠くなられたのですね。片づけは私がやりますから、カチューシャはお休みください」

「ううん……ありがとう、ノンナ……」

「はい、ゆつくりお眠りを」

座布団を二つ折りにして簡素な枕を作り、カチューシャの頭の下に敷く。

よほど眠かったのだろう。仮眠の状態が整うと早くも寢息を立て始めた。

「Спи, младенец мой прекрасный……」

ノンナの口から聞き慣れない子守歌が流れる。

ゴロドクは何か言おうとしたが、ノンナが静かに指を一本立てて沈黙を求めたため言葉を止める。

「Баюшки—баю……」

彼女が流行りの歌を含めて、何かを歌っているのは初めて見る。

カチューシャの身体を毛布の上から優しく撫でつつ、子守歌を聞かせて眠りにつかせるその姿はとても母性的で、ゴロドクはノンナの今まで知らなかった一面を見たような気がした。

考えてみれば、自分はノンナと何度か身体を重ねこそしているが——ノンナの事を知っているとはとても言えない。

学校で普通に会えるから不便に思った事は無かったが、彼女の携帯の番号も、趣味も、普段の姿も知らない。

それを自分は知りたいのだろうか、また、聞けば彼女は何時もの無表情で教えてくれるのだろうか。

「スウ……スウ……」

やがて、カチューシャは完全に眠りについたようだった。音も立てずノンナは身体を起こすとエプロンを身に着け、卓上の食器を持って洗い場に向かう。

ゴロドクはそつと窓から離れると、足音を立てずにカチューシャの側を横切りキッチンの中のノンナへと近づいた。腰くらいまでの高さの仕切りで区切られたキッチンに、静かな水音と皿を洗う音が小さく響く。

「……子守歌なのか？ 今の」

『コサツクの子守歌』……やがてコサツクの戦士となる、幼い息子を寝かしつける母親の歌です。授業で習いませんでしたか？」

「選択科目、音楽は取ってなかったんだ」

「そうですか……」

小声でゴロドクはノンナに声をかけた。洗い物をしつつノンナが答える。

「歌、上手かったんだな」

「……思った以上に恥ずかしいものですね。カチューシャ以外に聞かれるのは」

「いつも、ノンナが寝かせてるのか？」

「はい。カチューシャはお食事の後は必ず眠くなります。そうなるのと、しばらくは起きません」

そう言うノンナの表情は、困った風の言葉とは裏腹に穏やかなものだった。

「……本当に、カチューシャの事が大事なんだな」

「勿論です。カチューシャは私の全てを賭して支えるに足りる方ですから」

即答だった。

正直なところ、カチューシャが戦車道の隊長としてどの程度優秀なのかは門外漢のゴロドクには分からない。それでも、このノンナがそこまで言って敬愛するという事は相当なのだろう。

ゴロドクは感心すると共に、少しの嫉妬を覚えた。

「俺は……どうなのかな？」

出来るだけ何気ないふりで聞く。

「……」

ノンナは答えず、洗い物をしつつ指を素早く振った。跳ねた水がゴ

ロドクの顔を打つ。

「わっ!?!」

「下らない事を言っていないで、洗った皿の水切りや片づけを手伝ってください」

慌てるゴロドクに、ノンナはあくまで淡々と言った。どうやら答えを返すつもりは無いらしい。

「わ、分かったよ」

とりあえずの返事を返すが、その表情は納得には程遠い。

一応はゴロドクも男の端くれである。夕方の来訪から一方的にペースを持つてゆくノンナに、何かしらお返しをしたい気持ちが湧き上がってきた。

仕切り越しに眠るカチューシャを見る。完全に熟睡しているようだ。

「(……流石に怒るか?)」

こちらに背を向け、食器の水を切るノンナの姿を見る。プラウダの制服の上からエプロンを着けたその身体は、豊かな胸から引き締まった腰回りを経て肉付きよい尻へと艶やかなラインを形作っている。

人間の三大欲と言えば食欲・性欲・睡眠欲だが、「ひとつが満たされれば他の欲求が強まる」というのは本当なのだろう。旨いボルシチで食欲が満たされ、さほど眠くもない今のゴロドクは自分の中の性欲がむらむらと強まってゆくのを感じていた。

「(ええい、ままよー!)」

殴られたらその時はその時だ。

ゴロドクは腹を決めると息を止めて気持ち気配を殺しつつノンナの背後に近づき、おもむろに彼女の尻を鷲掴んだ。

「んっ!?!」

びくんとノンナの身体が驚きで跳ねる。そのままゴロドクは身体を寄せ、背後からノンナに密着した。

「っ!?! 何を、ゴロドク……んくっ!?!」

「ふうっ……ちゅ……はあっ……」

「ゴロ、ドクッ!?! あっ! ああっ!」

危うく手にしていた皿を落としそうになりつつ、ノンナが尋ねてくる。

ゴロドクはそれに答えず、彼女の滑らかな首筋に唇を押し当てた。もともと感じやすいノンナではあるが、幾度か身体を重ねる内、ゴロドクにも彼女の特に感じやすいところが分かってきた。例えばこの、首筋から鎖骨のあたりにかけてのラインだ。ここに舌を這わせる
と――

「……………」

それだけでノンナは全身が痺れたように震え、力が入らなくなってしまう。

取り落としかけた皿をどうにか洗い場に戻し、ノンナが背中越しにゴロドクを睨んでくる。しかしその肌は早くも火照り始めており、頬の赤みも怒りだけでは無い事がゴロドクにも見て取れた。

「いい、いい加減に……………」

「あんまり大声出すと、カチューシャが起きるぞ」

「っ!？」

ゴロドクの小声に、ノンナは慌てて自分の口に手をやり、声を抑えた。

「ん……………ノ、ノンナ……………」

寝返りを打ちつつ、カチューシャが寝言を言う。

声を殺しつつ、ノンナが言った。

「……………ゴロドク、何のつもりですか？」

「今日の夕方のお返し。まだ、ノンナを気持ちよくさせてないからな」
「それならここまでにして下さい。これ以上は、本当にカチューシャが起きてしまいます……………」

「ノンナが声を抑えていられれば、大丈夫だって……………んっ」

「んっ……………! あ、はあっ……………」

もう一度、首筋へのキス。同時に尻を揉んでいた手をスカートの裾に移し、捲り上げてタイトの中に手を差し入れる。

「んっ……………」

ノンナの瞳が潤み始めていた。口に手を当て、漏れそうな喘ぎを懸

命に抑えつつ身をよじる。しかし身体に力が入らないのか、その抵抗は弱い。

ゴロドクも自身の荒くなる吐息を抑えつつ、熟睡するカチューシャに目を向けた。ノンナを抑える材料に使ってしまったが、実際にこの状況で彼女が目覚めれば、窮地に陥るのはゴロドクも同じである。

しかし、その緊張感のある状況ゆえにだろうか。いつもの人気の無い場所でノンナと交わる時以上の興奮が湧き上がる。

「ふぁ……ゴロドク……そ、そこは……っ！」

「熱くなってる、ノンナの、ここ……！」

「い、言わないで、ください……っ！」

強い喘ぎが漏れそうになり、ノンナは口に当てた手の力を強めた。

豊満な尻肉が作り上げる谷間を越え、ゴロドクの指はノンナの女陰近くにたどり着いた。ひくつく尻穴のすばみに親指を添えると、恥じらいからかノンナの体温が更に上がってゆくのを感じる。

親指をそのままに陰唇に指を添え、外周を丁寧になぞる。流石にまだ濡れてはいないが、ノンナの反応からも感じているのは明らかだ。次第に秘所は熱を増し、奥からとろみのある愛液が滲んでくる。

「はあっ……ゴ、ゴロドク……ほ、本当に、これ以上は……！」

今にも泣きそうな表情で、ノンナの視線はカチューシャに向けられている。何時自分の喘ぎで起きるか気が気でないのだろう。

「……………」

思わず秘所を弄る手を止め、ゴロドクは少し悩んだ。彼女のごこまで弱々しい態度は初めて見る。

「それじゃ……さっきの答え、教えてくれるか？」

耳元に口を寄せ、囁くように言う。

ノンナはこくりと頷き、ゴロドク以上の小声で言った。

「し、心配……しないください、ゴロドク」

「……………心配？」

「貴方が……私がどう思っているかなどで、不安を抱えているのは、わ、分かります……！」

潤んだ瞳のまま、ノンナはゴロドクに顔を向けた。

「私の此処は……もう、貴方のモノの形になっています。貴方と交わった後、器具などでも試してはみましたが……満足、できませんでした」

「……………」

「私も身体はもう、貴方専用、なんです……だ、だから、安心して、ください……」

ゴロドクは息を呑んだ。ズボンの下で萎え始めていた肉棒に急激に血液が集まり、苦しそうに膨張してゆく。

一方、ノンナはゴロドクの様子の変化に気付かないのか懇願するよ
うに言った。

「ゴロドク……言いましたから、これで、もう……」

「…………ごめん、ノンナ」

「え？」

「それ、反則だわ」

ノンナの手を押さえ、ゴロドクは彼女の唇に自分の唇を押し当てると荒々しく舌を差し込んだ。吐息を交換し、ノンナの舌を吸うように絡ませつつ彼女の口腔内を蹂躪する。

突然の激しいキスに、ノンナは戸惑いつつも抵抗しない。今にも力が抜けそうな身体を洗い場の縁に手を置いて支え、断続的な刺激に身を震わせている。

「んっ、はっ、ノンナ、ノンナっ……………」

「あっ、あはあっ、ゴロ、ドク…………っ!？」

同時にゴロドクはノンナの女陰を弄っていた手を引き抜き、乱暴に自身のスウェットをパンツごと引き下げた。下に引つ張られた肉棒が弾けるように外気に晒され、むわっとする雄の匂いが立ち昇る。

そのままゴロドクは怒張した肉棒をノンナの尻に擦り付けつつ、キスを続けた。

「ちゅ、ふっ、ふうっ……………」

「じゅるっ、くっ、んんっ…………あ、熱い…………っ!」

ノンナの声に甘いものが混じり始めた。肉棒の熱と滾りが彼女にも伝わってきているのだろう。無意識にかその腰は淫猥にくねり、自

分から尻を肉棒に押し当ててくる。

もつと自分のものになりたい。自分を刻み付けたい。抑えようもない支配欲がゴロドクの理性を呑み込んでゆく。

「ああ、お前は俺のものだ。ノンナ……この胸も、尻も、全部……っ！」
「ああっ……い！」

エプロンの上からノンナの弾力有る乳房を強く揉む。掌に伝わる強い弾力と重み。ノンナは背を反らして悶え、咄嗟に唇を噛み締めて声を抑えた。

更にゴロドクはエプロンの裾から手を差し込み、制服のボタンを二つほど外してノンナの胸に触れた。厚手の制服は解放された隙間から焼けるような熱量を指先に伝えてくる。

手探りでブラの隙間から乳房を直に揉みしだくと、汗の滲むノンナの巨乳は更に張りを増し、心地よい弾力をゴロドクに与える。

「はあっ、はあっ……い！」

「……っ！…んっ、んんっ……い！」

必死にノンナは声を抑える。

手をゴロドクに抑えられ、潤んでいた瞳からはついに涙が流れ始め、腰を震わせながらも懸命に嬌声をあげる事を耐える。

だが、それは逆にノンナの快感を更に強めているようであった。荒々しいゴロドクの乳房を揉む手の動きも快感に既に変わっているのか、強く揉む度にびくんと身体を反応させる。

「ううん……」

毛布に包まれたカチューシャが声を漏らす。

ノンナは辛そうにしながらも、最早ゴロドクに制止を求めようとしていない。

ゴロドクはノンナのタイツに指をかけ、太腿までそれを捲った。白いショーツに窮屈そうに包まれた肌の火照りが直接亀頭に伝わってくる。更にショーツに手をかけてずり下ろす。

「はあっ……い！」

ノンナの口元から熱い吐息が漏れる。ショーツのステッチの部分には既に染みが出来ていた。亀頭を後ろから近づけて女陰へと押し

当てると、熱い潤みが亀頭を濡らし、挿入に期待するように陰唇がひくつく。

「……………いいいか?」

荒い吐息の中、ゴロドクはあえてノンナに尋ねた。

「……………」

ノンナの唇が動く。ゴロドクが聞き取れないほどの小声。

「いいいか?」

もう一度聞く。先程よりは大きい、かろうじて聞こえる程の小声。

「い、言わせないで、ください……………」

「言ってくれ」

有無を言わせない、短い言葉。

「ふあ……………」

ゴロドクは反り返る肉棒を前後させ、亀頭を女陰に擦り付けた。それだけでノンナの身体は跳ね、更に愛液を溢れさせる。

「……………言ってくれ」

ごく僅かな時間、ノンナとゴロドクの視線が交錯した。

観念したように、彼女の瞳が閉じる。

「お、お願い、します……………挿れて、ください……………っ!」

「ああ。ノンナ……………っ!」

「あああっ!」

奥まで一気に突き入れられたゴロドクの肉棒を、ノンナの膣内は待ち侘びたように強く締め付けてくる。

「ノンナッ、ノンナッ!」

「あっ! はあっ! ああんっ! 熱っ、熱いい……………っ!」

ぐちゅぐちゅと結合部から淫らな水音が鳴り始め、溢れた愛液と先走りがキツチンマットに滴り落ちる。

ノンナは遂に堪えられなくなり、甘い嬌声をキツチンに響かせた。

「ううん……………ノンナ……………」

未だ深い眠りの中のカチューシャが、また寝言を言った。

第三話

人通りも無い学園艦の町に、強い風と共に雪が吹き付ける。

カタカタと窓が鳴り、ベランダに積もった雪が部屋の灯りの照り返しを受けて銀色に光る。

しかし、キツチンで交わるゴロドクとノンナは互いの身体の熱さを感じ、更に昂るばかりだった。

「ああんっ！ あっ……んっ、ンンッ！」

「くうっ！ し、締まるっ……ノンナの、いつもより、強っ……！」

制服にエプロン姿のままショーツをずり下げられたノンナが、肉棒の挿入に嬌声をあげる。咄嗟に寝ているカチューシャの事を思い出したのか、指を咥えそれ以上の声が漏れるのを防ごうとする。

キツチンに手を置き、腰を突き出すような姿勢になった事でノンナの豊かな尻はゴロドクの腰に押し付けられるような体勢になった。見下ろしてみれば陰毛に彩られた秘所が肉棒を呑み込む様が丸見えだ。

それらが与えてくる快感を堪能するのと同時に、ゴロドクは挿入した肉棒を包む彼女の膣の熱さと締め付けに思わず声をあげた。幾度も身体を重ね、ノンナの身体に多少は慣れてきたつもりではあった。

しかし今、ゴロドクの肉棒全体を包む襞は更に熱く潤み、根元を強烈に締め付けつつも子宮に精液をねだるように蠢いて更に奥に導こうとしている。カチューシャがいつ起きるかもしれないという緊張感が、結果としてノンナの興奮を更に高めているようだった。

「んん……」

毛布にくるまったカチューシャが寝返りをうつ。

「……!?」

「うつ!？」

彼女が起きたかと思ったノンナが表情を強張らせる。同時にゴロドクは肉棒への締め付けがきゅっと強くなり、腰を震わせた。

「スウ……スウ……」

再びカチューシャは深い眠りの中に戻ったようだ。幸せそうな寝

顔をこちらに向けている。

「カチュー……んひいつ！ ぐ、ゴロ、ドクっ……!?」

「悪い……ノンナのここ、普段よりも、凄く、いいっ……!」

カチューシヤの姿を見て切なそうな表情を浮かべかけたノンナは、突然後ろから強く打ち付けられた肉棒の快感に抑え切れず声をあげた。再び肉棒を引き抜きつつ、汗を浮かべたゴロドクは彼女の耳に顔を寄せて小声で言った。

「うっ！ ぐっ、ノ、ノンナ、ノンナっ……!」

「んっんっんっ！ ふぁ……あっ、ンンツ！」

ノンナの名を繰り返しつつ、ゴロドクは夢中で腰を振った。ぱんぱんとノンナの尻とゴロドクの腰が打ち付けられる音が、結合部からのぐちゅぐちゅという淫らな水音と共にキツチンに響く。ノンナは懸命に声を抑えようとしつつも、それでも我慢しきれないのか強く閉じた唇が時折開き、甘い嬌声が漏れる。

「ううっ……こ、こっちも……!」

「ま、待ってください、ゴロドク……そこ、揉まれたら、本当……にいいっ!」

ゴロドクは細かなピストンを繰り返しつつ、両手をノンナの腰から胸へと移動させる。着衣のままブラを外され、エプロンの上からでも勃起した乳首まで分かる程に張った乳房をシャツの間から直接強く揉むと、ノンナは背を反らして悶えた。

170cmの長身をしてなお存在を主張するノンナの巨大な乳房はゴロドクの手には収まらない程で、掌に堪らない弾力と確かな重量感をゴロドクに伝えてくる。普通ならば痛みを伴うほどに揉みしだくが、既にノンナの身体は相当に熱くなっているようだ。がくがくと脚を震わせつつも、口からは快感の喘ぎのみが漏れる。

「ヤバ……出るっ、出るぞ、ノンナッ!」

「はっ、はいっ！ き、来て、下さい……早く、終わら……んあぁっ!」

「うっ、うあぁっ!」

「……っっ!」

ゴロドクの腰の奥から強い射精感がこみ上げてきた。乳房を揉ん

でいた手の片方を腰に戻し、一気にピストンを速める。

ノンナは泣きそうな声でゴロドクに懇願しつつ、肉棒が与えてくる快感に顔を紅潮させていた。その視線はカチューシャの寝顔に注がれている。振り乱された黒髪が、汗に濡れる火照った首筋に貼りつく。

ついに我慢できなくなり、ゴロドクはノンナの一番奥まで肉棒を突き入れると亀頭から精液を迸らせた。濃厚な白濁液は竿の中を昇り、幾度も地震と共にノンナの子宮に吐き出される。溢れた精液は結合部から溢れ、ぽたぽたと二人の足元に滴った。

絶頂の叫びを、ノンナは指を強く噛んで堪えた。

「あ、はあ……………はあ……………」

「ああ……………熱い……………こ、こんなにな、溢れ……………」

射精が止まらない。まるで睾丸の中の精液全てが出そうな勢いで続く射精に、ゴロドクは視界が霞みそうなほどの快感を覚えた。

一方のノンナも、今までのセックス以上の快感を味わっているようだった。射精する度に膣が蠢き、更なる快感を肉棒から搾り取ろうとしてくる。

やがて射精が完全に収まる頃には、結合部の下には水たまりになりそうな程の精液と愛液が広がっていた。

「ああ……………ゴ、ゴロ、ドク……………もう……………」

「……………」

懇願するようにノンナは振り返り、ゴロドクに潤んだ瞳を向けた。

ゴロドクの喉が鳴った。ゆつくりを腰を引き——半勃ちの肉棒を、そのまま再び突き入れる。

「ふああっ!？」

「ノンナ、まだ満足してないよな? もっと、もっと、してやる、からっ……………」

「だっ、駄目っ! カチューシャが、本当に起き……………んくうっ!」

火照ったままの肌、無意識に擦り付けられる腰、更に精液を求めめるようにひくつく秘唇。

終わらせようとする言葉とは裏腹に、ノンナの身体が満足しきって

いない事はゴロドクには分かっていた。

半勃起状態の肉棒はノンナの膣の壁によって全体を扱かれ、瞬く間に硬さと大きさを取り戻した。締め付けに負けない程に勃起したのを確認すると、荒々しいピストンを再開する。

「や、やめて、やめて下さい、ゴロド、クうっ！ 本当につ！ 駄目、です……！」

肉棒を突き入れられる度に言葉を途切れさせつつ、ノンナはゴロドクに訴える。

「（……どうなんだ？）」

ゴロドクはノンナのそんな様子を見て、腰の動きを次第に緩め——深く挿入したまま止めた。

「ああ……ゴロ、ドク……？」

「……そうだな」

不自然なタイミングでピストンを止めたゴロドクに、ノンナが戸惑いつつ尋ねる。

ゴロドクは汗を浮かべつつ、目を閉じたまま言った。今にも挿入を再開したい欲望を抑えつつ。

「え……？」

「ノンナの……言う通りだ。もしカチューシャが目を覚ましたら、俺も、只じや済まないしな」

荒い呼吸の中、ゴロドクはあえて落ち着いた口調で言う。

「抜いてくれ、ノンナ。それで今晚は終わりにしよう」

「……!?」

ゴロドクから腰を引こうとはしない。

そこでノンナはゴロドクの本意に初めて気づいたようだった。非難の色を瞳に浮かべつつも、頬を紅潮させたまま腰を動かそうとする。

「うっ……」

「…………！」

襷が竿を撫で上げる快感に、ゴロドクは思わず声を漏らす。

ノンナはゴロドクに押し付けていた尻を引き、そのまま肉棒を膣か

ら抜こうとしたが——その途中で腰が止まった。

「……どうしたんだ？」

「卑怯です、こんな、の……」

腰を震わせつつ、ノンナは悔しそうにゴロドクに言った。

ゴロドクにとってもこれは一種の賭けだった。このままゴロドクの肉棒を引き抜き、そのままノンナが殴ってきたとしても仕方ない。その自覚はあった。

しかし、もしノンナが——我慢できなければ？

「……」

「……んっ」

すぐにでも激しくピストンしたいと訴える腰を内心で止めつつ、ゴロドクはノンナの言葉に無言で返し、彼女の瞳を見た。

ほんの数秒、ノンナはゴロドクの瞳を見詰めると視線を逸らし——再び腰を落とすと、肉棒を強く締め付けた。

「うっ!? ううっ! ノンナっ!」

「ごめ、ごめん、なさい、カチューシャ……あつ、ああっ! いいっ、いいっ!」

カチューシャに謝罪するように眩くと、ノンナは自分から激しく腰を使い始めた。強烈な快感にゴロドクは呻き、こちらも肉棒により強い快感を与えるように腰を使う。ゴロドクの動きに合わせてノンナが動いていた一回目の結合と異なる、互いが互いを強く求めて淫らに肉を激しく打ち付け合う結合は二人の身体を更に熱くさせてゆく。

「い、いい、のかっ!? カチューシャが、起き、ちまうぞっ!」

「ごめっ、ごめんなさい、ごめんなさいっ、カチューシャっ! うあっ! いい、熱いのっ、いいっ! ああんっ! もっと、もっとして、くださいっ! ゴロドクっ!」

ゴロドクの言葉にノンナは謝罪しつつも夢中で腰を振り、快感を貪るようにゴロドクの肉棒を求めてくる。

うねうねと襞が蠢き、無数の舌で竿を舐め上げるかのように肉棒を刺激する。それに負けじと龟头がノンナの子宮口に達すると、跳ねるようにノンナの身体は反応して更に愛液を溢れさせ、抽送を滑らかに

させてゆく。

「ああ、やってやる！ 全部、全部出して、やる、からっ！ うおっ！
ノンナ、ノンナっ！」

「あひいっ！ ゴロドク、ゴロドクっ！ んっ、んはっ……ちゅ、
ちゅうう……」

切なそうに喘ぐノンナに堪らなくなったゴロドクは、ノンナの唇に自身の唇を押し当てた。舌を絡ませ、上と下の両方で互いを求める。

同時にゴロドクの手は濡れた陰毛をかきわけ、ノンナのクリトリスを優しく撫でた。きゅんきゅんと彼女の膣の締め付けが強くなり、今にも腰が崩れ落ちそうになる。

もはや身体を支える事ができなくなったのか、腰をくねらせつつノンナは流し台に半身を預けた。突き入れる度に両の乳房が重そうに揺れる様は、彼女を組み敷いている事実をゴロドクに再確認させ、更に快感を湧き上がらせる。

「あっ、あああ！ 駄目っ、イツ、イクツ！ イキ、ますっ！
「ううっ！」

ひととき締め付けが強くなり、褌がぞわぞわと竿を締め付ける。ゴロドクはその刺激に震えつつ、何とか射精を堪えた。びくびくと絶頂に痙攣するノンナの腰を掴み、遠慮なく肉棒を龟头の手前まで引き抜き、再び奥まで突き込む。

「ふああっ！ ま、待って、くださいっ！ まだ、イツて……んああっ
！」

「ノンナ、好きだよな、イツてる最中に、また、イカされるの……！
「ひっ、あっ、ああっ！ イクツ、また、イク……ッ！」

絶頂から引き戻されようとしたところに強引に再度の絶頂に導かれ、悲鳴めいた声と共にノンナは更に強い絶頂を迎えた。瞳から涙が零れ、濃い愛液が肉棒に絡みつく。

「あ、ああっ！ これ、以上はっ！ ほ、本当に、おかしくっ！」

「大丈夫、だっ！ どう、なってもっ！ おかしく、なってもっ！ 俺
が、いる、からっ！」

「あひいっ！ あっ、あっ、ああんっ！ ゴロドクうっ！」

引きちぎられそうな程にノンナの膣がゴロドクの肉棒を求めてくる。ゴロドクはそれに負けじと腰に力を籠め、ノンナの身体から快感を得ようと角度を変えつつピストンを繰り返す。

「くうっ！　で、出るっ！　全部、出るっ！」

「出してっ、出して、くださいっ！　ゴロドクの、全部、全部っ！」

耐えがたい射精感が押し寄せてくる。ゴロドクが叫ぶように言うと、ノンナは尻肉を揺らしつつ射精をせがむように言った。

「イクッ、イクッ！　うああっ！　ノンナっ、ノンナあっ！」

「ひあっ！　来て、ますっ！　ゴロドクの、精液っ！　ひっ、んあああっ！」

二度目だというのに、ゴロドク自身にも信じられない程の大量の精液がノンナの中に吐き出された。

「あ、あああ……し、子宮、一杯、です……！」

「うっ、うあっ、うああ……！」

ぼたぼたと溢れた精液が零れ落ちる。射精される感覚に震えるノンナに覆い被さりつつ、ゴロドクは獣のような声を漏らした。

実際の時間はほんの数秒だったのだろう。しかしそれは、まるで数分間続くような強烈な快感だった。

「あ……はあっ……！」

「ああ……ノ、ノンナ……！」

「ンッ……！」

再び唇を重ね、ノンナとゴロドクは荒い呼吸のまま舌を絡ませた。

「ノンナっ！」

突如、リビングでカチューシャが叫んだ。

「っ!?」

二人の身体が凍り付く。

「助けに来たわよ、ノンナ！　こ、このカチューシャ様が、ノンナを苦しめる、やつは、許さないん、だからあ……すう……！」

毛布から手を突き出したカチューシャは、目を閉じたままだった。

大きく叫んだと思ったら、その声はまた次第に小さくなり、再び寝息に戻る。

「どうやら眠りながらもノンナの喘ぎを「苦しんでいる」と判断して、夢の中で彼女を護ろうとしていたようだ。」

「……………」

「痛ーっ！」

突然、ゴロドクの足に強い痛みが走った。見下ろしてみれば、ノンナの足がゴロドクの親指を踏みつけている。思わず腰を引くゴロドクに、ノンナはふらつきつつも身体を離れた。

「あ……………」

「……………」

肉棒を噛まれたり口の中を火傷したり足を踏まれたり、何だか今日は気持ちよいのと同時に痛い目にも遭っている。

そう思いつつ一歩引いたゴロドクは、ノンナの厳しい視線を受けた。

カチューシヤの叫びで頭も体も冷えたゴロドクは、言葉を失いつつも彼女を見た。

「……………」

ノンナの拳に力が籠り——やがて、その力が弱まる。

「……………次に同じことをやったら、本気で怒ります」

「どうやら今回は見逃してくれるようだ。ゴロドクは内心で胸を撫でおろしつつ答えた。」

「あ、ああ……………ごめん、やり過ぎた」

「本当に、頼みますよ」

「ただ、その……………エプロンを着るだけのもの、駄目か？」

「……………検討しておきます」

首筋に貼りついた髪をかき上げつつ、ノンナは答えた。我に返って気付いたが、ゴロドクの身体も汗まみれだ。

「えーっと……………シャワー、浴びるか？」

「そうさせていただきます」

「……………一緒に入って、いいか？」

「……お好きなように」

エプロンを解きつつ、ノンナは浴室へ向かう。ゴロドクはシャツを脱ぎつつ、その後続いた。

「……洗うだけですよ?」

「ああ、洗うだけだ」

——結局、浴室でもう一回セックスした。

「ふああ……どうやら、雪も止んでくれたみたいね!」

翌朝、マンシヨンのエントランスの前は朝日を受けた積雪で光り輝いていた。

“一面の銀世界” そんなありがたい言葉を、空を見上げるカチューシャの右に立つゴロドクは思い浮かべた。

「今回は楽しかったわ、ゴロドク! また来て上げるから、今度は貴方がこのカチューシャを接待なさい!」

「ああ、分かったよ。それまでに何とか、料理のひとつでも覚えておく」

「味には期待しないでおきます」

「ちよ、そういう事を本人の前で言うかよ!?!」

カチューシャの左に立つノンナが、素っ気ない突っ込みを入れる。

その様子に、カチューシャは表情をほころばせた。

「良かった。二人も仲良くなってくれたみたいね!」

「え?」

予想外の言葉にゴロドクが問い返す。ノンナの表情にも、僅かな動揺が見て取れる。

その様子を単に「二人が驚いている」と受け取ったのだろう。カチューシャは得意そうに言った。

「いい、ノンナ、ゴロドク? 貴方たち二人はこのカチューシャにとって、どちらも大事な存在なの! なのに二人同志があまり仲良くないのは、カチューシャにとってもあまり良い事じゃないわ。だから今回は、カチューシャの料理を通して二人にも仲良くなってほしいという

作戦だったのよ！」

「……そう、だったのか」

「カチューシャ、素晴らしい配慮です」

ゴロドクが何とか言葉を返す事ができたのと対照的に、ノンナは淀みなく言った。

「どうやら、上手くいってくれたみたいで良かったわ！ 貴方たち、たまに会ってもところどころ余所余所しい雰囲気だったもの。それじゃ二人とも、挨拶して」

「あ、ああ」

カチューシャを挟み、ゴロドクはノンナと向き合った。表情に戸惑いが浮かぶゴロドクに比べ、ノンナの表情はあくまで鉄面皮のままだ。

「ええと……改めてよろしく、ノンナ……さん」

「よろしく願います。同志ゴロドク」

ぎこちなく、ゴロドクは頭を下げる。

ノンナは滑らかにお辞儀をした。

「なんかまだ固いわね、ノンナ……まあいいわ！ それじゃゴロドク、また学校でね！」

「失礼致します。カチューシャ」

「え？ ああ、そうね！」

ノンナの反応にカチューシャは若干不満が残るようだが、それでも満足できたのだろう。別れの言葉を言うと、側のノンナが腰を落とした。一瞬きよとんとするカチューシャだったが、意図を察して彼女の肩に跨る。

「それでは同志ゴロドク、また」

「日曜だからって、私たちが帰った後でごろごろしちや駄目よ！」

「分かってるよ。またな！」

肩車されたカチューシャを見上げつつ、ゴロドクは手を振った。嬉しそうにカチューシャが手を振り返すと、ノンナが方向を転換させる。身長170cm超のノンナが120cm前後のカチューシャを肩車させている様は、本当の親子のようだ。

カチューシャらが去る背中に手を振りつつ、ゴロドクは二人が角を曲がるまで見送った。

「……はあ」

無意識にため息が出た。

自分の中にもやもやしている『何か』がある。罪悪感とか、背徳感とか、自己嫌悪とか、色々なものが混ざり合った『何か』だ。

自室に戻り、ゴロドクはカチューシャが寝ていた毛布などを片付け、部屋を軽く掃除すると一息ついた。ふと、腹が鳴る。

「朝飯……食うか」

キッチンに視線を向ける。ボルシチの大鍋がコンロに乗ったままになっている。「材料が多い程ボルシチは美味しくなるの！」とカチューシャが多く作り過ぎたのだ。

その鍋に火をかけつつ、ゴロドクは何となく床を見た。昨晚の精液と愛液で出来た水たまりは丁寧に拭きとったが、それでも若干の残渣が残っているように見える。

「……ん？」

インターホンが鳴った。火を一旦止め、通話ボタンを押す。

「はい、伍堂です」

「……」

無音。

誰かの悪戯だろうか。そう思いゴロドクが通話を切ろうとした時、声が聞こえた。

「……よろしければ共に朝食をと思ったのですが、ご迷惑でしょうか」

「……!？」

ノンナの声。

ゴロドクは驚きつつも返事をした。

「あ、ああ。大丈夫……ちよつと待っていてくれ、今開けるから」

開錠ボタンを押す。

インターホンが切れた。おそらく中に入ったのだろう。落ち着かなげにゴロドクはボルシチを再び火にかけた。

数分後、部屋のベルが鳴る。

「入ってきていいよ！」

鍋から離れず、ゴロドクは声をドアに向けた。音もなくドアが開き、ノンナが入ってくる。

「失礼します、ゴロドク」

「あ、ああ……」

「やはり、朝食はそのボルシチでしたか」

「まあ、他に適当なものもないし……それより、何で？」

「お一人で片づけるには大変な量かと思ひまして」

やがて、ぐつぐつとボルシチが熱くなってきた。二つの皿にそれぞれ掬い、食卓に並べる。

「……いただきます」

「いただきます」

手を合わせ、朝食を食べ始める。

一晩寝かせたボルシチは更に味わいが深まっているようだった。少し溶けたジャガイモが味にとろみを与え、牛肉の旨みが起きたばかりの舌を覚ましてくれる。

「……」

「……」

ゴロドクは無言でノンナを見た。ノンナの表情は変わらない。

「私も……」

ノンナが、静かに言った。

「え？」

「動揺しているんですよ。こう見えても」

「……」

「らしくないとは、思うのですが」

そう言いつつ、大きめのニンジンを口に含む。

「……そっか」

ゴロドクはそう言いつつ、ジャガイモを齧った。

自分とノンナの関係がどこまで続くのか、自分たちを大事に思うか、チューシヤを、裏切りつつ。

それは正直ゴロドクにも、おそらくはノンナにも分からないのだろ

う。

「なあ、食べ終わったあと、いいか？」

「……こちからかも、お願いします」

しかしそれでも、今のところは彼女を求めている。

自分の身勝手に自覚しつつも、ゴロドクはそう思った。

自己批判室、再び 第一話

プラウダ高校の高く重圧的に聳える校舎に、今日も静かに雪が降る。

肌が痺れる程の寒さの外と異なり、防寒対策が施された校舎内は思いのほか暖かい。プラウダの女子制服はスカートが短めではあるが、タイツを装着していない少女も少なくはない。

椅子に座らされた伍堂六郎、通称ゴロドクが目覚めた時に眼前に目に入ったのは、そんな素足の白い脚だった。

「お目覚めのようですね、同志ゴロドク」

「……へ？」

澄んだ少女の音がする。

どこか既視感を覚えつつ、ゴロドクは靄のかかる意識の中で現在の状況を確認しようとした。

眼前には白い素足、椅子に座らされている自分、パチパチと暖炉から音がする。

ゴロドクは椅子から立とうとしたが、身体が後ろに引っ張られそれは出来なかった。どうやら後ろ手に拘束されているようだ。

「!?」

慌てて拘束を解こうと試みる。手錠だろうか、ガチャガチャと手首に金属の感触が当たるだけで解ける気配はない。

「大丈夫です、同志ゴロドク。貴方を傷つけようという訳ではありません」

透明感のある、しかし微妙に発音が異なる日本語。そこでようやくゴロドクは視線を上げ、眼前の脚の持ち主を見た。

きめ細やかな金髪を肩口まで伸ばした、碧眼の少女がゴロドクをにこやかに見下ろしている。

見覚えのある顔だ。ゴロドクはそんなに多くない知人の顔から該当するものを探そうとした。

「ええっと、確かアンタは……戦車道の!？」

「はい、クララーと申します。こうやってお話するのは初めてですね」
表向き交際しているカチューシャや、その裏で性的な関係にあるノンナから名前は聞いた事があった。ロシアからの留学生で、現在のプラウダ戦車道ではノンナに次ぐ実質的なNo. 3の位置で活躍する戦車長。

試合などで遠目から見た事があるだけだったが、「ロシア系の美少女」というイメージをそのまま実現化させたような白い肌と整った顔立ちは、ゴロドクにも強い印象を残していた。

ただ、その彼女がこうして自分を拘束する理由については、全く想像できなかった。

「ちよ、ちよっと待ってくれ! 同志クララー、こりや一体何の真似だ!？」

ノンナの時と同様に、カチューシャと交際している事に対しての嫉妬?

いや、既に自分とカチューシャとの交際は一カ月以上続いており、戦車道メンバーにも周知になっている今更で具体的な行動に出るとは思えない。

そもそもクララー本人が言う通り、自分とクララーは今までほとんど話をした事もない。

戦車道という接点があるとはいえ、知り合いとも言えない関係の手からこんな目に遭う道理は流石に無いだろう。

「私としても、こういつた形でお話するのは本意なのですが……貴方からお話を伺うには、この自己批判室にお招きするしかなかったので」

そう説明するクララーの表情には、申し訳なさは感じ取れない。まるでゴロドクを値踏みするかのようにしげしげと眺めてくる。

改めてゴロドクは周囲を見回した。彼女の言う通り、ここはプラウダの自己批判室のようだ。クララーの横には無機質な机。カンテラの灯りが部屋を照らし、無機質な白い壁がゴロドクを見下ろしている。

だんだんと覚醒するまでの記憶が蘇ってくる。天候の急変による授業の半ドンで、帰ろうとした時に彼女から突然話かけられ——意識を失ったのだ。

「……事情は説明してくれるよな、同志クララー？」

「そんな怖い顔をしないでください。貴方に危害を加えるつもりはありませんので」

あまり強気に出られる状況ではなかったが、精一杯の凄みを効かせたつもりでゴロドクは尋ねた。涼しい顔でクララーは答える。

皮肉めいた笑みを浮かべ、ゴロドクはわざとらしく手錠を鳴らした。

「……こんな真似をされて、信じられるかよ」

「まあ、それはそうでしょうね」

クララーは頷きつつ、少し腰を落とすとゴロドクを正面から見据えた。

拘束された状況で、ロシア人の美少女からじつくりと見られるというのは何とも奇妙な感じだ。何とか視線を逸らさずに受け止めつつ、ゴロドクはそう思った。

「貴方をこうやってお招きしたのは、貴方が『要因』だからです。同志ゴロドク」

「よ、『要因』？」

「はい。まず前提をご説明しますが、私はカチューシャ様を敬愛しています。隊長としても、愛らしい少女としても」

やけに仰々しい言葉が出てきて戸惑うゴロドクに、クララーは滑らかに説明を続ける。

「ああ、誤解はしないでください。ノンナ様と違い私の場合、性愛的な意味は含めていません。可愛いものを愛したいという、少女として自然な範疇の感情です」

「それって、自然な範疇なのか？ あと今……」

「ところが……最近、ノンナ様が変わってきました」

聞き捨てならない箇所があったが、どうやらこちらの疑問には答えられないらしい。クララーは更に言葉を続ける。

留学生の彼女は純粋なロシア人の筈だが、すらすらとクララーの口からは日本語が流れてくる。かなり頭も良いのだろう。

「変わってきた?」

「はい、端的に言うなら……女性として、非常に魅力的になってきました」

思わずため息をつくクララー。

果たしてそうなのだろうか。彼女にそう言われ、ゴロドクはノンナの事を思い返した。確かにノンナは魅力的ではあるが、この一カ月でそんな目に見える程の変化があつたようには思えない。体を重ねる時こそ淫らな面も見せてくれるが、普段は自分にも鉄壁の無表情を崩さない。『ブリザード』の二つ名に名前負けしない鋼鉄の淑女だ。

そんなゴロドクの疑問が表情に出ていたのだろう。クララーは噛んで含めるように言った。

「疑問に感じるのは、貴方が以前のノンナ様を知らないからです……勿論、それまでのノンナ様にも凛々しい美しさはありましたが、そこに最近艶めかしさが加わってきました。正直なところ、女性の私でも見惚れてしまう程です」

「は、はあ……」

ここまで来て、既に厄介な状況ながらゴロドクの背に更なる厄介を感じさせる悪寒が走った。

彼女が「魅力的になった」と語るノンナと、表向きはカチューシャと交際しているだけのゴロドク。そこまでならば接点を見いだせない筈だ。

嫌な予感を覚えつつ、ゴロドクはおずおずと聞いた。

「……なあ、同志クララー。余計に分からなくなってきたんだが。俺が付き合ってるのはカチューシャで、その副官のノンナ……さんは、顔見知り程度の関係しか無いぜ?」

危うく呼び捨てにしそうになり、どうにか言い直す。

「……まあ、そう言っただけならとは思っていました」

そう言うと、クララーは微笑みを崩さずに傍らの机の上に置かれていた複数枚の何かを取り、ゴロドクの前に差し出した。

「これは……?」

それは、ゴロドクにとって見慣れた建物の写真だった。ゴロドクが住んでいるマンションの玄関口を撮影したものだ。

だが——写真に写っている人物を確認した瞬間、ゴロドクの目は見開かれた。

「……………!?!」

インターホンを押すノンナの姿が写っている。中には、ゴロドクと二人でマンションに入ってゆく姿もある。

「おい！ 何だこりゃ!?!」

『何だ』も何も……見ての通りとしか」

予想通りの反応だったのだろう。驚愕するゴロドクにクララはからかうように言った。

「カチューシャ様と貴方が交際を始めた時期とノンナ様が美しくなられた時期が一致している時点で、お二人の関連性を探る理由としては十分でした。あとは警戒心の薄い貴方の側を中心に探れば、こうして物証が取れたという訳です。流石にノンナ様も、貴方のマンションまでは警戒されていなかったようで」

「だ、だからって、こんな物どうやって!?!」

「学園艦の住人の皆さんは、学生に協力的ですので……ちよつと『学園艦の防犯と防災についての協力』を、生徒会の腕章を着けてお願いしただけです」

「……………あんた、生徒会もやってたのか?」

「いえ、やっていませんが?」

当然のようにクララは言った。

ヤバイ、こいつはヤバイ。ゴロドクの額に嫌な汗が浮かぶ。

この「ヤバイ」には二つの意味があった。ひとつは眼前のクララがその穏やかな外見と裏腹に、ノンナとは別の意味で手段を選ばない相手であるという事実。もう一つは、自分とノンナの関係が第三者にバレてしまったという事実に対してである。

だからと言って、日々の生活で防犯カメラに注意しろと言われても無理な相談であろう。タレントならまだしも、平凡な学生であるゴロ

ドクが身辺調査されると誰が想像するものか。

先ほどまでの強気な態度を潜め、出来るだけ彼女を刺激しないよう注意しながらゴロドクは言った。

「認めるよ、確かに俺はノンナとも交際……と言っていいのか分からないけど、とりあえず付き合ってる」

「ご理解が早くて助かります。あと、この件はまだ私以外には知らせていません。カチューシャ様が泣く姿を見る事は、今回の私の目的とは離れた不本意なものですから」

「……それはどうも」

彼女の言葉がどこまで真実か分からないが、とりあえずは信じるしかないだろう。ここまで来て、ゴロドクはクララに抵抗する事を諦めた。

「で、そのノンナが魅力的になったって言うのと、俺をこうして拘束しているのと何の関係があるんだ？」

「はい。ノンナ様が貴方との付き合いで魅力的になられたのは疑いようがありません。最近ではカチューシャ様からの覚えも良く、ノンナ様以上にカチューシャ様のお側にいたい私としては差を付けられる一方なのです。そこで、貴方に彼女を変えた秘訣をご教授願えればと思います」

にこやかに尋ねてくるクララに、ゴロドクは困惑した。

そもそもノンナが以前に比べて魅力的になったという事さえ、クララの言葉で初めて知らされたようなものだ。心当たりなどある訳がない。

「そ、そんな事を言われても……」

「……………」

ふと、クララの顔から笑みが引いた。

「……やはり、そう簡単には教えていただけませんか」

「いや、そうじゃなくて……なっ!？」

おもむろにクララはスカートをずり上げると、ショーツに指を添えて下ろし始めた。白のレースが施された下着に、否応なくゴロドクの視線が吸い寄せられてしまう。男の悲しい性だ。

「先程も言いました通り、貴方に危害を加えるつもりはありません。外傷などをつければ、カチューシャ様やノンナ様に容易に察せられてしまいますし」

「……!?!」

そのままショーツを引き下げつつ、クララは淡々と言う。

ゴロドクはクララの意図を読めないまま、彼女の股間への視線を逸らせずにいる。スカートを戻す寸前、金髪に彩られた秘所が僅かに見えた。

クララは脱いだばかりのショーツを手にしたまま、ゴロドクへと一歩近づいた。

「ですので……傷付けないやり方で、貴方からお聞きしたいと思いません」

「いや。だから本当に……うわっ!?!」

突然、ゴロドクの視界が白く覆われた。温もりを残す布地が鼻まで塞いでいる。

何かは考えるまでもなかった。クララが自身の下着をゴロドクに被せたのだ。甘い匂いとうっすらと残る汗の臭いが混じりあったものがゴロドクの鼻孔から脳を直接刺激してくる。

「ご存知ですか？ 人間は、痛みにはある程度耐えられるように出来ています。危険を感じた脳が、痛みを和らげるからです」

視界が塞がれている中、クララの声が聞こえる。吐息がかかる距離。かなり密着してきているようだ。

「しかし……快感には、耐えられるように出来ていません」

ゴロドクの制服のズボンに手の感触。カチャカチャという音と共にベルトが外され、ジッパーが引き下げられてゆくのが分かる。

「ま、待って！ くれって！」

慌ててゴロドクは抵抗しようとするが、両手を拘束されている状況では身体を揺る程度しかできない。それは逆にクララがズボンを脱がせる助けとなってしまう。

やがてズボンは膝までずり下ろされ、ゴロドクの下半身はトランクス一枚の姿になった。

「下手に動けば、傷つきますよ」

囁くようにクララは言いつつ、トランクスの上からゴロドクの肉棒に柔らかく触れた。びくと肉棒は反応し、ゴロドクのことを無視して充血を始めてゆく。

「遅いものを、お持ちのようですね」

「うう……」

下着で目隠しをされ、ほぼ初対面に近い少女に肉棒を撫でられる。倒錯的な状況にゴロドクは混乱しつつあった。何とか彼女を止めようという焦る気持ちだけはあるものの、股間からの刺激に意識が持って行かれ、考えがまとまらない。

そのままクララは暫くの間、トランクスの上から優しく撫でていた。肉棒に快感を与えつつも一定以上の刺激を与えない、絶妙な手つき。

どこか手探り感を残すノンナの手つきとは全く異なる手慣れた動きに、下着の前面を押し上げつつ肉棒はびくびくと震えた。

「くうっ！ な、何で、こんな……!?!」

「本国では、諜報について多少の心得を学びましたので」

事もなげにクララは言いつつ、トランクスの隙間に細い指を差し入れると肉棒を引き出した。肉棒が外気に触れたのが感覚で分かる。

「……………」

ふと、肉棒からクララの指が離れた。何やらごそごそと探っているようだ。

少しの不安を感じたゴロドクは、クララに声をかけようとした。

「な、何を……ぐっ!?!」

竿の根元を強く締め付けられる感触に、ゴロドクは呻いた。何か糸のようなものが結ばれたようだ。

「あっさり達してしまわれては困ります。まだ尋問を始めてもいないのですから」

そう言いつつ、クララの指はゴロドクの肉棒に蛇のように絡みつき竿を抜き始めた。やはり痛みと快感の境界線を見極めたかのような、柔らかくも激しい手つき。たちまち肉棒は苦し気に充血し、露

出した亀頭をひくつかせる。

「ぐっ、ぐうっ!？」

「それでは……ンツ……んはっ……」

「うああっ!」

熱い舌先が亀頭に触れ、ゴロドクは拘束されたまま腰を浮かせた。ペロペロと舐めしやぶる感触に、視界を塞がれつつも自身の肉棒に顔を寄せるクララーの淫猥な姿を否応なく想像してしまう。

「んっ……んんっ……」

「え……う」

クララーの舌が急に亀頭から離れた。何か口ごもるような声が聞こえる。腰を半分浮かせたまま、ゴロドクは彼女の意図を読めず困惑した。

「はあっ……じゅるっ、んむう……」

「ふああっ! ク、クララー、熱っ!」

今度は亀頭だけでなく、肉棒全体が焼けるような熱く、それでいて柔らかいものに包まれた。

竿に絡みつく舌の感触が分かる。唾液を口に溜めたクララーが、一気に肉棒を呑み込んだのだ。

体温が彼女は高いのだろうか、ノンナのフェラとはまた違う、鮮烈な刺激が股間から全身に伝わってくる。

「んっ、じゅっ、じゅぶっ……!」

更にそこからクララーは頭を前後させ始めた。喉奥にこつこつと亀頭が当たっているのが分かる。

熱い唾液のぬめりと、唇による締め付け、舐め上げる舌による刺激が同時にゴロドクの肉棒に与えられ、思わずゴロドクは悲鳴をあげた。

「うああっ、クララー、それ、凄いつ!」

「んっ……あ、貴方のも、立派です……口に、入り切りません……」

一方的に攻め続けている状況にも関わらず、唇を離すとクララーは甘く囁くように言った。

更に口を離している間も肉棒への刺激は止めない。竿を抜き、頬ず

りをするように亀頭に吐息を吐きかける。

思わず腰を浮かせたまま、ゴロドクはびくびくと全身を震わせ達しかけた。しかし、

「うぐっ!？」

その射精感、竿の途中でせき止められた。紐によつて締め付けられた事で、射精に達する事が出来ないのだ。

「な、何だ……これ……っ!？」

「んっ……お忘れですか？ これは『尋問』です。素直にお話して頂ければ、すぐに解放してさしあげますが……」

「ぐうっ……!？」

クララーの下着を自身の汗で濡らしつつ、ゴロドクは苦しげに呻いた。赤黒く充血した肉棒は一刻も早い解放と射精を求めて震えている。

そう言う間にも、クララーの指はまた別の動きを始めていた。片手で肉棒を扱きつつ、もう片方の手をゴロドクの尻に回す。

「ちよ、待つ……うわっ!？」

思わずゴロドクは悲鳴をあげた。唾液に濡れる細い指が、ゴロドクの尻穴に触れたのだ。そのままにゆるりとクララーの指は奥まで押し入り、ゴロドクの内側から刺激を与えてくる。

話程度には聞いた事があつたが、これが前立腺を刺激するというものなのだろうか。痺れる頭でゴロドクは考えたが、その思考も強烈な快感に押し流される。

「ふあ……じゅぱっ……んむう……」

尻穴への刺激を止めることなく、クララーは再びゴロドクの肉棒を喉奥まで咥えこんだ。じゅぷじゅぷとゴロドクの股間の辺りから聞こえる水音が、見えないだけに余計に想像を掻き立ててゆく。

「ああ……た、救け……っ!？」

通常ならば既に数回は射精しているであろう快感に、ゴロドクは音を上げそうになった。

もういい。どうせノンナとの関係自体は既にバレているのだ。有る事無い事言つて、クララーを満足させれば気持ちよく射精できる。

それで良いじゃないか。我慢して何になる。
そう思い、ゴロドクは口を開こうとした。

「……!?!」

瞬間、暖炉の火に水が降りかかる音が耳に届いた。水蒸気が立ち上り、部屋の湿度が急激に上がってゆく。

「これは!?!」

クララーの戸惑う声。彼女の仕業ではない。では誰が。

火の消えた暖炉の方から、今度はごそごそと何かが動く音が聞こえてきた。遠く、次第に近く。

やがて、暖炉の消えた巻木を踏み折る音。

「……やはり貴女でしたか、クララー」

聞き慣れた声が、下着を被らされたゴロドクの耳に届いた。

第二話

「……やはり貴女でしたか、クララー」

聞き慣れた声と共に、水をかけられた暖炉の方から熱い湿気が伝わってくる。

クララーの下着を頭に被せられ、視界を塞がれた状態でゴロドクは汗を滲ませつつ首を振った。ショーツに残るクララーの匂いが強まり、こんな状況にも関わらずゴロドクの中の興奮を煽ってくる。

「ノ、ノンナ!？」

「……何とも酷い絵面ですね、ゴロドク」

普段と変わらない語調。しかし、その言葉の中にはつきりとした「呆れ」が込められているのがゴロドクには分かった。

まあ、頭から下着を被せられて下半身裸で、しかも股間を勃起させて肉棒の根元を紐で締め付けられている上にクララーの唾液塗れなのだ。酷い絵面なのは間違いないだろう。

「……………」

ゴロドクの肉棒から口を離れたクララーは立ち上がったようだった。煙突からエントリーしてきたノンナと向かい合っているのが気配で分かる。

「何か言う事はありますか、クララー?」

「いいえ。煙突から来られたのには驚きましたが、私程度の隠蔽ならノンナ様がそろそろ気付かれる頃だとは思っていました」

「……彼を解放させてもらいます」

「はい、どうぞ」

静かな怒りを滲ませるノンナと対照的に、クララーの口調は落ち着いたものだった。ゴロドクの解放についてもあつさり引き下がり、ノンナを促す。

ノンナの足音がゴロドクの座る椅子に近づく。クララーの下着に指がかけられ、鼻に若干引っかけりつつもゴロドクの視界が開かれてゆく。

「遅くなりました、ゴロドク」

ブラウダの制服のあちこちを煙突の煤で汚した姿のノンナが、ゴロドクを静かに見下ろしていた。

安堵の吐息と同時に、ゴロドクは思わずノンナに尋ねた。

「あ、ああ、助かった……でも、どうして？」

「貴方の行動ルーティンは把握しています。午後の授業が中止になった場合の貴方の行動がどれにも含まれなかった時点で想定外の事態が起こったと判断し、こちらの部屋の鍵をクララーが借りたと聞いた時点でほぼ断定できました」

「……そ、それは、どうも」

今の自分とノンナは表向き交際しているカチューシャに隠れて浮気をしているような状態だが、これが逆だったら自分はあっさり浮気を見抜かれていたのではないだろうか。

そんな寒気を感じつつ、ゴロドクは頷いた。

「立てますか？」

「いや、その、後ろで手錠がかけられてる」

後ろ手で手錠を何とかしようとしてみる。しかし、やはりその程度では外れないようだ。

「クララー、手錠の鍵は？」

ノンナがクララーに尋ねると、彼女は躊躇するでもなく答えた。

「はい、同志ゴロドクのお尻の下にあります」

「は?」

ゴロドクは驚き、自分の尻を見ようとした。ここまでの色々と予想外の展開に意識を持って行かれて気付かずにいたが、言われてみれば太腿の付け根の下あたりに違和感がある。

「貴女が取りなさい、クララー」

「別に構いませんが……そうすると、私が再び同志ゴロドクの股間や尻に顔を密着させる事になります。宜しいですか？」

クララーが何かを仕掛けていないか警戒しているのだろう。彼女に指示を出すノンナに、クララーは小首を傾げつつ問い返した。

「……………」

ノンナは無言でゴロドクの股間を見た。クララーの激しいフェラ

チオを受けていた直後という事もあり、血管を浮かび上がらせた肉棒は亀頭を露出させたまま、竿をびくびくと震えさせている。

「……分かりました、私がやります」

少しの間ノンナは考えると、自分からゴロドクの前に腰を落とした。ゴロドクも少しは助けをしようと腰を浮かせようとするが、上手くないかない。

「失礼します、ゴロドク」

「あ、ああ」

ノンナがゴロドクの尻の下に手を伸ばそうとすると、自然と体が密着してしまう。膝のあたりにノンナの胸が押し付けられ、肉棒に吐息がかかるまで顔が近づく。

「うっ……！」

熱い吐息が亀頭に吹きかけられ、思わずゴロドクは声を漏らした。裸の太腿の下にノンナの手が差し込む感触。もぞもぞとした動きが、そんな場合ではないと分かりつつも勃起が更に強くなってしまう。

「……ここでは、ないようですね。この辺りでしょうか」

「うぐっ……！」

亀頭の先端がノンナの頬にあたり、先走りがぬるりと彼女の肌を濡らす。

「……ゴロドク」

「ご、ごめん」

先走りを頬に付けたまま、少し怒った風にノンナはゴロドクを見上げた。

「これを何とか出来ないのですか？」

「いや、その、俺としても何とかしたいんだけど……」

気まずそうにゴロドクは勃起を治めない肉棒を見下ろし、根元の紐に視線を向けた。

如何せん、普通ならばとづくに射精している所まで興奮を高められたのを抑えつけられたままなのだ。そう簡単に萎むものではない。

そのゴロドクの視線で気付いたのだろう。ノンナは顔を近づけ、竿の根元を縛る紐に指をかけた。

「……………これですか？」

「っ！　ちよ、ちよつと待った、ノンナ！　それ、今はマズい……………」
「そう言いますが、これでは邪魔で鍵が取れませんので」

その紐を取つたら何が起きるか、ノンナは分かかっていないのだろう。慌てて制止するゴロドクの言葉も聞かず、ノンナは紐を解いた。

根元で抑え込まれていた血流が急激に走り出し、無理な我慢をさせられていた射精感が急激にこみ上げてくる。

「うあっ!?　ノ、ノンナっ、顔っ！」

「顔？」

何とかノンナへの直撃だけは避けたかったゴロドクだが、抑制から一気に解放された体の反応は予想以上に速かった。

「うっ、ううっ！　出るっ！　ノンナっ、出るっ！」

「ゴロド……………っ!？」

腰が大きく震え、亀頭の先端から噴火のように精液が迸った。

途中で止めようとしても止まらない、堪らない快感と共にどくどくと精液が吐き出されてゆく。

「はああ……………」

「……………」

心地よい脱力感を覚え、ゴロドクは大きく息をついた。

「……………あ」

ゴロドクは我に返り、そろそろと視線を下げた。

「……………」

ノンナの整った顔が、どろりとした白濁液に塗れていた。生臭い、むわつとした臭いがゴロドクにまで漂ってくるようだ。

「……………えっと」

静かな、極めて無感情な瞳で見上げてくるノンナにゴロドクはかける言葉を探したが——早々に諦めた。

「ゴロドク、貴方の故郷では助けようとする相手に精液を浴びせかけるのが礼儀なのですか？」

「いや、だから、こうなるのが読めたから止めようと……………」

ノンナの静かな抗議にゴロドクは気まずさを覚えつつも流石に抗

議する。

「フ、フフツ……！」

ふと見ると、ノンナの背後で様子を伺っていたクララが口元を押しさえて笑っていた。相当にツボに入ったのか、少し身体を屈めるようにして笑いを押し殺している。

「……ありました。外します」

「あ、あの、ノンナ？」

「どうしましたか？」

「いや、何でも無い。ありがとう」

精液塗れの顔のまま、ノンナはゴロドクの太腿の下から抜き出した鍵を手にする。立ち上がり、今度は椅子の後ろに回った。

「先に顔を拭いた方が良いのでは」とゴロドクは思ったが、それを浴びせかけた張本人が言う。と余計にノンナを怒らせそう。言葉が途切れた。

僅かな合間の後、ゴロドクの手首を拘束していた手錠が外された。

「とと……えーと、ティツシユか何か無いか？」

「煙突をくぐるために手持ち品は最小限にしましたので」

ふらつきつつ、ゴロドクは椅子から立ち上がった。液体塗れの股間を何とかしたくノンナに尋ねるが、素っ気ない返事が返ってくる。

まあ、持っていれば彼女はまず自分の顔を拭くだろう。

「ノンナ様、乾く前にこれを。そのまま廊下に出られるおつもりですか？」

解錠を終え、立ち上がったノンナにクララはハンカチを差し出した。

「助かります。ちゃんと洗って返しますので」

「いいえ、お気になさらず」

ノンナは彼女のハンカチを素直に受け取り、顔に粘つくく残るゴロドクの精液を拭きとった。

「それよりも……同志ゴロドクにお渡ししてあげて下さい。あのままでは、ズボンも履けないでしょうから」

「……………」

クララーは続けてそう言うと、まだ下半身裸のままのゴロドクに視線を移した。

ノンナは自分が顔を拭いたばかりのハンカチを一度見て、それからゴロドクを見て、またハンカチを見た。

「……ゴロドク、これを」

「あ、ああ」

数秒の逡巡の後、ノンナは濡れたハンカチを差し出してきた。

上質なハンカチだろうに、もう使えまい。ノンナとクララー、どちらにも変な申し訳なさを感じつつゴロドクは受け取り、股間を拭いた。

「フフツ……感謝します、ノンナ様、同志ゴロドク。お蔭様で、大凡知る事ができました」

ふと、クララーがそう言つて微笑んだ。

「え?」

「何の話です、クララー?」

思わず股間を拭く手を止め、ゴロドクは顔を上げた。

彼女の言葉の意味が理解できないのは同じなのだろう。ノンナもクララーに改めて尋ねる。

問われたクララーは、隠す風でも無く答えた。

「お二人の関係の度合いの話です。やはり、ノンナ様は同志ゴロドクと交合するようになった事で女性としての魅力を開花させていたのですね。ただ……単純な交合でなく色々と特殊なプレイをする所まで関係を持たれていたというのは、ちよつと予想外でした」

「……………」

「……何故そう思うのですか、クララー?」

すらすらと紡がれるクララーの言葉に、ゴロドクは驚いた。

少しの沈黙の後、ノンナが更に聞いた。

「お二人が関係を持たれているのは物証から掴めていましたが、どこまでの仲なのかまでは不明瞭でしたので……」

「……………」 そういふ事ですか」

「ええと、どういふ事なんだ?」

どうやら今の一言で、ノンナはクララーラの意図を察せたらしい。良く分からなかったゴロドクはノンナに尋ねた。

「つまり……私がここに貴方を助けに来た事も含めて、クララーラの想定内だったという事です」

「はい。失礼ながら、ノンナ様は最良の タ イ ミ ャ レ ム ェ ン グ ニ で来て下さいました」

そう言いつつ、クララーラはゴロドクを見た。

「もしお二人の関係が互いに趣味を共有する程度のものでしたら、例えノンナ様でも下半身裸で勃起させている彼を見て多少の動揺を見せるでしょう。でもノンナ様は普通にその状態のゴロドクと話をしています。つまり、お二人は互いの性器を見慣れている程度には深い仲だという事です」

「な……」

ゴロドクは思わず言葉を失った。自分の肉棒を舐めしゃぶりつつ、彼女はそんな計算をしていたのか。

「またその後ですが……彼の精液を顔に受けながら、ノンナ様は手錠の解錠を優先しました。これも、初めて浴びせられたなら出来ない反応です」

「……随分と今日は饒舌ですね、クララーラ。貴女らしくもない」

「ノンナ様、誤解のなきよう。私は貴女を尊敬し、憧れています。そこに間違いはありません」

ノンナがクララーラに一步踏み出す。クララーラは穏やかな表情のまま、彼女に言った。

「ただ……『貴女を超えたい』という気持ちもあるのです」

そう言う彼女の瞳には、強い意志があった。

やり方に多少——否、かなり問題はあったとはいえ、クララーラはクララーラなりに真剣なのだ。ゴロドクはそう理解した。

ノンナにもそれは伝わったのだろう。頷きつつも、ノンナは彼女に言った。

「その事を否定するつもりはありません。ですが、今日はここまでにさせていただきます」

「はい、お騒がせしました。ノンナ様」

そうクララーは深々と頭を下げ——姿勢を戻すと、ゴロドクに微笑みを向けた。

「それでは同志ゴロドク、改めてお願いがあるのですが」

「へ？」

これで終わりと思っていたゴロドクは、急に話を向けられて気の抜けた返事を返し、

「此処で私と交わっていただけませんか？」

「はい!？」

「お願い」の内容に硬直した。ノンナがクララーに尋ねる。

「クララー、今日はここまで」だったのでは？」

「はい、同志ゴロドクを強引にお招きして、ノンナ様にご迷惑をおかけした件についてはここまでです。ここからは、私個人のお願いです」

涼しい顔でクララーは答えると、硬直したままのゴロドクに更に言った。

「お願いします、ゴロドク。ノンナ様が受けたような快感を、私にも与えていただけませんか？」

「い、いやー！ いただけませんかって……!？」

どう返事をしたものか混乱しつつ、ゴロドクはノンナを見た。

ノンナの表情は変わっていない。しかし——その瞳の奥には、確かな怒りが浮かんでいるように思える。

その反応も想定内だったのだろう。クララーはノンナに聞いた。

「ノンナ様。これはあくまで私の推測なのですが……お二人は、〃恋愛〃としての交際はされていないのではありませんか？」

「何故そう思うのですか、クララー？」

「ノンナ様が来られる前に彼に尋ねたのですが、非常に歯切れが悪かったもので」

「……………」

ノンナは答えない。いや、答えられないのか。

正直なところ、自分たちの関係をどう説明したものか。それはゴロドクにも、そしておそらくはノンナにとっても難しい事柄だった。

自分たちを信頼するカチューシャを挟み、誤解から始まった肉体関係だけの関係。カチューシャを裏切りつつ、それでも互いを求めてしまう関係。ではセックスだけで良いのかと聞かれると、それもまた違う。クララに改めて言われた事で、その歪みを眼前に突き付けられたようにゴロドクは感じた。

場の空気が変わりつつあるのを感じ取ったのだろう。クララは指を立てて言葉を続けた。

「それに……これはお二人にとっても、『安心』できる提案かと思えます」

「安心?」

「はい、幾ら私がお二人の関係をカチューシャ様に漏らさないと云っても、完全な安心はできないでしょう。しかし、関係に巻き込んでしまえば言わば私も共犯者。絶対に情報は守られます」

「(そこまで考えてたのかよ!?)」

クララの提案にゴロドクは内心で舌を巻いた。なるほど、伊達にプラウダ戦車道のNo.3と呼ばれている訳ではないという事か。大した戦術眼だ。

「いかがでしょう、ゴロドク? 私としても、貴方が気持ちよくなれるように精一杯奉仕して差し上げますので……」

ちろり、とクララの舌が覗く。ゴロドクの脳裏に、先ほどまでのクララの口淫がフラッシュバックする。椅子に拘束されている自分の屹立した肉棒を喉奥まで咥えこんでいた姿を。

クララの言葉に気を持って行かれ、まだズボンを上げていない事に気付いたゴロドクは慌ててズボンを引き上げようとした。しかし

「あ……」

「……こちらの方は、……了承していただけるようですね」

間に合わず、再び勃起した肉棒を二人に晒す事になったゴロドクは顔を赤くした。嬉しそうに言うクララ。無言のままのノンナ。

「え、ええつと……」

「貴方が決めてください、ゴロドク」

助けを求めるようにノンナを見るが、彼女からは切り捨てるような言葉が返ってきた。

改めてクラララを見る。

「……………!?!」

ゴロドクは言葉を失った。

クラララがスカートの前をずり上げている。ゴロドクの頭に被されていたシヨーツは取られ、床に落ちたままだ。

「お願いします……ゴロドク。私も、本気なのです」

隠すもののない金髪に彩られた秘所が、カンテラの灯りに照らされていた。薄めの陰毛の合間から、桃色の秘唇が僅かに覗いている。

男性の本能を否応なく煽ってくるその姿に、ゴロドクの肉棒は臍に当たる程に反り返った。

「(うう……っ!)」

クラララとのセックスへの期待に疼く股間からの情動に耐えつつ、ゴロドクは迷った。

これは“浮気”に含まれるのだろうか？ 否、既に自分とノンナの関係は、何も知らないカチューシャからすれば浮気であり裏切りなのだ。それを棚に上げるのは躊躇われた。

確かにクラララ自身が言う通り、彼女を抱く事で口止めする事もできる。それは決して悪い話ではない。

だが——いや、だからって——それでも——

ゴロドクは悩み、悩み、スカートを上げたままのクラララに少しだけ視線を送り、やはり悩み——口を開いた。

「……分かった。それで、黙っててくれるなら」

この期に及んで自分を正当化しようとしてしまう自身の心に、情けなさを覚える。

「はい、それは勿論」

嬉しそうにクラララは手を合わせた。ノンナは何も言わず一歩引き、壁際に立った。

「ノンナ様？」

「ここで待たせていただきます」

「な!?! いや、ノンナ、俺なら大丈夫だから……」

「……………」

「……わ、分かったよ」

刺すような視線に、引き下がる。

ノンナが見ている中でクララーとこれからセックスする。何とも奇妙な状況になってきたが、OKしたからにはやるしかない。ゴロドクは腹を括り、クララーに言った。

「ええつと……その、それじゃ、始めるか?」

「ええ、お願いします」

そう言うときクララーは部屋の隅から毛布を持ってくると、床に敷いた。

「どうぞ、服をお脱ぎになって下さい」

「あ、ああ……………」

そう言われ、ゴロドクは上着を床に落とし、シャツを脱いだ。靴下と上履きも取り去り、全裸となる。

一方のクララーは、プラウダの厚手の制服のボタンを外すと金髪をかき上げ、床に落とした。ショーツと合わさったデザインの、上品そうなブラが露になる。

「(おお……………!)」

どうやら彼女は着やせする方だったようだ。流石にノンナの大きさには及ばないものの、十分なボリュームを備えた乳房は高校生とは思えない程で、ロシア人特有の透き通るような白い肌に血管が薄く浮かんでいる。

更にクララーはスカートの中のホックを外し、上履きを脱ぐと足を抜いた。既にショーツは無いので、ブラと靴下だけという何とも倒錯的な姿である。

その姿と、豊かな乳房と肉付きの良い双臀が作り出す煽情的な身体ラインにゴロドクは思わず息を呑んだ。

「ええつと、それじゃ……………」

その時、毛布に横になろうとするゴロドクの前でクララーが跪い

た。

「クラーラ？」

「先程は申し訳ありませんでした。お二人の関係を探るためとはいえ、苦しい思いを……」

「い、いや、それはもういいから……うっ！」

「ですので、先程の続きから……あむっ」

「(うおおっ!?)」

ゴロドクの腰に手を回し、クラーラは固く勃起したゴロドクの肉棒を咥えこんだ。空いた手で艶やかな金髪をかき上げ、舌を亀頭に絡めてゆく。

先ほどの射精を強制的に促すような激しい動きとは異なる優しい舌の動きに、ゴロドクは身を震わせる。

その背中に、ノンナの視線がちくりと刺さったようにゴロドクには思えた。

第三話

プラウダ高校、自己批判室。

表向き「全ての生徒は平等である」という理念の下、「本人が他人の指導を求めるため」の場所として提供される密閉空間。

ならば、この行為も「自己批判」に含まれるのだろうか。硬く反り返る肉棒を形良い唇で啜えこむクララーの姿を見下ろしつつ、ゴロドクはそんな事を考えた。

ノンナは壁際で、こちらの様子を静かに眺めている。その表情に変化は無い。しかし、内面に複雑な感情が渦巻いているであろう事は容易に予想できた。

「ンツ、ンツ……ふあ……如何ですか、ゴロドク？」

「あ、ああ、堪らない……」

「フフツ、恐縮です」

肉棒から口を離し、クララーは上目遣いにゴロドクに尋ねた。その間も手は竿を扱き、心地よい快感を与えてくる。

ノンナに見られているという気まずさと、先ほどから自分たちを翻弄するクララーへの警戒心からどこか滾り切れずにいたゴロドクだったが、やはり直接与えられる快感には抗えず熱い欲情が湧き上がってくる。

「ンツ、んぷつ、ンン……っ！」

「(ううっ、しかし、これは……上手い……！)」

顔にかかる金髪をかきあげつつ、再びクララーはゴロドクの肉棒を喉奥まで呑み込んだ。こつんと亀頭が喉奥に当たる。

息苦しいはずだが、クララーはそんな気配も見せずそのまま頭を前後させ、同時に口腔内では舌を蛇のように竿に絡みつかせ、唇を柔らかく締め付ける。じゅぷじゅぷと口元から粘っこい水音が立ち、唾液と先走りの混じり合った粘液が床に滴り落ちる。

本人に言えば怒られるどころではないだろうが、正直なところ、クララーの奉仕はノンナのそれより巧みで、上手かった。ゴロドクは腰を震わせつつ、クララーの与えてくる快感を味わった。

「はあっ……あ、熱いです、ゴロドク……口の中が、火傷してしまいそうですね。」

「そ、それは、どうも……それじゃ、今度は……」

「いえ、まだ……」

ふと、クララーはゴロドクから身体を離すと四つん這いそのまま机に寄っていった。ムチムチとした白い尻の間から、カンテラの光に照らされた金髪の陰毛が覗いている。

カンテラの光の陰になって気付かなかったが、プラウダ高校の校章入りの鞆が机の角に置かれていた。おそらくはクララーのものだろう。

彼女は鞆を開け、何かを探ると半透明の容器を取り出し、戻ってきた。調味料のドレッシングを入れるような形の容器で、中にはとろみのある液体が入っているようだ。

「それは？」

「ローションです。こちらからお願いしたのですから、もう少しご奉仕させていただきます」

「奉仕って……？」

「はい、ノンナ様には及びませんが、私も多少は自分の体に自信を持っていきます、そちらを活用できればと……」

ゴロドクの足元に戻ってきたクララーはそう言うと、ローションの瓶の蓋を開け容器を自身の胸に傾けた。粘り気の強い透明なローションがクララーの豊かな乳房を濡らし、艶めかしい光沢を放つ。

香料の甘い匂いがゴロドクの鼻孔に届き、この後の行為への期待に咽がごくりと鳴った。

白く大きな乳房に手を添え、クララーはゴロドクの肉棒を前に膝立ちになった。

「それでは、参ります。私の事は気にせず、お好きな時に射精してください……んっ……」

「う、うわっ!？」

クララーは自身の乳房に添えた手で谷間を大きく広げると、ゴロドクの反り返る肉棒をそこに収め、そして今度は乳房を寄せて強く挟み

込んだ。

ローションの滑りと、クララーのきめ細かな肌の乳房の温もりと弾力に包まれ、ゴロドクは思わず声を上げた。

「こ、このまま、動きますね……ふっ、んはっ……」

「すっ、凄いつ！ クララーの、胸……っ！」

「ふふっ、光栄、です……はあっ……」

そのままクララーは両の乳房に絶妙な力加減を加えてゴロドクの肉棒を谷間深くに挟み、身体を上下させ始めた。雪のように白い肌の谷間から時折赤黒い亀頭が覗く様はこの上なく淫猥で、見ているだけでゴロドクの支配欲を掻き立ててゆく。

無論、肉棒全体をにゆるりと包む暖かくも心地よい刺激も堪らないものだった。瑞々しい乳房の弾力を受けつつもローションを垂らされた谷間は滑らかで、無意識にゴロドク自身も腰を動かしてしまふ。

深い谷間から飛び出しそうな肉棒を押さえつつ、クララーは自ら乳房を揉みしだくように手を動かした。

「ん、んっ、んっ……」

「ぐうっ……い！」

規則正しいリズムでクララーの口元から静かな喘ぎが漏れる。白い乳房の先端で揺れる薄桃色の乳首は固く尖り、時折ゴロドクの陰毛に触れる。

リズムに合わせて上下する大きな乳房から目を離せないまま、ゴロドクは唇を噛み締めつつ腰の奥からこみ上げる射精感に耐えた。

「はあっ……わ、私も、気持ちよくなってきました、ゴロドク……」

「う、ううっ……っ」

汗を浮かべつつクララーが言う。ゴロドクは呻きながら、どこか違和感を覚えた。

しかし、その違和感の正体を探る前に射精感がそれを上回った。肉棒の上下でローションは泡立ち、腰がびくびくと震え、精巣から精液が駆け登ってくる。

「だ、駄目だっ！ 出るっ！」

「いい、ですよ……下さい。我慢せず、このまま……」

体を離そうとするゴロドクの肉棒を深く挟み込んだまま、クララーは乳房を両側から強く寄せた。ぷるんと亀頭が顔を覗かせ、クララーの熱い吐息が吐きかけられる。

その吐息と、左右から竿を締め付ける乳房の弾力にゴロドクは遂に限界に達した。

「あああつ！ ごめん、クララー！ くっ、ぐうっ！」

「はい、ください……貴方の、精液を……っ！」

「うっ、うああつ！」

先ほどノンナの顔面に向けて射精したばかりというのに、ゴロドク自身が驚く程の量の精液が亀頭から噴き出した。

「ああ……！」

うつとりとした声と共に、クララーは乳房から肉棒を解放する事無く射精を受け止めてゆく。ローションと汗の混じり合ったクララーの白く豊満な乳房の谷間の水たまりに、精液が混じり合っただけ。

精液の飛沫はクララーの顔にまで届き、整った口元に汚れた白濁液が付着する。

「はあっ……ああ……！」

腰が震える度に、精液は止まることなく吐き出されてゆく。

たつぷり十数秒に渡る射精感の後、クララーは乳房に添えていた手を離すとようやくゴロドクの肉棒を解放した。谷間の上に溜まっていた淫液がゆつくりと垂れ、臍を経由して下腹部へと流れてゆく。

「こんなに出るのですね……ふふ、匂いが染み付きそうです」

「あ、ああ……俺も、こんなに出るとは思わなかった」

頬を火照らせつつ、クララーはそう言うのと粘液を身体に擦り付けて微笑んだ。ゴロドクも荒い呼吸の合間に、素直に答える。

「……!?」

射精後の心地よい脱力感を覚えていたゴロドクは、ふと体に刺さる視線を感じた。ノンナの事が頭から抜けていた事に気付きつつ、彼女の方を見る。

「……」

ノンナは壁際に立ちつつ、じつとゴロドクに視線を送っていた。言

葉は発しないが、彼女の言いたい事はその瞳が十分に伝えてきていた。

「(随分と堪能しているようですね)」

「(……そう言うなって)」

気まずさと謎の申し訳なさを感じつつ、ゴロドクはそんな感じの意味を含めて視線を返した。「ゴロドク専用の身体」とまで言ってくれたノンナにしてみれば、当然思うところはあろう。とはいえ、ここまで来て引き下がる訳にもいかなかった。中途半端な落としどころでは今後もクララーラから強引なアプローチが来るかもしれないし、カチューシヤに秘密が明かされるリスクもあった。

「ゴロドク、どうされますか？ 少し休まれますか？」

先程ゴロドクが手放した、精液塗れのハンカチで申し訳程度に乳房を拭きつつクララーラが尋ねる。

「……いや、このままやろう」

ゴロドクはほんの少しだけ考え、クララーラに言うど体に力を込めた。ローションと精液に濡れ、垂れ下がっていた肉棒が固さを取り戻してゆく。

彼女に快感を与えるのが目的である以上は変な休憩は挟みたくなかったし、自身の身体の火照りを冷ましたくなかった。

——クララーラの身体が魅力的だったのも、否定はできなかったが。

「分かりました。では……お願いします」

クララーラはそう言うと、防寒用の毛布を床に敷き、身体を横たえた。仰向けになっても形を崩さない両の乳房が重そうに揺れる。

「ああ、いくぜ」

ゴロドクは彼女の身体に覆いかぶさり、乳房に手を伸ばしつつ顔を近づけた。

「キス……いいか？」

「……はい」

念のため尋ねる。クララーラの碧い瞳がゴロドクを見返し、こくりと頷く。

了承を得て、ゴロドクはクララーラに唇を押し当てた。白い肌と対照

的な紅い唇がやけに艶めかしい。

「ふあっ……ん、んんっ……クラーラ……」

「ゴロ、ドク……ンツ……んはっ……」

吐息を交わしつつ、舌をクラーラの口腔内に差し入れる。クラーラの舌がそれに応え、進入してきたゴロドクの舌に絡みつく。

やはり彼女は体温が高めのようだ。ゴロドクの口の中に流れ込んでくるクラーラの吐息は熱く、舌はその熱さを示すように情熱的に踊る。

それは確かに、練習や経験を感じさせる動きだった。クラーラは最初に「本国の諜報部で」と言っていた。あれは彼女なりのジョークかとゴロドクは思っていたが、案外本当なのかもしれない。

手に収まり切らない、陶磁器のような白く美しい乳房を揉みしだきつつ、ゴロドクはそんな事を考えた。

「ああっ！ か、感じます、ゴロドクの手……っ！」

乳房を揉む手の動きに合わせて、クラーラは敏感に反応する。

「……っ？」

しかし、やはりゴロドクは違和感を覚えた。試しに唇を離し、首筋に舌を這わせてみる。

「ンツ！ ンンツ！」

びくり、とクラーラの身体が反応した。熱い喘ぎが彼女の口元から漏れる。

「……」

最初は正体の分からなかった違和感の正体に、ゴロドクは気付き始めた。

彼女の反応は——どうにも綺麗すぎる。

まるで「こういう場所を攻められる時にこの反応を返せば、男性は満足する」というマニュアルを丸暗記しているかのような、綺麗な反応。

無論、全く感じていないという事はないだろう。しかし、個々人の性感帯が異なる以上、画一的な反応という事は無い筈だ。

では何故、「ノンナが受けたような快感を教えてほしい」と言いつつ

彼女はそんな反応をしようとするのか。

「……………まさか」

ある一つの可能性に思い至り、ゴロドクはキスを重ねつつ、乳房を揉んでいた手を離すとクララーラの下半身へと向けた。

「ふあ……………っ！」

臍をなぞる時に、クララーラの身体が跳ねる。おそらくはこれも、過度に見せている反応。

やがてゴロドクの指はクララーラの秘所に辿り着いた。柔らかな金髪の陰毛が指先をくすぐる。

「ゴロドク……………そ、そこは、まだ……………」

「すまない、クララーラ。触らせてくれ」

急なゴロドクの動きの変化に、クララーラは少し戸惑いつつ言った。有無を言わせぬ語調で、ゴロドクは陰毛の先の秘唇へと指をあてた。視線をそこへ向ける。金髪に彩られた陰唇は既に濡れており、朱鷺色の小さな襞をひくつかせている。ゴロドクはゆっくりと指を孔へと侵入させる。

挿入させた指は一本だけだったが、クララーラの膣内はそれを強烈に締め付けてくる。それでも指を奥に挿れようとしたところ、ぴつたりと襞が閉じられている感触が伝わってきた。

「……………マジかよ」

自分の（おそらくは見当外れだろうと踏んでいた）予測が当たり、ゴロドクは驚きと共にクララーラを見た。

怪訝な顔でゴロドクを見つめ返すクララーラに、ゴロドクはゆっくりと、しかしノンナにも聞こえる程度の大ききさで尋ねた。

「クララーラ、あんた……………処女だな？」

「……………」

壁際のノンナの眉がひそめられた。確かにここまでのクララーラの挙動から出てくる質問ではないだろう。しかし、

「……………やはり、隠せませんでしたか」

ゴロドクの奇妙な質問に、クララーラは肯定で返した。

「まあ、何と言うか……………反応が、その、ちよつと嘘くさかった」

「そうでしたか……やはり、付け焼刃では無理がありましたね」
「さつきまで俺にしてくれたのは？」

「あれは、本当に練習したものです。いざという時に、女性の武器を活かせるようにと鍛錬していましたので……」

このクララの答えに嘘は無いだろう。実戦が無かったとなれば、手慣れた奉仕の動きと反応の食い違いにも納得できる。

「(参ったな、こりや……!)」

ゴロドクは内心で頭を抱えた。

クララ、彼女は賢明で、冷静で、ラショナル理性的だ。それが今回、彼女が求めているものと完全に相反している。

この状況においてなお、クララはゴロドクとのセックスによる快楽を理性で受け止めようとしている。それでは駄目だ。

それでは彼女は十分な快感を知る事無く初体験を終え、「こんなものか」と思ってしまうだろう。

確かに今回、ゴロドクは完全に被害者でありクララの在り方に手出しする必要はない。やる事だけやって、それを彼女がどう受け止めたかは彼女の問題のはずだ。

しかし——それは嫌だった。

その目的は明後日の方向かもしれないが、それでも彼女は自分をより魅力的にしたいとゴロドクに申し出て、こうして処女を散らそうとしている。

ゴロドクも男の端くれである。そんなクララに中途半端な経験だけさせて終わりにするのは、男の意地が許さなかった。

「(とは言っても、どうしたもんだか……)」

思考が許される時間はさほど無い。二人の身体の火照りが冷める前に、何とかクララを理性を捨てる程に乱れさせる方法を考えなくては。

ゴロドクは考え、考え、部屋を素早く見回し——ある決意をした。

「ノンナ！ お前も、混じってくれないか？」

「ゴロドク？」

ゴロドクは顔を上げ、壁際のノンナに言った。クララが意図を測

りかねるように尋ねてくる。

そして意図を測りかねているのは、ノンナも同じだった。

「ゴロドク?」

「頼む、ノンナ」

「ゴロドク、貴方の性的な趣向に口を出すつもりはありませんが……」

唐突な頼みに抗議しようとしたノンナだったが、ゴロドクの真剣な表情に言葉を止める。

「(……何を考えておられるのですか?)」

「(クラーラを、狂わせたい)」

無茶苦茶な頼みだと自分でも思いつつ、ゴロドクはノンナの訝しむような視線に真剣に返した。

「……フウ。全く、貴方は」

数秒の沈黙の後、ノンナは制服のボタンに手をかけた。

「分かりました。クラーラ、私も参加させていただきます」

「ノンナ、様?」

「女性同士というのは私も初めてですので、お手柔らかに」

そう言いつつ、ノンナは淀みない動きで制服を脱いでゆく。クラーラ以上の豊満な乳房が、ボタンをひとつ外すごとに拘束を外されたように存在を強調してゆく。それでいてウエストは引き締まり、短いスカートに包まれた尻から腿にかけてのむっちりとしたラインは高校生のもそれとは思えない程だ。

「……綺麗です、ノンナ様」

彼女の脱ぐ姿に視線を奪われたクラーラの口から言葉が漏れる。ゴロドク自身、この極上の身体とセックスしているのは自分だけだという事実に、彼女の脱ぐ姿を見るたびに悦びを感じてしまう程だ。

やがてノンナはスカートのホックを外し、ベージュのハーフカップのブラとショーツだけの姿となった。フロントホックを外すと、熟れた果実のような重さと瑞々しきを感じさせる巨大な乳房が露になった。先端では小さな乳輪に彩られた桃色の乳首が震えている。

「下も脱ぎますか、ゴロドク?」

「……あ、いや、とりあえず、そこまでいい」

ノンナからの質問に、思わず見惚れていたゴロドクは我に返って答えた。

「それで……どうすれば？」

「ええと、俺がクララーの下半身を攻めるから、ノンナは上半身を頼む」

「分かりました」

ゴロドクはノンナに指示を出すと、クララーの上半身を抱き起した。その身体をノンナに預け、自身はクララーの下半身へと頭を下げる。

「ノンナ様、あの、これは……？」

クララーにとってノンナがセックスに加わるのは完全に予想外だったようだ。戸惑うクララーに身体を寄せつつ、ノンナが言った。

「……やるからには、本気で貴女を気持ちよくさせます」

「ノンナさ……ンツ!？」

更に問いかけようとするクララーの唇を、ノンナは自身の唇で塞いだ。

身を押し付け合う両者の間で豊満な四つの乳房が風船のように圧迫している様は、それを見上げるゴロドクには圧巻の光景だった。

「んむっ、はあっ……知らないうちに、こんなに胸が大きくなっていたのですね、クララー」

「ああ……ノ、ノンナ、様……」

「続けますよ？」

「ふあっ!？」

唇を一旦離し、ノンナは今度は唇をクララーの耳に這わせた。びくりとクララーの身体が反応する。

こちらの行動に対応し切っていない今がチャンスとばかり、ゴロドクは身体をずり下げクララーの股間に顔を埋めた。

白い肌と金髪の陰毛に彩られたクララーの朱鷺色の女陰は淫らで、そして同時に美しかった。

「こつちもいくぞ、クララー」

「え……？ ま、待ってくださ……ひうっ！」

ゴロドクの動きに気付いたクララーラが制止しようとするが、女陰を舐め上げられて思わず嬌声を上げた。

此処にゴロドクを誘い込む前にシャワーでも浴びていたのだろうか。石鹸の匂いと塩気の混ざり合った味がゴロドクの舌に届く。ひくつく陰唇を丁寧に舐めつつ、ゴロドクの手は陰核に柔らかく触れて撫で上げた。

「あんっ！　　そ、そこはっ！」

「上がお留守ですよ、クララーラ」

「ふえ……んっ、んむうっ!？」

再びノンナがクララーラの唇を塞ぎ、クララーラの口腔内に舌を挿入させてゆく。

「……安心してくれ、クララーラ」

とろりとした愛液が奥から溢れてくるのを確認し、ゴロドクは言った。

「あんたに、『快感』を教えてやる」

第四話

秘密を抱えた関係である以上当たり前だが、ゴロドクがノンナに他の女性を加えて乱交、いわゆる「3P」をするのは初めてである。

「はあっ……ああっ！　ノ、ノンナ様っ……」

「ん……貴女の硬くなつた乳首が当たっています、クララー」

「ちゅ……んはっ……ノンナ様も、こんなに尖らせて……ンンツ!？」

ゴ、ゴロドクっ!?　そんな、奥まで……っ!」

「じゅるっ……ふう……大丈夫、だいぶ滑らかになってきた。どんどん、奥から溢れてくる……」

「っ!?　言わないで、ください……!」

しかし、ゴロドクが驚く程にノンナは自分と呼吸を合わせ、クララーを攻めていた。上体のみ起こした状態のクララーに上半身を密着させ、互いの乳房を押し当てつつ唇を重ね、舌を絡める。

単に一辺倒に彼女を攻めるだけでなく、クララーの反応を伺いながらもゴロドクの動きをちゃんと確認し、同時に二点に刺激を与え、そこに緩急をつけてじわじわとクララーの身体を絶頂に押し上げようとしている。

優秀な戦車道の選手は戦場の全体を俯瞰し、攻めと守りを的確に使い分けると聞くが、ベッドの上でも通用するもののだろうか。大きく脚を広げるクララーの秘所に挿入していた舌を抜きつつ、ゴロドクはそんな事を考えた。

改めてクララーの顔を見上げる。透き通るような白い肌を紅潮させ、碧い瞳に快感の涙を滲ませつつ喘ぐその顔は美しく、同時に煽情的だった。

「ちゅ……ンツ……クララー……素敵、ですよ……んんっ……」

「あ、ありがとう、ごぎ……んむうっ……はっ、あはあ……!」

ノンナはクララーに囁きつつ、彼女の舌を吸い上げるような強いキスを繰り返す。律儀に礼を返そうとするクララーの言葉が途中で途切れ、喘ぎに変わる。

クララーを攻める事で、ノンナの身体も興奮してきたようだ。重そ

うな乳房は更に張りを増し、身体が熱くなってきているのがゴロドクにも伝わってくる。

「こっちも、もう一回……」

張りのある太腿に手を添え、舌を抜かれてぱくぱくと膣孔をひくつかせるクララーの秘所に再びゴロドクは顔を近づけ舌を侵入させてゆく。石鹸の匂いとクララーの愛液の匂いが合わさり、ゴロドクの鼻孔から脳へと官能的な刺激を送り、硬く勃起したままの肉棒を疼かせる。

「あつ！ ああつ！ ひああつ！」

クララーはゴロドクの舌の動きに敏感に反応し、身体を震わせる。それは先ほどまでの計算的なものでない、身体から湧き上がる快感からの直接的な反応だ。とろりと奥から滲み出てくる愛液の濃さがそれを示している。

「んはっ……ちゅ、ちゅばっ……ふあいふ、ほふまへ、ほほふようになっへひは……」

「ああつ！ ゴ、ゴロドク、挿れたまま喋らないで……ああんつ！」

「……ゴロドク、ちゃんと舌を抜いてから言っただけでください。『だいぶ奥まで届くようになってきた』で良いのですか？」

「あ、ああ……ふう、そ、それでいい」

ノンナの言葉にゴロドクは舌を抜き、頷いた。最初は指一本を受け入れるのにも難しそうだったクララーの膣^{なか}だが、二人がかりでの責めによりかなり柔らかくなってきていた。これならばゴロドクのモノを挿入しても痛みはさほど感じずに受け入れられるかもしれない。

しかし――

「(もうちよつと、か)」

ゴロドクは身体を起こし、今度は指をクララーの秘所に伸ばした。こちらの動きを察したノンナが唇を離し、背後に回りクララーの白い乳房に触れる。長身なノンナは掌もそれなりに大きいのが、それでもクララーの乳房を収めるには足りていないようだ。白い乳房に浮かぶ汗が、先ほどのパイズリでの精液の残渣を落としてゆく。

「ノンナ……んっ」

「ンツ!? んんっ!」

ゴロドクはクララーに唇を押し当てた。ノンナとのキスで熱さを増していた吐息がゴロドクの口腔内に流れ込んでくる。ノンナが彼女の乳房を揉む動きに合わせて、吐息が荒くなつてゆく。

「はっ、このまま……一回……」

「んむうっ!? はあっ、ゴ、ゴロ、ドク……くうっ!」

陰核を優しく撫で上げられ、クララーは唇を重ねたまま身体を跳ねさせた。あまり強く刺激すると痛みが変わってしまう。彼女を荒々しく犯したいという自身の中の衝動を押さえつつ、ゴロドクはクララーの身体を丁寧にする。衝動に任せるのは、もう少し後だ。

「抑える事はありません。このまま達してください、クララー」

「ノンナ、様……ひいっ!」

「れろっ……ふあ……ここも、感じるのですね……」

「ノ、ノンナ様っ! そこは、駄目で……はあっ!」

ノンナに耳を甘く噛まれ、クララーは悲鳴めいた嬌声をあげた。そのままノンナはクララーの耳朶に舌を伸ばし、なぞるように耳たぶを舐めると舌を耳孔に差し入れた。

「(うおお……!)」

クララーに密着しているゴロドクにも、ノンナの吐息と舌が動く水音が届く。その光景を横目で見つつ、ゴロドクは息を呑んだ。

ノンナの頬は紅潮し、瞳は潤み始めている。彼女の興奮が伝わってきたように、肉棒がびくりと反応する。

「あっ、ああっ! だ、駄目、ですっ! こんなっ、駄目……っ!」

何が駄目なのか、おそらくクララーにも分かっているのではないのだろう。体の内側からの絶頂の昂りに戸惑うように首を振り、悶える。

ゴロドクはそんなクララーの肩に優しく触れると、唇を離して言った。

「……ゴロドク?」

「大丈夫だ、クララー。全部、任せて……んっ」

「ふあ……ンツ、ンンツ……!」

ゴロドクは再びクララーにキスをした。同時に陰核に触れていた

指を、やや強く捏ねるように曲げる。ノンナはクララーラの背後から耳責めを続け、舌を深くまで挿入してゆく。

「……………ッ！」

唇を重ねたまま、クララーラは一瞬身体を強張らせた。びくびくと全身が震え、秘所がきゅつと締まると同時に愛液の飛沫がゴロドクの指を濡らす。

「あ……………はあつ……………ああ……………」

ゴロドクが唇を離すと、クララーラは恍惚とした吐息と共に体の力を抜いた。

「そろそろ……………かな。ノンナ」

「……………分かりました。ゴロドク」

「あ……………」

彼女が達した事を確認し、ゴロドクはノンナに視線を送った。頷き、ノンナはクララーラの耳から舌を抜くと腰を落としたまま少しずり下がった。それに合わせ、ゴロドクがクララーラの身体を毛布に横にする。

荒い呼吸で胸を上下させつつ、涙を浮かべた碧い瞳でクララーラはゴロドクを見上げていた。

「……………いくぜ、クララーラ」

「は……………あ、ああ……………う？」

クララーラの眼の焦点が合っていない。まだ絶頂の余韻から戻っていないのだろう。体は弛緩し、愛液に濡れた金の陰毛に彩られた膣孔は更なる快感を求めるようにひくついている。

ゴロドクは肉棒の竿に手を添え、クララーラの秘所にあてがった。ノンナはクララーラの頭の近くで四つん這いの姿勢になり、彼女の身体がずり上がらないように手を添えている。

「んっ……………！」

「あ？ ああつ！ くっ……………あはあつ！」

彼女の身体に上から覆い被さりつつ、ゴロドクは膣孔にあてがった龟头をぐいっと突き入れた。ぐちよぐちよに濡れそぼった膣は抵抗を残しつつもゴロドクの龟头を、竿を呑み込んでゆく。

初めての異物感に、クララーの背が沿った。しかし、身体にまだ力が入らないのだろう。その抵抗は弱い。

「ぐっ、う、うわっ！」

「情けない声をあげないでください、ゴロドク」

「い、いや、そう言われても……っ！」

クララーの締め付けにゴロドクは思わず声を漏らした。ノンナに窘められるも、予想以上のクララーの膣内の気持ちよさに戸惑いを隠せないのか腰の動きが鈍くなる。

ノンナの膣は強く締め付けつつも襞で肉棒を舐め上げるように刺激する感じだったが、クララーのそれは大きく違っていた。全体の締め付けはノンナに及ばないものの、襞の動きが一律でない。まるで別々の粘液質の生き物が無数に居る中に肉棒を突っ込んだような快感。ある襞は舐め上げ、ある襞はつつき、ある襞は竿をくすぐる。

「わ、悪い、ノンナッ！ ちょっと、尻、抓ってくれっ！」

「……私との時に、そんな我慢を貴方がした記憶はありませんか？」

「その辺りはっ、また、後でっ！ このままだと、マジでヤバいっ……！」

どうやらノンナはノンナなりに妬いているらしい。しかしゴロドクにそれに冷静に返す余裕は無かった。急激に押し寄せる射精感に、唇を噛み締めて耐える。

「……分かりました。こうですか？」

「ぐっっ！」

僅かの沈黙の後、ノンナは四つん這いのままゴロドクに近づき手を伸ばした。尻に強い痛みが走る。

しかしお陰で射精感はどうにか弱まった。そのまま腰を更に奥まで突き入れ、肉棒を完全に埋没させる。

「はあっ……はあっ……」

「ああ……わ、分かります、ゴロドクのが、奥まで……っ！」

奥まで挿入しきつたと同時に、クララーは大きく息をついた。結合部に視線を送るが、出血は抑えられたようだ。少し肉棒を引き戻すが、竿に赤いものは殆ど見られない。

「ここからだ……いくぜ、クララー」

「は、はい……お願……いいっ！」

「う、うおおっ、クララー、クララーッ！」

クララーの返事を待たず、ゴロドクは彼女の両脚を抱えると腰を動かし始めた。張り肉付きを両立させた美しいクララーの白い脚がゴロドクの腰に絡みつき、結合を更に深くしてゆく。

当初の予定ではもっと丁寧な最初の膣内射精までは持つて行こうとゴロドクは考えていたのだが、正直なところ、その余裕は無いようだった。大きく引き抜き、一気に突き入れる激しいピストンで最初からクララーを責めてゆく。

初めて男性の肉棒の挿入を許したとは思えない程に、クララーの膣内の動きは巧みだった。ものの本で読んだ“みみず千匹”という奴だろうか。一秒でも早く精液を求めるように無数の襞がばらばらに動き、鈴口から竿の根元に至るまで強烈にゴロドクに快感を送ってくる。ノンナの抓りが無ければ、とつくにゴロドクは射精していただろう。

「アアッ！ んっ、ひあっ！ こ、こんなっ、知りませ……んひいつ！」

ま、待って、待ってください……っ！」

「悪いけどっ、待てないっ！」

「ふああっ！」

戸惑いの混じる嬌声と共にクララーが懇願する。しかし、ゴロドクは腰を止める事無くクララーに更なる快感を与えようと肉棒を突き入れる。濃厚な愛液と先走りが混じり合い、ぐちゅぐちゅと淫らな水音が結合部から響く。

ノンナはゴロドクの尻を抓りつつ、クララーに顔を近づけた。

「ノンナ様……ああっ！」

「クララー、如何ですか？」

「た、助けて、くださいっ！ ノンナ様っ！ こ、このままだと、何もっ！ 考えられなく……んくうっ！」

ずん、と奥深くまで亀頭が達し、クララーは悶えつつもノンナに助けを求めるように言った。

それに対し、ノンナは優しく答えた。

「構いません、クラーラ。何も考えず、私に、ゴロドクに、全て預けて……動物みたいに、感じてください」

「ノンナ、様……ひあつ！　んっ！　ああつ！　ゴ、ゴロドクのが、もつと、太く……っ！」

ノンナの囁きに、クラーラの理性の壁が崩されてゆく。自身の身体の興奮に戸惑いを見せていた反応から、ゴロドクの肉棒の動きに合わせるような動きへ。

「ぐ、ぐうっ!？」

「ゴロドクっ、ゴロドクっ！　もつと、もつと、くださいっ！　ゴロドクの、全部っ！」

「あ、ああっ！　くれてやるっ！　全部、全部だっ！」

「ひいっ！　あ、あひっ！　ふか、深いっ！」

甘さが混じり始めたクラーラの声に、ゴロドクは膣内の肉棒を更に反り返らせつつ答え、腰の動きを速めた。ぱんぱんと肉を打ち付け合う音と粘り気ある水音が、無機質な自己批判室の壁に反響する。

「そ、そろそろっ！　ノンナ、尻、離してくれっ！」

「はい、思い切り、クラーラに与えてください」

二人の激しい交合に、ノンナも少なからず興奮しているのだろう。呼吸を早めつつ、ノンナはゴロドクの尻を掴っていた手を離れた。痛みから開放され、再び急速に射精感がこみ上げてくる。

「うおおっ！　出すぞ、出すぞ、クラーラっ！」

「はひっ！　ひっ、ひああっ！」

言葉にならない声がクラーラの口から漏れる。仰向けになっても張りを失わない白く大きな乳房を揉みつつ、ゴロドクはとどめとばかりに亀頭をクラーラの子宮口まで突き入れた。

「う、うあつ！　クラーラ、クラーラあつ！」

「ひいっ！　あ、あひっ！　ひあああっ！」

三回目の射精だというのに、大量の精液が精管を昇ってくるのが分かる。亀頭から迸る精液を受け、クラーラは部屋に響く大きさの嬌声と共に絶頂を迎えた。

「熱っ！ ああっ！ こ、こんな、焼け……ひうつ！」

「あ……ああ……クララー……凄っ……！」

大量の射精を受けつつも、クララーの膣内は一滴残さず搾り取ろうとゴロドクの肉棒を刺激する。ゴロドクはその快感に腰をびくびくと跳ねさせつつも、クララーに精液を注ぎ込んだ。

「ごぼり、とでも表現するしかないような音と共に、結合部から精液と愛液が混ざりあったものが溢れ出した。

「はああ……ゴ、ゴロ、ドク……」

「はあっ、はあっ……」

掘深く整った顔を汗と涙に塗れさせつつ、クララーは言った。まだ返事を言えない状態のゴロドクは、呼吸を落ち着かせようとしつつ彼女を見つめ返す。

「まだこんなものではありませんよ、クララー」

しかし、クララーに顔を寄せつつノンナが言った。

「え……？」

「ゴロドクの本番はこれからです。そうですね？」

ノンナの切れ長の瞳がゴロドクに向けられる。その視線を受けつつ、ゴロドクは多少無理しつつも不敵に微笑んだ。

「……ああ、まだだ！」

「ひうつ！」

クララーの身体が再び悶えた。挿入されたままのゴロドクの肉棒が固さを取り戻したのだ。

平凡な学生であるゴロドクには、性経験が多い訳ではないし、達人級のテクニクを持ち合わせている訳でもない。だが、回数ならば――頑張れば、いける。

クララーの名器を前に、どこまで頑張れるかは分からなかった。しかし、ここまでやったからには、限界まで彼女を感じさせられた。また、同時にゴロドクとしても――次の機会が無いかもしれない、クララーとのセックスをとことんまで感じたいという気持ちもあった。

「そんなっ！ ゴ、ゴロドクッ!?!」

「もつと、もつと、感じさせてやるっ、クララーッ！」

「ま、待って……あひいつ！」

ゴロドクはクララーの身体を抱え上げ、今度は自分の身体を仰向けに横たえさせると彼女の身体を上^に置いた。いわゆる騎乗位の体勢である。

「ふああっ！ ふか、深いっ！」

「ううっ！ お、俺も、気持ちいいっ！ クララーの膣^{なか}、堪ら、ないっ！」

自身の体重で結合が更に深くなったところに、ゴロドクが下から突き上げる。汗に塗れた白い乳房が重そうに揺れ、きめ細かな金髪を頬に貼りつかせてクララーが悶える。

「……ゴロドク」

その様子を見ていたノンナがすつと立ち上がり、自身のショーツを脱ぎ始めた。そちらにゴロドクの視線が向けられると、愛液の糸が彼女の陰毛と下着の間に見えた。既にノンナの秘所は愛液に濡れ、秘唇は物欲しそうにひくひくと蠢いている。

彼女が求めてきている事を察したゴロドクは、首の動きで彼女を導いた。

「ああ……俺の、上に……」

「お願い、します……ふああっ！」

「ノンナ様、素敵……いいっ！」

ゴロドクの顔の上にノンナが跨った。黒い陰毛に彩られたノンナの秘所が眼前に広がる。ゴロドクがそれに舌を伸ばすと、ノンナは背を反らし悶える。同時にクララーへの腰の突き上げを続け、彼女を感じさせる事も忘れない。

「ちゅ、ちゅぶっ……ノンナ、こんな、感じてたんだな……！」

「言わないで、ください……こんなものを見せられたら、誰だっ……ふああっ！」

「ノンナ様、ゴロ、ドクッ！ 私も、私も、また、すぐっ！」

「構いません、クララーっ！ 何回でも、何回でも……っ！」

自身の身体の上で踊る二人の美女の心地よい重みを感じつつ、ゴロ

ドクはノンナの秘所に舌を這わせ、クララーラの膣内に肉棒を突き上げる。

やがて、クララーラの膣内がひくつくような動きに変わった。絶頂が近いようだ。自身の射精をそれに合わせようと、ゴロドクは腰の動きを速めた。

「ひいつ！ ま、またっ、来ますっ！ もつと、すご、凄いのっ！」

「ああ、俺も、俺もイクっ！ クララーラの、ここっ、最高だっ！」

「あ、ありがっ！ ひっ、ひああっ！」

「うっ、うおおっ！」

「ンッ！ んあっ！ ああああっ！」

強烈な締め付けに、ゴロドクはクララーラの膣内に精液を思い切り吐き出した。半開きの口元から舌を覗かせ、涎を溢す程に快楽に溺れるクララーラの顔がノンナの股越しに見えた。

「……その、ゴロドク」

少し腰を浮かせたノンナが、ゴロドクを見下ろす。

「次は私にも……お願いできますか？」

「……ああ、ノンナ」

クララーラの膣内から抜け落ちた精液と愛液塗れの肉棒が、更なる快感を求めてびくりと身を起こした。

——結論から言うと、ゴロドクの狙いはうまく行った。

クララーラは満足し、ノンナとの関係を秘密にする事も約束してくれた。

実際あの日から二週間ほど経過した現在、カチューシャを含めた第三者が何かを知った気配は無い。その辺りはきっちり守られているのだろう。

それはゴロドクにとっても有難い事であった。しかし——

「……もう手出ししないのではなかったのですか、クララーラ？」

「男女の交わりには、知識のみでなく経験も必要と痛感しました。ノンナ様に負けないよう、私も自分をより魅力的にしたいのです」

「それならば、他の男性でも良いでしょう。貴女なら密かに慕う男子生徒も多いでしょうに」

「そこはやはり、ノンナ様がお選びになった男性の方が信用できますので……」

「クララ、貴女はそう言っ……」

「あ、あの……」

「どうしましたか、ゴロドク？」

ノンナとクララ。言い争う二人に向けてゴロドクが言う。視線を向けるノンナ。

「ええと……人のモノを挟んで喧嘩するのは、やめにしないか？」

ゴロドクの自室、ベッドの上で屹立する肉棒を挟んで口論する二人に困惑しつつゴロドクは言った。

二人の視線が互いに向けられる。

「……この話は後にしましょう、クララ……あむっ」

「はい、ノンナ様……れろっ」

「うっ、うっっ！」

そう言うと、ノンナは大きく口を開くとゴロドクの亀頭を呑み込み、クララは竿の根元に舌を伸ばすと袋を揉みつつ舐め上げ始めた。

結果、何かかんだ言いつつもノンナはクララを受け入れ、こうして三人で体を交える日も出てくるようになった。

「(体、鍛えないとな……)で、出る、出るっ！」

「構いません、このまま私の顔におかけください」

「……最初は私からですよ、クララ」

戦車道の修練に鍛えられた二人を同時に相手をして、どこまで枯れずに居られるだろう。

プラウダ高校戦車道でN.O. 2とN.O. 3を務める二人の美女の顔に精液を浴びせつつ、ゴロドクはそんな事を考えた。

幕間

11月のマトリョーシカ

スーパーマーケット「ルクス」プラウダ学園艦店の賑わう店内に、ジングル音と共に聞き慣れた音楽が流れていた。

正面入口には大きなモミの木が据え付けられ、様々な飾りが照明に照らされて煌びやかな光を放っている。

「クリスマスケーキ、ご予約受付中！」

少し前までハロウィーンの宣伝をしていたというのに、気の早いものだ。

買い物カゴの中身をビニール袋に移しつつ、伍堂六郎、通称ゴロドクはスーパーの壁に貼られた広告を見て思った。

数十隻ある学園艦の中でも上位に入る広さを誇り、十数万人が居住するプラウダ学園艦は商業区画の整備も徹底されている。

あくまで学生のための艦のため過激なものこそ無いものの、ファーストフード店やちょっとしたアミューズメント施設にカラオケ店、ボーリング場。買い物にしてもスーパーや家電店、小規模ながら百貨店なども存在している。ロシアとの繋がりが深いプラウダだけに、ロシアの民芸品を扱う店なども多い。

「(クリスマス、か……)」

他の学校の多くがそうであるように、プラウダ高校もクリスマス前には期末試験を経て冬休みに入る。実家に帰る者、そのまま学園艦で年越しを迎える者、様々だ。

今までのゴロドクは、普通に本土の実家に戻ってクリスマスも正月も過ごしてきたが――

卵を丁寧に袋に入れながら、つい先日、交際しているカチューシャから赤面しながら言われた内容を思い出す。

「いつ、いい、ゴロドク!? クリスマスは戦車道メンバーでのクリスマス

ス会があるけど、その後で私に付き合いなさい！ 今から絶つつ対に
予定を開けておくのよ！」

「恋人と過ごすクリスマス」

実際のところ自分には無縁と思っていた言葉だったが、今年はどう
もそうはならないらしい。

とはいえ、何をどうしたものかゴロドクには全く見当がついていな
かった。何より、彼女には申し訳ないが——カチューシャ以上に、ゴ
ロドクには気にかかる存在が居た。

「彼女」は、クリスマスはどう過ごすつもりなのだろうか。

「……ちゃんとカチューシャへの贈り物の用意をしていますか？」

「うわっ！」

突然に後ろから声をかけられ、ゴロドクは思わず声をあげた。

ふと見てみれば、買い物カゴに野菜などを詰めたノンナが後ろに
立っていた。そのままゴロドクの横に入り、手慣れた動きでカゴの中
の物を袋に詰め直してゆく。

「お、驚かささないでくれよ、ノンナ……」

「随分と熱心にクリスマスのポスターを見られていたようでしたの
で」

制服のままと言うことは、どうやら彼女も学校終わりに丁度買い物
に来ていたらしい。カゴをキャリーに戻しながらゴロドクは答えた。

「それで、どうなのですか？」

「いや、まだ11月だし、そんなに急がなくてもいいかなって」

「……」

どうやら、その答えはノンナの望むものではなかったようだった。
眉を僅かにひそめつつ、鋭く言葉をかけてくる。

「随分と呑気なのですね。その様子では、カチューシャへの贈り物も
買っていないのでは？」

「あ、ああ」

「……フウ」

ノンナは呆れたようにため息をついた。

「言っておきますがゴロドク、今の内から準備をしておかないと間に合いませんよ?」

「そんな事はないだろ。まだ一カ月以上先なんだぜ?」

「年末の繁忙期になれば、学園艦への補給艦が来る頻度も下がります。手頃に見える人気のあるプレゼントなどは、もう今月中に売り切れです。民芸品などは手作業で作っていますから、急に増産などもできませんし」

「ま、まあ、それなら残ってるのでカチューシャが喜びそうなものを……」

「残り物をカチューシャに贈るおつもりですか?」

「……」

相変わらず、ノンナはカチューシャが絡む事には容赦がない。彼女の言葉に剣呑な響きが含まれるのを感じ、ゴロドクは早々に言い訳を諦めた。

しかし改めて言われると困ったものだ。女性への贈り物など、母の日に親にカーネーションを贈ったくらいしか無い。カチューシャが喜びそうで、学生の自分に買えそうな範囲のものをゴロドクは咄嗟に考えたが——どうにも思いつかなかった。アクセサリーで着飾るようなタイプではないし、と言って余りに実用的なものを贈ってもクリスマスらしくはないだろう。

その困惑が表情に出ているのだろうか。ノンナは暫くゴロドクの顔を見ていたが、やがて静かに言った。

「……ゴロドク、次の日曜は空いていますか?」

「え?」

「カチューシャの好みは把握しています。私が案内しますので、探しに行きましょう」

有無を言わせないノンナの視線に、ゴロドクは考える前に頷いていた。

ゴロドクが頷いてから三日が過ぎた。

「よっ……ほっ……い！」

学園艦内唯一のアミューズメントセンター「クレムリン」。

通信対戦型の戦車道シミュレーターに腰かけつつ、ゴロドクは自身の戦車を操作していた。

カチューシャを初めとするプラウダ戦車道のメンバーと触れるようになり、ゴロドクも多少なりとも戦車道に興味を持つようになっていた。

今ゴロドクが遊んでいるのは、近年の戦車道復興ブームの中で作られた新機種だ。爆発することなく白旗が上がるのが何とも「らしさ」を感じる。

「これで……っ！」

ゴロドクの操縦するT-34が対戦相手のティーガーを撃破した。試合は最終盤だが、ここまでの戦績は悪くない。5両撃破のトロフィー獲得まであと一両。

ノンナに待ち合わせの場所として指示されたのがこの「クレムリン」だったが、少し早く来過ぎてしまった。今は時間つぶしにゲームをしている格好だ。

「え？ うわっ!？」

突然、側面からの攻撃を受けてT-34の耐久ゲージが削られた。慌てて攻撃のあった方向に視線を向けると、何時の間にか回り込んでいたIS-2がこちらに砲口を向けている。

「(何時の間に!?)」

驚きつつもゴロドクは落ち着こうと努めつつ、砲身をIS-2に向けた。

このゲームにおいてIS-2は攻撃力こそT-34より上に設定されているが、装填速度は遅い。向こうが二発目を撃つ前にT-34の装填が間に合う。

しかし相手もそれを読んでいたようだった。素早く遮蔽物である倒壊した建物の陰に身を隠し、再装填までの時間を稼ごうとする。

ゴロドクはモニター側面の戦況を確認した。敵味方は9割方撃破され、残りはゴロドクのT-34と相手のIS-2のみ。

「(装填される前に……!)」

レバーを動かし、ゴロドクはT-34を前進させた。砲塔を回転させて、IS-2が見え次第に攻撃しようとする。

「……え?」

しかし、その遮蔽物の陰にIS-2はいなかった。更に後退したのかと視界を切り替えるが、その姿は見当たらない。ゴロドクは更に砲塔を回転させた。

「な!」

単なる遮蔽用のオブジェクトと思っていた建物の中に、ちょうど一両の戦車が収まるスペースがあった。そこで待ち構えるIS-2。

「(そこ、隠れられたのかよ!?)」

ゴロドクのT-34の後部にIS-2の砲弾が撃ち込まれた。衝撃音のちに白旗が上がり、「LOSE」の文字と共にリザルトが表示されてゆく。

エースを取り逃した事を少し悔しく思いつつ、ゴロドクは席を立った。同じ筐体が何台か並ぶ中、何となく先ほどのIS-2のプレイヤーがいる席に足を向ける。

「お疲れさ……!?!」

途中まで出かけた劳いの言葉が、驚きで途切れる。

「……あの隠れ場所は熟練者なら常識レベルのポジションです。ゴロドク、あまり慣れていないようですね」

そう言うとノンナは立ち上がり、ゴロドクに視線を向けた。

「あ、ああ、時間つぶしにやってただけだから……それより、ノンナ?」「どうしました?」

「いや、その……」

プレイヤーがノンナだった事への驚きも確かにあったが、ゴロドクが最も驚いたのは彼女の服装だった。

普段、ノンナは厚手のプラウダの制服か、あるいは戦車道の武骨なパンツアージャケットしか着ないし、それ以外の姿をゴロドクも知らなかった。

しかし今の彼女はクリーム色のニットワンピースに黒いタイツ、

シオルダーバッグにショートブーツという出で立ちだった。大きく開いた首回りを温めるためか、襟元には薄手のマフラーが巻かれている。

もともとのデザインがそうなのか、身長170cm超のノンナの長身によるものなのかはゴロドクには分からなかったが、ワンピースの裾は膝上の高い位置で終わっており、そこから黒いタイツに包まれたしなやかな脚がすらりと伸びている。

また、彼女の日本人離れしたプロポーションを隠すには生地が足りていないのか胸の膨らみは大きくニット地を押し上げ、そこからきゅっと締まった腰回りを経て再び肉付きよい尻へと艶やかな曲線を描いている。シンプルながら、自身の身体のラインに相当な自信が無ければ出来ない着こなした。肌を全く露出させていないのに、やけに煽情的な恰好のようにゴロドクには思えた。

着古しのジーンズに長袖シャツ、ダウンジャケットという自分の格好に若干の気おくれを感じつつ、ゴロドクは言った。

「ええっと、随分と〴〵しつかり〴〵した格好だなんて、思つて」

「……これは外出用の普段着です。私も常に制服姿という訳ではありません」

ノンナの言葉にため息が混じっている。呆れているのだろうか、呆れているのかもしれない。

「ま、まあ、今日はよろしく頼む。何処に行くんだ？」

何だか他のギャラリーがノンナに視線を向けているように見え、ゴロドクは彼女を促す。淀みなくノンナは頷くと、バッグをかけ直してスツと歩き出した。

「ゴロドク、ちなみに今日は幾ら用意されていますか？」

「あ、ああ。3000円か、4000円くらいの贈り物で考えてきたんだけど……」

「そのくらいで良いでしょう。カチューシャはああ見えて、自分への好意に対しては謙虚です。あまり高いものでは、逆にプレッシャーを与えてしまいます」

「やっぱり、戦車道に関係するものがないのか？」

「確かにそれも選択肢ではありますが……そういった贈り物は、別にクリスマスでなくても可能です。貴方から贈られる初めてのプレゼントなのですから、思い出になるものでなければカチューシャは不満に思うでしょう」

なかなか難しいものだ。ゴロドクはそう思いつつノンナに聞いた。

「ノンナは何を贈るんだ？」

「私はカチューシャの銅像を贈ろうかと」

「……………」

「冗談ですよ」

本当に冗談だったのだろうか。ゴロドクはそう思ったが口には出さなかった。

少し先をノンナは歩きゴロドクを先導する。その足は百貨店ではなく、表通りからやや離れたところを目指しているようだ。

「百貨店に行かないのか？」

「あそこは高いですし、どこでも買える物が多いですから。民芸品の方から当たってみましょう」

あくまで良い物が見つからなかった時の場所ということか。

次第に周囲の建物は低くなり、小物類やロシアの民芸品などを扱う小売店が並ぶ通りへと二人は出た。華やかな色のステンドグラスが飾られたガラス細工店、ロシア語で値札が書かれた紅茶の量り売り店、民族衣装を着た大小の人形が並ぶ手作りの人形店などが、大通りの派手さとはまた違う落ち着きある風情を作り上げている。

「学園艦にも、こんな所があったんだな……」

「住民の1割から2割がロシア人とも言われていますし、当然コミュニケーションが存在しています……ああ」

きよろきよろと周辺を眺めるゴロドクにノンナは説明しようとし、途中で何かを思い出したように言葉を止めた。

「ゴロドク、ちよつと紅茶屋に寄っていいですか？」

「あ、ああ。どうしたんだ？」

「カチューシャの午後用のお茶が切れかけていたのを思い出しまし

て」

そう言うとノンナは紅茶屋の木製のドアを開けた。ゴロドクの鼻孔に茶葉の澄んだ香りが届く。

店内に入ると、カウンターの拭いていたぱりつとしたエプロンを着けた老人が顔を上げ、柔らかい表情でノンナに声をかけた。

「Драгавствууйте, обычный?」

「Да, дь добр」

本場のロシア語に対し、ノンナは微笑みつつ流暢に返した。

彼女はこの店の常連なのだろう。短い会話で、老人は迷う風もなく棚の紅茶を袋に詰めてゆく。

ふと老人はゴロドクの方を見て、ノンナにこやかに言った。

「Парень?」

「……Отличаться」

ノンナは少しだけゴロドクの方を見た後、表情を少しだけ固くして答える。やがて計量が済み、手提げ袋に入った紅茶が手渡された。どうやら領収書を切ってもらっているようだ。どういう経費かは分からないが、紅茶代も戦車道の費用に含まれるのだろうか。

「お待たせしました。ゴロドク」

「大丈夫。それじゃ、ちよつと回ってみるか」

手始めに近くのガラス細工店に入ってみる。透明感のある、手の込んだ細工が並んでいる。

「あ、これとか良いんじゃない?!?」

何気なく近くに飾られていた雪ウサギの親子の細工に目を留めたゴロドクは、値札を確認すると目を見開いた。手持ちの所持金よりゼ口がひとつ多い。

「それは家の玄関などに飾られるクラスの物です。カチューシャに贈るには、少し仰々しいかと」

一応の幾つかの候補を見定めて、次の店へ。今度はぬいぐるみ等を扱っている店だ。猿のような、それでいて微妙に違うような丸い目の動物のぬいぐるみを手にとってみる。

「ノンナ、これは?」

「チエブラーシカです。ロシアの子供向けアニメの人気のキャラクターですね」

「……こういうのって、カチューシャにはどうなんだろう？」

「大事にはしてくるでしょうが……子供扱いされるのを、カチューシャは嫌いますから」

「うーん……」

また次の店へ。今度はアクセサリー店。

複雑な意匠が凝らされた小物入れが並んでいる。触ってみると、布とは違う感触。

「ベレスタ……白樺の皮で作られた小物入れですね」

「綺麗だな……」

「あまりカチューシャはこういった物は持ち歩きませんが……候補にはして良いかもしれませんがね」

ノンナの助言に頷きつつ、ゴロドクは店を出た。幾つかの候補は固まってきた。あとはどれにするか考えねば。

「(それにしても……)」

ふと、ゴロドクは今の状況を振り返った。

普段着のノンナと二人で、日曜の休みにこうやってロシアの民芸品の店を回る。カチューシャへの贈り物選びという目的があるとはいえ、何だかデートみたいだ。

「……ん？」

——いや、既にこれはデートなのでは？

ゴロドクは横を歩くノンナに視線を向けた。その視線に気づき、ノンナが何時もの感情を見せない顔を向ける。

「……どうしました、ゴロドク？」

「い、いや、何でもない」

彼女の方はどう捉えているのだろう。聞いてはみたかったが、少し気が引けた。

意識しているのが自分だけで、ノンナは単純にカチューシャを喜ばせたいだけという可能性の高いのだ。勝手に舞い上がっては、只の馬鹿だろう。

誤魔化すようにゴロドクは周囲をきよろきよろと見回すと、ある店が目に留まった。様々なサイズの、ずんぐりした人形が並んでいる。

「ノンナ、あれは？」

「マトリョーシカです。知りませんか？」

「写真で見た程度なら……」

店に寄り、ひとつを手にとってみた。真ん中からばかりと開くようになっており、入れ子構造で複数の人形が入っているようだ。多くは民族衣装を着た少女のデザインだが、キャラクターものや野球選手が描かれたもの、芸能人が描かれたものなど様々なバリエーションのものが並んでいる。

「あれ？」

その中のひとつが、ゴロドクの興味を惹いた。金髪の少女が描かれているが、着ているのは民族衣装でなくプラウダの制服だ。

横のノンナも珍しいのか、小首を傾げている。

「これは……私も初めて見ますね」

「どうだいお兄さん、安くしておくよ」

店主と思われるロシア人の中年女性が日本語で話しかけてきた。

「面白いデザインですね、これ」

「ああ、それかい？ この辺によく遊びにくる子供がいてね。その子をイメージした手作り品さ」

「へえ……」

しげしげとそのマトリョーシカを眺める。丸い人形の形に合わせているため若干顔が扁平になっているが、吊り目がちな感じがどこことなくカチューシャを連想させた。

ゴロドクはその人形の値段を見た。十分に手の届く価格だ。

ノンナに視線を向けると、彼女は頷き返した。

「あの、じゃあこれ下さい」

「ありがとうございます。娘さんへの贈り物かい？」

「え!？」

予想外の話題の振られ方に、ゴロドクは驚いた。自分がどうかは分からないが、確かに今のニットワンピース姿のノンナはとても高校生

には見えない。店主からは若夫婦にでも見えたのだろうか。

咄嗟にノンナの反応を伺う。今の言葉で怒ったりはしていないか。

「……はい、そんなところですよ」

「え、ええ!？」

ノンナは少し微笑むと、恥ずかしがる風でもなく店主の女性に答えた。更に驚くゴロドクだが、その反応を「照れ」だと判断したのでろう。店主は察したと言うように頷くと、棚の包装材料を手にした。

「そうかい。それじゃ綺麗に包まないかねえ。カードは付けるかい?」

「はい。『カチューシャへ』をお願いします」

そこまでノンナは言うゴロドクに視線で促した。まだ代金を払っていない事を思い出し、財布から数枚の札を出してカウンターに置く。小銭を受け取る間にも、店主は慣れた手つきでリボンと赤い包装紙でカチューシャ似のマトリョーシカを包み始めた。

待っている間、ゴロドクはノンナに近づくと小声で言った。

「『娘』って……」

「別に間違っはしません。私にとってカチューシャは敬愛する隊長であると同時に、家族のように愛おしい存在です」

はつきりとノンナは答えた。

「……そっか」

どうやら、自分がゴロドクの嫁扱いされた事についてはどうでもいらしい。

若干の残念さを感じつつ、包まれた商品を受け取る。ビニールにも入れて湿気を避けて保管しておけば、クリスマスまで十分持つだろう。

とりあえずこれで目的は達成できた。ゴロドクは外に足を向けつつ、ノンナに言った。

「助かったよ。ノンナ、お礼がてらどこかで飯でも……」

「お邪魔するわよ! 何か新しい人形は入ったかしら!？」

突然、けたたましい声と共に小柄な人影が飛び込んできた。

「……!」

後ろにいたノンナが表情を凍らせた。

「カ、カチューシャ!？」

短く切り揃えた金髪と吊り目がちな瞳、SSサイズのプラウダの制服でさえ少しだぶつく小柄な体。

間違えようのないカチューシャとの突然の遭遇にゴロドクは驚きの声をあげた。それによって、カチューシャの側も店内にいたのがゴロドクである事に気付いたようだ。

「あれ、ゴロドク?」

「カチューシャ、何でここに!？」

「何でも何も……ここは私の行きつけの店よ? 知らなかったのに目をつけるなんて、ゴロドクもなかなかセンスがあるわね」

「そ、そりゃ、どうも……」

「でもゴロドク……貴方、自分用の人形を買ったりするの?」

まずい、違和感に気付かれた。

表面上だけでも何とか平静に保とうと努力しつつ、ゴロドクは二つの意味で焦っていた。

ひとつは、カチューシャへの贈り物を選んでいた事を悟られないかどうか。

もうひとつは、カチューシャ抜きでノンナと一緒に居たのを初めて見られた事について。

とはいえ、二つ目についてはさほどの焦りは無かった。自分とノンナが仲良くなる事は、カチューシャとしても望んでいた事だ。デートと思っていたのは自分だけなのだし、ノンナが説明してくれば――

「……え?」

「ノ、ノンナ?」

ゴロドクの口から戸惑いの声が漏れる。彼女に気付いたカチューシャが後ろに視線を向ける。

ノンナの顔から血の気が引いていた。『蒼白』と言ってよいような青白い顔で、カチューシャに視線を向けている。

「ちよ、ちよっと待ちなさい! どういう事なの、ノンナ?」
「……………」

カチューシャの表情が曇った。詰問の響きが言葉に混じる。

「今日は貴女、クララと一緒に出掛ける用事があるって言ってたわよね？」

「……………」

「それに…………その格好は、何？」

ノンナに向けられるカチューシャの視線は、彼女の姿や様子への戸惑いと違和感に満ちていた。

「初めて見るわ、その格好…………ノンナ、答えなさい。ゴロドクと一緒に居るだけならともかく、何でそんな余所行きの格好で着飾って彼と会っているの？」

「カチューシャ、私は……………」

絞り出すようにノンナは何かを言おうとした。一方のカチューシャの表情には、抑えがたい動揺と不安が浮かんでいる。

カチューシャの中に芽生えかけているのだ。家族のように信頼していた副官が自分の彼氏を奪おうとしているのではないかという、彼女自身も受け入れたくない考えが。

一方のゴロドクも驚きを感じていた。彼女の「外出用の普段着」というのは嘘だったのか？ 何故そんな嘘を？

だが、その真偽を確かめるのは後にした方が良さそうだ。このままノンナが硬直したままでは、どうしようもない破局が起きる。

ゴロドクは必死にこの状況を切り抜ける手段を模索した。どうすればいい、どうすれば——

「(ええい…………駄目でもともとか!) カチューシャ、あの……………」

ゴロドクはカチューシャに言葉をかけようとしながら、出来るだけうっかり落としたように見えるようにしつつ手にしたプレゼントの包みを落下させた。リボンが結ばれた赤い包みが床に転がる。

ノンナに向けられていたカチューシャの視線が、プレゼントに向けられた。

「へ?…」

リボンに挟まる「カチューシャへ」と書かれたメッセージカードに、彼女は気付いたようだった。

「……………」

ゴロドクは息を呑んだ。今、自分に出来る事はここまで。後はカチューシャの理解力次第。

「これは……………」

カチューシャは数秒間プレゼントを見詰めると、

「…………なるほどね」

愉快そうに笑い、プレゼントを拾うとノンナに手渡した。

「全て察した」そんな笑みを浮かべつつ、カチューシャはノンナに言った。

『私は何も見ていないわ。私への贈り物を見てもいなければ、それをこっそり買いに来た二人を見てもいない』

「カチューシャ……………」

「でも、変装にしてはちよつと過激だったんじゃないかしら？ ノンナは綺麗なんだから、そんなんじゃないゴロドクが勘違いするわよ？」

「は…………はい、カチューシャ、気をつけます」

まだ緊張が解けていないまま、ノンナは辛うじて答えた。

カチューシャは今度はゴロドクに言った。

「ゴロドクもよ。ノンナは怒ると怖いんだから！ 変な事をして、粛清されないようにしなさいな！」

「あ、ああ。勿論」

少し言葉に詰まりつつも、ゴロドクは頷いた。

その両者の反応に満足したのだろう。カチューシャは腕を組むと胸を張り、入って来たばかりの店を出てゆく。

「二人とも、このカチューシャに隠し事ができると思わない事ね…………楽しみにしてるわよ！」

そう言い残し、カチューシャは去っていった。小さな足音が遠ざかってゆく。

「……………」

「……………」

ゴロドクとノンナは無言で視線を交わし、

「あの子だよ、イメージになったっていう子供。あんた達の娘さん

だったんだねえ」

店主の言葉が合図になったように大きく息をつき、店を出た。既に遠くまで行ってしまったのだろう。通りにカチューシャの姿は見えない。

ゴロドクはまだ肩で息をするノンナに声をかけた。

「悪い。プレゼントの事、隠せなかった」

「いいえ……あれが、あの場での最良の判断だったと思います」

カチューシャを騙す事への罪悪感があった。

「二人が隠していたのは、カチューシャへのプレゼントを選んでいしたこと」と彼女に思わせ、自分とノンナの関係を隠す。とりあえずは上手くいってくれたようだ。

しかし、ゴロドクにはもう一つノンナに聞きたい事があった。『それ』が無ければ、カチューシャが猜疑心に捕らわれる事も無かったはずだ。

「なあ……それ、普段着じゃなかったのか？」

「……………」

ゴロドクはノンナのニットワンピースに視線を向けた。胸元が呼吸に合わせて大きく上下し、布地の上からでも彼女の豊かな乳房が想像できてしまう。

ノンナは僅かの沈黙の後、視線を逸らしつつ言った。

「……はい。これを着たのは、今日が初めてです」

「何でそんな嘘を……………」

当然ともいえるゴロドクの質問に、ノンナはゆっくりと答える。

「その、三日前にゴロドクを誘った時点では何も感じていなかったのですが……意識してしまいました」

「意識？」

「ですから、その……………」

ノンナの声が小さくなる。

「……………これは、デートに該当するのではないかと」

「!？」

「そう思うと、いつもの制服姿で会うのが……………急に、恥ずかしくなっ

しまつて……」

努めて無表情を装うとしているが、ノンナの頬に僅かな赤みが差す。それ以上は言えなくなったのか、ノンナは俯きつつゴロドクに視線を向けた。

そうやって身支度をして来たのに、何故ゴロドクには「普段着」と言い張ったのか。その理由がゴロドクには分かる気がした。

ノンナは強い意志を持つ女性だ。おそらくその嘘は——彼女にとつての、小さな意地っ張りだったのだろう。

そんなノンナの様子を、ゴロドクは素直に可愛いと思った。

「……まずいな」

体の奥から熱いものが湧き上がってくる。ゴロドクは内心で呟いた。

つい先ほどカチューシャとのやり取りで危ない所だったというのに——したくなってきた。

いや、今さっきの動揺や不安があるからこそ、なのかもしれない。

「……なあ、ノンナ。疲れたんじゃないか？」

「ええ……少し、疲れました」

「俺の部屋で、ちよつと休むか」

「……そうですね」

おそらくは、意味は伝わっている。

「じゃ、行くか。ノンナは何か買っていないのか？」

「私はまた、日を改めて買いに来させていただきます」

ゴロドクの提案にノンナは頷き、並んで歩き始めた。

11月ともなると日の入りも早い。まだ時刻的にはさほど遅くないというのに、既に西日が差し始めている。

「それにしても、びっくりしたな。カチューシャとあそこで会うなんて」

「ええ。私も予想外でした。あの通りに遊びに行く事は知っていましたが、ここまでの鉢合わせになるのは……」

何気ない会話。

先程よりも、互いの動悸が高まっているのが分かる。

何とか気を逸らそうとしているが、それでも股間に血液が集まってゆくの分かる。

「カチューシャは、逆にノンナに何かあげたりしてこないのか？」

「クリスマス会では、カチューシャ手作りの料理が振る舞われます。一年のメンバーの努力を労い、隊長が皆を祝うんです」

「そっか……」

通りを抜け、住宅街へ。ゴロドクのマンションが近くなる。

「……寒くなってきたな」

「……そうですね」

会話が途切がちになる。無言でエントランスを抜け、エレベーターへ乗り込む。

「……」

「……」

視線を交わさないまま、無言で二人はエレベーターが止まるのを待つ。

ノンナが自身の襟元に手を伸ばし、マフラーを解いた。ワンピースの大きく開いた胸元が露になり、双丘が形づくる深い谷間が覗く。

「……」

「……」

エレベーターが止まった。部屋へ向かう足が、無意識に早足になっているようだ。

鍵を持つゴロドクが先行し、ドアを開けた。

「そんじゃ、どうぞ」

「お邪魔します」

軽い挨拶と共にゴロドクが部屋に入り、ノンナがそれに続く。

「……っ！」

「はあっ……ンッ！」

ドアが閉まり切るのを待たず、ゴロドクはノンナを抱きしめると唇を押し当てた。それを待ちわびていたかのようにノンナも自身からゴロドクに身体を押し付け、舌を絡めてくる。

「んっ……ふぁ……ノンナ……ノンナっ……！」

「ゴロ、ドク……ふあ、ンツ、あはあっ！」

蛇の交尾のように互いの舌を絡ませあい、吸い、舐め、唾液を交換する。

ゴロドクはワンピース越しに存在を強調するノンナの豊満な乳房を服の上から強く揉んだ。ノンナの吐息が熱さを増してゆく。一方ノンナもゴロドクの股間をジーンズの上から撫でさすり、その存在を確かめるように愛おしそうに腰を擦り付ける。

「ああ……ノ、ノンナ、シャワーは、浴びるか……?」

「構いません、このまま、早く、下さい……!」

ゴロドクの言葉に、ノンナは潤んだ瞳で答える。彼女も体の疼きを抑え切れないのだろう。

自身の心の中の不安や罪悪感を快楽で押し流すためのセックス。実に後ろ向きで、逃避的な行為だ。それはゴロドクも分かる。

しかし、逃避的で退廃的であるが故に湧き上がる欲情は激しく、ゴロドクの理性を押し流してゆく。

「いいのか? ドア薄いから、声が漏れちゃうかもしれないぞ?」

すぐにでもズボンを下ろして彼女の秘所に肉棒を突き入れたいのを懸命に抑え込みつつ、ゴロドクはノンナの髪をかき上げ耳元に囁いた。

「お、お願い、します……!」

肌を火照らせ、首筋に汗を浮かべつつノンナは言うのと、ドアに手をつけてゴロドクに背を向けた。

そのまま自分の手でワンピースの裾をずり上げ、黒いタイツと白いショーツに包まれたむっちりとした尻をゴロドクに晒す。

「意地悪をしないでください……欲しいんです、ゴロドクのを、奥に……せ、全部、注いで、下さい……っ!」

そう言つて、ノンナは涙を浮かべつつ尻をゆるやかに振った。黒いタイツの鼠径部付近は既に染みができており、むわつとした熱気が漂ってくる。

先ほどまで落ち着いた雰囲気崩すことなく振る舞っていた彼女が、自分の肉棒を求めるためだけに腰を振って誘う。

ごくり、とゴロドクの喉が鳴った。ジーンズの中で苦しそうに張り詰める肉棒が更に固さを増し、窮屈そうに暴れている。

「ああ……やってやる……ノンナ……っ！」

「ンッ！」

タイトの隙間から手を差し入れ、汗ばむ尻の谷間を経て秘所に触れる。ノンナの背が大きく跳ね、一際大きな喘ぎを漏らす。

指先にとろりとした愛液の感触。既に十分に濡れているようだ。

「もうこんな……これ、部屋に入ってからじゃないよな？」

「ああ……は、はい……カチューシャが、帰られてから、急に疼いて、きてえっ！」

指を膣内に差し込まれ、ノンナは長い黒髪を振り乱しながら悶えた。片手でノンナの秘所を刺激しつつ、ゴロドクは空いた手でジーンズのベルトを外し、パンツと一緒にずり下げる。竿に血管を浮かべはち切れそうな程に勃起した肉棒が外気に触れた。背中越しにノンナが肉棒に視線を送る。

「ゴロドクも、もう、そんなに固く……」

「ああ、俺も早く、したい……っ！」

衝動のままにノンナのタイトに両手を添え、ショーツごと捲る。豊かな尻肉の間から陰毛に彩られた女陰が覗き、愛液が淫猥な光沢を放っている。

臍に貼りつきそうな程に反り返った肉棒に手を添え、ゴロドクは腰を突き出した状態のノンナに覆い被さった。亀頭を膣孔に定めると、そのまま一気に奥まで突き入れる。

「あっ、ああんっ！」

「うあっ！ ノ、ノンナッ、熱っ！」

まるで熱した蜜の中に肉棒を突き込んだかのような熱さと潤みに、ゴロドクの腰が震えた。待ち焦がれていた肉棒を迎え、ノンナの膣は全体でゴロドクの肉棒を締め付けてくる。既に何度もノンナとは身体を重ねているが、今回はいつも以上に膣内が仕上がっている。ゴロドクは歯を噛み締めると、射精感に堪えつつ腰を動かし始めた。

「あっ、あひっ！ いつもよりっ！ あっ、熱いです、ゴロドクっ、のっ

！ はあんっ！」

「ノ、ノンナのも、堪らない……う、うおおっ！」

「ンツンツンツンッ！ お願ひ、しますっ！ もっと、もっとおおっ！ あはあっ！」

ぐちゅぐちゅと結合部からの水音と、ぱんぱんと肉と打ちつけ合う音が玄関口に響く。

ゆさゆさと重そうに揺れる乳房に、ワンピースを腰上まで捲り上げつつゴロドクは直接手を伸ばした。ブラをずり下げて揉みしだくと、拘束から開放されたノンナの乳房のずっしりとした重みが掌に伝わってくる。

大きく腰を引き、一気に突き入れるとノンナの中は激しく締め付け、逃がさないように竿の根元から上に向けて撫で上げるように襞で刺激してくる。それは堪らない快感をゴロドクに伝える。

「ああっ、やってやるっ！ 何回でも、何回でもっ！」

「ふああっ！ あっ、ありがっ、とうっ、ごごい、ますっ！」

「うおおっ！ ノンナっ、ノンナあっ！」

更にスパートをかけてゆく。愛液の飛沫が飛び、ノンナの喘ぎが更に大きくなる。本当に外に聞こえているかもしれない。

だが、そんな事が既に気にならない程にゴロドクも興奮していた。次第に射精感が強まり、それは堪えられない程になってゆく。

「イクぞ、イクぞ、ノンナっ！」

「はひっ！ ゴロドクッ！ ゴロドクっ！」

ノンナの名を呼びつつ、ゴロドクはとどめとばかりに深く突き込んだ。

「ぐっ、うっ、うあああっ！」

「ゴ、ゴロドクっ！ アッ、あああっ！」

激しい射精感と共に、精液がノンナの子宮に迸った。どくどくと吐き出される精液は暫くの間止まらず、溢れた精液がぼたぼたと結合部から零れ落ちる。

「あ、ああ……」

「しっ、搾ってくる、ノンナの……！」

ノンナの恍惚とした吐息。ゴロドクは更に数回の震えと共に精液を出し終えると、大きく息をついた。

「……んっ」

「ううっ!？」

ノンナは、一旦肉棒を引き抜こうとするゴロドクの腰の動きに合わせて尻を突き出すと、膣内に迎え入れたままの肉棒を締め付けた。射精したばかりというのに、たちまち肉棒に再び血液が集まってゆく。

「ノ、ノンナ!？」

「まだ……足りないんです。ゴロドク、お願いします。このまま……っ!」

喘ぎつつ、ノンナは早くも腰を振り始めた。どうやら、先ほどの一件で彼女の中に生まれた動揺や不安は一度の交合では埋まらないようだ。

その姿は淫らで、煽情的で、それでいて同時に美しかった。

「……ノンナッ!」

「ふひっ! ゴロドクっ! いいっ、いいっ!」

彼女の動きに応えるようにゴロドクが動くと、獣めいた喘ぎと共にノンナは再び快感を貪り始める。

床に転がるプレゼントの包み紙に、愛液の飛沫がかかった。

迷い惑うはスネグーラチカ 第一話

凍り付きそうな程に冷えた潮風が吹く海上に、島と思う程に巨大なプラウダ学園艦が停泊している。そこに接舷する輸送船が一隻。

巨大艦船であると同時にひとつの学園都市でもある学園艦には様々な船が来る。寄港を待たずに人を行き来させるための連絡船、艦上の店舗に商品を運ぶ物資船などだ。

そして今接舷しているのは、手紙や送り物などを受け渡しするための郵送船である。プラウダ学園艦の艦上もひとつの住所として登録されており、「プラウダ学園艦上〇〇」などと送り先に書かれた郵送物が大量に運び込まれる。通信技術の発達により最盛期に比べてその量は減少傾向にあると言うが、それでも手紙などでなければ伝えられない事柄もある。

例えばその郵送艦から降ろされ、プラウダ戦車道隊長・カチューシャの仮住まいに届けられた一通の封書などがそれであった。表面には印刷されたロシア語が書かれている。

「……………」

カチューシャは息を呑み、その封筒を開けた。中には数枚の書類。まず一枚目を広げる。

そこには最初に、大きくこう書かれていた。

“Переходя”

「……………」

大きく息をつき、カチューシャは表情をほころばせた。

「流石、私ね」

自信に満ちた言葉。しかし、その表情はすぐに曇った。彼女には似つかわしくない深い迷いがその顔には刻まれている。

しばらくそうしていた後、カチューシャは椅子に腰かけ書類に一通

り目を通すと傍らに置かれた電話機の受話器を上げた。数度の発信音の後、応答の声。

「——ノンナ、ちよつといいかしら？」

「……毎年の事ながら、どうも慣れないな」

通りがかった一般宅の前に並んで立てられたヨールカ（クリスマスにロシアで飾られるツリー）と門松が並んでいるのを横目に見つつ、伍堂六郎、通称ゴロドクは呟いた。固まった雪の隙間を縫うようにして雪かきされた、歩道の細い箇所を歩く。

よく見ればヨールカと門松が並び立っているのはその家だけではない。そこかしこの家に同様にヨールカと門松が並んでいる。既に今日は12/27、ツリーの片づけ忘れではない。

日本ではクリスマスといえば12/25というのが一般的だが、ロシアでクリスマスといえば1/7である。これはキリストの生誕日が欧米のカトリックではグレゴリオ暦が使われて12/25になっているのに対し、ロシア正教ではユリウス暦が使われ1/7になっている事に依る。ロシア色が強く、実際にロシア人の住人率が高いプラウダでは同様に1/7にクリスマスを祝うのが一般的だ。そこに日本人の新年の慶賀が噛み合うと、このように事情を知らぬ者には何ともシュールに見える光景になる。流石に三年目ともなり慣れてきたが、プラウダ艦上で初めて年末を迎えた時はゴロドクも驚かさされたものだ。

年越し蕎麦と餅が入ったスーパーの袋を片手に、ゴロドクはそんな事を考えつつ自宅のマンションに戻っていた。エントランス前に、見慣れた少女がひとり立っている。

「あれ？」

「Привет, там, Голдок」

そう言ってクララはゴロドクに手を振った。厚手の黒のコートに紺のスカートに若草色のブラウスというシンプルな着こなしだが、クララの透き通るような白い肌ときめ細かな金髪と相まって周囲の雪景色に映えている。

「クララー、どうしたんだ？」

「はい。年末から年明けにかけて故郷に戻りますので、そのご挨拶に伺おうかと」

「それで待ってたのか？ 携帯の一本でもくれれば急いだのに……」

「そう遠くには行かれていないと思いましたが」

涼しい顔でクララーは言う。

「そっか。時間大丈夫なら、少し上がっていくか？」

「ありがとうございます。ゴロドク」

ゴロドクの言葉にクララーは微笑んで答えた。エントランスのロックを解除し、エレベーターを使ってゴロドクの部屋まで向かう。

「悪い、ちよつと散らかってるけど」

「いえ、お気になさらず」

玄関前でコート脱ぎ、丁寧に靴を揃えるとクララーは中に上がった。その動作からは正しく日本のマナーを習ったであろう事が伺える。

室内は整然と整頓されていた。床に積まれた本や脱ぎ散らかされた衣類などもなく、ベッドも布団が丁寧に畳まれている。

「……………」

「ちよつと待っていてくれ。お茶淹れるから……あ、コーヒーや紅茶のがいいか？」

「あるようでしたら、コーヒーですと助かります」

クララーはそれらを興味深そうに眺めつつ、リビングの卓袱台に腰を落とした。

窓の外では一旦降りやんでいた雪がまたちらつき始めていた。ロシアでは年末年始は家族と過ごすのが一般的だ。そのため、この時期のプラウダ学園艦は日本海周辺の港に連続して寄港し帰郷する生徒たちを降ろして回る。必然的に雪と遭遇する頻度も大幅に上がる訳だ。

窓の外の雪をクララーが眺めている内に、マグカップ二つを手にとりゴロドクが戻ってきた。クララーの前にカップを置き、自身も腰を下ろす。

「いただきます」

「そんな大したモンじゃないよ。インスタントだ」

言いつつ、ゴロドクは自分のコーヒーを飲んだ。それを確認してからクララーも自身のカップを取りひと口飲む。

「……で、もう今日中に帰るのか？」

「いえ、明日ウラジオストクに学園艦が寄港するので、その際に降りる予定です。戻りについては、父は『クリスマスまで残れ』と言っているのですが、そうになると冬休み終わり直前に連絡船で戻る事になるので……どうしたものかと」

クララーは苦笑しつつ言った。

「お父さん……って確か、向こうの情報機関で働いているんだっけ？」
「はい、諜報員としては腕利きらしいのですが、まだ私を子供だと思っ
ているようです」

「それはそれで羨ましいけどな。ウチとかは『元気でやってりやそれでいい』って感じだから」

「ふふ、それでもゴロドクの事を大事に思われていると思いますよ？」
「そんなもんかな……？」

ゴロドクはもう一口コーヒーを飲んだ。暖房が効くまでもう
ちよつとかかる。冷えた身体に熱いコーヒーが染みわたるようだ。

「……それにしても、ゴロドク」

ふと、クララーは室内を見回して言った。
「ん？」

「冬休みに入ってから、ずっとノンナ様とされているのですか？」
「ッ!?! ゴホッ、ゴホッ!?!」

突然の言葉にゴロドクはコーヒーを吹き出しそうになった。ク
ラーラの顔にかかるので何とかそれは堪えたが、今度は気管に入って
思い切り咽る。

「ゲホッ、ゴホッ! な、何だって!?!」

「いえ、ですからノンナ様と……」

「いや、聞こえなかったんじゃないやなくて! 何言ってるんだよ!?!」

抗議するゴロドクに、クララーは逆に不思議そうに小首を傾げた。

「……違いますか？」

「え？ あ、ああ。そりや『全く無い』とは言わないけど……」

「とりあえず、ここ三日ほどは休まずさっていると」

「だ、だから違うって！ 何でそう思うんだよ!？」

ゴロドクからすれば当然の疑問だったのだが、クラーラは答えた。

「何故と言われましても……ここまでノンナ様の匂いが残っているのは、つい今朝方まで激しくされていたと言っているようなものです」
「な……!？」

ゴロドクは咄嗟に部屋を見回した。かなり消臭剤を吹き付けたのだが、それでもクラーラの嗅覚を誤魔化すには至らなかったようだ。「それにゴロドク、外にベッドのシーツが干されているようですが……二枚も干すほど、貴方は独りで頻繁にシーツを汚されているのですか？」

「あ」

「あと補足するならば、男性の気遣いとしては至極当然かとは思いますが……スキンは黒い袋に入れてお持ち帰りされた方が良いかと」
「うっ……!？」

ぐうの音も出せなくなり、ゴロドクはがっくりと頭を下げた。降参の合図だ。

「ゴロドク、頭を上げてください。別に貴方を責めようとか言っているわけではありません。お二人の関係が良好なのは、私としても喜ばしい事です」

「喜ばしい事、ねえ……」

複雑な表情でゴロドクは顔を上げた。

ゴロドクがカチューシャから告白された事を契機に始まったノンナとの関係は、既に数ヶ月続いていた。それを知ったクラーラが途中から関係に加わってからも二カ月ちよつとになる。

「セックスには体の相性が重要」などと書かれた男性向け雑誌の胡散臭い特集記事などが真実だとするならば、自分とノンナの体の相性は（またクラーラについても）良かったと言えるのだろう。体を重ねる度に互いの快感を引き出せるようになってゆき、互いを求めるよう

になってゆく。少し前にカチューシャに關係を気付かれかけた後にこの部屋の玄関でノンナと交わった時などは特に激しく、外に声が漏れる事も気にせず玄関で、リビングで、ベッドで、浴室でと翌日腰が立たなくなるくらい激しく交わった。

だが——この關係が、間違つても健全なものでない事も自覚していた。それは時折、見えない棘のようにゴロドクの心に刺さった。

そんなゴロドクの内心を知ってか知らずか、クララーはいつもの調子で言葉を続けた。

「はい。交わっているお二人の姿は非常に美しいと思います。特にノンナ様は、日頃の凜とした姿勢からはとても思えない乱れた様を見せて下さりますので」

「……それは、どうも」

どう答えて良いのか分からなくなり、ゴロドクはとりあえず答え

た。「つきましては、私が今日こちらに伺ったのもそれに関する事でした。にこやかな表情のまま、クララーはゴロドクに身を近づけてきた。

「そ、『それに関する』って？」

「10日ほど学園艦を離れますので……ゴロドク、貴方に一度抱かれておこうかと」

卓袱台を回り込むように、クララーはゴロドクに身を寄せた。香水だろうか、心地よい香りがゴロドクの鼻孔をくすぐり、クララーの身体の温もりが伝わってくる。

「いつも思うんだけど……クララーって、思い切りがいいよな」

「人を尻軽みたいに言わないでください。ノンナ様がそうであるように、私は貴方だからこそ身体を許しているんですよ？」

「それは、どうも……んっ」

「ンンッ……」

確かに、男としては光栄に思うべきところだ。ゴロドクは返事をしつつクララーに唇を寄せた。最初は軽いキス、次第に舌を絡め、互いの吐息を交換する。

「ふあ……ンッ！」

ブラウスの上からクララーラの胸に触れる。流石にノンナには及ばないものの、十分な大きさと張りを併せ持つ乳房の感触がゴロドクの掌に伝わってくる。ゴロドクはキスを繰り返しつつ彼女のブラウスのボタンを外した。黒のブラが露になり、クララーラの白い肌をより引き立たせている。

次第に熱さを増すクララーラの肌を撫でつつ、ゴロドクは囁いた。

「もう、熱くなってる……」

「ンンツ……ゴ、ゴロドク、それを言うなら貴方だつて……」

「くっ……まあな」

クララーラの細い指がゴロドクのジーンズのジッパーを下ろし、そのまま中に侵入してくる。半勃起状態の肉棒にクララーラの指が触れ、急激に血液が集まってゆくの分かる。厚手の生地の中で窮屈そうに興奮を主張する肉棒を、クララーラは優しく撫でるとジーンズの留め具を外した。

「はあっ……ど、どうする？ このまま、するか？」

「そう、ですね……良ければ、ベッドで続きは」

「……分かった。シャワーは浴びるか？」

「家で浴びてきましたので、このままで……」

よくよく彼女は準備がいい。ゴロドクは一旦クララーラから身を離すと、手早くシャツを脱いだ。クララーラも立ち上がり、スカートとホックを外すと床に落とし、そのまま流れるようにブラウス、下着と脱いでゆく。

日頃の戦車道の修練で磨かれたものであろう引き締まった肢体には一切の弛みはなく、それでいて豊かな乳房と張りのある腰回りはしっかりと張り出し、全体として美しい曲線を作り上げている。金色の薄い陰毛に彩られた桃色の秘所が僅かに除き、ゴロドクの視線を引き寄せさせる。

「ゴロドク、先に横になって頂いてもいいですか？」

「え？」

「ちよつと試したい事がありました」

そう言うときクララーラは悪戯っぽく笑い、ゴロドクを促した。つい

二カ月ほど前まで処女だった彼女だが、性に対しては非常に研究熱心だ。ゴロドクは言われるままにベッドに横になった。勃起して固くなった肉棒は腹に貼りつきそうな程に反り返っている。クララーはゴロドクの足元からベッドの上になると、足をゴロドクの顔の方に向けつつ横になり、愛おしそうに肉棒に触れた。

「うっ……！」

「ゴロドクは今日は何もしないでください……私が、全てして差し上げますから……」

「あ、ああ……分かった。頼む……ううっ！」

甘い声でクララーは言うど、肉棒を優しく扱き始めた。白い指が赤黒い肉棒に絡みつき上下する様はそれだけで煽情的だ。どうやら今日のクララーは、主導権を握って進めてみたいらしい。

右手でゴロドクの肉棒を刺激しつつ、クララーは左手を自身の股へ伸ばす。ゴロドクの眼前で張りのある尻がくねり、桃色の陰唇をくちくちと捏ねるように指を動かす。ゴロドクはその尻に手を伸ばしたくなつたが、クララーの願ひ通り我慢した。喉の奥が鳴る。肉棒は更に充血し、亀頭が露出してゆく。次第に粘りある先走りが溢れ、クララーの指を汚してゆく。

「ぐっ……上手くなつたよな、クララー……っ！」

「ふふっ。これからですよ、ゴロドク……はむっ……ンンツ……」

「うあっ！ ク、クララーっ、熱っ！」

ゴロドクの言葉にクララーは嬉しそうに答えると、大きく口を開けて肉棒を口に含みそのまま喉奥まで迎え入れた。唾液を溜めていたのだろう。肉棒が根元まで熱いぬめりに包まれ、ゴロドクは思わず声を上げた。腰が無意識に浮きクララーの喉奥に亀頭が当たるが、クララーは少し息苦しうに眉を寄せただけで頭を動かし始める。口の端から唾液と先走りが溢れ、ゴロドクの陰毛を濡らす。

「ンツ……んふっ……ふあ……ゴ、ゴロドク、いかがですか？」

「あ、ああっ……最高だ、クララー……！」

一度口を離し、手で扱きつつクララーが尋ねてきた。股間からの快感を堪能しつつゴロドクは素直に答える。

クララーはその反応に満足したのか、自身の秘所を弄る手を止めないまま再び肉棒を咥えた。頭の動きが激しくなつてゆき、じゅぽじゅぽと淫らな水音がゴロドクの耳に届く。腰がびくびくと震え、射精感が腰の奥からこみ上げてくる。

「くうっ……ク、クララー、このままだと……っ！」

「っば……もうちよつと、堪えてください」

肉棒から口を離し、亀頭をひと舐めするとクララーは身を起こしゴロドクの身体を跨いだ。自ら秘所を指で押し広げ、もう片方の手を肉棒に添えて位置を定める。

「最初の射精は、私の膣内でお願ひします……いきますよ？」

「あ、ああ。頼む……うっ！」

「あはあっ！」

ずぶずぶとクララーが腰を落としてゆくと、膣内の無数の襞が待ち侘びていたゴロドクの肉棒に絡みついてきた。最近では締め付け方が分かってきたのか、クララーは適度に腰を揺らしつつ時折力を入れてくる。それに合わせて膣内がきゅつと締め肉棒を締め付けてくるのは堪らない快感だった。

「んっ、あんっ！ ゴ、ゴロ、ドク……っ！ 届いています、奥っ！」

一方のクララーもゴロドクの肉棒から与えられる快感に堪えているようだった。身を震わせつつゴロドクの胸板に手を置き、腰を振り始める。

クララーが腰を落とす度、白く豊かな乳房がゆさゆさと揺れる。先端の薄桃色の乳首は固く尖り彼女の快感の度合いを示す。ゴロドクはその光景に堪らなくなり、手を伸ばすと乳房を強く揉んだ。

「ああんっ！ だ、駄目ですっ、ゴロドクっ！ 今日は、私が……！」

「そう言われても、こんなに目の前で揺らされちゃ……」

「あっ！ ああんっ！ ゴロドクうっ！」

制止しようとするクララーにゴロドクは答えると、乳房に手を添え下から捏ねあげるように揉み続ける。白い身体に幾つもの汗を浮かべ、クララーは悶えた。更にゴロドクは下から突き上げるように腰を上げた。結合部から飛沫が飛ぶほどに激しい結合に、互いの肉が打ち

合う音が室内に響く。

やがて、再び強い射精感がこみ上げてきた。クララーラの乳房を揉む手に力を込めつつ、ゴロドクは更に腰を動かす。クララーラの腰の動きもそれに合わせるように激しさを増してゆく。

「うっ、うあっ！　だ、駄目だ、クララーラ！　もう、出るっ……！」

「いいっ、ですっ！　ゴロドクっ！　このまま、中っ、中につ！」

「うおおっ！　イクっ、イク……っ！」

「ひいっ！　わたっ、私、もっ……あああっ！」

我慢を解き、一気に射精感に任せて精液を迸らせる。どくどくとクララーラの膣内に熱い精液が届くと同時に、クララーラも絶頂に達した。

「あっ、ああ……ゴ、ゴロドク……こんな、沢山……！」

「ううっ……クララーラの、中、絞ってくるっ……」

繋がったままクララーラは脱力し、ゴロドクの胸板に身体を任せた。クララーラの豊かな乳房が張りのある弾力を伝えてくる。ごぼりと膣内から肉棒が抜け落ち、溢れた精液がシーツを濡らしてゆく。

「あ、ありがとうございます、ゴロドク……いい、お土産になりました……」

「ごっちこそ……」

荒い吐息の中で律儀に礼をしてくるクララーラに、ゴロドクは答える。ふと気付いたように彼女が尋ねた。

「……そう言えばゴロドク、ノンナ様はどうされたのですか？　ご一緒でしたら、二人でゴロドクを責めようかと思っていたのですが」

「ああ……何だか、カチューシャから呼び出されたって……」

最初に嘘をついたゴロドクだったが、それは本当だった。戦車道の練習も冬休み中はそんなに無かった筈だが、急な連絡を受けて彼女のもともとノンナは向かったのだ。

「そうですか……あの、ゴロドク？」

「ん？」

「……もう一度、いいですか？」

「じゃ、今度は俺がクララーラを好きにする番で」

「……はい」

紅潮した顔で頷くクララに、ゴロドクは身体を再び重ねた。

「その判断で正しいかと思えます」

カチユーシヤ宅、ノンナは彼女の話聞き終え静かに頷いた。

「……そうよね。そうするのが一番よね」

自分が言った事だというのに、カチユーシヤの表情は重かった。あるいはノンナに自身の提案を否定してほしかったのかもしれない。

しかし、ノンナは彼女の言葉を正しいと思った。彼女は『地吹雪』のカチユーシヤ。昨年のプラウダ戦車道を全国大会優勝に導き、今年度もベスト4まで牽引した偉大なる指導者。

そう在り続ける事は容易いことではない。嫉妬や羨望を跳ねのけ、実力を示し、時として自身の感情を殺さねばならない。それが例え、どれだけカチユーシヤにとって辛い事であろうとも。

「私が言伝致しますか?」

ノンナの問いかけにカチユーシヤは首を横に振った。

「……いいえ、私が直接言うわ」

そう答えるカチユーシヤの表情は今にも泣きそうで、しかしそれでも強い決意があった。

第二話

浴室のシャワーの音が、ベッドに横になったままのゴロドクの耳に届く。

帰省前に訪れてきたクララとの二度の交わりを経て、心地よい脱力感が身を包んでいる。油断するとこのまま寝てしまいそうだ。

「んん……」

寝返りを打ち、窓の外に視線を向ける。冬至を開けたばかりの日の入りは早く、まだ時計の針は17時を指していないが既に夕暮れだ。

今朝まで一緒にいたノンナは午前中にカチューシャからの連絡を受け、手荷物を持って出ていったきりだ。どんな用件かは彼女にも分からないようだったが、「今日はこのままプラウダ高校の女子寮の方に戻るかと思えます」と言っていたし、なかなか面倒な内容なのかもしれない。

そんな事を思い出していると、卓袱台の上に置いたままにしていたゴロドクの携帯が鳴った。軽快なアレンジが加えられたロシア民謡「カチューシャ」のメロディーが室内に響く。

「ととっ!？」

聞き間違えようもない番号指定メロディーに、ゴロドクは慌てて身を起こした。カチューシャからの着信である。

ゴロドクは咄嗟に浴室のクララの方に視線を向け、それから携帯を手に取った。気持ち浴室から距離を置きつつ通話ボタンを押す。

「もしもし、伍堂です！」

既にメロディーがサビの部分に届きかけていた。これだけ待たせた場合、最初にカチューシャから返ってくるのは『遅いわよ、ゴロドク!』という一喝だ。

『……ゴロドク、今、大丈夫?』

しかし、電話口から聞こえてきた彼女の声は予想とは異なる静かな問いかけだった。いつもと違う様子に戸惑いつつ、ゴロドクは答えた。

「あ、ああ、大丈夫。どうしたんだ、カチューシャ?」

「その……ゴロドク、もう夕食は食べたかしら？」

夕食どころか、帰宅後に摂ろうと思っていた昼食もクララーラのセックスでもともに食べていない。正直なところ、少し腹が鳴っている。

「いや、全然。これからコンビニに行こうかと思つてたところさ」

「そ、そう、それじゃ、これから一緒に夕食とかどうかしら？」

「夕食？」

「カチューシャの行きつけのロシア料理の店があるの。あ、あくまで良ければだけれど……」

やはり今日の彼女はおかしい。普段であれば「今からお昼を食べに行くから一緒に来なさい！ 10分以内に公園の噴水前！ いいわね！」と一方的に言ってくるのがカチューシャのはずだ。無論、そういう風に強引に誘ってくるだけあつて彼女のおすすめの店は当たり前ばかりなのだが。

また、夕食を共にしようとするのもゴロドクの記憶の限りでは初めてだったはずだ。生活リズムが健康的と言うべきか子供っぽいと言うべきかは議論の余地があるが、彼女は早寝早起きが基本で、暗くなるとすぐに眠くなってしまう。

それらの違和感を感じつつも、ゴロドクは頷きつつ言った。

「ああ分かった、喜んで。時間は？」

『ええっと、そうね、『クレムリン』の前に18時……』

「ゴロドク！ すみません、コートの中のハンドクリームを取つてもらえますか？」

突然、浴室からクララーラの声が飛び込んできた。慌ててゴロドクは通話口を押さえ、身を覗かせるクララーラに視線を送る。

それだけでクララーラは察したのだろう。申し訳なさそうに頭を下げると、浴室の戸を閉じた。

『今、クララーラの声がしなかった？』

「……いや、部屋には俺だけだけど？」

『そう……ごめんなさい、ゴロドク。ちよつと気疲れね』

「あ、ああ。大丈夫。それじゃ後で」

これも普段のカチューシャならば追及してきたところであろう。それもゴロドクという言葉にあっさり引き下がる。やはり今日の彼女は変だ。

ゴロドクとしては心配する気持ちもあったが、このままクララを浴室から出られないままにもできない。短い応答の後、電話を切る。

「……もう大丈夫！」

「カチューシャ様からお電話でしたか。すみません、ゴロドク」

そう言いつつ、クララは浴室から身体を拭きつつ出てきた。シャワーに火照る白い肌に水滴が残る様子が何とも艶めかしい。

「ああ。ちよつと様子が変だったけど、夕食を一緒にどうだって。18時に待ち合わせだから、シャワーを浴びたらちよつと出かけてくる」

「お気になさらないください。私も着替えたなら家に戻りますので」

そう言いながらクララは自身のコートを探り、小物入れに入ったハンドクリームを取り出して塗り始めた。

「ところでゴロドク、カチューシャ様の様子がおかしかったとは？」

「それが……何だか、元気がない感じ。『気疲れ』とか言ってたし、何かあったのかな？」

「ゴロドクとノンナ様との関係に気付かれたとか？」

「怖い事を言わないでくれよ……」

からかいめいて言うクララの言葉に、ゴロドクは恐ろしそうに答えた。

ふと、クララの表情が真面目なものに変わった。

「しかしゴロドク。何処かで答えを出さねばならない事ではないですか？」

「……それは、まあ、分かってる」

もともとはカチューシャと交際する事になったゴロドクに対し警戒し過ぎたノンナの勇み足から始まった関係ではある。しかしここまで長く、深い関係になってしまった以上、最後に物事を決めるのは男の務めだろう。

しかし、では具体的にどうしたものかとなるとゴロドクには見当も

つかなかった。カチューシャとの交際を始めてからの数ヶ月、自分とノンナが彼女に隠し事をして裏切っていたのは事実なのだ。

悩むゴロドクに、クララーは軽く言った。

「良い方法でしたらありますよ？ カチューシャ様もノンナ様も、ゴロドクも幸せになれる方法が」

「え？ いや、そりや無理だろ。幾らなんでも……」

「いいえ、簡単な事です。カチューシャ様の身も心も、完全にゴロドクの物にしてしまえば良いのです」

ゴロドクは思わず口を半開きにした。

「……カチューシャを、俺の？」

「はい。もともと貴方はカチューシャ様の『彼氏』なのですからその権利があります。カチューシャ様を籠絡させて、ノンナ様との関係を明らかにしても怒らない。ノンナ様を責める事もしない。そうなる程にゴロドクに依存するようになれば誰も辛くはなりませんよ。もちろん、私も」

よくよく彼女の発想は凶抜けている。ゴロドクはクララーの言葉に呆れと驚きを同時に感じつつ尋ねた。

「カチューシャがそんな風になるのは、クララー的にはどうなんだ？」

「私としては喜ばしい事です。敬愛するカチューシャ様と戦車道で共に戦えるだけでなく、快感も共有できるようになるのですから」

「……そうですか」

思わず敬語で答えつつ、ゴロドクは想像してみた。

ベッドの上で先に横になるカチューシャ。緊張を解くように彼女の髪に触れ、優しくキスをする。

幼さを残した——と言うより、まだ第一次性徴期すら迎えていないような凹凸の無い小柄な身体を抱きしめ、小さな女陰に自身の肉棒を埋めてゆく様子。それを痛がるでもなく受け入れ、圧迫感を感じつつも悶えるカチューシャの姿。

「うーん……」

しばらくゴロドクは唸っていたが、やがて首を横に振った。

「……いや、やっぱり駄目だ」

「駄目ですか？」

「そういうんじゃ無いんだよ、カチューシャは」

それはゴロドクにとつての本心だった。決してカチューシャの事が嫌いな訳ではない。彼女の事が好きかと聞かれれば「好きだ」と迷わず答えられるだろう。

しかしそれがセックスしたいという欲求と直結しているかと問われれば、ゴロドクは否定するだろう。カチューシャの事は好きだが、それは家族などに向けられる親愛に近いものだ。

大事にしたいという気持ちに嘘は無い。だが彼女とセックスしたいという気持ちとそれがどうにも繋がらない。

ゴロドクの言葉はクララーの予想の範疇だったのだろう。小さくため息をつくと彼女は言った。

「しようがありませんね、ゴロドクは」

「……悪い」

「でも、そういう選択肢が貴方にある事は忘れないでくださいね」

とりあえず、今のクララーの言葉が善意からのものである事は間違いないのだろう。

そこまで考え、ゴロドクは自分の股間が乾き始めている事に気付いた。一応ティッシュで精液や愛液は拭きとったが、拭き残しがこのままではカピカピになるだろう。

ベッドから立ち上がるとゴロドクは言った。

「んじゃ、シャワー浴びたら行ってくるよ」

「お気をつけて。私も着替えたら出ますので」

髪を拭きつつクララーが言う。ゴロドクは頷くと浴室に向かった。

1時間後。

雪がちらつく夜の町をゴロドクは歩いていった。胸元には小さな赤いピンズ。クララーがコーヒーのお礼にと部屋に残していたものだ。

帰省で一時的に艦を降りている学生が多いせいか、通りを歩く人もまばらだ。全く居ない訳ではないが、皆早足で家路に向かっている。

艦に残る人も年末の準備に忙しいのだろう。

ただそれでも商業地区が近くなつてくると街並みは華やかになり、『年末セール！』などのポスターや張り紙が貼られた店が立ち並ぶようになってくる。

「悪い、待たせたか？」

「い、いいえ。カチューシャもさつき来たばかりだから」

学園艦内唯一のアミューズメント施設「クレムリン」の前で、既にカチューシャは待っていた。何故かその服装は戦車道の試合時に着るパンツァージャケット姿だ。

「それじゃ、行きましよ。お店は私が案内するわ」

「OK、楽しみだ」

カチューシャはゴロドクに言うと、先導して歩き始めた。その小さな背中をゴロドクも追う。

「それにしても珍しいな、カチューシャが夕食に誘ってくるなんて」

「……そうかしら？」

何気ない問いかけだったのだが、カチューシャの反応は鈍かった。

大通りを離れ、ロシア人の店が並ぶ民芸品などの通りに出る。この場所はゴロドクも覚えていた。先月、ノンナと共にカチューシャへのクリスマスプレゼントを選ぶために訪れ、偶然カチューシャと遭遇して窮地に陥りかけた通りだ。

まだ18時過ぎという事もあり、通りのどの店も店頭に明かりを点けて営業していた。柔らかな電球の光にガラス細工店のステンドグラスが照らされている。クリスマスが近いからか、その絵柄は青い服を着た老人と白い服を着た少女に変わっている。

ロシアのクリスマスにおいてサンタクロースは存在しない。その代わりとして登場するのが「ジエド・マロース（吹雪の老人）」と呼ばれる冬の精と、その娘の「スネグーラチカ（雪娘）」だ。

スネグーラチカは冬の象徴であるジエド・マロースとヴェスナ・クラスナという春の精の間に生まれた雪の身体の少女で、夏を迎えるために溶けて消えてしまうという悲劇的なエピソードがオペラで歌われ知られるようになった。

現在ではそういった悲劇性は陰を潜め、ジエド・マロースと人間を結ぶマスコミ的存在としてロシアの人々には広く認知されている。

「ここよ、ゴロドク」

ステンドグラスに視線を送っていたゴロドクは、カチューシヤの声に我に返ると前方を見た。木製の簡素な店構えが家庭的な印象を与える、ロシア家庭料理の店だ。

慣れた感じで戸を開け入店してゆくカチューシヤの後に続いて入ると、暖かな空気と共にトマトスープの酸味と肉の焼ける匂いが混じり合った旨そうな匂いがゴロドクを包んだ。

「いらつしやい、カチューシヤちゃん。席の用意は出来てるよ」

「ありがとう、おばさま」

如何にも「ロシア人の女将」といった風情の恰幅の良い女性がエプロン姿で陽気に出迎えてきた。微笑みつつカチューシヤが答える。戦車道においては「小さな暴君」の異名に恥じない攻撃的な指揮ぶりを見せる彼女だが、日頃は素直な少女なのだ。

カンテラ型の証明が並び暖かな光を放っている店内の窓際の二人掛けのテーブルに案内され、カチューシヤはびよんと軽く跳んで椅子に腰かけた。次いでゴロドクもその正面に腰かける。

「アンタがゴロドクさんかい？ 噂はカチューシヤちゃんから聞いているよ。色々と助けてあげてくれてるんだって？」

「ど、どうも……いえ、そんな」

「ハハハ、照れるもんじゃないよ！ それじゃ、用意してくるかね」

店主であろう女性は流暢な日本語で話しかけてくる。おそらく学園艦暮らしも長いのだろう。ゴロドクは少し恐縮しつつ頭を下げた。

厨房に彼女が入っていったのを確認し、ゴロドクはカチューシヤに言った。

「常連なのか、この店？」

「まあ、それなりになって所かしら」

照れくさそうにカチューシヤは言うど、手元に出されたお冷を飲んだ。釣られてゴロドクも手元のグラスを傾ける。レモンの微かな香

りがする、程よい冷たさの水が気持ちを落ち着かせてくれるようだ。やがて、テーブルには幾つかの大皿が運ばれてきた。赤いスープに大きい野菜がたっぷり入ったボルシチ、揚げたての КОТЛЕТА、ピロシキなどだ。

「この料理は本当に美味しいわよ。ゴロドク、先にお食べなさいな」
「ああ、それじゃ遠慮なく……いただきます」

小さなボウルに移したボルシチをスプーンで掬い、少し冷ましてから口に入れる。

「……！」

以前、カチューシャが手作りでボルシチを作ってくれた事があった。あれもあれで旨かったが流石はプロの味という事だろうか、じつくりと引き出された肉と野菜の深みのある味わいが口の中に広がってゆく。

「美味い！」

「でしょ？」

ゴロドクの反応が嬉しかったのだろう。ここまで固い表情になりがちだったカチューシャは緊張を解き、自身もボルシチを口にした。

それ以外の料理も流石と言っている物だった。学園艦に来てから自炊とコンビニやスパーで済ませていた事をちよつと後悔しつつ、ゴロドクはその味を堪能した。

カチューシャもゴロドク程に食べはしないものの、他愛ない会話を交えつつ食事を進めていった。

「……ねえ、ゴロドク？」

「え？」

その空気が変わったのは、最初の肉料理を食べ終え魚料理が出てきた時である。

カチューシャは大きく息を吸うと、ゴロドクを正面から見据えた。彼女の態度の変化に、思わずゴロドクも襟を正す。

「どうしたんだ、カチューシャ？」

「その……来年、卒業したらどうするつもり？」

正直なところ、その質問はゴロドクにとっては拍子抜けするもの

だった。

「どうするって、まあ……前に言ったかもしれないけど、普通に青森の大学に行くつもりさ。とりあえず『津軽味噌大』や『じゃっば汁国際大』あたりなら何とか俺でも行けそうだし」

「そう……」

「カチューシャも、大学に上がってからも戦車道は続けるんだろ？
だったら……」

少なくとも彼女からゴロドクはそう聞いていた。大学戦車道を続けるならば、学園艦でない青森の大学に入学する事になる。彼女の華々しい戦歴からすれば、スポーツ推薦も余裕のはずだ。

そう思いつつ言葉を返したゴロドクに、カチューシャは静かに言った。

「私は……ロシアに留学する事になるわ」

「え？」

ゴロドクの言葉が途切れた。

「ロシアで……より本格的な戦車道を学べる事になったの。一応学業面でのテストはあったけど、それも今朝になって合格通知が来たわ」
「ちよ、ちよっと待ってくれ、カチューシャ!? そんな事、今まで一度も……」

寝耳に水のカチューシャの話に、ゴロドクは動揺を隠せずに尋ねた。

「……合格できるか、実際、微妙だったの。はつきりするまで、言えなくて」

そう絞り出すように答えるカチューシャの表情には、深い苦悩があった。

「年明けに、高校戦車道としての最後の大会『無限軌道杯』があるわ。それを終えたら、カチューシャはロシアに行く事になる」

「……………」

ゴロドクは言葉を失い、カチューシャを見た。

その視線を正面から受け止めつつ、カチューシャは言った。

「だから……ごめんなさい、ゴロドク。カチューシャからお願いした

事なのに、貴方と一緒に居られるのは、あと一カ月も無い」

「いや、それなら遠距離で……」

「それは駄目よ！ これはカチューシャの身勝手なもの……ゴロドクを付き合わせる訳にはいかないわ」

寂しそうにカチューシャは笑った。

その笑顔を前に、ゴロドクは自分の中から湧き上がる感情に強い怒りを覚えた。

馬鹿野郎。別れ話を持ち出されて何を安心しかけてる。もっと本心から彼女を慰め、関係が続けようと呼びかけるべき場面だろうが。

「……………」

苦しそうなゴロドク表情を、別れの悲しみと判断したのだろう。

カチューシャはあえて元気な声を出した。

「さ、食べましょう！ 料理が冷める前に食べてあげるのが、お店の人への最上のマナーよ！」

——あの女将さんには悪いと思ったが、その後の味は分からなかった。

二時間ほど経って店を出ると、外はすっかり暗くなっていった。民芸品店なども既に明かりを落とし、人の無い通りには静かに雪がちらつくだけだ。

「その……ありがとう、カチューシャ」

「いいのよ」

短く答え、カチューシャはゴロドクに向き直った。ゴロドクも少し腰を落とし、彼女と視線の位置を合わせる。カチューシャの瞳が閉じられる。

「……………」

「……………」

カチューシャが何を望んでいるのか、ゴロドクにも理解できた。肩を柔らかく掴み、そのまま静かに唇を合わせる。

「ん……………」

「ンツ……」

数秒そうしていた後、唇を離しゴロドクは腰を上げた。

「……おやすみなさい、ゴロドク」

「ああ、おやすみ。カチューシャ」

別れの言葉を交わすと、カチューシャは背を向け足早に歩いてゆく。潤んでいた瞳をゴロドクに見せたくなかったのだろう。

時折こちらを振り向くカチューシャに、ゴロドクは微笑んで手を振り見送った。小さな背中が更に小さくなり、見えなくなる。

「……」

振っていた手を下げ、ゴロドクは自分の背後に向かって言った。

「いるんだろう？」

そう、こんなカチューシャの大事な場面に彼女が立ち合っていない訳がないのだ。

「……はい」

背後からの返答。ゴロドクが振り返ると、そこにはカチューシャと同様にパンツァージャケットを着たノンナが立っていた。

「その……ここじゃ何だし、ちよつと話できないか？」

「……分かりました」

ノンナは頷いたが、自分からは動こうとしなかった。行き先はゴロドクに任せるようだ。

無言でゴロドクはノンナに背を向け、歩き出した。それに付いてくるのが足音で分かる。

「……」

「……」

言葉を交わさず、ゴロドクは通りから離れてゆく。しばらく無言で歩いた後、その脚は帰路の途中の公園前で止まった。

「……で、いいか？」

「はい」

そのまま公園に入る。学園艦にはホームレスは存在せず、年末の冬の公園という事もあり園内に人の気配は全く無かった。少し奥まで入ったところのベンチの雪を、二人が座れる程度に掃う。

ゴロドクはそこに疲れたように腰かけた。その横にノンナも座る。ひと息ついた後、ゴロドクは口を開いた。

「……知ってたのか、この事？」

「ロシアの大学から打診を受けているという程度は聞いていました。ここまで話が進んでいたと知ったのは、今日が初めてです」

淀みなくノンナは答えた。そこにおそらく嘘は無いのだろう。

「今朝の電話がそれだったのか？」

「はい。カチューシャ自身も相当に悩まれていましたが、自身でゴロドクに伝えると決められました。あのジャケットは、カチューシャにとってこれが臨戦態勢でなければ言えなかった事柄だからです」

「そっか……」

「ロシア戦車道が日本人の実力を認め招聘するのは非常に稀で、同時に名誉な事です。プラウダ戦車道としても断る事は許されません」

まるで事務員が文書に書かれた内容を説明しているかのように、ノンナは淡々と言葉を続ける。

「良かったじゃないか。これで、ノンナにとっては最初の思惑通りになったんだから」

「……」

ノンナからの返答は無い。

「……ごめん、意地の悪い事を言った」

「いいえ」

自身の中に正体の分からない苛つきがある。それを自覚し、ゴロドクは謝罪した。自己嫌悪に額に手をあてる。

「……ゴロドク、貴方は悪くありません」

そこで初めてノンナはゴロドクに向き直った。視線を真っ直ぐにこちらに向けている。

ゴロドクも彼女と視線を合わせ、その感情が読めない瞳をじつと見た。

「その、ノンナは……」

尋ねようとして、言葉が途切れる。

聞くまでもない事だ。常にノンナは言っていた。何があるうとカ

チューシャの側に居ると。

彼女の頭脳と語学力なら今からでも容易にカチューシャと同じ大学に行けるだろう。対して自分は国内の私立が精一杯、今から勉強して間に合うとは到底思えなかった。

「……聞いては、くれないのですね」

ゴロドクが何を言おうとしていたのかノンナにも伝わっていたのだろう。その言葉には幾らかの寂しさが混ざっている。

「そりゃ、まあな」

嘘だ。

彼女を「行くな」と引き留めたい。強く抱きしめ、何処にも行けなないようにしたい。

しかし——果たしてそれで彼女は“ノンナ”のままに居られるだろうか。

カチューシャを強く敬愛し、凜として戦車を駆り、“ブリザード”の二つ名に負けない強さと激しさを持ち合わせた鉄の淑女。

その彼女を構成している要素を全て失った上で、彼女は彼女のままに居られるのだろうか。その迷いがあった。

「ゴロドク」

ノンナは、静かにゴロドクの手を取った。

「……どうすれば良いのでしょうかね、私は」

「ノンナ？」

「かつての私であれば、迷わずカチューシャと共にロシアに向かい、貴方を一瞥もせず去る事ができたのでしょうか」

その手をノンナは自身の胸に当てさせた。厚手のジャケット越しにでも分かる彼女の乳房の重みと、動悸が伝わってくる。

「……………」

「今も理性は正確な判断を下しています。カチューシャは留学し、私はそれに共に行き、貴方とはもう会わなくなる。それが最も収まりの良い状態です」

ノンナの空いた手がジャケットのボタンを外した。ゴロドクは手を振り払う事もできず、彼女の動悸を感じていた。激しく、熱い。

「でも……身体は今も、貴方を求めてしまっている」

ジャケットの隙間からゴロドクの手を奥に差し入れさせる。汗ばむ肌と、弾力ある乳房の感触が直接伝わってくる。

「ノ、ノンナ……」

「お願いします、ゴロドク……此処で、していただけませんか？」

ノンナの瞳の奥に、欲情の炎がゆらめいている。

声を出す事もできないゴロドクの頬に、一片の雪が落ちて水になった。

第三話

人間に日々の調子や体調があり、それによって同じ人物の同じ行動でも違う結果が出る事は珍しくない。それはセックスにおいても同じである。

ゴロドクとノンナの身体の相性はかなり良く、またノンナ自身になり感じやすい体質という事もあり噛み合わないセックスというのはあまり無いが、逆に普段より激しいセックスになる時がある。それはノンナが強い緊張や精神的なストレス、あるいは強い動揺を受けた時などだ。

日頃から鉄面皮めいた無表情で過ごしているように見えるノンナだが、大人びていてもまだ彼女は18歳の少女なのだ。自身の感情や衝動を完全にコントロールできている訳ではない(それでも、同世代の少女に比べれば遥かに自律できているのは事実なのだが)。

具体的には戦車道の重要な試合の前夜や、先日のカチューシャに係がバレかけた時などだ。そうなった時の彼女は、まるで動揺や緊張で自身の心に生まれたヒビを快楽で埋めようとするかのように激しくゴロドクを求めてくる。

その経験が、ゴロドクに悟らせた。

「お願いします。ゴロドク……ここで、していただけませんか？」

——今のノンナは完全に「スイッチ」が入っている。それも、今まで見た事が無いほどに。

「その、それなら今から家に……」
「……………」

無言のまま、ノンナの潤んだ瞳がゴロドクを切なそうに見つめる。

今の自分の言葉で彼女が止まらないであろう事は、掌に伝わる乳房の熱さと弾力が何より物語っていた。既に相当に身体を火照らせている。おそらく料理店で自分とカチューシャが話をしていたより更に前、ひよつとすればカチューシャから留学の話をされた時点から身体を疼かせていたのかもしれない。

ゴロドクは周囲に視線を巡らせた。公園の入り口は二カ所だが、奥

のベンチを選んだため直接視界が通る事はない。雪は少しちらつく程度だが降っており、午後8時の冬の公園に自分たち以外の人の姿は見えない。年末という事で一部生徒有志による「火の用心！」の夜回りが行われており遠くで拍子木の音が聞こえるが、あれは住宅地周辺のみで公園には来ないはずだ。

「大丈夫か？」 ノン……うっ!？」

股間に柔らかな刺激。視線をノンナに戻すと、ゴロドクに視線を向けたままその手はゴロドクの股間をジーンズ越しに撫で擦ってきている。

「ノ、ノンナ、落ち着いて……!」

「すみません、ゴロドク……今の自分が少しおかしくなっている自覚はありません。ですが……抑え切れないんです」

囁きと共にゴロドクの顔に届く彼女の息は焼けるように熱い。ゴロドクは思わず喉を鳴らした。ノンナの手は股下からジツパーをなぞるように下から上に動き、時折布地の上から優しく揉む。むくむくと固さを増してゆく肉棒が窮屈そうに開放を求めている。

ゴロドクは自身の中からも強い欲情が湧き上がるのを感じていた。不安や動揺を覚えていたのはノンナだけではない。ゴロドクにしても、先ほどのカチューシャの告白で少なからず動揺し、またこの先の事についての不安を抱いていた。それをノンナを抱く事で一時的にでも忘れたいという気持ちはあった。ただそれが、まだ我慢できていたというだけだ。

カチューシャの留学という事実、それによってノンナとも別れる事になるという現実。それらを何ら変える事のない、ただ心を慰めるためのだけのセックス。

しかし——そんな逃避的な「慰め」が必要な時がある。その「慰め」が無ければ前に進めなくなる時がある。

「んっ……!」

「はあっ……ンッ、ンンッ……!」

ゴロドクはノンナに顔を寄せ、唇を押し当てた。冷えた唇を重ね、舌を差し入れると口腔内の熱いぬめりが出迎えてきた。ノンナも吐

息を荒くしつつゴロドクの舌に自身の舌を絡めてくる。

「ふう……あ、はあ……」

「ああ……ゴロ、ドク……ああんっ！」

情熱的にノンナは身を寄せ、肉棒を撫でる動きを止めないままゴロドクに密着してくる。それに応えるようにゴロドクは彼女のジャケットのボタンをもう一つ外して手を動きやすくさせると、汗ばむ乳房を強く揉んだ。思わず大きな嬌声を漏らすノンナに、ゴロドクは囁く。

「ノンナ、もうちよつと声を抑えて……ふっ、んはっ……！」

「は、はい、ゴロドク……ん、んふう……！」

唇を再び重ねて彼女の声が漏れないように注意しつつ、ゴロドクは更に深いキスを続ける。舌でノンナの歯茎を撫で、口腔内を舐め、彼女の舌を息苦しくなるまで愛撫する。

その間に、ゴロドクの股間を撫でていたノンナの手はジッパーを引き下ろしジーンズの中に差し込まれていた。下着を押し分け彼女の指が直接肉棒に触れると、それだけで肉棒はびくりと震えて更に固さを増してゆく。

「ゴ、ゴロドクの、こんなに苦しそうに、なっています……」

「ああ……俺も、興奮して……くうっ！」

ノンナの指が肉棒を引き出した。亀頭の粘膜が冷たい外気に触れ一瞬だけ萎えようとするが、ノンナの手に包まれると再び滾り始める。

そのままノンナはキスをしつつ肉棒を手で扱き始めた。ジーンズの留め金を外して根元まで握りやすくすると、反り返る竿全体を強すぎない程度に握り上下させてくる。時折指先で亀頭を撫でられると、粘りある先走りが滲み彼女の指を濡らした。

「痛くないですか？ ゴロドク……」

「ああ……ノンナ、堪らないっ……！」

ノンナの乳房を揉む手を止めず、ゴロドクは言った。次第にノンナの手の動きが早くなってゆく。粘り気を帯びた手の感触が痛みとの

境界線上ギリギリのところまで快感を探り、与えてくる。

「ぐうっ……駄目だ、ノンナ、このままだと……」

「……お待ちください」

こみ上げる射精感にゴロドクが呻くと、ノンナは扱っていた手を止めてゴロドクの肩に手を置き一旦距離を取った。はだけた胸元を直すこともせずにベンチから立ち上がり、座ったままのゴロドクの正面に周り腰を落とす。

「ゴロドク、足を……」

「あ、ああ……」

ノンナの求めるままにゴロドクは脚を広げた。既に半脱ぎ状態のジーンズはずり下がっており、トランクスの際間から反り返る肉棒をノンナの眼前に突き付ける格好になる。

「素敵です。こんな、大きく……はむっ……ンツ、んふっ……」

「うお……っ!？」

広げられたゴロドクの腿に手を置き、ノンナは大きく口を開けると凶悪なまでに怒張した肉棒を愛おしそうに呑み込んだ。思わず大きな声が出そうになり、ゴロドクは慌てて口を押さえる。

そのままノンナは頭を前後に動かし始めた。かき上げる黒髪にちらつく雪が降りかかり、小さな雫となつてゆく。整った口元には赤黒い亀頭が入りし、ぐちゅぐちゅと唾液と先走りの混じった粘液が口の端から滴り落ちる。

「ふうっ……ふあ、ンンツ……ちゅうう……」

「(くあっ!?)」

強烈なバキュームフェラ。頬をすぼめ、竿ごと吸い上げる。ゴロドクは強烈な快感で声が出そうになるのを歯を噛み締めて堪えた。

「だっ、駄目だっ、出る……っ!」

「ンツ、ンンツ……っば……だ、出してください、ゴロドク……全部、私の、口に……」

口を離して懇願するノンナ。その間も肉棒には彼女の指が絡みつき唾液塗れの竿を扱っている。

「ノ、ノンナ……!」

「んっ……」

「くっっ！」

ノンナはひくつく亀頭に柔らかくキスをする、再び啜えこんだ。ゴロドクの背筋にぞくぞくと快感が這い上がり、耐えがたい射精感が腰の奥から湧き上がる。ゴロドクは無意識にノンナの頭を押さえると腰を突き出した。

「ああっ！出る、出るっ！」

「んっ!？」

急に頭を押さえられ反射的に身体を固くするもの、ノンナは抵抗する事無くゴロドクに身体を合わせた。どくどくと濃い精液が駆け上がり、ノンナの口腔内を満たしてゆく。

「あっ……ああっ……ノンナっ……！」

「ふうっ……ん、んふっ……」

少し息苦しそうにしながらも、ノンナの喉が鳴った。ゴロドクの精液を呑み込んでいるのだ。

「はあっ……あ、はあ……！」

「……ふう」

たっぷり数十秒は続いたであろう射精が止まり、脱力したゴロドクはベンチに身を預けた。肉棒を口から開放したノンナは口元の精液と唾液を拭い、ゴロドクの股の間に身を置いたまま身体をずり上げると寄りかかってきた。

「こ、今度は私にお願いします、ゴロドク……」

「……！」

ノンナは自らスカートをずり上げ、タイツを下ろすと脱力感から抜けきっていないゴロドクの手を自身の下半身に導いた。にちやりとした感触と熱い湿気が伝わってくる。

そのままノンナは座るゴロドクの身体に跨るような格好になった。彼女の身体から立ち上る淫臭に当てられたかのように、射精直後だというのに肉棒が再び固さを取り戻してゆく。

「はあっ……ゴロドク、ゴロドク……早く、早くください……っ！」

「ちよ、ちよつとノンナ、まだ……！」

フェラの最中も相当に興奮していたのだろう。熱っぽくノンナは言うのと、秘所をゴロドクの肉棒に押し当てると腰を揺すって擦り始めた。濡れそぼった陰唇が挿入をもとめてひくついているのが、亀頭から伝わる快感で分かる。

ここまででも十分にアウトではあるのだが、流石に街灯に照らされたベンチの上で挿入は危険なわけでは。射精で僅かに取り戻した判断力でゴロドクはそう言おうとしたが、その口はノンナの唇で塞がれた。咽るようなノンナの匂いと先ほどのゴロドクの放った精臭が混じり、頭が痺れてくるようだ。

「んっ……あ、はああっ！」

「うぐっ！ ノンナっ、凄いつ！」

ゴロドクの背中に手を回し強く抱きつきつつノンナは空いた手をゴロドクの肉棒に添え、ひと息に腰を落とした。焼けてしまうのではと錯覚する程に熱く滾るノンナの膣内がゴロドクの肉棒を締め付けると、そのまま彼女は腰を激しく振り始めた。ベンチがギシギシと音を上げ、街灯の灯りが紅潮したノンナの首筋を照らす。

「ああっ！ もっと、もっと下さいっ！ ゴロドクの、熱くてっ、太いのを、全部っ……！」

「うああっ！ ノンナ、ノンナっ！」

最早声を抑える事も忘れてしまったのか、ノンナは両手をゴロドクの身体に回し強く密着させつつ悶え、更なる快感を求めるように肉棒を強く締め付けた。ゴロドクもそれに応えるように腰を使い、下からノンナの秘唇を激しく突き上げる。引き抜かれた肉棒が再び奥まで届くたび、ノンナは荒い吐息と共に膣内の壁を蠢かせ射精を求めてくる。

「ふあっ！ あっ、ああんっ！ 凄いつ、ゴロドクッ！ こんな、あひいつ！」

「ああもう、知らねえぞっ！ くっ、ぐうっ！」

もし周辺に誰か居たならば、とつくに気付かれているだろう。ここに来てゴロドクも声を抑えるのを諦めた。雪の冷たさも公園に吹く

冬の風も、既に感じない。ノンナと身体を重ねる事で感じる熱さだけが全てだった。

抱き着いてくるノンナを自分からも抱きしめ、更に腰を動かす。テクニクなどの考えは何も無かった。ただノンナの膣内が与えてくる快感を貪ろうとする本能的な、彼女の全てを貪ろうという情動に任せた動き。しかしその荒々しい行為をノンナは全て受け止め、更にも自らも快感を求めて肉棒を締め付け、愛液を溢れさせ、腰を夢中で打ち付けてくる。

「ひいつ！ イクツ、イキます、ゴロ……ドクツ！」

「ああっ！ 俺も、俺も出るっ！」

「おっ、お願いしますっ！ 全部っ！ ゴロドクの、精液っ！ 全部注いで下さいっ！」

「うああっ！ だ、出すぞ、出すぞ、ノンナッ！」

「ふひいつ！ イクツ、イクウツ！」

獣のような声と共に、ノンナが絶頂に達する。同時にゴロドクの肉棒は膣内で膨れ上がり、彼女の子宮に精液を吐き出した。

「あっ！ あはあっ！ イクツ、また、イクツ……！」

射精で肉棒が震えるたび、ノンナが身をよじらせる。精液が吐き出される度に軽い絶頂を迎えているようだ。

「はあっ……く、くうっ……！」

その感覚が少しでも続くように、ゴロドクは腰に力を込めた。精液の奔流が次第に弱まり、結合部から溢れてくる。

「うう……はあ……」

「ハア、ハア……」

ノンナを身体の上に載せたままゴロドクは大きく息をついた。ノンナもようやく絶頂が治まったのかゴロドクに身体を預けてくる。

「ノ、ノンナ……」

「……！」

「うっ！」

挿入したままの肉棒を包む褌が撫でるように優しい刺激を与えてきた。射精直後だというのに再びむくむくとノンナの膣内で勃起し

てゆくのが分かる。

ノンナはゴロドクの反応を待たず、再び腰を動かし始めた。愛液と精液が混じり、より滑らかになった結合部から水音が響く。

「ううっ……い！」

「まだ……まだ、足りないんです」

ノンナは知らないとはいえクララとの二度のセックスを経て既に本日4回目、更に射精直後で敏感になっている肉棒を刺激されゴロドクが呻く。

背中に回した手の力を緩めないまま、ノンナはゴロドクの耳元に囁いた。

「……刻みつけてください。私が何処に行っても、ゴロドクの事を忘れない、ように……ああんっ！」

「……い！」

そう言いつつ、再びゴロドクの肉棒が与えてくる快感にノンナは再び耽溺してゆく。ゴロドクの目が見開かれた。

ノンナの理性と判断力は既に決めている。カチューシャと共に行く事を。それは彼女の未来にとっても、カチューシャの未来にとっても正しい判断だ。

しかし彼女の感情は——それを認められていない。だからこそここまでゴロドクを求めてきたのだ。自分が居ない場所でも、自分を覚えていられるように。理性が感情から自分の記憶を奪わないように。

「……分かった」

「あ、ありがとうございます、ゴロド……」

「好きだ、ノンナ」

「っ!？」

ノンナの膣が一際強く肉棒を締め付けた。

それはゴロドクが今まで言うのを避けていた言葉だった。そして、おそらくはノンナも。互いに幾度となく体を重ねてきたが、「好き」だけは口に出来なかった。

あくまで身体を求めあうだけの関係でなければならぬ。そうではない、心までもカチューシャを裏切るだけになってしまう。そう

思っていた。

だが、ゴロドクの腹は決まった。彼女がカチューシャへの想いとの板挟みで苦しみながらも自分を求めるならば、それに応えたいと思った。

「ゴロドク……ゴロドク……っ！」

「くうっ……ああ、相手してやる……このまま二回でも、三回でもっ！」

「ンッ！ んああっ！」

泣きそうな顔で悶えるノンナにゴロドクは言う、彼女の尻を掴んで結合をより深くさせた。既に下着は愛液と精液でぐしょぐしょだ。

ノンナはジャケットのボタンを完全に外すと、前を露出させた。ブラのホックを自分で外すと、重そうな乳房が揺れつつ露わになる。既に乳首は固く尖り、ゴロドクの愛撫を求めるように震えている。

堪らずゴロドクはその豊かな乳房に顔を埋めると、舌を乳首に這わせた。それだけで敏感なノンナの身体は反応し、背中を震わせている。

「好きっ！ 好きですっ、ゴロドク！ もっと、もっとおっ！」

「ああっ！ 俺もっ、好きだ、ノンナっ！ ノンナあっ！」

再び強い射精感がこみ上げてくる。ゴロドクはノンナの身体を強く抱きしめた。

「うあっ！ また、まだ出るっ！」

「下さいっ！ 私の、身体にっ！ 貴方の精液を染み込ませて、くださ

……いひいっ！」

「ああっ、ノンナあっ！」

体がびくびくと震え、ノンナの膣に再び精液が注ぎ込まれる。

「あはあ……ゴロ、ドク……っ！」

快楽に蕩けた表情で、ノンナは喜々としてゴロドクの精液を受け止めた。

「……すみません、ゴロドク」

ノンナが冷静さを取り戻したのは、それから更に二度の射精をゴロ

ドクが行った後だった。

流石にちよつと腰にきたようだ。疲れを訴える腰骨を軽く叩きつつゴロドクはベンチを立ち、周辺に残った性交の残渣を拭きとつてゆく。

「大丈夫、気にするなよ」

「……………」

「……………さて、どうしたもんだかな」

ゴロドクはため息をついた。

ノンナとの関係を正面から受け止める事は決めた。では、カチューシャとの関係をどうするべきなのか。このまま行けば自然消滅するとはいえ、流石にそれは無責任すぎるとも思えた。

その様子に、ノンナはゴロドクが何を考えているのか察したのだろう。ジャケットを締め直しつつ彼女は言った。

「…………私が全てお話します、ゴロドク。もともとは私が勝手に起こした事です」

「今更それも無いだろ？ それに、この関係を引きずってしまったのは俺の責任だ」

「そんな事はありません。ゴロドクは私が誘わなければ……………」

「いや、だからそれを言ったら……………」

「確かに、お二人ともに責任があるとは言えます。しかし……………そう悲観的になるものでもないかと」

突然の横からの声。

「え？」

ゴロドクは言葉を止め、声の方向を見た。

「Добрый вечер, Нонна様、ゴロドク」

「ク、クララー!?!」

「クララー、どうしてここに?..」

果たしてベンチの裏の茂みから、黒いコート姿のクララーが顔を出していた。

ノンナにも彼女の存在は予想外だったようで、無表情に僅かな驚きを乗せて彼女に尋ねる。

クララーはさも当然のように答えた。

「はい。本日ゴロドクにお付けした発信機が長時間に渡って公園から動かなくなったので……これは何かあったなと思ひまして」

「は、発信機!？」

「はい、カチューシャ様との大事なお話のようでしたし、そうであれば私にとっても重要な話ですので。しかし……思つた以上の難件だつたようですね」

彼女の言う「発信機」が何を示すのかをゴロドクが連想するのは難しくなかつた。出掛けの前にクララーから「コーヒーのお礼」と渡されたあのピンズだ。

「ああ、もちろん他の方が公園に入つてこないように手は打つておきましたので」

「な、なあ、クララー、聞きたい事は色々あるんだけど……何時から居たんだ?」

「そうですね……ゴロドクがノンナ様に『好きだ』と言われた時あたりでしょうか」

「……!？」

ゴロドクは思わず言葉を失つた。ノンナも羞恥心からか、ジャケットの襟を立てて顔を俯かせている。

こちらの動揺をあえて無視するように、クララーは言葉を続けた。

「ともかく、時間の余裕はありません。このままカチューシャ様もノンナ様もゴロドクも各々が心残りをしたまま離れ離れになつてしまつては、行く先でも苦しい思いをするだけです」

「今日言つていた、カチューシャを籠絡させるって方法か?」

「あれは今後もカチューシャ様とゴロドクの交際が続くという前提での作戦です。この場合は……」

クララーは指を一本立てた。

「カチューシャ様がゴロドクとの関係に『思い出』を作つた上で決着をつけられて、ノンナ様もカチューシャ様に隠れ立てなくゴロドクとセックスできるようにする。それが最良でしょう」

「いや、それは流石に無理じゃ……」

思わず素直な感想が漏れたゴロドクに対し、ノンナは再び落ち着きを取り戻した表情で尋ねた。

「……何か算段があるのですか、クララー？」

「はい。ただその為にはお二人のご協力は当然として、次の無限軌道杯でのそれなりの成果が必要となります」

そこまで言うと、クララーはノンナを正面から見据えて言った。

「最低でも準優勝を目指します。如何ですか、ノンナ様？」

「……言われずとも優勝を目指すつもりです。クララー」

そう答えるノンナの表情は、元の「ブリザードのノンナ」のそれに戻っていた。

【最終エピソードに続く】

祝砲に暴君は散る 第一話

窓の外には満月が浮かび、深夜の雪原を静かに照らしている。

僅かにそちらに眼を向けていた伍堂六郎、通称ゴロドクは再び正面に視線を戻した。

「ふあ……ノ、ノンナっ……!」

「カチューシャ、もつと力を抜いてください。中から溢れてくるものに、身を委ねて……」

「そ、そんな事、言われたって……あつ、ああっ!」

童女と見紛うような小柄な少女と、それに寄り添う長身の少女。シルエツトだけであれば添い寝する親娘にも見えたかもしれない。

しかし、下着も着けずに浴衣を着崩しほぼ全裸となっている彼女らが現在繰り広げているのは紛れも無いセックスであり、小柄な童女はれっきとした高校三年生にしてプラウダ高校戦車道において“小さな暴君”の異名で畏怖される少女、カチューシャであった。

そのカチューシャのきめ細やかな白い肌に舌を這わしつつ、同戦車道の副隊長であるノンナは長身を蛇のように絡ませていた。

無論、それを同様に全裸で眺めているゴロドクもただ棒立ちしている訳ではない。淫蕩に絡み合う二人の姿に股間の肉棒は既に固く反り返り、添えた手を緩やかに前後させつつ弱い刺激を与え続けている。滲んだ先走りが龟头を濡らし、テラテラと常夜灯の光を照り返す。

「ハアツ、ハアツ……ん、くうっ!」

カチューシャの身体がびくんと跳ねた。ノンナの指が彼女の秘所を丁寧に弄る。クリトリスに痛みにならない程度の刺激を加えつつ、薄い金髪に彩られた陰唇をなぞるように指を動かしてゆく。その指先には粘りあるカチューシャの愛液が絡みつき、指の動きをより滑らかにしてゆく。

泣きそうな顔で未知の刺激を感じるカチューシャに、ノンナは唇を

近づけた。親が子を愛するような柔らかなキスにカチューシャの身体は小さく震え、その不安を溶かしてゆくようであった。

「んっ、大丈夫、大丈夫です、カチューシャ……私が一緒に、いますから……」

「ああ……ノ、ノンナ……！」

固く握られていた小さな手がゆつくりと広げられてゆく。カチューシャの唇から首筋、首筋から胸、臍、そして秘所へと舌を移し、全身を刺激してゆく。

それは永久凍土の氷塊を溶かそうとするような粘り強い行為であったが、確かにカチューシャの身体に効果は表れていた。

「ああ……あ、はあ……」

熱い吐息を吐きつつカチューシャは肌を火照らせる。強張っていた身体も随分と脱力し、ノンナの行為に身を任せるようになってきていた。

「……そろそろ、でしうか」

その反応を測るようにノンナはカチューシャを見つめると、すつと身体を離れた。彼女の片手を握ったまま視線をゴロドクに向ける。

「ゴロドク、もう大丈夫なはずです。カチューシャの処女を、貴男が奪ってください」

「……………」

「ごくり」とゴロドクの咽が鳴った。腰を落とし、カチューシャの折れてしまいそうな華奢な脚に手を添える。

ゆつくりと脚を広げると、愛液に濡れたカチューシャの小さな秘所はひくひくと震え、ゴロドクの肉棒を待ち受けるように更に愛液を滲ませる。その反応に、ゴロドクは彼女が「子供」ではなくれつきとした「女性」なのだと理解した。

しかし、それでもなお怒張したゴロドクの肉棒を受け入れるにはカチューシャの身体は小さく、そして狭く思えた。今にも挿入したがる股間からの衝動に耐えつつ、ゴロドクは腰を止める。

「ゴ……ゴロ、ドク……！」

その考えが伝わったのだろう。カチューシャは潤んだ瞳でゴロド

クを見上げると、懇願するように言った。

「お、お願い、来て……」

「……ああ、分かった」

既に彼女は覚悟している。ここまで女性の側からお膳立てさせて腰を引いては、男として失格であろう。

ゴロドクは息を呑み、カチューシャの秘唇に亀頭を押し当てた。

何故このような状況に至ったのか？ それを説明するには、この冬に行われた高校戦車道・無限軌道杯の開催前まで遡らねばならない。「無限軌道杯」。高校戦車道において全国大会に次ぐ大規模な大会であったが、戦車道界隈の衰弱の流れにより20年ほど前に中止。今年に入り国の戦車道に対してのテコ入れもあり復活したという事情を持つ特殊な大会である。

大会の再発表が秋口という割と急な形での発表であったが、界隈はこれに沸き立った。全国大会における“大洗の戦神”こと西住みほ率いる大洗女子学園の大番狂わせ等もあり、マンネリ化と衰退化の気配に包まれていた高校戦車道は新規の履修希望者も増え、にわかに活性化していた矢先であったからだ。

また、強豪校と呼ばれる主要な高校は当然ながらこの大会の優勝を目指した。過去にあったとはいえ実質的な「第一回大会優勝校」としての肩書を得る事は大きなステータスであり、翌年からの戦車道希望の新入生を増やす意味でも重要であったからだ。そしてこの強豪校にはプラウダ高校も含まれる。今年度はベスト4止まりだったとはいえ、昨年の同校優勝を牽引したカチューシャとノンナの手腕には周囲からも期待が寄せられていた。

しかし――

「ちよつと、何なのよあの動きは!？」

――大会に向けての演習において、カチューシャはその精彩さを明らかに欠いていた。

「カチューシャは言ったわよね!? 『敵がこちらに向かう間に別ポイントに急行して後背から砲撃しなさい』って!」

「だ、だどもカチューシャ様……あんの位置だと、晴れててもギリギリなんです。それを雪中で間に合わせろってえなあ……」

「口答えする気!?!」

カチューシャが怒鳴りつけているのは彼女より更に小柄な少女、KV-2担当車長のニーナである。弱々しく抗議を返すが、それは逆にカチューシャの怒りに油を注いだようだ。

現在、彼女らプラウダ戦車道メンバーは先ほど行われたチーム内紅白戦の結果に対しての反省会を行っていた。結果はカチューシャの指揮していた紅組の惨敗である。大雪降る中、意図的に各個撃破を誘った白組に紅組は乗せられ伏兵の襲撃を受け、更に突撃陣形に変わった相手の背後を無理に叩こうとして失敗したのだ。故に、ニーナの抗議は決して間違っていない。それはこの場においてカチューシャ以外の全員が理解していた。

しかし、激昂したカチューシャを抑えられる人物はプラウダ戦車道において「二人」しか居ない。他の戦車道メンバーはその「彼女ら」の言葉を待って顔を伏せている。

「そう言うなら分かったわ! 同志ニーナ! 貴女をKV-2車長から解任、戦車の洗淨係から……!」

「……カチューシャ。それは良くない判断です」

哀れニーナが「粛清」されかける寸前でその一人、白組隊長を務めたノンナが口を開いた。

柔らかな否定を受け、驚くようにカチューシャはノンナを見た。

「ノンナ?」

「今日の雪の状態では、例えば私がKV-2を指揮していたとしてもカチューシャの指示通りに間に合わせるのは不可能だったでしょう」

そう言いつつ、壁のホワイトボードに書かれた紅白戦の戦況の推移を示す図を指す。

「そ……そう?」

「はい、むしろ私が疑問を提示したいのは、カチューシャが何故我々が

完全に結集する前に突撃を敢行しなかったか……という点です。あの天候下で、我々の合流も予定より遅れていました。それはカチューシャにも分かっていたかと思うのですが」

「そ、それは……用心したのよ」

「今回、私が指揮に専念するためにIS―2でなくT―34／76に搭乗していた事はカチューシャも把握されていた筈ですが？」

「うっ……」

ノンナの言葉にカチューシャは返答に詰まった。確かにIS―2の長砲身による長距離高火力であれば用心すべきであつたらうが、プラウダ戦車道において標準機であるT―34であれば勝負に出て良い場面であつた。しかもカチューシャの乗るT―34／85は射程、火力共にT―34／76に勝る。カチューシャも当然それは分かっていた筈なのだ。

では何故、彼女は攻めに転じる事が出来なかったか？ ノンナにはその答えが分かっていた。カチューシャは指揮官として勇敢であり、通常の指揮官であれば迷うような場面でも即時に行動を決定できる決断力と行動力を併せ持つ人物である。しかしその判断力が――今は鈍っている。

「……カチューシャ様、本日の演習はいつもより過酷なものでした。皆疲れていますし、これ以上雪が積もると帰宅も難しくなります。本日はここまでにされてはいかがでしょうか？」

停滞しかけた空気に助け舟を出したのは、もう一人のカチューシャを押さえ得る人物であるクララーだった。穏やかな微笑みを浮かべつつ提案を投げかける。

「同志クララー……わ、分かったわ。今日はこれで解散！ ニーナ、次はミスしないように、いいわね!？」

「わ、分かりますた……」

流星にここで変な事を言ってややこしくするつもりも無い。ニーナは理不尽なカチューシャの言葉に素直に頭を下げた。

「では、以上で反省会を終了します。起立、礼」

『ありがとうございました!』

ノンナの号令にメンバー達は一斉に立ち上がり、礼をした。緊張した場の空気を身体に残さないようにか皆が皆、大きく息を吐きつつ会議室を出て行く。

「……………」

「……………」

「……………」

やがて、室内には椅子に座ったままのカチューシャとノンナ、クララだけが残った。

「カチューシャ」

「…………分かってるわ。ニーナには、悪い事をしちやったわね」

ノンナの気遣うような響きにカチューシャは顔を伏せつつ言った。一度冷静さを取り戻せば、彼女は自分を省みる事ができる人間なのだ。

「(始めますよ、クララ)」

「(はい、お任せください)」

カチューシャがこちらに顔を向けていない事を確認し、ノンナとクララは無言で視線を交わした。ここからは「詰将棋」だ。

ノンナとゴロドクが雪降る中で交わった夜、それを横から覗いていたクララは二人に「ある作戦」を提案した。

「おそらくこの一件、カチューシャ様も相当なストレスになっているはずです。ですので、暫くの間は戦車道においても影響が出るかと思えます。まずはそこが第一段階です」

そして、彼女の予想通りにカチューシャの指揮には陰りが見えてきた。判断の迷いや遅れが散見され、会議中でも意識が逸れる場面が見られるようになってきた。

この状況を改善させると共に彼女の思考を「ある方向」に誘導する。まずはノンナが仕掛けた。カチューシャに優しく声をかける。

「同志ゴロドクの事、割り切れてはいないようですね」

「っ!? ノ、ノンナ!？」

「見ていれば分かります」

カチューシャからすれば完全な不意打ちだったのだろう。明らか

な動揺を見せる彼女にノンナはあくまで落ち着いた口調で答えた。

「……隠せないわね、貴女には」

幾つかの弁明を考えようとしたが、結局は諦めたのだろう。カチューシヤは寂し気な笑みを浮かべた。何度か試合の観戦に來たり差し入れを持ってきたりで、ゴロドクとカチューシヤが交際していたのはプラウダ戦車道メンバーの大半が把握している。カチューシヤの現状とその事を結びつけるのはノンナでなくとも容易であろう。それが「カチューシヤから直接の相談を受けた訳でない」クララであつたとしても。

次はクララ。あくまで深い関係まで知らない第三者としての位置を保ちつつ、彼女はカチューシヤに尋ねた。

「その、カチューシヤ様……同志ゴロドクとは、もう?」

「……別れるって話をしたわ。流石に彼をモスクワにまで連れてゆけないもの」

その話をするだけでカチューシヤは泣きそうになっていた。別れたい訳ではないが、ロシアへの戦車道留学を断る事もできない。彼女からすれば身を裂かれる思いであろう。

「だとすると、彼と会えるのもあと1, 2カ月と言ったところですか……」

「……そうなるわね」

「もう、彼と身体は重ねたのですか?」

「へっ!?!」

さらりと突っ込んできたクララの質問にカチューシヤの声が1オクターブ跳ねた。戸惑いを隠さずクララに言う。

「ちよちよ、な、何を言っているのクララ!?!」

「いえ、ですから彼とセックスはされたのかと……?」

「なな……!?!」

思わず「同志」を付け忘れながらクララの名を呼ぶ。それに対し当たり前のように答えるクララに、カチューシヤの顔が急速に赤くなつてゆく。

「しっつ、してる訳が無いじゃない! 私もゴロドクも高校生で……」

！」

「学生同士のセックスなど珍しくはありません。何より、愛し合う上で身体の相性を知るのは重要な事です」

クララは真面目に言った。彼女がからかいで言っているのではない事を理解し、カチューシャは赤面しつつも少し落ち着きを取り戻す。

「そ……そうなの？」

「はい。特にロシアでは子沢山の家庭は祝福されると言われます。交際し、結婚する相手とのセックスが不快なものでは幸せもありません」

「ううん……ロ、ロシアって進んでるのね……ええっと、っていう事はクララ、貴女ももう、経験があるの？」

「はい、既に *Девственница* ^{処女} ではありません」

「……………」

おずおずと聞いてくるカチューシャにクララはさらりと答えた。

言葉を失い、カチューシャは今度はノンナに視線を向けた。

「そ、その……ノンナは？」

「答えなければなりませんでしょうか？」

「……………」

「……はい、私も『男性』を知っています」

「っ!？」

カチューシャは完全に硬直した。

もしこの二人の処女を奪ったのが同一人物で、しかもそれがカチューシャの彼氏であるゴロドクであると知れば彼女は本当に気絶するかもしれない。そんな事を考えつつノンナは硬直したままのカチューシャに言った。

「カチューシャ、逆に伺いたいのですが……カチューシャは、同志ゴロドクの事が好きですか？」

「そ……それは……そうに、決まってるじゃない」

「……………」

「……………」

ノンナは無言でカチューシャが答えを出すのを待った。彼女は聡明な女性である。自分が言外に「好きならば、彼に抱かれないと思つた事は無いのか？」と問いかけている事に気付いているはずだ。

果たして、カチューシャは隊長然とした態度でなく、弱気な少女のような面持ちで言つた。

「うん……それは、その、ゴロドクとはキ、キスをした事はあるし、『そういう事』だって、カチューシャは知識としては知ってるわ。でもカチューシャは、ノンナやクラララみたいな身体じゃないし……」

「プロポーシオンなど大した問題ではありません。大事なのは気持ちです。同志ゴロドクにしても、今のカチューシャだからこそ好きになつてくれたはずです」

「そ、そうなの、かしら……？」

不安そうにカチューシャは言つた。戦車道では大人顔負けの強さを発揮する彼女も、それ以外では普通の恋する少女なのだ。

自分の言葉に僅かの罪悪感を覚えつつ、ノンナは言葉を続けた。

「カチューシャ、踏み込んだ話になつてしまいましたが……同志ゴロドクも、カチューシャを抱きたいと思つていのではないでしょうか？」

「カ、カチューシャを!？」

それは彼女にとつて意外な発想だったのだろう。驚くカチューシャに今度はクラララが言つた。

「カチューシャ様、私もそう思います。付き合っている女性を抱きたいと思うのは、むしろ男性としては当然です」

「……ゴロドクが？」

「はい。もし彼の事が心残りと言うのであれば、最後に抱かれる事で区切りをつけるのも重要かと思うのですが……」

少し落ち着きを見せていたカチューシャの顔に、再び血が上つてゆく。ゴロドクに抱かれる自分を想像してしまつたのだろう。

「ででっ、でも、もうカチューシャは、ゴロドクに『別れる』って言つちやつたし……」

「それについて同志ゴロドクの返事は？」

「……聞いてないわ。聞くのが怖くて……事情を話して、キスして、それだけ」

その言葉に、まるで事態を初めて知った風な反応でクララーラが言った。

「それならば、何も問題はありません。彼もカチューシャ様を受け入れてくれるでしょう」

「そ、そう……かしら？」

「はい。それとも、同志ゴロドクはそこでカチューシャ様を悪く言われるような方でしょうか？」

この問いかけは少し意地悪ではあった。この流れで、カチューシャがゴロドクの事を悪く言える筈がない。

カチューシャは暫くの間黙考し——首を横に振った。

「……やっぱダメ」

「カチューシャ様？」

「ごめん、クララーラ。励ましてくれてるのは分かるけど……カチューシャには、その勇気が無いの」

“小さな暴君”はそう弱々しく言った。心身両方の意味で自分が彼を受け入れられるのか、万が一拒絶されるのではないか。その不安を拭いきれないのだろう。

クララーラはノンナに視線を送ってきた。ここまでは想定内だ。

ノンナは小さく息を吸い、カチューシャに言った。

「……ではカチューシャ、こうしては如何でしょう？」

「ノンナ？」

「今の貴女はゴロドクの事で心乱れています。このままでは、仮にロシアに行ったとしても十全の実力を出せないでしょう」

「……」

「ですから……この無限軌道杯での結果を貴女にとっても、そして同志ゴロドクにとっても区切りとするのです」

「区切り？」

小首を傾げるカチューシャに、ノンナは言葉を続けた。

「今大会で優勝……あるいは決勝進出できれば同志ゴロドクに抱かれ

る。そう決めるのです」

「!?」

「貴女が本当に同志ゴロドクを想い、その別れが戦車道の足かせになっっているのであれば……それを逆に力の抛り所とするのが最良と私は思います。逆にそれでなお力及ばず決勝にも届かないようであれば、悪い言い方になりますがカチューシヤのゴロドクへの想いはその程度だったという事。迷いなくロシアへ行けるでしょう」

「……言うわね、ノンナ」

表情を引き締め、カチューシヤは言った。

実際これはノンナらしからぬ、挑発めいた駆け引きであった。正直なところ、ノンナの内心には自分でも分からぬ感情が混ざり合っている。敬愛と愛欲と、少しの嫉妬が入り混じった感情が。

その感情を表に出す事無く、ノンナは言った。

「これもプラウダを思えばこそ……です」

「……………」

カチューシヤはノンナの顔をじつと見た。横でクラーラは口を閉じ、推移を静かに見守る。

やがて、カチューシヤは口を開いた。

「分かったわ……その提案、乗ってあげる」

第二話

戦車道連盟、北海道演習場。

この演習場で今年の夏、大洗女子学園を中心とした高校戦車道連合チームと大学選抜チームがプロリーグを意識した特別演習——実際は一言では語りつくせぬ事情があった事は当事者たちだけが知っている——を行った事は戦車道に関わる者の間では有名な話である。西住流家元の二人の娘と島田流の天才少女の激突は、当時の戦車道新聞を大きく賑わせた。

そして今、その場所で無限軌道杯の決勝戦が行われていた。

「……………」

T—34／85の砲塔から小さな半身を出しつつ、前方を見据えるカチューシャ。

「……………」

IV号戦車の砲塔から身を出し、静かに目を閉じる栗色の髪の少女。西住みほ。

「…………どつちだ?」

彼女らを映すプロジェクターから目を離せないまま、観客席のゴロドクは膝に置いた手を強く握った。

小銃めいた射出音が二つ響く。戦車の走行不能を示す白旗が噴き出る音。

僅か、ほんの僅か、T—34／85の白旗が遅かった。

「ふう…………おっととっ!」

そこでカチューシャは緊張の糸が切れたのか、大きく息をつくとうく下に落ちかけた。慌ててハッチを掴み、身体を支える。

「…………ありがとうございます、カチューシャさん」

一瞬先に白旗が上がったIV号戦車から、みほが頭を下げる。

姿勢を立て直し、カチューシャは不敵に笑った。

「良い勝負だったわ、ミホーシャ」

『——映像確認完了。大洗女子学園フラッグ車の走行不能判定が先に

発生した事を認めます。よって、プラウダ高校の勝利!」

審判長の蝶野亜美一尉の声がフィールドに響く。同時に粉雪降る観客席は熱い歓声に包まれた。

「Xop^{ハラ}po^{ショ}o、カチューシャ」

観客席の一角、試合中に走行不能になった選手が待機する観戦席からノンナは立ち上がり、プロジェクター上でアップになるカチューシャに拍手を送った。周囲のプラウダ戦車道メンバーもある者は歓声をあげ、またある者はノンアルコールウオツカの瓶を高々と掲げる。そんな中、別の席に座っていたクララは拍手をしながらノンナの傍へと寄った。周囲の歓声が二人の会話を隠す。

「お疲れ様でした、ノンナ様……さて、〝ここからが〝本番ですね」
「……ええ、分かっています」

カチューシャへと視線を向けたまま、ノンナは静かに答えた。

かくして、プラウダ高校の〝小さな暴君〝〝地吹雪〝の異名を持つカチューシャと〝ブリザード〝の異名を持つノンナは高校戦車道卒業を前に新たな伝説を残す事となった。

真冬に開催される大会だけに、無限軌道杯におけるプラウダの活躍は下馬評の時点である程度は予測されていた。それでいて尚、見る者を驚かせたのはプラウダ戦車道メンバーの戦意の高さであり、同時に隊長であるカチューシャの大きな変化だった。

他の強豪校の隊長格に比べカチューシャは行動力と決断力はあるものの相手を侮るところがあり、その慢心が大きな弱点というのが大方の評価だった。しかし、今大会のカチューシャは何かが違っていた。勝負ひとつひとつと丁寧に向き合い、勝利を妥協なく追求し、格下の相手であろうと慢心する事無く全力で押し潰す。それは今までのカチューシャを知る者に大きな驚きを与えた。

また、そのカチューシャを補佐するノンナやクララ等の個々の踏ん張りも大きな助けとなった。特に準決勝の聖グロリアーナ戦において、敵将ダージリンの策に嵌ったカチューシャを身を挺して守り

切ったノンナのIS―2とクララーのT―34／76の健闘には戦車道関係者からも賞賛の声が挙がった。

——しかし、そんな彼女たちの戦いの原動力が、一人の平凡な男子生徒に依るものである事を知っていたのは当事者だけであろう。

「……さて、これで『第二段階』もクリアしました」

プラウダ高校優勝が決定して、一通りのセレモニーが終わった翌々日。その「当事者」たちはゴロドクの部屋でテーブルを囲みつつ今後の打ち合わせを行っていた。コーヒーの入ったマグカップに口を寄せつつクララーが言う。

「次が『最終段階』……俺がカチューシャを抱いて、彼女に心残りなくロシアに行ってもらおう、か。そう上手くいくのかな？」

「それは貴男次第ですよ、ゴロドク。しっかりカチューシャを気持ちよくさせて、最高の喪失を与えてあげてください」

「……努力します」

自信なさげにゴロドクが言うのと横に座るノンナが大真面目に答えた。正直なところ、まだゴロドクにはカチューシャとセックスするというイメージがピンと来ていない。

「カチューシャの様子は？」

「やはり気持ちの揺れはあるようですが、それでも覚悟を決められていると思われます。あとは最後の一步を踏み出す勇気といったところでしょうか。そこで少し気おくれしてくれた方が、こちらとしては都合が良いのですけど」

クララーはそう言うノンナの方をちらりと見た。ノンナもそれ目配せを返すが、その意図はゴロドクには読めない。

「で、その……俺は、カチューシャから誘ってくるのを待てばいいのかな？」

ゴロドクの問いかけにクララーは首を横に振った。

「いいえ。それでは何時になるか分かりません」

「それじゃ、俺からカチューシャを？」

「それもそれで問題があります。カチューシャ様からすれば、ゴロドクは別れ話を持ち出してそれきりの相手になっています。その相手が自分から『抱きたい』と言ってくれば流石におかしいと思いますし、最悪の場合、カチューシャ様の洞察力ならこの一連の仕掛けに気付くかもしれません」

「??？」

ゴロドクの顔に幾つもの疑問符が浮かぶ。それでは、どうやって自分とカチューシャの接点を作るのだろうか。

その疑問に答えるように、クララーは懐から封筒のようなものを取り出した。のしの巻かれたご祝儀袋である。

「それは？」

「プラウダ学園艦町内会の方からの祝い金です。これを使って、戦車道メンバーの慰安をするようにと。これも優勝を目指す理由のひとつでした」

「既に候補地は決まっています。青森の山奥の温泉宿です。年末年始を過ぎたオフシーズンなので、貸し切りも大歓迎だそうです」

「温泉宿……でも待ってくれ。それは戦車道メンバーの慰安旅行だろうか？ 幾らかチューシャの元彼だからって、女子ばかりのところは俺と一緒にいくのか？」

ノンナの補足に対してゴロドクは尋ねた。こと戦車道に関してはゴロドクは門外漢である。いくら何でも、当たり前のような顔で戦車道メンバーの慰安旅行に参加しては奇異の目は避けられまい。

当然ともいえる疑問に、クララーは動揺することなく答えた。

「勿論、それにゴロドクを来させることはできません。一緒に来ていただくのは……」

数日後。

青森港に寄港するプラウダ学園艦から降船する三人の男女の姿があった。

「……なるほどね」

大きなリュックサックを背負いつつ、誰とはなしにゴロドクは呟い

た。

「ほ、ほら、ゴロドク！ バスが来るわよ！」

「一本逃がせば一時間は来ません。遅れないようお願いします」

そんな彼にどこかぎこちない口調で指示を出すカチューシャと、いつもと変わらぬ口調で声をかけるノンナ。二人とも軽装だ。

「分かってるって。よっころ……しよつと」

二人に答えつつ、ゴロドクはリュックを背負い直した。

現在、ゴロドク達は慰安旅行の予定地である温泉宿に下見に向かうとしていた。下見役がカチューシャとノンナ。ゴロドクは荷物持ちとしての同行だ。

バスに乗り込みつつ、ゴロドクは打ち合わせの時のクララーの話思い出した。

『戦車道メンバー全員参加の大所帯での旅行となります。周辺に危険な場所はないか、温泉はどの程度の人数が一度に入れるか、レクリエーション施設はどんなものがあるか。それらを実地で下見しなければなりません』

『その下見に、俺が？』

『カチューシャ様も切っ掛けを探っています。貴男を荷物役として同行させるよう誘導するのは難しくないでしょう』

『温泉宿で、カチューシャと……か』

『こういうものはシチュエーションが重要です。雪降る宿で、互いの事を忘れないために交わる二人。ストーリー性としては十分かと』

自分自身が学校の、牢獄めいた自己批判室で処女を失った件についてはどう思っているのだろうか。涼しい顔で説明するクララーに聞いてみたかったが、流石にそれは我慢した。

古めかしいバスに乗り、ゴトゴトと揺られながら宿へと向かう。周囲の景色は港町から市街地へ、市街地から山の方へ。空は晴天だが、木々に被った残り雪が緑に白の彩りを添えている。

やがて、古めかしいバスはそれ以上に古めかしい和式の旅館の前で

止まった。クララーの言うとおり、今はオフシーズンなのだろう。降りるのは自分たちだけのようだ。

「おー……」

改めてその建物を前にしてゴロドクは声を漏らした。建造物の歴史などは分からないが、しっかりと構えと丁寧に掃除が行き届いた玄関口だけでも、その旅館が相応の伝統を持つものである事が理解できた。

「感心している場合ではありませんよ、ゴロドク」

「あ、ああ」

エントランスにチェックインに向かうノンナに声をかけられ、ゴロドクは我に返るとその後を追った。

「部屋は三人部屋ひとつよ。ゴ、ゴロドク！ 変な事を考えないようにね！」

顔を赤くしつつカチューシャが言った。カチューシャは二部屋に分けて泊まるプランで考えていたようだが、それをノンナとクララーが部屋代を理由に相部屋としたのだ。当然ながら、これも『作戦』の一環である。

チェックインのサインを書く時、ゴロドクは何となくその宿帳の名前に目を留めた。僅かだが自分たち以外の宿泊客もいるようだ。

「……ん？」

流麗なキリル文字で書かれた名前が「カチューシャ」とカタカナで書かれた上にある。外国人の宿泊客。日本に観光に来たのだろうか。

そんな事を思いつつゴロドクは名前を書き、カチューシャらと共にエレベーターで部屋へと向かった。

「わあ……」

先頭でドアを開けたカチューシャが声をあげ、眼を輝かせた。

家族用の部屋なのだろう。内部は二部屋に分かれており、落ち着きある居間には大きなテーブルに幾つもの座椅子、大型テレビが備え付けられている。壁際には小さな冷蔵庫にポットに急須に茶葉の筒。窓からは雪積もる山の景色が一望でき、なかなかの絶景である。

奥の寝室には布団が敷かれ、浴衣なども用意されているようだ。

「個室の風呂、トイレはありません。ここは天然の温泉が沸き、サウナ、岩風呂、露天風呂もあるようですね」

旅館のパンフレットを見つつノンナが言う。ゴロドクは部屋に上がると、背負ったリュックを下ろし肩を回した。

「ふう……」

「わ……悪かったわね、ゴロドク。重かった？」

おずおずとカチューシャが聞いてくる。最初にゴロドクに荷物役を頼みに電話をしてきた時から、彼女の態度はどこかぎこちない。ここに自分を誘った時点で覚悟はできているのだろうが、それでもいつも通り接するというのは難しいのだろう。彼女の気持ちを押し量りつつ、ゴロドクは笑って答えた。

「大丈夫、大丈夫。こんな大荷物、実際カチューシャには持たせられないいな」

「そ、そう？　ありがとう……ええつと、ノンナ。この後の予定は？」
「まずは明るい内に周囲の施設や名所とされる場所、あと危険とされている場所の確認を行います。旅館内の確認はそれから良いでしょう」

カチューシャの問いかけにノンナは手帳を広げつつ答えた。既にプランは固まっているようだ。

「結構かかりそうね……それじゃ、早速回るとしましょうか！　ゴロドク、キーは預けるから貴男はしばらく寛いでなさい。ゲームコーナーでお金を使いすぎないようにね！」

「子供かよ!？」

「温泉にでも入って疲れを癒してください」

そう言うとカチューシャらはリュックからデジカメや測量用のメジャーなどを取り出した。カチューシャの処女喪失という裏の目的もあるとはいえ、ちゃんと下見もするようだ。

彼女らを見送り、ゴロドクは改めて身体を伸ばして横になった。このままゴロゴロとするのも悪くはないが、折角の旅館と温泉である。学園艦での一人暮らしで旅などろくにした事も無い。ここは貴重な機会を堪能すべきだろう。

「……よし」

身を起こし、寝室に用意された浴衣にゴロドクは着替えた。外の寒そうな光景とは裏腹に、屋内は暖房が効いている。下着に浴衣だけで十分な程だ。

揃えたスニーカーを靴箱にしまい、スリッパを引つけて廊下に出る。再び階下に戻り、フロントに場所を確認して温泉へ。

やがて、やはり年季を感じさせる暖簾のかかった浴場前までゴロドクはたどり着いた。壁には「入浴上の注意」と書かれたプレートが貼られており、「タオルの浴槽内での使用禁止」「洗濯禁止」「入れ墨の方はご遠慮ください」などのお決まりの文言が書かれている。

「……あれ」

『混浴風呂の利用について』という見慣れない箇所にゴロドクは気付いた。どうやら露天風呂には男女別に分けられたものとは別に、混浴もあるようだ。

「混浴……か」

まあ、こんな山奥の温泉宿では自分ら以外では湯治に来た老人くらいしか居ないだろう。あるいはノンナやカチューシャを誘えば、水着でなら一緒に入れるだろうか。

そんな事を考えつつゴロドクは暖簾をくぐり脱衣所の戸を滑らせた。浴衣と下着を手早く脱いでロッカーに入れ、備え付けのタオルを取って浴場へ。

「おお……」

果たして大浴場にゴロドク以外の入浴者はおらず、貸し切り状態のようになっていた。先の方にガラス戸があり、そこから露天に行けるようだ。

自宅の風呂では味わえない開放感を覚えつつ、ゴロドクはかけ湯をするときよろきよろと辺りを見た。屋内の浴槽で思い切り手足を伸ばして入るのも気持ちよさそうだが、やはり露天が気にかかる。

カラカラとガラス戸を開け、ゴロドクは屋外へと出た。

「うおっ!?!」

今までの暖かな空気から一転して、身を切るような冷たさの外気が

ゴロドクの肌を刺激する。

「うう、寒い寒い！」

身を縮めつつゴロドクは足早に岩風呂に向かった。つるつるする石畳に注意しながらも、駆け込むように湯船に飛び込む。

「きゃ……!?!」

「え!?!」

急いでいて気付かなかったが、どうやら先客がいたらしい。飛沫が跳ねたのか、湯気の間こうから女性の驚く声が届く。

「(つて、女性?) す、すみません……」

間違つて混浴の方に来てしまったのだろうか? 動揺しつつもゴロドクが謝罪すると、湯気の間こうの人影は聞き慣れた声で答えた。

「ほぼ貸し切りで気分が昂ぶるのは分かりますが……気をつけてくださいね、ゴロドク」

「クララー!?!」

果たして、それは金髪を上でまとめて入浴するクララーだった。バスタオルは着けておらず、乳房や秘所を隠すことも無く温泉に身を委ねている。

均整の取れた白く美しい身体が湯船で火照る様は何とも艶めかし

「つて、そうじゃなくて! 何でここにクララーが!?!」

「今回の私はバックアップ要員です。万一の事態でカチューシャ様とゴロドクが結ばれる事が阻害されないよう、先行してこちらに来させていただきました」

そう語るクララーはどこか楽しそうだ。彼女の父は諜報関連の仕事でロシアでしているそうだが、彼女もその血を受け継いでいるのだろう。

「それなら、普通にカチューシャ達と一緒に来れば……」

「残念ながら、私はノンナ様ほどカチューシャ様からの信頼を得てはいません。表立って同行を志願すれば、カチューシャ様は第三者の私を意識してゴロドクへのアプローチを諦めたでしょう」

「『第三者』つて……それじゃ、ノンナは?」

「ノンナ様は既にカチューシャ様にとって家族も同然……いいえ、家族以上に素直な自分を出せる相手です。正直なところ、あの合間に入るのが私の目的なのですが達成できる気がしません」

「……そこまでなのか」

ゴロドクは以前、カチューシャが自分とノンナを仲良くさせようと自宅に食事を作りに来た日の事を思い出した。今思えば、あれはゴロドクに自分の家族を紹介するような感覚だったのだろう。

確かにあの二人の間に入り、ノンナより優先順位を上げるのは不可能に近い試みだ。クララなりに悩むところはあるのかもしれない。

湯船に浮かぶ白い乳房に吸い寄せられる視線を意識して逸らしつつ、ゴロドクはクララに言った。

「それじゃあ、二人からは隠れたままクララは動くのか？」

「ノンナ様とは携帯で連絡を取っていますが、カチューシャ様には内緒です。偽名でチェックインは行っていますし、動きが重ならないように立ち回ります」

なるほど、あの宿帳に書かれていた外国人の名前はクララの偽名だったか。ゴロドクは頷き、ふとある事に気付いて言った。

「あー、って事は悪い事したな。二人が外を見て回っている間に温泉に浸かろうとしてたんだろ？」

ノンナと連携を取っているという事は、彼女らが旅館から離れている事も把握している筈だ。

カチューシャが気まぐれで「温泉に入ろう」とか言い出した場合、温泉に浸かっている状態から咄嗟に隠れるのは難しくなる。だから今の内にクララは温泉を利用していただ。ゴロドクはそう判断した。

「悪い。俺は中の風呂に行くから、クララはゆっくり浸かってくれ」

そう言っただけでゴロドクは湯船から立ち上がろうとした。

だが、その手がきゅっと掴まれた。

「違います、ゴロドク」

「違うっ?」

クララーがその身を寄せてくる。ゴロドクは少したじろぎつつも尋ねた。

「……お待ちしていました」

温まっている筈のゴロドクの身体に震えが走った。

腰を落としたゴロドクに、クララーは更に身を寄せてくる。湯に濡れた彼女の艶やかな肌が直接ゴロドクの肌に触れ、乳房の豊かな弾力が伝わってくる。

「ク、クララー?」

「ノンナ様から『ゴロドクは温泉に向かうでしょう』とメールをいただきましたので、ちよつと先回りしていました」

「それって……ど、どういう、事だ?」

いや、「どういう事」かは既に気付いていた。自分が温泉に入ると知っておきながら、タオルひとつ身に着けずに湯船で待ち構えていた。これで「ただお話をしたかっただけ」という訳はあるまい。

クララーは微笑んだ。少し顔が上気しているのは、温泉にの熱さに因るものだけだろうか。

「ゴロドク……こうして貴男に触れるのも、暫くぶりですね。先日の打ち合わせの時も、本当に打ち合わせだけで終わってしまいましたし」

実際、無限軌道杯に突入してからはノンナやクララーと個人的に接する機会は大幅に減っていた。

連日の仕合と演習に加え、二人ともカチューシャの下でN.O. 2、N.O. 3としてメンバーの指導や管理も行わなければならない立場である。それでいてちゃんと学生として授業も受けねばならないのだ（戦車道の大会中、学校側も多少の融通は利かせてくれはするが）。必然、朝は早く、夜は遅くまで戦車道漬けとなり、ゴロドクからすればセックスはおろか普通に話をする事も難しい状態が続いていたのだ。

また、優勝した事で大会後も彼女らは多忙な状況だった。戦車道関

連メディアの取材を受け、支援者へのお礼回りを行い、ここに来てようやく慰安旅行のプランを固められる余裕ができた感じだ。

「うっ……！」

お湯の中、クララーの指がゴロドクの太腿に触れた。そのまま付け根まで這い上がり、既に半勃ち状態だった肉棒に触れる。それだけでびくりとゴロドクの肉棒は跳ね、クララーの指の中で膨らみ始める。「ちよ、クララー、まずいつて……！」

「大丈夫です。今は私たち以外のこの宿の利用者は居ませんし、ここは古くから著名人の逢引き宿としても使われていたそうで」

「ふおっ！」

きゅつと肉棒を柔らかく握られ、ゴロドクは思わず声をあげた。

クララーの瞳が潤み始めていた。温泉の湯気の独特な香りに、彼女の身体から放たれる妖艶な気配が加わりゴロドクの脳髓を刺激する。

「恥ずかしながら、私も少し溜まってしまっていて……カチューシャ様たちが戻って来られるまで3、4時間かかるそうです、それまでの間、ゴロドクを独り占めさせていただこうかと」

「な、なあ、クララー。ひよつとしてこの旅行、カチューシャを出汁だしにして、ノンナと二人で俺から搾り取るのが目的とかじゃ、ぐっ！ ないよな？」

「……さて、どうでしょう？」

「(否定しないのかよ!）」

お湯の中でクララーの手がゴロドクの肉棒を滑らかに扱く。ちやぷちやぷと水面に波が立ち、その波は次第に激しさを増してゆく。

ゴロドクからしても、クララーから手淫をしてもらうのは久しぶりである。新鮮な刺激に肉棒はびくびくと震え、今にも射精してしまいそうだ。

「ク、クララー、ヤバイ、出るっ……！」

「ふふっ、まだ我慢してください」

そう言うときクララーは手の動きを止めると縁の岩に手を置き、そのまま腰をゴロドクに向けた。

「どうぞ……私の一番奥に、ゴロドクの、一番濃いのを下さい……！」

「(うおお……!)」

湯に濡れた肉付きよいクララーの尻がゴロドクの眼前に突き出される。秘所はおろか、ひくつく尻穴まで丸見えだ。臍に貼り付く勢いで勃起している肉棒に自身の手を添えつつ、ゴロドクは立ち上がった。

「分かった。いくぜ」

「は、はい……んっ……!」

赤黒い亀頭がクララーの女陰へ押し当てられる。波立つ湯が時折肉棒にかかり、心地よい温みを与えてくれる。外気の寒さは相変わらずだが、それが気にならない程に今のゴロドクは昂っていた。おそらくはクララーもそうなのだろう。挿入を待ち侘びるようにその腰をくねらせ、亀頭だけではなく全体を迎え入れようと自分から肉棒に秘唇を擦りつけてくる。

「……本当、エロくなつたよな。クララー」

「お嫌い……ですか?」

「いや……大好きだ」

「あ、ありがとう、ごぎ……ンンツ!」

ずぶずぶとゴロドクの肉棒がクララーの秘所に挿入されてゆく。クララーは強まった快感に嬌声を漏らしつつも、ゴロドクの肉棒全体を無数の襞で舐めまわすように刺激してゆく。相変わらずの名器に、ゴロドクの腰が震え危うく射精しそうになる。

「ぐうっ!」

「い、いいですっ! ゴロドク、奥、来て……っ!」

それを何とか堪え、ゴロドクは腰を動かし始めた。温泉で十分に温まったクララーの身体は何時も以上に暖かく、具合がいい。

「(こりや、まずいな……) クララー、一気にいくぞ!」

「え? んっ! あっ、ふああっ!」

強まる射精感が限界に達する前にクララーを絶頂に導こうと、ゴロドクは荒々しく腰を振った。じゅぶじゅぶと水音が結合部から響き、腰を突き入れると時折亀頭がクララーの子宮口に触れる。クララーは激しく悶え、結ばれていた髪が解けて背に貼り付く。濡れた金髪が

白い肌に美しい光沢を与え、湯と汗で更に濡れてゆく。

「ぐっ、うっ、うおっ！」

「はっ、はひっ、ゴロ、ドクッ！ いいっ！ 私の中、一杯にっ！ ああっ！」

獣めいた声をゴロドクが漏らすと、クララも雌そのものの嬌声で応える。クララの膣内の動きが激しくなり、強く肉棒を締め付け始めた。彼女も絶頂に近い。

「出すぞ、出すぞっ、クララっ！」

「来て、来てくださいっ！ 全部、奥に、出して……あんっ！ ああんっ！」

「うっ、うあっ！」

「……………っ！」

どくどくとゴロドクの奥から溢れた精液がクララの子宮へと迸った。精液の熱い奔流が容赦なくクララの子宮へと叩き付けられる。

「うおっ、ま、まだ、出るっ……………」

「あっ、ひいっ！ ゴ、ゴロ、ドクう！ はあっ！」

それを受け、クララも絶頂に達した。一際強く肉棒を締め付けたかと思うと、一滴残らず搾り取ろうと襞がより奥まで導こうとする。

「あ、は、はあっ……………」

幾度かの射精感を経て、硬度を弱めた肉棒がクララの秘所から抜き出された。

「あ……………」

クララは身体を回し、ゴロドクに正面を向けると温泉の縁に腰かけ、そのまま身体を引いた。

「クララ？」

「湯船に、ゴロドクのを零す訳にはいきませんから……………んっ……………」

ごぼりとクララの秘所から精液が溢れてくる。手近にあった洗面器を手に取り、クララは自分の身体に湯をかけた。

まだ力が入らないのだろう。投げ出された脚の間から覗く秘所からは、ゴロドクが大量に吐き出した精液が更に零れてゆく。

「うっ……」

その様に、射精したばかりというのにゴロドクの肉棒は早くも固さを取り戻し始める。

「……………♪」

クララは艶やかに微笑むと、ゴロドクに言う。

「ゴロドク、その……私も一度では物足りないのです、もう一度、よろしいですか？」

カチューシャ達が戻ってくるまで、あと3時間ほど。

「あ、ああ……その、こっちこそ、頼む」

果たして、この旅行が終わるまでに自分の身体は持つだろうか。そんな事を頭のどこかで考えつつも、ゴロドクは頷いていた。

第三話

「うん……良い味ね。新鮮さも十分」

「青森港から当日競り落としたものを直送しているそうです。コースも魚と肉が選べますから、事前に確認しておけば多少の好き嫌いも緩和できるでしょう」

浴衣姿のカチューシャが鮪の赤身を醤油に浸して口に入れ、それを吟味する。同じく浴衣姿のノンナが手帳を広げつつそこに何かを書き加える。

「ねえノンナ、うちにアレルギー持ちはいたかしら？」

「夏の合宿の際には居なかったかと思えます」

手帳を置き、ノンナは手元の山菜の胡麻和えに箸を向けると口に入れた。カチューシャは刺身を食べ終えると、今度は鯛のあらが入った吸い物を少し口に含む。

「ずずつ……で、ねえ、ノンナ」

「はい」

「ゴロドクが食べているアレは、私たちには出ないの？」

「……あれは旅館のキャンペーンの、男性専用メニューだそうでした」
カチューシャの問いかけに、ノンナは少しだけ視線をゴロドクに向けると答えた。

「ふうん……ゴロドク、そっちの味はどうかしら？」

「ま、まあ……悪くは、ないかな」

そう言いつつゴロドクは眼前の、固形燃料に熱せられた小さな土鍋の中に浮かぶスッポン肉を箸で摘まんだ。

既に時刻は夕方。外は暗く、街灯や旅館の灯りが周囲を弱く照らすばかりである。

暗くなる少し前にカチューシャとノンナは周囲の施設の見回りを終え、戻ってきた。クララとの温泉での三回戦を終えてゴロドクが部屋に戻ってきた直後の話だ。

そして今、少しの休憩を挟んで彼女らは旅館の料理を吟味してい

た。二人には同じものが運ばれ、ゴロドクには別の料理が。

その料理のラインナップは、あまり料理に詳しくないゴロドクでも容易に「その意図」を察せられるものであった。メインディッシュにスツポン鍋、ニンニクのホイル焼き、とろろ汁、生薬が煎じられたと思われるお茶もついていて、酷く苦いが飲むだけで身体が暖かくなつてゆくようだ。明らかに精力増強のためのレシピである。

「……クララだな」

これを全部食べたなら鼻血を噴き出すんじゃないだろうか。そんな事を思いつつもゴロドクは料理を食べてゆく。流石老舗旅館と言うべきか、味は非常に美味しい。食べ慣れない料理だというのに抵抗なく箸が伸びる。

これがクララの言う「バックアップ」のひとつである事は間違いない。料理を置いてゆく時の仲居さんの意味ありげな目配せが、何よりそれを物語っていた。

まあ、確かに予想外のクララとのセックスで少なからず消耗していたのは事実である。苦みの強いお茶でニンニクの臭いを流しつつ、ゴロドクは一息ついた。

「それでカチューシャ、これから二人はどうするんだ？」

「とりあえずはお風呂に行ってくるわ。旅館の人にも聞きたいこともあるわね」

「そっか……何か、手伝える事は無いかな？」

「大丈夫よ、カチューシャたちで……」

「そうですね……ただ休んで貰っているだけでは逆に疲れるでしょう。ゴロドク、貴方には旅館内の施設や自販機、売店の商品のチェックをお願いできますか？ 土産物だけでなく、肌着や生理用品の有無も確認してください」

ゴロドクの言葉にカチューシャは手を振って答えたが、そこに割り込むようにノンナが言った。怪訝な顔でカチューシャがノンナを見る。

「ノンナ？」

「旅館の方への確認は私がやりますから、カチューシャは途中でゴロ

ドクと合流を」

「……………」

そう言いつつ、ノンナはカチューシャに視線を送った。その意味を理解したのかカチューシャの顔が赤くなる。

このままではカチューシャとノンナは常に二人で行動し、ゴロドクはゴロドクで独りのままとなる。ノンナはカチューシャとゴロドクが二人きりになるシチュエーションを作ろうとしているのだ。

「ま……………まあ、分かったわ。頼んだわね、ゴロドク」

「あ、ああ……………」

ぎこちなく話を振るカチューシャに、やはりぎこちなくゴロドクが答える。

そこからの食事は言葉も少なく、やがて全員が食べ終わった。

「……………行ってくるわね」

「分かった。仲居さんが膳を持って行ったら、俺も行ってくるよ」

カチューシャが視線を逸らしたまま言う。

「遊びついでで結構ですので、ゆっくり調べてください」

それに続けてノンナはそう言うと、カチューシャの視線がこちらに向いていないのを確かめて少しゴロドクに近づいた。

「心構えをお願いします、ゴロドク」

「わ、分かっているって」

小声で言葉を交わし、ノンナはカチューシャの後を追う。

残されたゴロドクは一人考えた。あと数時間でカチューシャを抱く。カチューシャも、そうしようとしている。

「……………腹を決めないとな」

そう思いつつ、ゴロドクは膳の上の皿をまとめ始めた。

「……………」

「……………」

浴衣姿で廊下を歩くカチューシャとノンナ。互いに前を向き、目線を合わせないまま無言で二人は浴場へと向かう。

50 cm近い身長差と、カチューシャの歩幅に合わせてノンナがゆっ

たりと歩くさまは知らぬ者が見れば実際親子に見えるであろう。

「……カチューシャ」

「わ、分かってるわ」

ノンナが横目でカチューシャに言うと、顔をうつむかせつつカチューシャは答えた。無限軌道杯を優勝し、この下見にゴロドクを同行させる事に了承した時点でカチューシャもこの「趣旨」を理解しているし、それも含めて覚悟をしている。少なくとも、プラウダ戦車道の会議室でクララを含めてこの話をした時の彼女は覚悟を決めていた。

しかし、ここに来てその覚悟が揺らいでいる事にもノンナは気付いていた。仕方のない事ではあった。カチューシャの事を思つての行動を契機に結果としてゴロドクと関係を持つようになったノンナや、ノンナの変化に興味を持つてゴロドクを捕獲して抱かれようとしたクララのようなパターンの方が大概イレギュラーなのだ。元々カチューシャが抱える「コンプレックス」を知るノンナには、彼女の不安や動揺はよく理解できた。

しかし、この下見はあくまで一泊二日の短い旅行である。今晚を逃せばハードルは更に上がるだろう。それで心残りしたままカチューシャをロシアに行かせる事は、ノンナとしても避けたかった。

「(奇妙なものですね……)」

自分の変化に今更ながらノンナは思いを馳せた。カチューシャの貞操を守ろうとしてゴロドクに抱かれる事を選択したはずの自分が、この数ヶ月を経て彼女がゴロドクに抱かれるように動いている。

そう思う間に、二人は浴場まで辿り着いた。脱衣所に入り、浴衣を脱いでゆく。

「……どうしました、カチューシャ？」

「な、何でもないわ」

ふと、ノンナは自分の胸元へと視線を向けるカチューシャに気付いた。顔を向けるが、誤魔化すようにそっぽを向く。

小柄な身体とそれに見合った慎ましやかなプロポーションは、他の事に置いて完璧なカチューシャが唯一抱えるコンプレックスだ。「子

供のような外見だけで、相手はまともに話を聞いてくれない」そういう場面に幾度も遭遇した彼女は努力を重ね、外見に関わらず意見を通せるだけの立場と人物になろうと努め、今こうしてプラウダ戦車道の名隊長となった。

しかしながら、身体的なコンプレックスというのはそれだけで払拭はできないものだ。今でもカチューシャがぶら下がり体操などで身長を伸ばす努力をしている事もノンナは知っている。そしてそのコンプレックスが今回、最大の障害となっていた。カチューシャは自分の精神や知性に自信は持てているが、身体に関しては自信を持っていない。それが「自分の身体でゴロドクに抱かれていいのか。彼を満足させられるのか」という不安に繋がっていた。

「なかなかどうして、難しいものですね」

そう思いつつ、ノンナは先に浴室へのガラス戸を横に開きカチューシャを促した。

「へえ……いいお風呂ね」

「露天もあるようですが入られますか、カチューシャ？」

「うーん……外はもうかなり冷えているし、まずは中で十分温まってからね」

「承知しました。かけ湯をしますので、カチューシャはそこにお座りください」

入口付近に小さな湯船がある。そこから手桶で湯を掬うと、ノンナは台に腰かけたカチューシャの背にゆっくりとお湯をかけた。続けて自身にもかけ湯。張りのある豊満な乳房をやや持ち上げ、胸の下のところにも湯をかける。

「ふう……やっぱり身体が冷えていたみたいね、よく沁みるわ」

「そうですね。ここは疲労回復に効く天然温泉だそうですので、ゆっくり浸かりましょう」

とととととタイルを歩き、中央の大浴槽の段差の部分に腰かけつつカチューシャが大きく息をついた。ノンナも黒髪を簡単にまとめ、湯船に身をゆだねる。

「……ねえ、ノンナ」

少しの躊躇いを見せつつも、カチューシャはノンナに言った。優しく微笑みつつノンナは答える。

「はい、何でしょうか？」

「その……前にノンナは言っていたわよね、『もう男性を知っている』って」

「……はい、そうです」

「言い辛かったらいいんだけど……『最初』って、どんな感じだったの？」

「それは……」

赤面しつつカチューシャはそう聞いてきた。ノンナは少しだけ返答に困り、言葉を濁した。

困った事になった。カチューシャは嘘に対しては敏感だ。ここで完全な作り話をして彼女も違和感を感じるだろう。クリスマスのプレゼントをゴロドクと買いに行つて遭遇した時のように、幾つかの真実を織り交ぜなければどこかで違和感に気付かれる。

「い、嫌ならいいわ！ カチューシャも無理に聞こうとは……」

「いいえ、大丈夫です。カチューシャ」

黙考を「言いづらそうにしている」と判断したのだろう。発言を引つ込めようとするカチューシャをノンナは押し留めた。

「そうですね……もう何年か前の事ですが、それで良ければ」

「中学の頃だったの？」

「ええ。もう相手は別の学園艦に行ってしまったって、交際もありませんが」

まずはカチューシャと会う以前という事にする。彼女と会って以降はほぼ共に行動していたので、流石に無理があるからだ。

「ええつと……や、やっぱり、最初って痛かった？」

「そこまではありませんでした。確かに強い圧迫感などは感じましたが、受け入れる前までで丁寧に解されましたから」

「解され……ま、まあ、そうよね、そういう事をするんだものね」

「ここは本当だ。『初体験』と呼ぶには余りに強烈な内容であったが、それによりノンナは今まで知らなかった自身の中の快感を引き出

された。

淀みなく答えるノンナの言葉に、カチューシャが逆に動揺を見せる。その初心うぶな様子をノンナは素直に可愛いと思った。

ノンナはカチューシャに問いかけた。

「カチューシャ。貴女はどの程度知っていますか？」

「ええ!? そ、それは……ど、同志たちが読んでる雑誌に載っている程度は、知ってるわ」

「だとすると……大凡のイメージは出来ているようですね」

少女向けハイティーン雑誌というのは、同世代の少年向け雑誌に比べて遥かに発展的だ。表立って興味を示せないセックスについての知識や情報についても少なからず網羅されている。それらを読み知っているという事は、カチューシャはセックスに対して知識的なところは十分備えているのだろう。

「知ってはいるわ。でも……」

カチューシャは視線を自身の身体に向けた。18歳の高校生としては余りに小柄な、127cmの凹凸の全くない自分の身体を。

「お言葉ですが、カチューシャは自分の身体の事を気にしすぎです。同志ゴロドクも、貴女を嫌っていたなら今回の同行も拒否したでしょう。自信をお持ちになってください」

励ますようにノンナは言った。

カチューシャは顔を下に向け、何かを考えているようだった。

やがて、彼女は決意したように顔を上げるとノンナに言った。

「……ノンナ、お願いがあるの」

「どうも、ありがとうございます。ええと、コーラとアンパンも貰えますか？」

「ありがとうございます」

売店の商品のチェックを終え、ゴロドクはお礼に買った商品の袋を手に出した。

「……あれ？」

「そつちも終わったみたいね、ゴロドク」

浴衣姿のカチューシャが、少しの緊張を見せつつもこちらに歩いてくる。それだけならば予想していた展開だ。

しかし彼女の背後には、やはりこれも浴衣姿のノンナが立っていた。濡れた黒髪を拭いつつ、その瞳はゴロドクに向けられている。

確かこの分担は、ゴロドクとカチューシャを二人きりにする為ではなかったか？　ゴロドクは疑問を顔に浮かべつつも二人を迎えた。

「お疲れ。そっちも温泉の確認は終わったみたいだな」

「ま……まあね、いい温泉だったわ」

「……………」

ノンナの表情に僅かの困惑が見える。ゴロドクはそれが気になったが、カチューシャが居る手前では言葉も交わしづらい。

そんな事を考える間に、カチューシャはゴロドクを促すと歩き始めた。

「さ、部屋に戻るわよ」

「あ……ああ、分かった」

それを数歩後ろから追いつつ、ゴロドクはノンナに小声で尋ねた。

「(段取りと違ってないか?)」

「(……カチューシャの話を聞いてあげてください)」

それだけ答えると、ノンナもカチューシャの後ろにつき部屋へと向かう。

首を傾げつつもゴロドクは二人の背を追った。やがて部屋に戻り、居間で腰を落とす。

「お疲れ様、ゴロドク」

「いや、ちよつと話を聞いてメモを取った程度さ」

机を挟まず、カチューシャはゴロドクの横の座椅子に座った。

「……………」

カチューシャが大きく息を吸う音。

いよいよか。ゴロドクは腹に力を籠めると座椅子を回し、カチューシャの方を向いた。

果たしてカチューシャも、ゴロドクの方を向いている。ノンナはその後ろで正座し、こちらの様子を見守っている。

ノンナが同席していて良いのだろうか？ そうゴロドクが疑問を感じる間もなく、カチューシヤが言った。

「そ、その、ゴロドク……改めてになるけど悪かったわね。卒業前で忙しいのをお願いして、一緒に来てもらって……」

「いや、その事なら大丈夫だって言っただろ？」

「まあ、そうなんだけど……」

「……………」

「……………」

言葉が途切れる。

ゴロドクはこちらから問いかけたい気持ちを抑え、カチューシヤの言葉を待った。

「ゴ、ゴロドク！」

「あ、ああ!？」

カチューシヤは突如として大声をあげた。

「……………この下見に来てもらったのには、もう一つ理由があったの」「理由？」

「ええ……この慰安旅行が終わったら、カチューシヤはすぐにロシアに行く事になる。大学を卒業しても、ロシア戦車道を学ぶのは続かわ。戻ってくるのは何年後になるか分からない」

ゴロドクをしつかりと見ながらカチューシヤは言葉を続ける。

「だからそれまでに……ゴロドク、貴男に、カチューシヤの「初めて」の人になってほしいの」

「カチューシヤ……ちよ、ちよつと待ってくれ!？」

思わずゴロドクは声をあげた。拒否されたのかとカチューシヤの顔に怯えが浮かぶ。

「だ、駄目なの、ゴロドク？」

「いや、そうじゃなくって……その、いいのか？ 後ろに、同志ノンナが……」

それがゴロドクを動揺させていた。カチューシヤは自分とノンナの関係を知らない。ノンナの前で「自分を抱いてほしい」と言う事にカチューシヤは抵抗が無いのだろうか？

「あ……そ、それなんだけど……」

ゴロドクにそう言われ、カチューシャは初めてゴロドクの反応の理由に気付いたのだろう。後ろのノンナに視線を向け、改めてゴロドクに向き直る。

「その……ゴロドク。ノンナに傍に居てもらったまま、してほしいの」
「はい!？」

予想外にも過ぎる提案に、ゴロドクの声が跳ねる。

しかし、カチューシャの表情はあくまで真剣だった。膝に置いた小さな手が震えている。

「こんな事言ってるけど、カチューシャはまだ、不安で仕方ないの。ゴロドクに嫌な思いをさせないか、満足してもらえないんじゃないかって」

「そんな事は……」

「ノンナとは、高校に入ってきてからずっと一緒だった。戦車道でも、楽しい時も、苦しい時も、家族以上に一緒に居てくれた。だから……カチューシャにとつて一番大事なこの時にノンナが一緒だったら、きつとこの不安も無くせる。そう思うの。ゴロドクには、迷惑かもしれないけど……」

「……………」

ゴロドクは言葉を失い、ノンナを見た。いつもの口調で危うく話しかけ、慌てて他人行儀な言葉に変える。

「その、ノン……ど、同志ノンナ。あんたは、その、いいのか？ 俺とカチューシャのに、混じるとか……」

「カチューシャがそう仰るなら」
即答が返ってきた。

カチューシャがそう望み、ノンナも許可すると言うのならゴロドクに反論の余地はない。当初のイメージとは大幅に異なる展開になってきたが、それでもゴロドクは腹を括った。

「……分かった。じゃあ、隣に行くか」

「え、ええ……」

「分かりました」

ゴロドクが腰を上げると、二人もそれに続く。

襖を開け、隣の寝室に行くところには大布団に「三つ」の枕が用意されていた。

親子と勘違いした旅館スタッフの気遣いだろうか？ いや、これもおそらくはクララーの手筈だろう。

彼女が事前の打ち合わせで「カチューシャにセックスに対して自信が無い方が好都合」と言っていたのはそういう事か。ゴロドクは今更ながら彼女の言葉を思い出した。

「ええと……じゃ、やるか」

「よ、よろしく……」

掛布団をめくり、ゴロドクは敷布団の上に胡坐をかいた。その前でカチコチになったカチューシャが座る。ノンナはその二人の間で、見合いの立会人のような位置に腰を落とす。

「(さて……まずはこの緊張を解かないとな)」

ゴロドクは眼前のカチューシャを見た。まるで怒る親を前にした小学生のように身を固め、視線を膝に落としている。

ゆっくりと腰を上げ、ゴロドクはカチューシャの肩に手を置いた。びくりと小さい肩が跳ねる。

「ひっ……」

「……」

ゴロドクはそのまま、無言でカチューシャを抱きしめた。柔らかく手を背に回し、ぽんぽんと柔らかく叩く。

「あ……」

「大丈夫」

それだけ言い、ゴロドクは今度は頭を撫でた。サラサラした金髪の感触が心地よい。しばらくの間、ゴロドクはそうしていた。

「んっ……」

「……大丈夫だ」

カチューシャの口から吐息が漏れる。次第に緊張が解け、肩の震えが静まってゆく。

ゴロドクは肩に手を置いたまま、顔を近づけた。

「……いいか？」

「き、聞かないで……ンツ……」

薄い唇にゴロドクは柔らかく口を当てた。最後のデートでもしなかった、唇へのキス。そしてこれから、色々なところにキスをする。

「ンツ……ふうっ……」

「んはっ……カチューシャ……」

まだ舌は使わない。唇を当てるだけのキスを繰り返す。浴衣越しにカチューシャの身体が熱くなってゆくのを感じる。

子供のような小さな手を、壊れないように握る。指を絡め、彼女の肌のきめ細やかさを確かめるように撫でる。

「(まだ、もうちよつと……)」

舌を伸ばし、カチューシャの歯茎を舌で撫でる。ぴくりと初々しい反応が返ってくる。

「ふあっ、ゴ、ゴロドク……はあっ……い！」

「カチューシャ、舌、出して……」

おずおずとした感じで伸びてきたカチューシャの舌に、ゴロドクの舌が絡みつく。ちゅぷちゅぷという唾液の音が耳朶にやけに響く。

何十秒、何分そうしていただろうか。ゴロドクが唇を離すと、カチューシャは倒れ込むようにゴロドクの胸板に力なくもたれた。

「はあっ……はあっ……」

大きく息をするカチューシャ。そのうなじは赤く火照り、彼女の身体の初めての興奮を示している。ゴロドクの股間は未だ完全な勃起には至っていないかったが、その様子に肉棒がぴくりと反応する。

「……触るぜ、カチューシャ」

「え……んんっ！」

はだけた浴衣の隙間から手を差し込み、平坦な胸に触れる。滑らかな肌は汗ばみ、ゴロドクの掌を濡らす。

僅かな膨らみの先端で可愛らしく震える小さな乳首に触れると、カチューシャの身体は大きな反応を返した。

「ん、んんっ……い！」

無意識に身をよじるカチューシャ。体の緊張はかなり解れてきた

が、まだ完全ではないようだ。

その反応に、ゴロドクは傍らのノンナを見た。

「ノ……同志ノンナ、いいか？」

「……はい」

ノンナは素早く察すると、腰を落としたままカチューシャに身を近づけた。

「ノ、ノンナ……？」

「大丈夫です、カチューシャ。私が一緒です」

本当の母親のような優しい声と共に、握り締められたカチューシャの手に触れる。

それだけで彼女の緊張は瞬く間に和らぎ、握られていた手が広がってゆく。

「あ、あ、ノンナ……」

「大丈夫です、ゴロドクは、優しくしてくれます」

すっかり緊張の解けたカチューシャの反応を感じつつ、ゴロドクは思った。

「(本当にノンナのこと、信頼してるんだな……)」

そして、そのノンナが自分を信頼してくれている。ならばカチューシャをしっかりと満足させねば男として失格であろう。

「……ああ、最高の思い出にしよう、カチューシャ」

「ゴロド……ああ、ああっ！」

薄桃色の乳首にゴロドクの舌が触れる。

未知の刺激に、カチューシャは小柄な身体を震わせた。

第四話

——斯くして、冒頭の状況に至る。

ノンナの助けを得つつ、ゴロドクはカチューシャの身体を丁寧に愛撫していった。以前クラララの処女を奪った時よりも繊細に、かつ綿密に。

高校生としては成熟した肉体を持っているクラララに比べカチューシャの秘唇は遥かに小さく、狭い。対して勃起したゴロドクの男根の大きさは少なくとも標準か、それ以上ある。十分に解し、濡れさせなければカチューシャに痛みを与えるだけになってしまいうだろう。破瓜の痛みを完全に無くす事はできないだろうが、それでも最小限に留めたいとゴロドクは思っていた。

「ハア、ハア………」

そして、その粘り強い試みは着実に実を結びつつあった。彼女が信頼するノンナの愛撫によって、カチューシャの陰唇は透明感のある愛液によって濡れ、ノンナの指が挿入する程度には緩んできている。

「……そろそろ、でしょうか」

その反応を測るようにノンナはカチューシャを見つめると、すつと身体を離れた。彼女の片手を握ったまま視線をゴロドクに向ける。

「ゴロドク、もう大丈夫なはずです。カチューシャの処女を、貴男が奪ってください」

「……………」

「ごくり」とゴロドクの咽が鳴った。腰を落とし、カチューシャの折れてしまいそうな華奢な脚に手を添える。

ゆつくりと脚を広げると、愛液に濡れたカチューシャの小さな秘所はひくひくと震え、ゴロドクの肉棒を待ち受けるように更に愛液を滲ませる。その反応に、ゴロドクは彼女が「子供」ではなくれっきとした「女性」なのだと理解した。

しかし、それでもなお怒張したゴロドクの肉棒を受け入れるにはカチューシャの身体は小さく、そして狭く思えた。今にも挿入したがる

股間からの衝動に耐えつつ、ゴロドクは腰を止める。

「ゴ……ゴロ、ドク……！」

その考えが伝わったのだろう。カチューシャは潤んだ瞳でゴロドクを見上げると、懇願するように言った。

「お、お願い、来て……」

「……ああ、分かった」

既に彼女は覚悟している。ここまで女性の側からお膳立てさせて腰を引いては、男として失格であろう。

ゴロドクは息を呑み、カチューシャの秘唇に亀頭を押し当てた。

「ンッ……！」

カチューシャが喘ぐ。くちくちと亀頭の先端で幾度か陰唇を擦ると、ゴロドクの先走りとカチューシャの愛液が混ざってゆく。

「行くぜ、カチューシャ」

「……！」

こくり、とカチューシャが頷く。ゴロドクは腰に力を入れ、そのまま肉棒を突き入れる。

「（……あれ？）」

その瞬間、カチューシャの身体が少しずり上がった。狙いを外した亀頭がクリトリスを撫でる。

「ンンッ！ も、もう、入ったの？」

「いや……すまない、まだだ。もう一回……」

目を固く閉じたままカチューシャが尋ねる。ゴロドクは答えると、再び腰を突き入れた。

「……あれ？」

思わず声が出る。またカチューシャの身体がずり上がったのだ。

「ど、どうしたの？」

「いや、カチューシャ……カチューシャの身体が上に行ってる。これじゃ挿いらない」

「え、ええ？」

戸惑いつつカチューシャは眼を開いた。手を握ったまま傍らのノンナが言う。

「カチューシャ、怖くないですから……」

「わ、分かっているわよ！」

彼女の反応からして、カチューシャは本当に意識せず動いてしまっている。無意識に身体が異物の挿入を拒み回避しようとしているのだ。

「(これじゃ駄目だな……)」

ゴロドクは内心で頭を抱えた。

強く押し掛かれれば彼女の動きを止める事はできるだろうが、カチューシャの身体はゴロドクに比べ二回り小さい。如何に戦車道で身体を鍛えていると言っても、ゴロドクの全体重がかかれば流石に苦しいだろう。今も彼女の身体に重さがかからないよう、腕立て伏せのようにカチューシャの頭の上あたりに手を置き、何とか腰の動きだけで挿入しようとしているのだ。

「ご、ごめんなさい、ゴロドク……」

「いや、仕方がないって」

申し訳なさそうに言うカチューシャにゴロドクは首を振って答える。しかしどうしたものか――

「……ゴロドク、一度横になってもらって良いですか？」

その時、何か思いついたのかノンナが言った。

「え？ あ、ああ」

何を思いついたのかは分からないが、ノンナの発想なら間違いはあるまい。ゴロドクはとりあえず素直に従い、カチューシャから身を離すと布団の上に横になった。仰向けになった身体に、勃起したままの肉棒が屹立して存在感を示している。

ノンナはカチューシャの手を取ったまま彼女の身を起こし、ゴロドクの身体へと促した。

「ノンナ？」

「無意識に動いてしまうなら、逃げようのない体勢で結ばれるのが一番かと」

「……！」

ここまでの快感で紅潮していたカチューシャの顔が真っ赤になる。

ノンナの言葉の意図を理解したのだろう。そして、その反応でゴロドクもノンナが何をしようとしているのか理解した。

「うう……」

ごくりと息を呑み、カチューシヤは柱のように屹立するゴロドクの男根へと視線を向けた。ゴロドクの内心の嗜虐欲が刺激されたのか、竿がぴくりと跳ねる。

その反応にノンナは柔らかく、しかし有無を言わせぬ強さを込めて言った。

「……カチューシヤ」

「へ、平気よ……」

そう言いつつ、カチューシヤはその小さな身体でゴロドクに跨ると胸板に手をあてた。大きく脚を広げて膝立ちになり、片手で身体を支えつつ一方の手をゴロドクの肉棒に添える。

「な、なあ、カチューシヤ……」

明らかに強がりを見せているカチューシヤをゴロドクは制止しようとした。その一方で、女兒めいたカチューシヤの手を添えられた肉棒は背徳的な状況に更に昂りを見せている。自分の一部とはいえ勝手なものだ。

「……ゴロドク」

カチューシヤの身体が止まる。

「あ、ああ……もつと、ゆっくりやって行こう、そんなに焦っても……」

「カチューシヤが、こっとうしたいの」

そう言っていると、カチューシヤはそのまま一気に腰を落とした。

「うっ、ぐあっ!?!」

「くっ、くうっ……!」

ノンナやクララとは比較にならない強烈な締め付けと粘液の熱さを唐突に受け、うめき声にも似た喘ぎをゴロドクは漏らした。一方のカチューシヤも大きく身体を震わせながら、それでもゴロドクの肉棒を全て納めようと更に腰を揺する。

彼女の手を握りつつノンナが言った。

「カチューシヤ、もう少しです……」

「ノ、ノンナ……！ 強く、握っていて……あああつ！」

ぷちぷちと何かが千切れるような感触を肉棒に感じる。カチューシャの処女膜を亀頭が押し広げているのだ。ゴロドクは彼女を気遣い何かを言おうとしたが、肉棒から届く強烈な刺激が言葉を許さな。それだけカチューシャの秘所は熱く、狭く、そして気持ちよかつた。

「ううつ、カ、カチューシャ……す、凄い……っ！」

「くうつ……は、入ってくる、ゴロ、ドクのが……！」

カチューシャの顔が苦しそうに歪む。しかし彼女の腰は更に下が、遂にはゴロドクの男根を完全に呑み込んだ。

「あ……は、はあ……っ！」

「……お見事です、カチューシャ」

ノンナが握る手の力を緩めつつ言う。カチューシャは大きく息を吐きながら、未だ治まらない圧迫感と刺激を堪えているようだ。

「ど、どう、ゴロドク……カチューシャの、中は……？」

「ああ……キツくて、暖かくて、凄く、気持ちいい……！」

「そ、そりゃ、当たり前じゃない……このカチューシャは、全部、完璧なんだ、からあ……！」

痛みも感じているだろう。しかしカチューシャは汗ばんだ顔で、震えながらも不敵に笑った。

早く終わらせて、カチューシャを解放させたい。そう思い、ゴロドクは腰を揺すった。それだけでカチューシャが大きく跳ねる。

「ふああっ！」

「カチューシャ、すまない。早く、終わらせるから……」

「……！」

「うおっ!？」

声をあげたのはゴロドクの方だった。

初めてで、挿入の直後で疼きも治まっていないだろうにカチューシャは自ら腰を振り、ゴロドクの肉棒に刺激を与え始めたのだ。

「カ、カチューシャ!？」

「お願い、ゴロドク……カ、カチューシャで、もつと気持ちよく、なっ

て……カチューシヤのこと、忘れ、ないでっ……!」

結合部から愛液と先走り、それと僅かな血液が混じったものが溢れ出る。カチューシヤの腰の動きが激しくなるのに合わせその量は増してゆく。

「……カチューシヤ!」

ゴロドクは自分の胸板にあてられていたカチューシヤの手をとり、強く握った。同時に自分からも腰を突きあげる。カチューシヤの未熟な膣内を肉棒が押し広げ、奥の子宮口に亀頭が乱暴にキスをする。

「ああんっ! ゴ、ゴロ、ドクツ!」

「……忘れない。絶対に忘れない。だからカチューシヤ。お前も感じてくれ。俺の、全部っ!」

「ふああっ! ゴロドク、ゴロドクツ!」

カチューシヤの身体がゴロドクの上で踊る。片手はゴロドクと、もう片手はノンナと繋がりながら、身長127cmの小柄で華奢な身体が男性器を受け入れ、快感と苦悶の入り混じった表情で悶える。それはゴロドクの中の欲情を一層熱くさせてゆく。

「ゴロドクツ、ゴロドクっ!」

「ああ、カチューシヤ! 俺は、ここにいるっ!」

「あっ、はあっ! ひああっ!」

カチューシヤの声にゴロドクが答える。最早相手を気遣う余裕もなくゴロドクは腰を突きあげる。

「……カチューシヤ、失礼します」

手を握りつつ、ノンナがカチューシヤの背後からゴロドクに跨った。カチューシヤの僅かな膨らみを見せる乳房を柔らかく撫で、首筋に舌を這わす。

刺激が連動しているのだろうか。ノンナの動きに合わせて膣内が収縮し、ゴロドクは声を漏らした。

「うっ、くうっ! し、締まるっ!」

「ノ、ノンナ……!」

「……私も、一緒です」

「あ、ンツ、ああっ!」

びくびくとカチューシャの身体が震える。破瓜の痛みを快感が上回りつつある。ゴロドクはカチューシャの手を握ったまま、気持ち捏ねるような動きを加えつつ彼女の小さな膣内を蹂躪してゆく。

「あっ！ ああんっ！ ゴロ、ドクうっ！」

「ああっ、一緒だ！ 俺も、ノンナもっ！」

思わずノンナを呼び捨てている事も忘れ、ゴロドクは更に腰を動かす。同時にノンナは胸や首筋や耳、唇などを丁寧に愛撫してゆく。カチューシャは白い肌を火照らせ、同時に与えられる快感に嬌声をあげながらも腰を止めない。ゴロドクに自分の身体で感じてもらうと、猥身的に腰を振る。

やがて、一際強くカチューシャの締め付けが強くなってきた。絶頂が近づいている事を察し、ゴロドクは言った。

「カ、カチューシャ、そろそろ、イカせる、から……！」

「くうっ！ だ、駄目っ！ ゴロ、ドク、貴男も、うあっ！ ぜ、全部、

カチューシャの、中に……！」

「い、いや、それは……っ！」

「大丈夫、だからっ！ しゃ、射精しないと、ゴロドクの方は、駄目、なのよね？ だったら、カチューシャの中に、全部……全部、出してっ！」

「ぐっ、ぐうっ！」

今まで近所に住んでいる幼い少女のように思い接してきた少女が、自ら腰を振って射精を求める。その状況に、否応なくゴロドクの股間からぞくぞくと快感が昇ってくる。

「うっ、うおおっ！ カチューシャあっ！」

「あっ！ はあっ！ やっ、ああっ！ ゴ、ゴロ、ゴロドクうっ！」

こつこつと連続して子宮口に龟头が当たる。急激に迫る射精感と、自分の手を強く握るカチューシャの手の感触を覚えつつゴロドクは遂に絶頂に達した。

「ぐっ、で、出るっ！」

「ふあっ、あ、はああっ！」

どくどくと溢れ出る精液がカチューシャの未踏の子宮内を満たし

てゆく。同時にカチューシヤも絶頂に達したのだろう。根元から竿を強く絞るような膾内の動きと共に、カチューシヤは背を反らし、舌を出して悶絶した。

「……………」

「ああ…………お、お腹、一杯に、来てる…………ゴロドクの、一杯…………」

恍惚とした声を漏らしつつ、カチューシヤは糸が切れた人形のようにゴロドクの胸板に倒れかかった。

「ふう…………」

タオルを頭の上に置き、ゴロドクは岩風呂の中で大きく息をついた。この時間に露天風呂が使えるようになっていいるのもクララーの氣遣いだろうか。

初めての絶頂を知ったカチューシヤが汗を拭い、そのまま寝てしまったのはつい十数分前の事だ。

「まだ火照ったままですし、少しカチューシヤの身体を涼しくさせてから寝かせます」

団扇を片手にカチューシヤの寝姿に柔らかな風を送りつつ、ノンナはそう言うのとゴロドクを見送った。先程まで身体を交えていたというのに、慈愛の目で団扇をあおぐノンナの姿はやはり親子めいて見える。

そして、ゴロドクは汗を流しに浴場に來ていた。最後、カチューシヤとノンナの二人を上に乗せての腰の突き上げは流石に少し堪えた。腰周りの肉を湯の中でマッサージしつつ、ゴロドクは夜空を見上げた。

冬の夜空は寒い分澄んで見えると聞くが山奥というのもあるのだろう、見事な星空が広がっている。オリオン座程度しか分からなかったが、その見事さにゴロドクは圧倒された。戦車道メンバーの慰安旅行の本番では、この夜空を見てため息をつく少女もいるだろう。

「…………それが終わったら、お別れか」

カチューシヤとも、ノンナとも、そしておそらくはクララーとも。

それは仕方ない事だと分かる気持ちもある。戦車道の名門校とし

て知られるプラウダ高校の戦車道において、数多の戦車乗りの頂点に立つ三人のエリート。そもそも自分とは世界が違うのだ。

——だが、それで納得できない気持ちがある事も否定できなかった。

果たして、自分はこのままで良いのだろうか。「住む世界が違うんだから仕方ない」と割り切つて、ただこの半年だけの思い出として忘れてゆくに任せる事が本当に最良の選択肢なんだろうか。

「……………」

「星を見ている割には、随分と陰気な顔をされていますね」

「占星術で悪い結果でも出ましたか？」

「へ？」

唐突に声をかけられ、星から声の方向へと視線を下ろす。

「!？」

そこには、バスタオルを巻いたノンナとクララーが立っていた。止める間もなくゴロドクの浸かる湯船に入ってくる。

「ど、どうしたんだよ二人とも？」

「どうしたも何も……私も少なからず汗をかきましたから。カチューシャも熟睡しましたし、丁度良かったので」

「私もひと仕事終えましたから、汗を流そうかと」

「…………お疲れ様でした」

そう言われればゴロドクは何も言えない。実際、彼女らの協力が無ければ自分とカチューシャは気まずい空気のまままで終わっていただろう。

だが、何だかんだで付き合いの長い彼女らである。ゴロドクは、もう一つの疑問”を尋ねた。

「それで、俺が出てくる前に入つて来た理由は？」

「…………なかなか鋭くなりましたね、ゴロドク」

「ふふっ、ノンナ様の影響でしょうか？」

クララーが楽しそうに微笑む。湯船に浸かったままのゴロドクに、

二人は左右から迫る。右の二の腕にはノンナの豊かな重みある胸が、左にはクララーの白く弾力ある胸が押し当てられる。

「カチューシャとゴロドクが結ばれる様を前に私も感じていたのですが、やはり直接ゴロドクを受け入れないと、身体が満足しないようです……」

「私も、ひと仕事終えた『報酬』をゴロドクから戴こうかと」

「あの、俺、さつき頑張ったばかりなんだけど」

「……ゴロドク、あの夕食を完食されたのなら、まだまだ余裕でしょう。むしろ、治まり切っていないのでは？」

「うっ……」

そう言うときクララーはゴロドクの股間に滑らかな指を伸ばした。果たして、ゴロドクの肉棒は先ほどの射精が無かったかのように逞しく勃起している。

湯船の中でゆらめきつつも存在を示すゴロドクの肉棒に視線を向けつつ、ノンナが言った。

「これならまだ、大丈夫そうですね」

「……とはいえ、ゴロドクの言う事にも一理あります。一番頑張ってくれたのは確かですし、ここは先にゴロドクに『報酬』を差し上げた方が良くもしませんね」

「報酬？」

怪訝な顔をするノンナにクララーが耳打ちする。ノンナは少しだけ眉を動かしたが、了承したのか頷く。

クララーは今度はゴロドクに顔を向けた。

「ゴロドク、そこに腰かけてもらっていいですか？」

「へ？ ええつと……これでいいのか？」

クララーが指さしたのは岩風呂の縁だった。彼女の意図が読めぬまま、ゴロドクは言われる通りにそこに腰かけた。

ノンナとクララーの二人が、身に巻いていたバスタオルを外す。幾度も身体を重ねる度に見飽きる事のない魅力的な二人の肢体が露になる。

二人は膝立ちの態勢で腰かけるゴロドクへと近づくと、左右からま

るで跪くようにゴロドクの脚に身体を押し当てた。畢竟、湯気に濡れる乳房は肉棒に触れんばかりまで近くなる。

「では始めましょうカ、ノンナ様」

「いきますよ、ゴロドク」

「ふおおっ!?!」

突然、肉棒を左右から弾力ある乳房で挟み込まれゴロドクは身を跳ねさせた。

「ここではローションはありませんので……」

「くっ、熱っ……!」

そう言いつつ、クララーが手桶で湯を汲んで肉棒と乳房に振りかける。湯を浴びた亀頭がひくひくと脈動し、二人の豊満な乳房の谷間からひよっこりと頭を出している。

「呼吸を合わせますよ、クララー」

「お任せください、ノンナ様」

「いや、ちよ、待って、これ……うわっ!」

制止する間もなく、ゴロドクの肉棒は四つの乳房によって扱かれ始めた。ノンナの重量感ある乳房が竿全体を締め上げたかと思うと、クララーの弾力ある乳房が跳ねるように鈴口を撫でる。何より、日頃クールな姿しか人前に見せないプラウダ戦車道のNo. 2、No. 3を務める二人の美しい才女が豊かな乳房を互いに押し当てつつ自分の肉棒を刺激する様は、堪らない征服感をゴロドクに与えていた。

「ふあ……む、胸が熱くなってきました……如何ですか、ゴロドク?」

「ああ、さ、最高だっ……ノンナの胸も、クララーの、胸も……!」

「ふふっ、光栄です、それではノンナ様、次へ……はむっ」

「分かりました……んっ」

「……!」

身を寄せ、互いの乳房を押し当てて竿を締め付けつつ二人の少女はゴロドクの亀頭を舐め始めた。クララーがカリの裏を舐め上げると、ノンナは舌先を尖らせてつつくように鈴口を弄る。ゴロドクは声をあげる事もできず快感に震えた。

されるがままのゴロドクの反応をノンナも楽しんでいるようだっ

た。切れ長の瞳を潤ませ、口の端から涎を溢しつつも亀頭への刺激を止めない。

「ま、まずい、イクっ……………」

「お湯に出してはいけませんよ、ゴロドク。42度以上の温度で精液は固まってしまいます……………ノンナ様、貴女に譲ります」

「恐縮です、クラーラ……………構いません、ゴロドク。私の口に吐き出してください」

「そんな……………くうっ!？」

Wパイズリによる心地よい圧迫感に加え、今度は亀頭全体が柔らかいものに包まれた。ノンナがかぷりと亀頭を口に含んだのだ。

十分に昂っていたゴロドクの快感はそこで頂点に達し、腰をびくびくと震わせつつゴロドクは達した。

「イ、イクっ!」

「……………!」

先ほどのカチューシャへの射精に勝るとも劣らない大量の精液がノンナの口腔内に迸った。苦しそうに眉をひそめつつも、ノンナはそれを躊躇なく嚥下してゆく。

幾度もの射精感を終えようやく最後のひと噴きを終えたのを確認すると、ノンナは尿道に残る精液を吸い取るように口をすぼめ、本当に湯船に精液を一滴も落とすことなく肉棒を解放した。

「ケホっ……………ゴロドク、出し過ぎです」

「わ、悪い……………」

「さて、これでゴロドクへの『報酬』もお渡しできましたし、次は……………私たちに、いただけますか?」

蠱惑的な笑みをクラーラは浮かべ、再び湯船にゴロドクを誘う。

「……………ああ、俺で良ければ」

『『貴男だから』ですよ、ゴロド……………んんっ!』

湯船に揺れる豊かな乳房に吸い付かれ、ノンナが喘ぎを漏らす。

——やっぱり、違う。ここで彼女らと別れるのは、最良の選択肢ではない。

再び固さを取り戻してゆく肉棒を自覚しつつ、ゴロドクはある決意を胸に二人の柔肉を弄り始めた。

〔エピローグ「春のモスクワにて」に続く〕

エピソード 春のモスクワにて

小銃の発砲音めいた、走行不能を示すフラッグ射出音が雪原に響く。

「……それまで！」

観戦席に座る、パンツァージャケット姿の数十人の少女。何人かは日本人やアジア系だが、大半はロシア系白人の少女たちである。

その最前列で双眼鏡を手に状況を確認していた、隊長の徽章を着けた20過ぎと思われる女性がマイクを手に声を放った。見てみれば雪原のあちこちにはスピーカーが設置されており、そこから雪原上で戦っていた戦車たちに彼女の声が届くようになっていく。

「お、終わったのね……」

「……手荒い歓迎でしたね」

車体の各所に擦過痕を残したT-34/85と、それを守るように位置する、やはり満身創痍のIS-2。

それぞれのハッチが開き、顔に疲労を浮かべたカチューシャとノナが顔を出す。

スピーカーからは、少し海外特有の訛りを残しつつも流暢な日本語で声が流れてきた。

『大したものね。新入生への“歓迎会”とはいえこちらもそれなりのメンバーを揃えたのだけど、ここまで粘り強いとは思っていなかったわ』

「いいえ……あと一発撃たれていれば、終わっていたのはこっちだったと思います」

マイクを通してカチューシャが答える。

『ノンナさん、貴女のIS-2の狙撃も見事だったわ。こちらの支援砲撃の位置をよく予測できたわね』

「去年のプラウダ高校との親善試合では痛い目を見ましたから。ですが、今日が晴天でなければ一撃での撃破は難しかったですよ」

涼しい顔で答えるノンナ。

『今年が良い子たちが来てくれたみたいで、私としても楽しみになってきたわ！ 走行不能になった戦車はこちらで回収するから、貴女たちも戻ってきなさい。今度は本物の歓迎会。暖かいボルシチとウオツカを用意して待つてるわ』

「え!?! あ、あの、隊長。カチュ、ええと、私たちは未成年だけど……」
『それは日本の話でしょ？ ロシアでは18歳から飲酒は認められているわ。試合の後は敵味方問わずウオツカで乾杯して互いを労う。これがロシア戦車道の流儀よ』

「……………」

「……………どうやら、この後の『歓迎会』も覚悟が要りそうですね、カチューシャ」

言葉を失うカチューシャに、ノンナは薄い苦笑を浮かべつつ言った。

モスクワの春は遅い。

日本では桜が咲き乱れる四月上旬でも時折雪が降り、道のあちこちには雪かきによる小山が残っている。

半面、緯度が高いこともあり日没もかなり遅い。夕方過ぎでも日は残り、街灯無しでも十分に明るい程だ。

「うう……………」

「もう少しで家ですよ」

その夕闇迫る通りを、小柄な少女を背負いつつ帰路に就く長身の女性。カチューシャとノンナである。

「も、もう大丈夫、歩けるわ……………」

「無理はされないでください」

「……………もつとウオツカを飲み慣れないといけないわね」
「酒の強い弱いは体質的なものですから、強引に飲むものでもありません。薄めたものやノンアルコールでカチューシャは十分かと」

実際、カチューシャは酒を強引に薦められて酔いつぶれた訳ではない。歓迎会の最初の一杯のウオツカで真っ赤になった彼女は、そのま

ま寝息を立てて横になってしまったのだ。その後、ノンナに介抱されつつ現在に至る。

——二人がプラウダ高校を卒業し、学園艦を降り、春休みもそこそこにシベリア平原を越えてモスクワに着いたのはほんの数日前の事だ。

カチューシャがロシア戦車道への招聘を受け、ノンナにも同様にロシアの大学戦車道への推薦の話が持ち上がったのは無限軌道杯優勝を記念した慰安旅行を終えた暫く後の事であった。

もともとノンナの卓越した狙撃力や副隊長としての指揮能力については戦車道関係者も注目していたが、それをカチューシャの「彼女も共に呼んでほしい」という推薦が後押しした格好である。

無論この件においてノンナからも異存は無く、プラウダ戦車道に名を残した二人の戦車乗りはかくしてロシア戦車道を共に学ぶ事になった。

そして今日がその初日だったのだが——早速彼女らは手荒い「歓迎」を受けた。新入生チームと先輩チームに分かれての模擬戦である。

日本人の戦車乗りに対しての色眼鏡や言葉の行き違いなどの諸問題もあったが、何とかカチューシャとノンナは搭乗員を含む他の新入生を認めさせ、試合を制したのだ。

「それにしても、今日の試合は疲れたわ……」

「クララーが居れば、まだ違ったのでしょうけどね」

この場にクララーは居ない。

彼女は「卒業後はお父様の仕事を手伝います」と言っ、学園艦を降りていった。彼女の父は諜報関係の仕事をしていると聞くが、この都市に居るかも定かではない。

やがて二人はひとつのマンションへとたどり着いた。セキュリティを解除し、階上へ向かう。安全性なども考慮し、二人はルームシェアでの生活を始めている。

「んっ……」

カチューシヤを背負ったままノンナは部屋の鍵を開け、室内へに入った。

まだ住み始めたばかりのリビングは広く、簡素だ。テーブルと椅子、そしてベッドがあるだけである。それ以外の家具や日用品は実家から送ってくるものと現地で購入するもので半々になる予定だ。

ノンナはゆっくりとカチューシヤを下ろし、そのままベッドへ寝かせた。着たままだった厚手のパンツアージャケットを脱がせ、胸元を緩めさせる。

「ありがとう、ノンナ」

「いいえ。私も少し回っているみたいですので、休むとします」

そう言うノンナは自身のジャケットを脱ぐと、カチューシヤと同様に自分のベッドに横になった。夕闇の中、二人の寝息だけが聞こえる。

「ねえ、ノンナ」

「何でしょう、カチューシヤ？」

「ゴロドクは、どうしているかしらね」

「……さて、青森の大学の何処かに進学しているとは思いますが」

伍堂六郎、通称ゴロドク。

慰安旅行の下見を終え、別れてから——彼とはまともに会っていない。

留学についての様々な手続きや準備などでノンナ達が多忙を極めていた事もあるが、ゴロドク自身も学内で姿を見なくなったのだ。卒業前という事もあり単位的には問題なく卒業はできたようだが、その後の岐路については彼女らの耳には全く入ってこなかった。

カチューシヤと交わり彼女に思い出を残した事で、下手にそれ以上関係を深くして迷いを生むのを避けたのではないか。ノンナはそう分析していた。

「……ノンナ」

カチューシヤの声。ノンナはそれに答える。

「はい、何でしょうか」

「ノンナも、ゴロドクの事が好きだったの？」

「!?」

一瞬、ノンナは身を固くして息を止めた。数秒の沈黙の後、ゆっくりと言葉を返す。

「……………何故、そう思うのですか？ カチユーシヤ」

『あの時』……………カチユーシヤがゴロドクと、その……………した時、ノンナ、少しも恥ずかしそうにしていなかったじゃない。その前の、カチユーシヤのプレゼントを買いに行っていた時も珍しく、おめかししていたし……………ゴロドクの事、ノンナも気になっていたのかな、って……………」

既に半分眠っているのだろう。問い詰めるでもなく、浮かんだ言葉をそのままカチユーシヤは言っているようだった。

ノンナはその顔に少しだけ憂いを浮かべ、答えた。

「……………そうですね、そうだったのかも……………しれません」

「そう……………」

「怒りますか？」

「ううん……………カチユーシヤは、そんな、事、言わないわ……………むしろ、ノンナが同じ人を、好きなら、嬉し……………すう、すう……………」

カチユーシヤは言葉を言い終える前に眠りについたようだった。

「……………」

ノンナはカチユーシヤの寝顔を見つめていたが、やがて寝返りを打ち彼女に背を向けた。毛布を被り、自身も眠りに落ちようとする。

「んっ……………」

身体が疼いている。ノンナはそろそろと手をスカートの中に差し入れ、自身の秘所をショーツの上からなぞった。

奥から熱いものがこみ上げてくる。それは酒によるものだけではないだろう。

「ゴロ、ドク……………んっ、んはっ……………」

更に少し強く撫でる。全身に刺激が走り、吐息が漏れる。

胸も張ってきているようだ。ノンナは空いた手でシャツの上から自身の手に余るサイズの胸を揉んだ。痺れるような快感が乳房から伝わってくる。

「ゴロドク……ゴロドクっ……！」

だが、足りない。この手は『あの人』の手ではない。

カチューシヤに声が聞こえないように毛布を頭から被りつつ、ノンナは自身を慰めた。

翌朝、曇天だった空は見事な青空へと変わっていた。昨晚の酔いを残さずにノンナは覚醒し、カチューシヤを起こした。

「ふああ……良く眠れたわ。樽には聞いていたけど、ウオツカは回るのも早ければ覚めるのも早いわね」

「おはようございます、カチューシヤ。今日は休みですし、ゆっくりと過ごされてはどうでしょう？」

「そうね……」

ウオツカを痛飲した翌日は戦車道を休む、これもロシア戦車道の特徴だ。歓迎会では隊長を始めとする先輩方は結構な飲み方をしていた。おそらくは今朝もまだベッドの中だろう。

「……？」

その時、インターホンのチャイムが鳴った。時計を見れば午前9時。こんな時間に来客だろうか？

ノンナは怪訝な表情で通話ボタンを押した。

「はい、どなた様でしょうか？」

『え、ええっと……こちら、カチューシヤ、さん……と、ノンナさんのお宅で、しょうか？ 日本から、の家具を、届けに伺った、のですが』

雑音混じりの男性の声が流れてくる。

ノンナは眉をひそめた。酷くたどたどしいロシア語だ。外国からの出稼ぎだろうか。

カメラに映るのは、大手宅配便の制服を着て帽子を目深に被った配達員。その後ろには確かにカチューシヤが実家に頼んでいた、彼女のサイズに合わせた机と椅子が台車に乗せられ、別の配達員が支えている。ノンナは頷くと応答した。

「はい、そうです。今、エントランスを開けますからお待ちください」
『す、すみま、せん……』

やはり配達員はたどたどしく言うと、台車へと向かった。ノンナは通話を切り、セキュリティを解除する。

しばらくしてドアがノックされ、二人の配達員が家具を室内に運び入れてきた。

「この度はご利用いただき、誠にありがとうございます。どちらにお運びすれば良いですか？」

「そうですね、それではあちらの部屋の角にお願いできますか？」

どうやら、配達員のもう一人は女性だったようだ。こちらは流暢なロシア語で話しかけてくる。最初から彼女が対応すればよかったのでは、そう思いつつもノンナは指示を出した。

指示を受けた場所に置かれた小ぶりな机と椅子に、早速カチューシャは腰を下ろした。

「……うん、やっぱりこの大きさがしっくり来るわね。据え付けの家具は丈が外国サイズでいけないわ」

満足そうにカチューシャが頷く。

その様子に微笑まじさを感じつつ、ノンナは差し出された配達票にサインを走らせた。

「ありがとうございます。もう大丈夫です」

「はい、またお願いします」

「……………」

「……………」

ノンナの表情に警戒が浮かんだ。作業を終えたと言うのに、配達員が帰る気配がない。

万一の際はカチューシャを守ろうと、彼女との間の動線を遮りつつノンナは言った。

「まだ何か、ありましたか？」

「……………」

女性配達員は何が面白いのか、口元に微笑みを浮かべたまま何も言わない。

やがて、もう一人の男性の配達員が驚いたように言った。

「……驚いたな、本当に気付かれてない」

「そう言うものです。『此処にいる筈がない』という思い込みは、それだけ認識を妨げます」

涼しい口調で女性配達員が言う。ノンナは二人に尋ねた。

「あなた方、一体何を……」

「いや、だから、ええつと……」

ノンナの警戒に戸惑うように男性配達員は言うのと、目深に被っていた帽子を取った。

「こういう事って、言うか……」

つい昨晚、自慰の時に思い浮かべた顔がそこにあった。

「ゴ、ゴロドク!?!」

椅子に座ったままのカチューシャが驚きの声をあげる。ノンナは同様に驚きながらも女性配達員の方を見た。という事は――

「まさか……」

「お久しぶりです、ノンナ様、カチューシャ様」

「クラーラ!?!」

帽子を取ると、どうやって隠していたのが長い艶やかな金髪が流れるように現れる。

配達員の服を着たクラーラは澄ました表情で一礼した。

「どういう事!?! ゴロドク、貴男、何でここに居るのよ!?! 大学は!?!」

当然の如く尋ねてくるカチューシャに、ゴロドクは頭をかきつつ答えた。

「ああ……その、俺、浪人する事にしたんだよ。ロシア語を本場で覚えて、来年カチューシャ達と同じところに合格しようって思ってた。親を説得したり色々準備したりで、まともに説明できなかつたのは悪かつた」

「それじゃ、クラーラは?」

「ええつと、何て言えばいいか……」

「『雇い主』と生きていただけで構いません。生活費を自分で稼ぐと彼は言っていました。日本人独りで身寄りもなく生活するのは厳し

いですから……私やお父様の「お仕事」を手伝っていたただく代わりに相応のものをお渡しして、またロシア語のレッスンもさせていただいています」

「ど、どうだった？ さっきのロシア語の挨拶？」

不安そうに聞いてくるゴロドクに、ノンナは思わず口元をほころばせた。

「……酷いロシア語でした。0点です」

「そ、そっか……」

「しかし、贈り物としては100点です」

ノンナはカチューシャを見た。

椅子に座ったままのカチューシャは泣きそうな、それでいて嬉しそうな、そんな笑顔を見せた。

「ば、馬鹿な事をしたものね……来年、合格しなかったらどうするのよ？」

「絶対に合格する。一年遅れになるけど、絶対にカチューシャと一緒に居る」

ゴロドクはそう言うと、一瞬だけノンナを見た。

ノンナはその視線をしっかりと受けた。それで十分だった。

カチューシャは椅子から降りると、小柄な身体でその腕を精一杯まで広げ、ゴロドクの身体に抱き着くと顔を埋めた。

「……ありがとう」

それだけ言うと、カチューシャは静かに泣いた。

「で、これは一体……」

その一時間後。

テーブルを囲み、互いの現状を話していたはずが——ゴロドクは、ベッドの横で全裸になっている自分に気が付いた。

いや、確かに久しぶりの邂逅でありカチューシャやノンナと肌を重ねたいと思っただけだ。しかし、その想定と現状は大きく違っていた。

「ちよ、クラーラ、何で貴女まで一緒なのよ!？」

そう、既に衣服を脱ぎ華奢な身体を露わにしているカチューシャ、豊満な身体を惜しげも無く晒すノンナに加え、雪の如く白い肌を見せるクララーまでも一緒に居るのだ。

「カチューシャ様とゴロドクが慰安旅行の下見で身体を重ねたのは察していました。敬愛するカチューシャ様を選ばれた殿方がどのようなものか、私も興味がありました」

自分が仕込んだ事だというのに涼しい顔でクララーは言う。つくづく彼女は自由に奔放だ。ゴロドクは思った。

「如何でしょう、カチューシャ様？　ここまで彼を連れてきた事に免じて、私も加えてはいただけないでしょうか？」

「うう……」

痛いところを突かれカチューシャは言葉に詰まった。助言を求めるようにノンナを見る。

ノンナはあくまで落ち着いた口調で答えた。

「ゴロドクが良いのであれば、私としては特に異論はありません。彼女の功績は認めねばなりません」

「どうなの、ゴロドク？」

「い、いや、まあ、俺としても雇い主には失礼はできないって言うか……」

言葉を選びつつゴロドクは答える。カチューシャは困り顔のまま、諦めたように息を吐いた。

「……分かったわ、クララー。特別よ？」

「ありがとうございます、カチューシャ様」

嬉しそうにクララーは一礼すると、いそいそとゴロドクの腰の前に跪いた。

「さて、それでは」

「ま、待ちなさいよクララー！　何してるの!？」

慌てて彼女を止めようとするカチューシャに、逆にクララーは不思議そうに首を傾げた。

『何を』と言われましても……このままではゴロドクも事が出来ませんし、まずは元気になっていただこうかと」

「うっ……！」

そう言いつつ、クララーは眼前で揺れる半勃起状態のゴロドクの肉棒に触れた。ぴくりと亀頭が反応を見せる。

クララーの慣れた反応に、思わずたじろぎつつもカチューシャは抗議した。

「うう……だからって、その、貴女が真っ先に行くところじゃないでしょ？」

「それでは、カチューシャ様がゴロドクにして差し上げるのですか？」
「え!? そ、それは……そ、そうよ! このカチューシャが最初にしてあげるのが筋つてもものでしょ!」

「(……クララー、こうなると分かって誘導したな)」

彼女の突然の行動と提案の意図を測りつつ、ゴロドクはカチューシャを見た。

視線を受け、カチューシャは顔を赤くしつつもゴロドクに歩み寄った。ノンナやクララーでは膝立ちになるところだが身長120cmちよつとのカチューシャの場合、顔を下に向け、腰を少し落とす体勢になる。

「ゴ、ゴロドク、いくわよ?」

「あ……ああ、頼む……あまり強くしないで、アリスを舐めるみたいな感じで……」

「……わ、分かったわ」

カチューシャが息を呑む心配がゴロドクにも伝わってくる。彼女の処女を奪った時も、ここまで間近に突き付ける事は無かった。幼女めいたカチューシャの外見も合わかり、ぞくぞくするような背徳感が刺激となってゴロドクの背を這い上がってくる。

「凄いい形……こんなものが、カチューシャの中に入ったのね……ん、んはっ……」

「うおっ……」

カチューシャの小さな舌がおずおずとゴロドクの亀頭に触れる。それだけでゴロドクの肉棒には血が集まり、昂ってゆく。その反応にカチューシャは驚き、尋ねてきた。

「ごめんなさい、痛かった!？」

「いや、大丈夫……そんな感じで、もつと、舐めてみてくれ……」

「ええつと……こ、ことう？」

ゴロドクの表情で、自分が快感を与えられている事を理解したのだろう。カチューシャは先ほどより大胆に亀頭に舌を這わせてきた。

「少し、しよっぱいわね……んっ、あむっ……」

戸惑いながらも亀頭を舐めしゃぶるカチューシャの舌使いはどこかもどかしく、しかしその初々しさがゴロドクに興奮を与えていた。

「……カチューシャ、お手伝いします」

「く、くうっ! ノンナっ!」

ふと見れば、カチューシャの右まで来たノンナがゴロドクの足元に横向きに跪いていた。亀頭を舐めまわすので手一杯の彼女を補助するように、舌を伸ばすとゴロドクの肉棒の竿の根元から舐め上げるように動かしてゆく。同時に来る二つの刺激にゴロドクは呻き、十分に充血した肉棒は一際膨らむと反り返った。

「ふおっ!？」

直後、ゴロドクは今度は更に下からの別の刺激に思わず声をあげた。ノンナとは逆側に回り込んだクララが玉袋を舐め始めたのだ。竿を直接舐められるのは異なる快感を受け、肉棒がびくびくと跳ねる。

「ま、待った! 三人一緒じゃ、これ、準備じゃなくて、このまま……!」

「この程度で弱音を吐かないでください、ゴロドク。カチューシャは貴男の事を待っていたのですから」

「そ……そうよ、少しは、カチューシャが我慢してたの程度は我慢なさい。んっ、んちゅ……」

「うおおっ!」

亀頭が熱く、柔らかいものに包まれた。一杯に口を広げたカチューシャが亀頭を呑み込んだのだ。彼女の口に入らない竿の部分は引き続きノンナが舌を絡め、唾液と先走りが肉棒を濡らしてゆく。

「カ、カチューシャ、それ、ヤバっ……!」

「ンツ、ンンツ……!」

「お、お上手です、カチューシャ……はむっ、はあっ……」

「お綺麗です、カチューシャ様、ノンナ様……ふあ、れろっ……」

「ぐっ、くうっ!」

不慣れながらカチューシャは口腔内で亀頭を舐めまわし、鈴口を弄る。クララは袋を舐めるのからノンナと同様の竿舐めに移行し、左右から同時に肉棒を舐めてゆく。

三人の美少女と同時に肉棒を責められる。その快感はゴロドクの腰の奥から思った以上に早い射精感を促した。歯を食いしばり何とか堪えようとするが、それでも抑えようのない衝動がこみ上げてくる。

「だ、駄目だっ、出るっ! カチューシャ、口、離して……!」

「カチューシャ、離してはいけません。そのままゴロドクのを受け止めてあげてください」

「……ンンツ!」

「っ!」

真逆の指示にカチューシャは一瞬だけ戸惑いを見せたが、ノンナのアドバイスを優先したのだろう。苦しうにしながらもカチューシャはゴロドクの肉棒を更に奥まで含んだ。喉奥に亀頭が当たる感触が伝わってくる。

堪らずゴロドクはカチューシャの頭に手を添えると、耐えていた射精感を解放した。

「うあっ! で、出るっ、カチューシャっ、出るっ!」

「ンツ、んぷっ!?! んむう!?!」

「あ、はあっ……堪えてください、カチューシャ。そのままゆっくりと呑み込めば、咽ませんから……」

「うう……ふっ、ふうっ……」

どくどくとカチューシャの口腔内に精液が吐き出される。その勢いと量に咽そうになったカチューシャだったが、竿に舌を這わしつと言うノンナの言葉に、鼻で息をしつつそのまま精液を嚥下してゆく。

ゴロドクはこれ以上は苦しませまいと腰を引き、まだ射精の治まら

ない肉棒を彼女の口から抜いた。溢れんばかりに精液が満たされたカチューシャの口から引き抜かれた亀頭はびくんと震え、彼女の幼さを残す顔にも容赦なく白濁液を浴びせかける。

「ああ……ぶ、ぶめん、カチューシャ……」

「へ……変な味……苦くて、臭い……」

そう言いつつも、カチューシャは喉を鳴らしてゴロドクの精液を飲みこみ、微笑んだ。

「で、でも……これが、ゴロドクの味なのね」

「……！」

射精したばかりというのに、ゴロドクの肉棒はそのカチューシャの精液塗れの微笑みで固さを取り戻しつつあった。

「カチューシャ、お顔が……ん、はあ……」

「ノンナ……んっ、ンンッ……」

「カチューシャ様、こちらにも……ふう……」

ノンナがカチューシャの頬に顔を寄せ、彼女の顔の精液を舐めとつてゆく。唇にも寄せられる舌に、カチューシャは舌を出して返す。反対側の頬にはクララーが顔を寄せ、そちらも舐めとつてゆく。その淫靡な様子にゴロドクの肉棒は完全に硬さを取り戻した。

「それじゃ……今度はカチューシャの準備をしてやらないとな」

「え……う？」

彼女の顔の精液が舐めとられたのを確認すると、ゴロドクはカチューシャの身体に手を添え、ベッドの上へと促した。彼女には大きめのベッドに小柄な身体を横たえさせ、紅潮した肌と無毛に近い秘所に視線を向ける。

「ゴロドク、私たちはこちらで準備しておきますので、カチューシャの方をお願いします」

「ノンナ様の方は、もう準備が要らないかと思いますが……折角ですので、お相手させていただきましょうか」

ノンナはそう言うと、クララーの胸と秘所に手を伸ばした。クララーもそれに応え、ノンナの身体を愛撫してゆく。どうやらカチューシャへの前戯が済むまでの間に自分たちで濡らしておいてくれるら

しい。彼女らの気遣いに感謝しつつ、ゴロドクはカチューシャの脚に手を置き、ゆっくりと広げた。

「あ、あまり見ないで、ゴロドク……!」

顔を赤くしつつカチューシャが恥じらう。すぐにでも脚を閉じたそうに視線を逸らしているが、ゴロドクの視線を受けた秘唇はとろりとした愛液を滲ませつつあった。

「……可愛いよ、カチューシャ」

「そっ、そんな事をこんな時に言わないでよ!」

本心からゴロドクは言った。自分を想い、想うが故に分かれようとした“小さな暴君”を、ゴロドクはずっと可愛いと思ってきた。それはこうして、セックスをする関係になっても変わらない。

余計に恥ずかしくなってきたのかカチューシャが抗議の声をあげる。苦笑しつつ、ゴロドクはカチューシャの秘唇に舌を伸ばした。

「ごめんごめん、それじゃ……んっ」

「ふああっ!」

薄桃色の陰唇を舐められ、カチューシャの身体が跳ねた。男性器を受け入れたとはいえ、まだ未熟な秘所は慣れない刺激に戸惑うようにひくつきを見せる。ゴロドクは陰唇を舐めつつ、カチューシャの胸の僅かな膨らみへと手を伸ばした。先端で固さを増す乳首を丁寧に弄り、こりこりと固くなつてゆく感触を指先で楽しむ。

「ああっ、ゴ、ゴロ、ドク……それ、ンツ!」

「大丈夫、俺に任せて……」

クリトリスを舌先でつつき、奥へと舌を伸ばす。膣内からは次第に愛液がその量を増し、誘うように照り光り始める。

ゴロドクは横目でノンナ達の様子を見た。

「んっ、ああっ……ノンナ様、ま、また大きくなりました?」

「クララーも、女性らしく、なり……ンツ、はあっ……!」

互いの脚を交差するように交え、秘所を弄り合いつつ豊かな乳房を寄せ合うノンナとクララー。吐息も荒くなつてきている。ゴロドクとの3Pを含めて幾度となく体を重ねた関係だ。互いの興奮を高め合うツボも心得ているのだろう。

「あつ、ああつ！ ゴロドク……ふああつ！」

一方のカチューシャは華奢な身体を震わせ、秘所からの快感に身を悶えさせていた。既に軽い絶頂には達したようだ。

ゴロドクはカチューシャの秘所から舌を抜き、傍らのノンナ達に言った。

「……そろそろ、かな」

「わ、分かりました……こちらも、大丈夫です……」

「ふふつ、私も大丈夫です……ではカチューシャ様、ノンナ様、ゴロドクに『選んで』いただきましょうか？」

「え……選ぶ？」

カチューシャはその言葉の意味がよく分からなかったようだったが、クララの説明を聞くと既に赤くなっていた顔を更に真っ赤にして、しかし「彼を最高に興奮させられますよ」との言葉の前にその提案を呑み込んだ。

そして、ベッドの上でカチューシャ、ノンナ、クララの三人は並んでゴロドクに背を向けうつ伏せになり、そのまま腰を突き出した。

「さあ、ゴロドク。好きなところから挿入してください」

「……………」

悪戯っぽくクララが微笑む。しかしゴロドクにはその微笑みに苦笑で返す余裕は無かった。プラウダ高校戦車道でトップを飾った三人の才女が、自分の肉棒の挿入を待ち望んで腰を振り、尻を突き出してくる。それはゴロドクの支配欲を強烈に刺激し、肉棒を臍に当たりそうな程まで反り返らせた。

「わ、私からに決まってるわよね、ゴロドク!？」

小ぶりで肉付きも未熟、しかしそれ故に倒錯的な欲情を湧き上がらせるカチューシャの秘唇。

「……カチューシャは、もつと十分に広げてからの方が良いかと。まずは私で慣れておいてください」

18歳とは思えない成熟した肉体で、豊かな肉付きの尻の谷間から濡れた陰唇を覗かせるノンナの秘所。

言っている内容こそ努めて理性的であろうとしているが、ゴロドク

に向ける潤んだ瞳は「自分に最初に挿入してほしい」という無言の懇願を伝えてくる。

「私はどちらでも、でも……やはり、一番元気なゴロドクをいただければ嬉しいですね」

シミひとつない白い肌で、金髪に彩られた秘所を揺らしてゴロドクを誘うクララ。

三者三様にゴロドクを誘う様は、理性を溶かすに十分なものだった。

「(うおお……!) じゃ、じゃあ……」

ゴロドクは喉を鳴らし――

「うっ、うおっ!」

「あ、あ、ああっ!」

――ノンナの尻肉を掴むと、一気に奥まで挿入した。

「ちよ、ゴロド……くうっ!?!」

抗議しようとしたカチューシャの身体が震える。ゴロドクの指が秘所に触れ、ゆつくりと彼女の中に入ってゆく。小さなカチューシャの膣内は指を強く締め付けた。

「……やっぱりカチューシャのここ、もつと広げないと駄目みたいだ。ちよつと、待って……くっ、ぐうっ!」

「あつ、はあつ! ああんっ!」

ゴロドクは強い快感に呻きをあげた。ノンナが激しく腰を振ってきたのだ。全体を優しくも絞り上げるようにノンナの髀はゴロドクの肉棒を迎え入れ、そのまま逃がすまいと精液を求めて蠢く。

カチューシャへの指の動きを止めることなく、ゴロドクは身体を前に倒すとノンナの耳元へ口を近づけた。

「ああんっ! ゴロドク、ゴロドクっ!」

「(ノンナ、ちよつと緩めて……そんなに乱れたら、カチューシャが怪しむ……!)」

「……!」

少し我に返ったのだろう。ノンナは喘ぎを押さえ、荒い呼吸のまま唇だけを動かした。

「(ごめんなさい、ゴロドク……でも、我慢、できなかつたんです……)ンッ、ンンッ！」

「(……遅くなつて、悪かった。ただいま)」

「(……お帰りなさい) あんっ！ ああんっ！」

再びノンナは乱れ始めた。ゴロドクはカチューシャの中の指の締め付けが多少滑らかになったのを確かめると、ノンナの秘所から肉棒を引き抜き、今度はカチューシャの尻に手を添えた。

「お待たせ、カチューシャ」

「お、遅いわよ、ゴロ……ふああっ！」

「くうっ……し、締まる……！」

ずぶずぶとゴロドクの怒張した肉棒が、カチューシャの小さな秘所を容赦なく押し広げてゆく。ちぎれそうな程の強烈な締め付けにゴロドクは声を漏らしつつも腰を動かし始める。少しずつではあるがその中は愛液によって滑らかさを増し、圧迫感に圧倒されるばかりだったカチューシャの声にも甘い響きが混じり始める。

「ふああっ！ な、何、これ……奥から、熱いのが……！」

「お美しいです、カチューシャ様……ンッ!? ノ、ノンナ様!？」

「次は貴女です、少し熱くしておきましょう」

喘ぐカチューシャの顔を恍惚と眺めていたクララーの秘所をノンナの細い指が弄り始める。部屋に複数の喘ぎが響き、汗と愛液と精液の混じった淫臭が満ちてゆく。

やがてカチューシャの身体が大きく震え、絶頂に達する。

「あ、やあっ、ゴロドク、ゴロ、ドクうっ！」

「カチューシャ、カチューシャあっ！」

奥までの一突き。カチューシャはびくびくと身体を痙攣させると、力が抜けたのか大きく息をつくと言を落とした。ノンナとカチューシャの愛液に塗れた肉棒が抜けるが、勃起はしたままである。

ゴロドクは今度はクララーの白い尻を掴み、亀頭を彼女の秘所に押し当てた。

「お待たせ、クララー」

「いいえ、十分に眼福を堪能させていただきました……んああっ！」

「うおっ、あ、相変わらず……凄……！」

奥まで肉棒を突き入れられ、桃色の乳首を尖らせた豊かな乳房が揺れる。

クララの膣内の壁はゴロドクの肉棒を無数の舌で舐めまわすように、個々が別々の動きを見せてくる。ゴロドクは強く歯を食いしばり、迫る射精に耐える。

「くっ、うおっ、ぐううっ！」

「やっ、あ、ああんっ！ 素敵ですっ！ ゴロドクッ！ 固くて、熱くてっ！」

クララの汗に濡れた金髪が揺れ、頬に貼り付く。それは淫靡で、かつ美しかった。

腰の奥から痺れるような感覚が強くなってきた。一度射精したとはいえ、そろそろ限界か。

ゴロドクの射精が近いのが分かったのだろう。横のカチューシャが未だ桃源郷から戻ってきていない事をノンナは確認すると、ゴロドクに懇願した。

「お、お願いします、ゴロドク！ 最後は、全部私の中に入れてください！」

ゴロドクの精液で、私を……一杯にしてください……！」

「……ああ、勿論だ！」

「んっ……！」

ゴロドクはクララの秘所から荒々しく肉棒を引き抜くと、再びノンナの腰を掴み彼女の秘所へ再度の挿入を行った。

「うおっ！ うおっ！ ノンナっ、ノンナっ！」

「ふあ、はひいっ！ ゴロドク、ゴロドクっ！」

獣のような喘ぎを漏らしつつ、ゴロドクは夢中で腰を振った。ノンナもそれに強く応えるように肉棒を締め付け、そして腰を動かす。ベッドのシーツに愛液と先走りの混じった飛沫が染みを作ってゆく。亀頭が子宮口にこつこつと当たる程に二人は激しく交わり、そして、絶頂が来た。

「ノ、ノンナ、出るっ！」

「くださいっ！ ゴロドク、あああっ！ ゴロ、ドクうっ！」

「ぐううっ！ ノンナあっ！」

精管を通して大量の精液が迸る。ノンナの子宮を、膣内をゴロドクの精液が満たしてゆく。

「あ、は、はあ……」

「ハアツ、ハアツ……」

荒い呼吸のまま、ゴロドクはノンナの背に身を被せるように置いた。背中越しにキスを交わし、舌を絡ませてゆく。

その姿を見て、クララーは少し羨ましそうに言った。

「お美しいです、二人とも……でも、モスクワの一日は長いですよ？
もっと楽しむと致しましょう」

「……タフだな、クララーは」

「んはっ……貴男ほどではありませんよ、ゴロドク」

紅潮した肌を汗に濡らしつつ、ノンナが言う。

「……じゃあ、もうひと勝負といくか。カチューシャ、大丈夫か？」

「ふえ、へ？ ゴロドク……？」

この関係が健全なものだとは思わない。矛盾もあるだろう。

しかし彼女らを愛おしいと思う気持ち、これだけは本物だ。

ならば、それを矛盾も含めて抱えつつ、自分のいけるところまで行こう。

ゴロドクはそう心の中で呟き、カチューシャに目覚めのキスをした。

【暖炉よりもなお熱く 終わり】

番外編・例えばこんなノンナさん 独占欲だよノンナさん

涼し気な日差しがそそぐ昼下がりのカフェ。長身のウエイトレスが慣れた手つきで二人の少女の間にケーキと紅茶、そして小さなボウルに入ったジャムを置いてゆく。

「ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

ウエイトレスの一礼に二人の片方、クララはにこやかに答えると彼女を見送り、完全に去ったのを確認すると前に座る少女を見た。

「……それにしても珍しいですね。貴女の方から私にご相談とは」

「こういう内容を話せるのは貴女くらいですから、クララ」

そう言いつつも一人の少女、ノンナはスプーンにジャムを掬うと口に含み、カップを手にすると紅茶を少し飲んだ。

現在、クララはノンナらと常に行動を共にしている訳ではない。モスクワの大学で戦車道を修めるノンナやカチューシャ達と異なり、クララは父の諜報関連の仕事を補助する形でロシアの各地を転々としている。伍堂六郎ことゴロドクはそれに時折随行しつつ、やはりモスクワでロシア語の勉強をしながら暮らしている（なお、父親の目が光っているためゴロドクと交わる回数が大幅に減っているのがクララとしては若干不満ではある）。

「つまり、カチューシャ様にはお話できない事……という訳ですか」「まあ、そういう事です」

短いやりとりでクララはノンナの相談内容を察し、ケーキにフォークを入れた。頷くノンナ。

「ゴロドクと上手くいってないのですか？」

「!？」

カチャンと皿に置かれたカップが鳴った。丁度戻すところであれば、ノンナはカップを取り落としていたかもしれない。クララはそう思いつつ言葉を続けた。

「そう驚かれなくても結構です、ノンナ様。貴女がカチューシヤ様に相談できない事があるとしたら、ゴロドクの事以外にはそう無いだろうと思っただけです」

「……本当に話が早くて助かります。クララー」

深く息を吸い、ノンナは再び落ち着いた口調で答えた。

「何があつたのですか？ 少なくとも、私と一緒に居るときのゴロドクはノンナ様の事で何か言ったりはしていませんでしたが……」

クララーのその言葉に嘘は無かった。ロシア語の勉強や『仕事』絡みで共にいる時、ゴロドクがノンナやカチューシヤの事で不満を言っているのをクララーは見たことがない。むしろ、自分の知らないカチューシヤやノンナの姿を嬉しそうに語る彼が羨ましく思える程だ。

一方、ノンナは少し顔をうつむかせ、自分の考えや思いをどう言つたものか考えているようだった。

やがて、ノンナは顔を上げると言った。

『上手くいっていない』というのは適切な表現ではないのかもしれないが……その、最近のゴロドクがどうにも『淡泊』なんです」

「……『淡泊』？」

ノンナの言葉をクララーは一旦受け止めて吟味した。男女関係においての『淡泊』の意味が理解できないほど、彼女は初^{うぶ}心ではない。

クララーは声を気持ち小さくしつつ尋ねた。

「つまり……あまり夜の相手をしてくれなくなつたと？」

「ええ。以前は互いが満足し切るまで相手をしてくれたのですが、最近はこちらが物足りない状態でも普通に寝てしまつたり、あるいは『そういう事』も無く食事の後でそのまま寝てしまつたりで……」

何やら相談内容が若妻の愚痴めいてきた。

とはいえ、ここで安易に彼女の意見に同意しては相談相手としては不十分だ。クララーは更に聞いた。

「ゴロドクが面倒そうな素振りをしたりとかはされましたか？」

「いいえ、申し訳なさそうにはしてはくれるのですが……それが何回も続き、正直なところ私への興味が薄れているのではないかと」

「……………」

そう言うノンナは一見するといつもの無表情のままに思えるが、その瞳の奥には言いようのない不安感と切なさが浮かんでいる。

普段見慣れない彼女の姿にクララは同情を覚えつつも、ふとある事に気付きノンナに尋ねた。

「ノンナ様、一つお聞きしたいのですが……ゴロドクと『される時』は、カチューシャ様はどうされているのですか？」

「勿論、カチューシャとも一緒です。彼女の前で交わる事が出来るようになったとはいえ、私とゴロドクの関係はあくまで伏せられたものですから」

「……毎回、そうなのですか？」

「そうですね……ほぼ、毎回だと思えます」

「……」

クララはどう返したのか迷い、少しぬるくなった紅茶をひとくち飲んだ。

大凡の状況は分かった。この問題の原因はシンプルだ。要はゴロドクへの過剰な負担と、ノンナ本人は自覚していないようだが彼女のゴロドクへの独占欲が組み合わさり、強い欲求不満を引き起こしている。

如何に精力旺盛な男子（今は浪人中だが）とはいえ、ゴロドクは運動系の部活をやっていた訳でもない普通の学生である。日々フィジカルトレーニングを欠かさない戦車道の活動を何年も続けているカチューシャやノンナとでは基礎体力が違う。3Pによるセックスは確かに強い刺激にはなるだろうが、それが毎回続き常に両者から求められれば、当然応えられる限界もあるだろう。

では、どうするか――

「……ノンナ様、そちらの学校の戦車道の今後の活動予定は分かりますか？」

「え？ ええ、手帳に……」

ノンナは頷くと、傍らのポーチから手帳を取り出して広げクララに渡した。

几帳面なノンナの性格を示すように、流麗な文字で丁寧にその日の

予定が書きこまれている。クララはそれを翌月分まで読み進め、ある所で目を留めた。

「ノンナ様、こここの『遠征試合／残留』というのは……？」
「それは……」

ノンナが詳細を説明すると、クララは頷いた。

「……では、ここの一週間が良いかもしれませんね。ゴロドクの予定がフリーになるようこちらも調整しておきます」

そう言うとクララは微笑んだ。これでノンナの鬱積したのも発散されるだろう。

——実際のところこの時、クララはひとつ「誤算」していたのだが。

カフェでノンナとクララが話をしてから二週間後。

大勢の人々で賑わうモスクワ駅、戦車が搭載された貨物列車を背にパンツァージャケット姿の少女達が向かい合うように並んでいる。

「それではこれより、ノヴォシビルスク大学戦車道との交流戦へ出発するー！」

「出立するチームへ、歓送の礼！」

『お気をつけて！』

列車を背にする隊長の言葉に応えるように、それに向かい合う副隊長が号令を放つ。副隊長の後ろに並ぶノンナを含めた少女たちが礼をすると、列車側の少女たちがそれに返し、頭を上げてから列車へ乗り込んでゆく。

ノンナはその少女達の中で頭ふたつほど小柄なカチューシャの姿を認め、声をかけた。

「頑張ってきてください、カチューシャ」

「任せなさい！ このカチューシャの強さをノヴォシビルスクの連中にも見せつけてやるんだから！」

ノンナと暫く離れ離れになる事への不安は当然あるだろうに、カチューシャは強気な表情で答え、手を振った。

ロシアの大学戦車道においても、日本の戦車道と同様に他校との交流戦は積極的に行われている。

とはいえ、何事も日本と同じようにとはいかない。一番の問題は距離である。ノヴォシビルスクはロシアにおいて大都市のひとつであるが、モスクワとの距離は実に2000kmを超える。今回の交流戦は行きに二日、現地で三日、戻りに二日と一週間を要する長旅となる。無論、それにモスクワ戦車道のメンバー全員を連れてゆくのは難しい。現地には向かうのは選考されたメンバーと随行の整備班だけだ。

今回、これまで常に一緒に行動していたノンナとカチューシャを意図的に引き離してメンバー分けしたのは隊長の意向である。広大な雪原が試合場となりやすいロシア戦車道において、通信が乱れ友と引き離された中で単騎での強さを求められる場面は少なくない。プラウダ出身の彼女らの1年生とは思えぬ連携は隊長格も認めるところであったが、だからこそ個々の強さをより磨きたいという狙いもあった。

——つまりこの一週間、ロシアに来てから常にカチューシャと一緒にだったノンナは初めて独りになるのだ。

やがて、大きく音を立てつつ幾両もの戦車を載せた列車が動き始める。窓から手を振るパンツァージャケット姿の少女達を手を振って見送る、やはりジャケット姿の少女たち。

列車がホームから完全に姿を消し、その姿が小さくなってゆく頃に副隊長が空気を切り替えるように手を叩いた。

「……皆、お疲れ様！ 本日はこれで解散！ 明日からは配布したメソード通りに演習を行うわ。今日の上りが早いからって、飲み過ぎないようにね！」

「副隊長こそ、前みたいに赤ら顔で来ないでくださいね！」

「あ、あれはもう忘れてよ……それじゃ、解散！」

『はい！ お疲れ様でした！』

メンバーの切り替えしに苦笑しつつ副隊長が言うと、一礼の後に彼女らは三々五々に散っていった。その流れに合わせ、ノンナも駅の改札口へと向かってゆく。

「お疲れ様」

「……お待たせしました」

改札の外で待っていたパーカーにジャケット姿のゴロドクが声をかける。ノンナは頷くと、ゴロドクへ近づいた。

「今日は戦車道の方は、もういいのか？」

「ええ。もう今日はこれで解散だそうです」

「そっか」

「……？」

ゴロドクはどこか落ち着かなげに言った。ノンナは小首を傾げ、ゴロドクに尋ねた。

「どうしました、ゴロドク？」

「え!? あ、いや、その……こういうの、久しぶりだなんて、思っ」

「……そうですね」

ノンナは口元に僅かな笑みを浮かべると、ゴロドクの傍らに寄って言った。

「ゴロドク……手を、握っていいですか？」

「あ……あ、ああ」

柔らかくノンナの手がゴロドクの手を握る。ロシアの澄んだ冷たい空気の中でも、温もりが伝わってくる。

「家に帰る前に、買い物に寄ってもいいですか？」

「……勿論。ゆっくり帰ろう」

ゴロドクの手が握り返してくる。

ノンナは少し楽しそうに、手を繋いだまま通りへと踏み出した。

——四日後。

「……………ふう」

モスクワから離れた、とある都市のホテルの一室。

「仕事」の報告書作成をひと段落させたクララはノートパソコンから手を離し、大きく伸びをした。

最近はゴロドクのアシストに助けられていた所もあっただけに、改めて一人で細かいところまで全てやるのは一苦労だ。

クララは壁の時計を見つつモスクワとの時差を計算する。今ならば丁度昼下がりにくらいだろうか。

カチューシャが不在のタイミングでゴロドクをフリーにし、ノンナと一緒に過ごせるようにしてから既に数日。特に向こうからの連絡はない。

(上手くいつているでしょうか……?)

クララはふと気になり、携帯を取り出すと履歴から番号を選んで発進した。何となくではあったがノンナではなく、ゴロドクへ。

数度の発信音の後、聞き慣れた声がクララの耳に届いた。

『はい、伍堂です。クララ?』

「ええ。お元気ですか、ゴロドク……」

『丁度良かった。俺からも電話しようと思ってたんだ』

「?」

クララの言葉の途中で返ってきたゴロドクの声には明らかな戸惑いが混じっていた。社交辞令の挨拶を打ち切り、クララは彼に尋ねた。

『どうしたのですか、ゴロドク?』

『その……秘密の話だったら悪いんだけど、ノンナ、俺の事で何か言っ
てなかったか?』

「……と言いますと?」

小声で尋ねてくるゴロドクの問いかけにすぐには答えず、クララはその意味を伺う。

『いや、その、ノンナの様子が変わって言うか……』

「相手をしてくれない、という事ですか?」

『そう言う訳でもなくって……一緒に遊びに行ったり、料理を作ってくれたりはしているんだけど……』

「しているのだけど?」

クララが問い返すと、ゴロドクは少し言葉に詰まってから言った。

『その……夜、全く相手をしてくれないんだ。身に覚えが無くって……何か、心当たりはないか?』

「……ゴロドク。そのお話ですが、もう少し詳しく聞かせていただいても良いですか?」

肩に携帯を挟むと、クララは手早くメモとペンを用意して机の上に置き、ゴロドクの言葉を書き写し始めた。

最初の夜はゴロドクも違和感を覚えなかった。実際のところ急に駆けつけたゴロドクには疲労が残っていたし、ノンナも「課題が残っていますので、先に寝ていてください」と夕食後に睡眠を促してくれたからだ。

奇妙に感じ始めたのは、二日目からだ。大学の授業を終えたノンナはゴロドクを連れ出すと公園やカフェなどを共に散策し、久方ぶりのデートを楽しんだ。夜はそのまま彼女の部屋で手作りの料理を堪能した。いつもならばここで、なし崩しにノンナとゴロドクはセックスにもつれ込む流れである。

しかしノンナはゴロドクが風呂を終えて出てくると、既に自身のベッドで横になって寝息を立てていた。仮眠だったのかもしれないが、もし本当に眠っていたならば起こすのは躊躇われたのでゴロドクもそのまま横になった。

そして三日目。やはり大学から帰ってきたノンナは香草を効かせた精の付く肉料理を振る舞ってくれたが、最早理由付けすらせず彼女は「おやすみなさい、ゴロドク」と言う就先に寝てしまったのだ。

「……………」

クララはメモを眺めつつ、ノンナの意図を探った。「ゴロドクが淡泊だ」という悩みからの、カチューシャが居ない一週間という絶好の状況においての彼を突き放すような行動。それは単なる嫌がらせとかではなく、必ず意味がある筈だ。

このまま彼女はゴロドクと交わらないまま一週間を終えるつもり

だろうか？ それだけは無いとクララーは確信していた。では何故

「……ひよつとすると」

『え？』

クララーは小さく呟き、ゴロドクに言った。

「ゴロドク、失礼ですがこの4日間で自慰行為はしましたか？」

『へ!? いや、いや、してないけど?』

「本当に？」

『こんな事で嘘つかないって！ それに……ノンナが横で寝てるころでそういうの、流星に情けないだろ?』

「なるほど……それであれば結構です。ゴロドク、おそらくノンナ様は何かしらのサプライズを用意している筈です。今晚も何も無い可能性が高いですが、我慢してくださいね」

『サ、サプライズ?』

「ええ。ですから安心してください」

そう言いつつも、クララーの額には汗が滲んでいる。

やがて、電話を終えるとクララーは大きく息を吐いた。

「……迂闊でしたね。ノンナ様の『溜まり具合』を見誤るとは」

ノンナの欲求不満の度合いが、自身の見立てよりも大幅に強まっていた事をクララーは理解した。

彼女は今、ゴロドクを『熟成』させようとしている。当然、彼が間近に居る中でノンナ自身も我慢しているのだろう。それを互いが最高に昂った状態で一気に解放して発散させるつもりなのだ。

その時、果たしてゴロドクはどこまで搾り取られるか。

「無事だと良いのですが……」

おそらく、無事では済まないだろう。そう予想しつつもクララーは呟いた。

——五日目。

「(サプライズ、ねえ……)」

「……どうしました、ゴロドク？ 口に合いませんでしたか？」
「ふえっ！ いや、美味しいよ、美味しい！」

窓の外の薄暗くなりつつある夕暮れの街並みをぼんやりと見ていたゴロドクは、ノンナの声に我に返ると手元のビーフストロガノフを掬って口に入れた。濃厚な牛肉の旨みとサワークリームの爽やかな風味が良い感じで組み合わせっており、食い応えがありながらしつこさは無い。カチューシャが食べる分もノンナが作っているそうだが、彼女なら家庭料理の店を出せるかもしれない。

ゴロドクから見えるノンナは、何時も通りの落ち着いた表情で食事を進めている。そこにはゴロドクへの思惑めいたものは感じられない。まあ、彼女の内面を読み取る事は今のゴロドクでも難しいのだが。

「……」ちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

やがて、食べ終えたゴロドクは手を合わせて一礼した。ロシア料理を食べたにしては何とも日本的ではあるが、幼少時から仕込まれたマナーというのは忘れないものだ。

「お風呂も沸いています。ゴロドク、良ければ先にどうぞ」

「あ、ああ……」

皿を片付けつつ言うノンナの促しに、ゴロドクは彼女の様子を伺いつつ答えた。

クララは「サプライズがある」と言ったが、今晚も同じではないだろうか？ 別に無理矢理ノンナに求めるつもりは無かったが、男としてどうにも物足りなさを覚えてしまう。

浴室前で服を脱ぎ、近くの洗濯籠に入れるとゴロドクは浴室へ入った。シャワーの蛇口をひねり、頭から湯を浴びる。

「ううん……」

「鬼の居ぬ間に」と言えばカチューシャに失礼になってしまおうが、クララから説明を受けた時に期待しなかったと言えば嘘になる。カチューシャの事を愛おしいと思う気持ちはあるし、ノンナを交えてのセックスこそ出来るようになったが、それでもカチューシャの前では

「カチューシャの補助」という扱いをノンナにせねばならない事への引っかかりはあった。

「……あ」

二人との3Pを思い返しただけで、ゴロドクの肉棒は早くも充血して反り返った。

正直なところ、ノンナが滋養豊富な料理を作ってくれる上に自由もあり、それでいて自慰行為もしていないため精力が結構溜まっている。

クララはああ言ったが、その言葉が確實という保証もない。1回くらい抜いても良いのではないだろうか。

そう思いつつゴロドクが肉棒に手を添えた時、浴室の戸が開いた。

「な……!?!」

「失礼します」

薄い湯気越しに見えるノンナは、浴室に入るならば当然と言えば当然なのだが全裸であった。隠す風もなくゴロドクに近づいてくる彼女に、ゴロドクは思わず勃起した肉棒を隠して背を向けた。

「ノンナ!?! ちよ、ちよつと待った!」

幾度も身体を交えてきた仲とはいえ、不用意に勃起してしまっている姿を見せるのは流石に恥ずかしいものがある。しかしノンナはそんなゴロドクの焦りに全く遠慮することなく更に身を寄せてきた。シャワーの飛沫が彼女の肩や黒髪を濡らし、その姿はより艶めかしさを増してゆく。

どう反応したものが分からず、思考が停止したままのゴロドクの背中にノンナは身体を密着させた。

「(うおお……!!)」

「……ゴロドク。この数日間、我慢をさせたかと思えます」

背中に当たる豊かな乳房の弾力。それだけで肉棒がビクンと反応を示す。

体を密着させたままノンナはゴロドクの耳元に口を寄せ、囁くように言った。同時にその手がゴロドクの股間へと伸び、隠していた手の隙間をすりと抜けると肉棒を優しく握ってきた。

「うあつ!? ノ、ノンナ!」

「でも……私も、我慢して、いたんですよ?」

シャワーの湯がかかっているというのに、ノンナの吐息の熱さをはつきりと分かる。背中当たる弾力の中に感じる、少し固い突起の感触。既に乳首が固くなっているのだ。

「い、いや、ノンナ。ちょっと落ち着い……ううっ!」

ゴロドクの言葉も聞かず、ノンナは肉棒に添えた手を動かし始めた。血管の浮き上がった竿を痛くない程度に握ったまま緩急をつけつつ前後させ、快感を引き出してゆく。

「ぐ、くうっ!」

「……この一週を終えれば、カチューシャが帰って来られます。それからでもゴロドク、貴男とは交わる事ができますが……こうして、二人だけで交わる事が出来るのは、んっ、んんっ! つ、次は何時になるか、分かりません……っ!」

ゴロドクの肉棒に添えられていない方の肩が動いているのが分かる。おそらく、肉棒を扱きながら自身の秘所も弄っているのだ。ノンナの吐息が荒くなってゆく。

「だ、だから……『いつも通り』でなく、互いに、最も昂るような……ああっ! か、形で、して、欲しかったんです……!」

「ノンナ……!」

ゴロドクは肩越しにノンナを見た。

整った顔を紅潮させ、快感に喘ぐノンナ。幾度となく見た。淫らながらも美しい顔。

しかし——ゴロドクに向けられる潤んだ瞳に映る強烈な肉欲は、今までに見た事がない程に強いものだった。

かつて、ノンナが激しく自分を求めてきた学園艦の冬の公園でのセックスを思い出す。だが、あの時はカチューシャの留学に起因する激しい動揺から求めてきた、言わば感情の振り幅を戻すためのセックスであった。今回のそれは明らかに違う。

何と言うか——今のノンナの内面は相当に煮えている。動揺を埋めるためとかでなく、ロシアに来てから溜め込まれた、ただ自分と二

人だけで、自分を独占できるセックスをしたいという思いからこの行動に出ている。それはゴロドクの内面に愛おしさや可愛らしさと同時に、彼女の感情に応えられる程の激しいセックスでノンナの身も心も満たしたいという激しい昂りを湧き上がらせた。

「……分かった、ノ、ノンナ……しよう。思い切り、あと二日、寝る暇も、無いほどに……ぐっ、や、ヤバ……っ！」

「っー！」

ゴロドクの腰が小さく震えた。射精の兆候を察したノンナが咄嗟に強く竿の根元を握る。

「す、すみません、ゴロドク！ その、さ、最初の射精は……」

痛がるゴロドクに詫びつつ、ノンナは竿から手を離すと今度はゴロドクの前に背を向けるように立ち、壁のタイルに手を置くと肉付き豊かな尻を肉棒に押し当ててきた。

「わ、私の中に、注いで、ください……！」

「……！」

ごくりとゴロドクの喉が鳴る。上半身を傾けた事で、濡れた大きな乳房が釣り鐘のように更に存在感を増しつつ揺れている。数秒前の痛みも忘れ、再びゴロドクの肉棒は固く反り返った。

今すぐに挿入したいという気持ちを懸命に抑えつつ、ゴロドクはノンナの尻肉の谷間から覗く秘所に指をやった。陰毛の感触を抜けると、お湯とは異なる粘り気のある熱い液体が指に絡みついてゆく。そのまま陰唇をなぞり、膣口に指を差し入れると膣壁が待ち望んだように指を包み、締め付けてくる。

「ンッ！ ゴ、ゴロドクっ！」

「この濡れ方……ノンナ、これ、入ってきてから弄っただけじゃ、ないよな？」

「!?」

ゴロドクの言葉にノンナは顔を更に紅潮させると、ゆっくりと頷いた。

「は、はい……さつき、食事の最中から、疼いていて……ゴロドクが浴

室に入った後に、自分で……」

「ノンナ……今日のノンナ、本当に、エロいな」

「す、すみません……」

「謝らなくていいよ。そんなノンナも、大好きだ」

「んっ、んんっ！ そんな、胸、強くっ！」

片手で秘所を弄る手を止めないまま、ゴロドクはノンナの乳房を強く揉んだ。片手では収まらないボリュームある豊満な乳房はその大きさを持ちながら確かな弾力を持ち合わせており、ゴロドクの指を押し返してくる。

胸と秘所の両方からの刺激に、ノンナは身を震わせ、泣きそうな顔で懇願してきた。

「ゴ、ゴロドクっ、早く、早くください……！ ゴロドクの、熱くて、堅いそれを、奥まで……お願い、します……！」

「ああ……俺も、そろそろ限界だ……」

秘所を弄っていた手を離し、ゴロドクは自分の肉棒に添えると臍に当たりそうな程に反り返ったそれを押し下げた。ノンナに覆い被さるように体を重ねると、亀頭を秘唇に押し当てる。くちゆりと愛液が亀頭に触れただけで、その熱さにゴロドクは思わず射精してしまいそうになった。

「いくぜ、ノンナ……く、ううっ！」

「は、は……ひいっ！ あ、熱い、ですっ！ ゴロドク、ゴロドクっ！」

「ノ、ノンナの中も、凄い……こんな、熱いのは、初めてだ……！」

ずぶずぶと奥まで挿入され、ノンナは身を悶えさせる。一方のゴロドクも焼けるようなノンナの膣内に腰を震わせ、歯を食いしばり腰からこみ上げる射精感を堪えた。

「うおっ！ ふうっ、くうっ！」

「ああんっ！ ゴ、ゴロ、ドクっ！ いいっ！ いいっ！」

ゴロドクは荒々しく腰を動かし始めた。肉の打ちつけ合う音が浴室に響くと同時に、平時のクールな面持ちを投げ捨て、ノンナは大声で善がりつつ快感を貪る。

後ろから突かれる度に乳房はゆさゆさと重そうに揺れ、ノンナの秘

唇から溢れる愛液はゴロドクの肉棒を包み、それを潤滑油として膣内の無数の襞が龟头を、竿を、鈴口を刺激する。

「ひいっ！ い、イクツ、イキます、ゴロドクっ！」

「ああっ！ 何度でもイってくれ、何度でも、相手、してやる、からっ！」

「んああっ！ い、イクツ！ ああああっ！」

ノンナの全身が震え、肉棒が強く締め付けられる。軽い絶頂に達したようだ。しかしそれに構わずゴロドクは更に腰を振る。

「ふああっ！ ま、また、また、来ますっ！」

「ううっ！ お、俺も、そろそろ……っ！」

「だ、出してくださいっ！ 私の、一番、奥っ！ 全部っ！」

「ぐっ、ぐううっ！」

「いつ、いつ！ 凄く、出て……ン、ンンツ！」

強烈な射精感に今度こそゴロドクは我慢できなくなり、一番奥まで肉棒を突き入れると我慢を解いた。どくどくとここ数日溜め込んでいた精液が、ノンナの子宮口に容赦なく吐き出されてゆく。

「あ、ああ……搾り、取られる……ノンナ……！」

「ああ……で、出ています、ゴロドク、のが……！」

数十秒間、ゴロドクの射精が終わるまで二人は身体を止めたまま絶頂の余韻を味わった。秘所から溢れてきた精液がシャワーの湯と混じり、流れてゆく。

「はああ……」

「んっ……」

大きく息をついたゴロドクの所作を合図に、ノンナは腰を揺すると肉棒を抜いた。射精を終えたというのに、ゴロドクの肉棒はまだ固さを保ったままだ。

その肉棒を潤んだ瞳で見つめると、ノンナは今度はゴロドクの前に跪いた。

「まだ堅いまま……素敵です、ゴロドク……」

「あ、ああ……ノンナのも、凄かっ……うおっ！」

「ンツ、あむっ、んふう……」

精液と愛液に塗れた肉棒を迷わずノンナは啜えこんだ。

「ちよ、ノ、ノンナ！ 今出したばかりで、まだ、敏感……ううっ！」
「んちゅ、ふうっ……か、構いません、ゴロドク……何度でも、射精して、ください……貴男の匂いが取れなくなるほど、私に、ください……！」

「……………」
舌で肉棒全体を舐め回してからノンナは口を離し、上目遣いにゴロドクに言った。その淫らな姿は、ゴロドクの中に残っていた射精後の余韻を更なる興奮で忘れさせた。

赤黒く先走りが溢れる亀頭に、愛おしそうにノンナは頬ずりまでしてくる。それは堪らない征服感を否応なく湧き上がらせる。

「ノンナ、その、今度は、胸で……」
「……………はい、ゴロドク」

ゴロドクの指示にノンナは従順に従うと、自分の乳房を下から掬うように持ち、膝立ちのままゴロドクの肉棒を挟み込んだ。口や膣内とはまた異なる弾力ある両の乳房に挟まれる感触にゴロドクの肉棒は震え、僅かに乳肉の谷間から覗く亀頭からは先走りが溢れている。

そのままノンナはゴロドクの肉棒をすっぽりと包んだまま身体を上下させ、肉棒を乳房で扱き始めた。時折乳房を挟む力に強弱をつけて刺激に緩急を与えつつ、顔を俯かせると時折舌が届く鈴口をつつくように舐める。

以前よりも更に胸が大きくなったのでは、ゴロドクは快感に痺れる頭でそんな事を思った。

「ハア、ふう……如何ですか、ゴロドク？」

「ああ……ノンナの胸、最高だ……っ！」

「こ、光栄です……いつでも、射精してください……このまま、私の胸に……」

「うおおっ！ ノンナ、ノンナあっ！」

甘く射精を促され、ゴロドクの奥から早くも次の射精感がこみ上げてきた。ノンナの張りのある乳房を自分の肉棒が蹂躪しているという実感と快感が、ゴロドクの絶頂をより早めさせてゆく。

それからさほどの間も置かず、ゴロドクは絶頂に達した。

「で、出るっ！ ぐっ、うああっ！」

「んっ！ 凄い、二度目なのに、こんな、出て……ンンッ！」

噴水のように吐き出される精液がノンナの乳房を、整った顔を容赦なく汚してゆく。しかしノンナはうつとりとゴロドクの精液を受け止めつつ、乳房の挟み込みを更に強めて最後の一滴まで絞り出さんと握ねるように手を動かす。

何度もの射精を終え、ゴロドクが身を離すとノンナは立ち上がった。顔にかかっていた精液をシャワーが洗い流してゆく。その肌は紅潮し、瞳にはまだ熱情が消えていない。

ノンナがまだ満たされていない事は分かっていた。ゴロドクは身体に力を込めると、再び肉棒を勃起させた。

「ノンナ、続きはベッドで……」

「……はい」

嬉しそうにノンナは微笑むとシャワーを止め、ゴロドクに寄り添った。

「ンッ……」

「んんっ……」

唇を重ね、身体を密着させたまま濡れた身体で浴室を出る。

ノンナの手はゴロドクの肉棒に、ゴロドクの手はノンナの秘所に置かれたまま、互いを弄りつつベッドに向かい、倒れ込むように身を預ける。

「……カチューシャが帰ってくるまで、あと50時間くらいか」

「んはっ……そ、そのくらいだと、思います……」

壁の時計を見つつゴロドクが言う。ノンナが同意すると、ゴロドクは言った。

「それなら……そこまですつとやろう。ノンナ、寝るのと、飯と、トイレ以外の、全部の時間を使って……二人きりで、何回でも」

「ゴロドク……！」

「まずは……もう一回……！」

「んあああっ！」

ノンナの太腿を抱え、いきなり秘所へと肉棒を突き入れる。
「は、はいっ！　してください、ゴロドクっ！　何回でもっ、何十回でもっ！」

恍惚とした表情に汗を浮かべつつ、ノンナは嬌声と共に腰を振り始めた。

——七日目。

「……………ふう」

とある都市のホテルの一室。報告書の記入を終えたクララはキーボードから手を離して背を伸ばした。

時計に目を向け、モスクワとの時差を測る。今頃は昼過ぎくらいだろうか。

「……………」

クララは無言で携帯を取り出すと、履歴から「ノンナ」を探し電話をかけた。数度の発信音の後、携帯の向こうからノンナの落ち着いた声が聞こえてくる。

『クララ……ですか？』

「はい、ノンナ様。その……先日の相談の件がどうなったか、気になったもので」

『ええ、お陰様ですっかり解消されました。ゴロドクも……ん、んああっ！』

突然、そこに嬌声が混じる。

「……………ノンナ様？」

『い、今も、下、からあ！　ゴ、ゴロドクっ！　揉みながら、そんなっ！　んはあっ！』

よく聞けば、声の合間に水音も聞こえてくる。クララはノンナに尋ねた。

「ノンナ様、結局ゴロドクとは、何回くらいされたのですか？」

『お、覚えて、ああっ！　いません……50回くらいまでは、数えて、いたの、ですが……んひいっ！』

クラーラは更に耳を澄ます。焦燥した獣のような、男の荒い吐息が僅かに聞こえる。

「……そうですか、それは何よりです」

『ゴ、ゴロドクは、明日には、復帰させ、い、いいつ！ イクツ、イクツ！ ま、ます、からあつ！ ゴロドクつ！ イキ、ますつ、ああああつ！』

「……………」

情報部の父は、木乃伊^{ミイラ}化した人間の蘇生法を知っているだろうか。そんな事を思いつつ、クラーラは無言で電話を切った。

【独占欲だよノンナさん 終わり】